

# もう一つのペダル

ユーチャロー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

主人公の山中大地

ごく普通の男子高校生で自転車好きの中嶋悠斗と出会うことでロードレースの世界に入る。

彼がロードレースを通じて成長していき奮闘していく物語。

# 目次

もう一つのペダル	第1話	山中
大地 目覚める能力	—	1
もう一つのペダル	第2話	二重人格 v
s 狂人!!	—	13
もう一つのペダル	第3話	双子のスプ
リンター!?	—	24
もう一つのペダル	菅原兄弟 v s 佐々	—
木山中ペア	—	38
もう一つのペダル	第5話	新
メンバー続出!!	—	54
もう一つのペダル	第6話	ハイケ
イデンスクライマー!	—	64

もう一つのペダル	第7話	沼津南
高校自転車競技部!	結成!!	—
もう一つのペダル	第8話	初練習
!!	—	83
もう一つのペダル	第9話	新た
な能力!!	—	104
もう一つのペダル	第10話	合宿
開始!!	—	119
もう一つのペダル	第11話	合宿
1日目!!	—	127
第12話	合宿2日目!	前編
149	—	—
第13話	合宿2日目!!	後編

第14話	合宿3日目!!	前編	169	第24話	2人の山岳賞!	292
第15話	合宿3日目!!	後編	184	第25話	運命の1日目の総合優勝!	
第16話	東京観光!!		198	第26話	反省!	324
第17話	宮崎浩輔!!		210	第27話	中嶋リタイア!?	340
第18話	予選大会開始!		220	中嶋の覚悟!		356
第19話	山中大地vs杉山光輝			京伏 嵐山始動!		369
232				美影良和と宮崎の出会い		376
第20話	インターハイが始まる!			2日目のクライマー対決!		388
243				下り勝負!		399
第21話	最速!最強!		251	沼津南。再始動!		405
第22話	波乱な展開!		267	先頭争いの死闘	前編	411
第23話	箱根の勝負!!		281	先頭争いの死闘	後編	418

メンバー交代	427
多村と勘太のミーティング	436
3日目のオーダー	441
京都伏見の計らい	448
中嶋の囮	456
3日目の山岳賞勝負 前編	466
3日目の山岳賞勝負 中編	475
3日目の山岳賞勝負 後編	485
北上と中嶋の最後の想い	495
下り坂の追い上げ	507
純太と多村の狙い	515



## もう一つのペダル

## 第1話

山中大地

目覚める

## 能力

もう一つのペダル

第1話 山中大地 目覚める能力

静岡県沼津。この町は漁業が盛んでありちよつとした港町である。この町で暮らしている1人の自転車乗りの成長と青春が詰まった物語である。

沼津南高校。沼津の町から少し離れたところにある小さな高校である。ごく普通の高校。

そんな高校に通ってる1人の青年が元気良くロードバイクで登校し校門を通り、自転車置場に置く。彼の名前は山中大地。

「今日からまた学校か……。だるいな……。」

彼は二年生にあがり、学業も運動神経も、ルックスや人望など良くも悪くもなくごく普通の高校二年生である。

「春休み早すぎだし……。先輩の立場になるのか。俺は部活やってないから関係ないけどな w」

彼の隣にロードバイクを止めた青年がいた。

彼は山中のバイクを見て急に話しかけた。

「そのロードはジャイアントですよね!!」

「なんだこいつ。急に話しかけて…。」

「そうだけど…。」

「ジャイアントはカッコイイですよね!! 俺もいつか欲しいんですよ!」

「ありがとう…。俺そろそろ行くから。」

「あなたは自転車競技部の方ですか?」

「自転車競技部? そんな部ないし部活やってないから。」

「そうなんですか…。インターハイに出たいんですよ!! あなたはロード経験者ですか!!?」

「インターハイ? 自転車であるんだ。知らなかった。このロードは最近買ったやつで運動部とか入ってないしたまに体を動かさないと太るからサイクリング行く時か登校の時にしか乗らないから。」

「そうなんですか!!? 自転車競技部がないなら一緒に部を作りませんか!!?」

「なんでよ。そもそもお前。馴れ馴れしくて鬱陶しい。」

「すみません!! 失礼しました! ロードに乗ってる人がいると話しかけたくなるんで



すよ!!」

「そうなんだ。そんなに自転車好きなんだ。そろそろ授業始まるからまたな。」

「名前聞いていいですか？ 僕は1年の中嶋悠斗といいます!!」

「1年か…。入学おめでとう。俺は2年の山中大地だ。じゃあな。」

「山中さん!! よろしくお願ひします!」

「おう…。じゃあな…。」

「変な1年だな…。初日からなんかついてないな。」

山中は教室に向かう。

放課後。

授業が終わり自転車置場まで疲れたように歩いていった。

「はあ…。これからバイトとかだる…。みほと一緒にカラオケ行きたかったな…。」

「へえ。山中さんて彼女いるんですね w」

そこには中嶋が山中を待っていたかのように

立っていた。

「うあつ!! ビックリしたな! 朝の1年かよ!! なんているんだよ!!」

「山中さんを待ってましたから。僕と少しだけ勝負しませんか?」

「勝負? なんの?」

「自転車です。」

「自転車？ かけっこでもするのかよ！ これからバイトだからさ。お前と遊んでるヒマないんだよ!!」

「この学校に小さな裏山がありますよね。昨日入学式のあとこの山を自転車で登ってみたんですけど。なかなか急でハードでしたね。」

「げっ…。この山道俺の通学路だし。しかも、この山を越えたら俺の家が近いしバイトしてるコンビニも近いんだよな…。」

「ちようどこの山道。俺の通学路だし少しだけ付き合つてやるよ。」

「ありがとうございます!! 結構ノリが良い先輩で良かったです!! やるなら何か賭けませんか？ その方が本気になれますし!!」

「ほう…。良いだろう。」

「こいつなんかだるいやつだから。ここでこいつに勝つたら今後2度と関わらないようにしてやるか…。」

「なら。俺が勝つたらお前は2度とオレに関わるな。」

「えー。嫌ですよ。なら僕が勝つたら山中さんと一緒に自転車競技部に入るといいうのはどうでしょうか。」

「そう言うと思ってた。オレはこの山を入学してから1年間ずっと自転車で登ってたか

ら負ける気がしないがな。」

「そうなんですか…。僕も負ける気がしないので。」

「そうか。時間もないから早くやろうか。」

「その前にルールを言いますが、この山道の頂上がゴールでどうでしょう?」

「良いだろう。ここから山頂まで2kmある。」

傾斜15。もある激坂だ。大丈夫か?」

「大丈夫ですよ。僕。山道慣れてるので。」

「こいつ…。闘う目になってる…。そして自信に満ち溢れている。やばいな…。これで負けたらこいつに自転車競技部っていうやつに入るハメになる。それは回避したい。」

「やるか。」

「はい!!」

山中と中嶋は裏の校門前でスタンバイしてスタートを切る。最初先頭で走ってたのは山中。中嶋は山中のあとを追いかける。

「対した自信の割に対したことないな。オレはこの山道に慣れてる俺の方が有利だ。」

中嶋と山中の差がドンドン開いていく。

いつの間に残り1km。山中は中嶋が後ろから追いかけていないかを確認し差が

開いていたため勝ちを確信したかのように言う。

「対したことなかったな!! 1年坊主! この勝負もらった!!」

100mも差がつかれており、中嶋の圧倒的不利であった。激坂であるためそう簡単に追いつかない状況である。

「やっぱり… あなたの走りはクライマーだ…。僕が朝あなたが走っている姿を見て追いかけてしまった。だが…追いつけなかった。しかし、僕は本気を出していないからね。」

中嶋は目の色を変え、下ハンを持ちダンシングの体制になる。

「さて…。やるか!」

中嶋はギアを上げて一気に山中に追いかける。一瞬で山中と並んだ。  
!!!?  
」

山中は一瞬の出来事で理解出来なかった。100mも差がついてたのにいつの間にか中嶋が隣に並んでいたからである。

「追いつきましたよ。山中さん!!」

「お前…。いつからそこにいるんだ。」

「今ですよ。」

「……………」

山中も驚きを隠せず焦り出す。

「あと山頂までの500m…。本気でやりませんか？ あなたの本気を見たいんです！」

「本気？ そんなもんじゃない。」

「僕はあなたの走りを見て確信しました！ あなたはクライマーの走り。この激坂を一般人は長く走ることが出来ない。だいたい途中で足を止めて自転車を押してしまう。だが、あなたは今この激坂を登っている!! 何か隠し玉でもあるんですか!!?」

「隠し玉？ そんなもんじゃないが…。この高校はバイク通学禁止だから。入学当初から1ヶ月前までママチャリでこの山を登って登校してたから。最初はキツかったが慣れた。あと、ロードにした理由はママチャリより早く登れるし、時間短縮になるしな。」

山中の発言に更に中嶋は興奮してしまった。

「ママチャリ!!? ママチャリはロードよりはるかに重い!! ママチャリで約1年間この激坂を登っていた!! しかも、息も上がっていなく普通に走っている!!」

「なら…。山中さん！ 更に早く登れる方法を教えますよ！」

「そうだな…。お前がここまで登ってきたのも早く登れる方法があるからだろ。競争ならフェアにやりたいからな。」

「ですよね!! なら、ハンドルの下ハンを持つてください! あと、ダンシングできますか?」

「これか?」

「そうです!! あとはダンシングです!」

「この下の奴何か気になってたからな。早く走るための下ハンか。立ち漕ぎすると登る時楽になるな。そういうことか。」

「そうですよ!! なら、行きましよう!」

「ああ。」

山中は下ハンを持ちダンシングの体制になる。その姿を見た中嶋は驚いた。

〔ロード初心者の方がダンシングできるなんて!! この人なら……。〕

「負けたくないから。先に行くわ。」

山中は一気に加速しきつきと違う走りになった。中嶋はその姿を見て更に興奮する。

「敵に塩を送ってしまったな…。だが!! 本気の勝負こそ!! 楽しい!!! 僕も負けませんよ!!」

中嶋はギアを更にかけて最大レベルで回す。

また山中と並ぶ。

「はははは!!! また追いつきましたよ!」

「!!!?」

「楽しいですね!! 勝負は!!」

「こいつ…。勝負を楽しんでいるのか? すごく笑っている。こいつはやばい!!このままじゃ負ける!!」

「お前…。どこまで本気になるんだ!」

「僕はいつでも本気ですよ!!」

「…っ。」

「さあ!! 残り150m! 行きますよ!!」

山中は中嶋の実力に驚いた。負けたら自転車競技部に入ることになる。山中は目を色を変えて走る。

「いつぶりかな。去年の体育祭のリレー以来かな。競争するなんて…。あの時も本気で勝ちにいったからな。負けたが…悔しかったな。」

山中は負けず嫌いで勝負事になると燃えるタイプである。山中の中のスイッチが入る!

「中嶋とか言ってたな!! お前…。オレの中の闘争心を燃やしやがったな!!」

山中は前を走っていた中嶋に並び、中嶋を見る。

「!?。山中さん……。さっきと違う雰囲気……。これがあなたの本気ですか!!。その闘争心とプライド!。あなたはやっぱりクライマーだ!!。」

「中嶋よ……。これが俺の隠し玉だ!。」

「ははっ!!。最高ですね!。おらー!!!。」

「負けるかよ!!!」

残り50m!!

両者は必死に漕ぎペダルを回す。汗が吹き出し車輪の音が響く。

「心臓がやばいつ……。勝負してる時の高揚感!緊張感!そして……。勝った時の達成感!この快感をロードでしか出せない!!。だからロードは好きなんですよ!!。」

「心臓がバクバクだし……。脚も少し痛い……。負けるのは嫌だ。勝った方が嬉しいからな。負けてたまるかよ!。」

両者の想いとプライドを賭けて山頂を目指す。そして、勝敗がはっきりした。

勝者は天を見て両手をガッツポーズし、敗者は頭をさげて地面を見る。

「はは!!。決まりましたね!!。この達成感!快感!!。最高!!!。」

「クソツ……。」

「勝ちましたよ!。山中さん!。」

「くっ……。」



僅かな差で山頂に先に到達したのは中嶋。

「下り坂なんでスピードが出過ぎないように気を付けてください。」

「わかつとるわ…。」

「僕が勝つたので自転車競技部に入ってください!! 約束は約束なんで!!」

「くっ…。そうだな…。」

「僕の目に狂いはありませんでした。山中さんはロードにむいてる!! その登板能力にセンス。そして! その闘争心! クライマーに必要な要素が詰まってる!! 逆にその力を発揮しない方がもったいないです!!」

「そうか…。確かに久々に勝負して負けたが…楽しかったな…。」

「こいつ…。少し変わってるヤツだが… 悪くないか…。 少しでも付き合ってるか…。だが… 勝負してた時すごく充実してた。心の中が燃えるあの感覚。今まで感じたことなかったな…。」

「中嶋よ。」

「はい!!」

「自転車競技部っていうのに入ってやるよ。」

「ありがとうございます!!」

「しかしな…。 自転車競技部作るには部員集めるのはもちろんだが…理事長とか校

長、生徒会に申請しないと作れないぞ。」

「そうなんすか!!自分たちで勝手にできると思っていましたけど…。」

「そういうところは… バカなんだな…。お前…。 自転車バカかよ…。」

「はは! 自転車バカとか良い言葉ですね!」

「褒めてないぞ…。」

こうして山中大地と中嶋悠斗は自転車競技部の第一歩を踏み出す。

# もう一つのペダル 第2話 二重人格 v s 狂人!!

もう一つのペダル

第2話 二重人格 v s 狂人!!

あの山中大地と中嶋悠斗の裏山クライム勝負から2日後。山中は放課後のバイトが休みであり、中嶋と合流し自転車競技部を作る話し合いを始める。自動販売機でジュースを買い、学校の中庭のベンチに座る。

「どうしまししょう?」

「どうしまししょうって… お前… 自転車仲間とかいないの? 同級生で…」

「うーん。今の所山中さんしか見てないですね…。」

「そうなんだ…。ロード乗ってるヤツいたら話しかけるんだろ? なら… 話は終わ

りだ…。」

「どうしてですか!!?」

「だって… お前が話しかければ集まるでしょ。お前が部員集める係でよろ。」

「山中さんも一緒にやりましょうよ!」

「そういうのは後輩の仕事だ。」

「そういうの関係ないですよー!!」

「俺さ…。時間ないからあととよろ。」

「ちよつ…。 山中さん!」

山中は急足で校門の方に走る。置いていかれた中嶋は1人で考える。

「インターハイに出るには6人必要で…。現状僕と山中さんのクライマーが2人…。平坦が得意なスプリンターとかルーラータイプ。」

平坦も山も走りゴール前に勝負できるオールラウンダーがいけないといけない。だが…ロードレースは選手もそうだが…選手を支える裏方が必要…。そうなると10人ぐらいは最低必要になる…。この学校にいるのかな…。」

「頭で考えても仕方ないか!! やっぱり! 走るしか答えは見つからないな!!」

中嶋は気晴らしに裏山を走りに行く。

山の中腹あたりで後ろから車輪の音が聞こえる。中嶋は後ろを見てしまった。

同じ制服で身長がデカくイケメンの男がスイスイと登ってきてるのである。中嶋はすぐその男に駆けつけて話しかける。

「あのー 沼津南高校の人ですよね!!」

「ああー そうだけどー 君も?」

「はい!!」

「急に話しかけるからビビったよー うん？ 君のロード… 黄色のBMCだねー

「はい!! 僕の尊敬する人が乗ってるロードバイクなんで!! お揃いで!!」

「へエー いいねー そうなの。僕は家に帰るからじゃあ〜ね。」

「ちよつと待つてください!!」

「うん? なにー?」

「あの!! 僕達自転車競技部を作りたんです!! 是非良ければ入りませんか!!?」

一瞬沈黙した。

「自転車競技部ね〜。いいよー。」

「本当ですか!!!」

「あつ…。しかし…。競争しない?」

「競争ですか!! 喜んで!!」

「良かった〜。君はクライマーかな?」

「そうです!! よくわかりましたね!」

「バイクを見ればわかるよ〜。」

「知ってるんですか? あの人!!!」

「もちろん〜 だって有名だもんねー。」

「なら話が早いですね!! この山道で勝負しませんか?」

「いいよー。いつの間に山頂に着いちゃったからまた下って勝負しますかー。」

話りながら登っていたらいつの間にも山頂に着いてた。

2人で話しながら下り学校の裏門があるスタート地点に立つ。

「さて!! 行きますよ!! ゴールはもちろんさっきの山頂までですよ! 良いですか!?!」

「良いよー。では行きますかー。」

2人は同時にスタートして中嶋は山中戦の時と同じように相手の様子を伺いギアを少しずつ上げていく作戦でいく。

だが、中嶋は自転車のことになると頭の回転が早くなり相手の特徴やスタイルなどを考える。

「身長がだいたい190cmぐらいで手脚が長い!! リーチがある分一回転だけで結構進む。あと、風の抵抗がかなりあるはず! 彼はどちらかというとクライマータイプに近い。さっきの発言を聞いて経験者だと思う。油断大敵な人だ!!」

「君は、そんなもんかい?」

「えっ?」

「君さ、なんで、ギアを上げないの?」

「ギア？ ギア上げたら登りづらいじゃないですか!!？」

「一つ言い忘れてたけどさー 君…。『ギア上げの狂人クライマー』って去年の中学生静岡県自転車競技大会で呼ばれてたの知ってる?？」

「なんで知ってるんですか？あなたは！」

「たしか名前は中嶋悠斗。あつてるよね？」

「ははは!! あつてますよ!! 大正解ですね!! あんまそう呼ばれるの気分が良

くないのでギアを上げて勝ちに行きますよ!!」

「おらーおらー!!!! そんなもんすか!? 本気でやりましょうよ!!」

中嶋はギアを上げて彼と差をあけていく。

「まさか…。あの人…。去年の大会に出場した選手なのか?」

「やっぱりく 彼は中嶋悠斗…。去年の大会の山岳リザルトを取りレッドゼツケンをつけた男やねく。今も健在で良かったよー。だが…俺の存在…わかってなかったな!!!」

彼は一瞬で人格が変わる。

「あのマネ粒!!! そこをどけー!!」

彼はその長い手脚が武器にケイデンスを上げ中嶋をとらえる。中嶋はブロックするが、リーチが長いためブロックしても無意味であった。

「えっ…！ ブロックしても避けられる!!これは… リーチの差か!!」

「おいっ。 マネ粒!! テメエーじや…。 このオレを抜くことは無理だな!!」

「待てよ！ 今まで気づかなかったが… その顔でその口調！ まさかお前は!!」

「ああ!! 去年の中学生大会2位の佐々木竜司だ!」

「二重人格の竜司!!」

「オレもな… その名前で呼ばれるのは嫌いなんだよ!!! だからよー 勝ちに行く

んだよ!!!」

佐々木はその圧倒的な力で中嶋と差を開き中嶋もギアを最大にして佐々木にしがみつくが、長い手脚とケイデンスのせいか差が開く。

「もらーー!! クソーーー！ 回しても回しても抜くことができない!!」

中嶋は必死にペダルを回したが佐々木の実力に構わなかった。

当然 先に山頂に着いたのは佐々木竜司。

中嶋は5秒遅れて山頂に着いた。

「おい!!! ギア上げの狂人クライマー!」

おめーは去年の大会で山岳リザルトとった癖に俺に負けてるのかよ!! ださ!!」

「お前に言われたくないな…。 お前はあいつの存在があつて去年優勝出来なかつたくせ  
ん!!」



「なんだと!! このマメ粒!!」

佐々木は中嶋の胸ぐらを掴み、中嶋は小柄で体重が軽いため身体が宙を浮く。佐々木は中嶋の顔に殴りそうになった。

その時!!

1人の女性が悲鳴をあげる!

「ケンカはだめー!!!!」

「どうした!! みほ!! こんな山道でケンカかよ!!」

そこに現れたのは山中大地と彼女のみほだ。

「おい!! やめろ!!」

「ちえつ… 邪魔が入ったか!」

佐々木は中嶋の胸ぐらから手を離し中嶋を落とした。中嶋は苦しそうに咳ごむ。

「おい! こいつはオレの後輩だ!」

「そうなんですかー。なんかこの人が、悪口言ってきたから、つい手が出ちやい

ました。」

「だからって! そこまでやる必要ないだろ!」

「山中さ……ん……。」

「大丈夫か？ でもな…。お前も悪いからな。どんな悪口言ったか知らんが…。」  
「すみません…。」

「じゃあくく 僕は帰りますねく。」

佐々木はこの場から去るようにロードに乗り山を下っていった。

「さてよ!! お前!! クソっ。」

山中はカバンから水を取り出し中嶋に飲ませた。

「山中さん…。ありがとうございます…。」

「まず事情を説明しろ。」

中嶋は今までのことを説明した。

「なるほどな…。二重人格か…。珍しいな。」

「二重人格なんて珍しいよねー。」

「そうなんです!! 普段は優しくて穏やかな感じなんです…レースになると凶暴化して阿修羅のように怖い人になるんです! だから… 佐々木竜司君は少し危険な人物なんです! ロードレースでは…。」

「そうか…。気をつけろよ。そんなヤツたまにいるからな。」

「はいっ…。あと一ついいですか?」

「なんだ?」

「彼女さんめっちゃ可愛いですね　ww」

「可愛いに決まっとる！　失礼なこと言うな！　バカヤロウ!!」

彼女のみほは照れて山中の頬を叩く。

「ぐはっ。」

「ははは!!　　山中さんモテモテですな！」

翌日。　授業開始前。

中嶋は一年生の教室がある廊下を歩いていけると向こうから佐々木が歩いてきた。身長がデカいせいなのか周りからの視線があり存在感がある。

「おい！　佐々木竜司！　お前に話があるから昼休みになったら中庭に来いよ！」

「あつ…。　中嶋君だね。　話ってなに？」

「それをあとで言うんだよ！」

「よくわからないけど…。わかつた。」

昼休み。　中庭。

中嶋は中庭にあるベンチに座り家から持ってきた弁当を食べながら佐々木を待った。

中嶋が弁当を食べ終えたところに佐々木が来た。

「おい。遅くないか？」

「ごめんね。女子と一緒に弁当食べようって言ってくるから断わりづらくて…。」

「……………。まあ。いいや。早速だが…。」

「えっ？ なに〜？」

「佐々木竜司！ お前は自転車競技部に入ってくれ!! お前みたいなゴール前でゴールをとれる選手が欲しかったし!! 昨日の件に関してはオレが悪かった!! 負けたのが悔しくてつい口に出してしまった!! すまん!!」

中嶋は頭を下げた。佐々木は笑顔で中嶋の頭を撫でた。

「えっ…。」

「ゆう君はわるくないよ。悪かったのは僕のもう1人の人格。僕もわかってるんだ。人格は変わっても昨日の出来事は記憶に残ってるから。あと…逃げちゃってごめんね。」

「本当だよ!!」

「僕もさ… ロード走るときはみんなで仲良く走りたいたんだ…。でも… あいつが来てみんなを困らせてしまう…。少し走るのが怖いんだ…。」

「なら! 一緒に解決しないか? 佐々木竜司のもう1人の人格がいなくなるよう

に!!」

「そうだね。1人では解決できそうにないし… 自転車競技部に入るよ。」

「おう!! 一緒に頑張ろうな!!」

佐々木と中嶋は共にライバルでもあるがそれと同時に少し友情が芽生えた。

その頃…。 山中は…。

「やめろって… みほ…。」

「大地く アーン」

みほの手作り弁当を彼に食べさせてもらっていた。リアルを満喫している山中大地であった。

# もう一つのペダル 第3話 双子のスプリンター!?

## 第3話 双子のスプリンター!?

翌日の放課後。

中嶋が山中のクラスの教室で待機してた。

「あの…山中さん!! 少しいいですか?」

「うん? なんだ?」

「少し話したいことがあります!!」

「だからなんだよ…。」

中嶋の後ろから佐々木が来た。その身長に教室に残っていた他の学生たちは驚いていた。

「あつ……。どうも……。」

佐々木は昨日の勝負後中嶋の胸ぐらを掴んで山中に止められて逃げたからだ。

「あつ… 昨日のやつか。中嶋の胸ぐらを掴んだデカやろう!! まず! 中嶋に謝れ

よー!」

「その件はもう済んだので…。」

「そうか…。事情は聞かせてもらったよ。」

「なら…。良かったですー。」

「で…。話ってなんだ？　中嶋？」

「彼も自転車競技部に入ることになりました!!　しかも!!　去年の中学生大会の2位

なんですよ!!　我チームのエースです!!」

「ほう!!　1年生でエースか!!　って…。まだ部も作ってないしな　w」

「頼もしい仲間が増えて感無量です!!　このままどんどん集めましょう!!　部員を！」

「そうだな…。オレはこれからバイトだからオレはこれにて…。」

「バイト頑張ってください!!　山中さん！」

「おう…。」

山中は自転車置場に行った愛車のジャイアントの前に少し堅いが良い2人組がいて自転車を見ていた。

「おい。俺の自転車がそんなに気に入ったのか？　だが…。これから用事があるから退いてくれ。」

2人が山中に視線をむけて片言ではなす。

「勝負しろ。」

「勝負しろ。」

山中はこの2人を見て双子だと思った。

「だから用事があるんだって…。」

「勝負しろ。」

「勝負しろ。」

「……………」

「こいつら…。人の話聞かないやつだな。」

「逆に聞くが… なんでオレと勝負したい?」

「お前。強そうだから。」

「お前。強そうだから。」

「……………」

「双子のシンクロっていうやつか?これ!」

「嫌と言ったらお前らはどうする?」

「お前のジャイアントをもらう。」

「お前のジャイアントをもらう。」

「おいおい…。オレが必死にバイトして稼いだ金で買ったロードバイクだ。その分の金を払ってくれるなら勝負しないという選択肢はどうだ?」



「オレらバイトしてないし。」

「オレらバイトしてないし。」

「被るのはやめてくれ。ややこしいわ。」

山中は考える。彼らを勝負をやめさせる方法を。考えたが一つしか思いつかなかった。

「なら。裏山の山頂まで勝負しないか？」

何故なら。山中にとって好都合な条件であるからだ。山を越えれば自宅があり、その近くにバイト先のコンビニがある。そして、山中は山道が得意からである。

「……………」

「……………」

「さすがに諦めたか…。」

「今日は見逃してやろう。ただし、明日また勝負仕掛けるからな。」

「そうしてくれ。オレは忙しいからな。」

「ちなみにお前の名前を聞きたい。」

「おい。そんなやつ最近いたがな。」

「言え。言わないとジャイアントとるよ。」

「お前ら窃盗で警察行きだぜ。」

「気に入ったからほしいんだ。」

「気に入ったからって奪うのは良くないぞ！」

「名前を聞く。」

「オレは2年の山中大地だ！ お前らは？」

「菅原勘太」

「菅原純太」

「お前ら… 見事にシンクロしとるな…。」

「明日の正午。沼津駅に來い。」

「おう！ だが… 競争ならフェアにやりたい。2対1では卑怯だ。オレも誰か1人

連れてきていいか？」

「……。良いだろう。」

「なら！ また明日な！」

「ちなみに… 明日來なかつたらジャイアント解体するからな。」

「………。」

「おつかない2人やな…。異様な雰囲気を感じる！ そんなにオレのジャイアント気に入ったのなら… 自分達で買えばいいのに…。」

山中は少しモヤモヤした様子でバイトに行くのであった。

「山中大地……。あの男はスプリンターの素質がありそうだな。純太。」

「そうだね。兄さん。だが……兄さんと開発した『ツインスプリント』は誰にでも真似できないし負ける気がしない。」

深夜。

山中はバイト終わりに中嶋に電話をかける。

「もしもし!! あっ! 山中さん! 珍しいっすね! 電話かけてくるなんて!! いつもは僕がかけてもシカトするじゃないですか!」

「なるべくお前とは自転車以外では関わりたくない。」

「ひどいっすよ!!」

「くだらないことはどうでもいいが……明日の正午に沼津駅とか行けるか?」

「どうしてですか?」

「今日の帰りにな……菅原勘太と純太っていう双子に会ってよ。勝負しないかと頼まれたんだ。」

「?!?!」

「どうした? 黙ってるが?」

「山中さん……。あの2人のことは知ってます!!」

「なんだと?」

「ツインスプリント……。菅原兄弟が開発した難易度高い技です!!! あの兄弟は2年前の中学生大会で平坦区間を2人で走り弟の純太が兄を運び兄がグリーンゼッケンをとる。あの2人は当時最強のスプリンターと言われておりました!!」

「そうなのか? まず……。スプリンターってなんぞや?」

「スプリンターっていうのは基本平坦の道が得意タイプでゴール前で競うこともありません。僕たちのようにクライマーとは違い、堅いが良く筋肉もムキムキで瞬発力に優れています。逆にクライマーは山道が得意タイプで僕のように小柄で体重が軽い選手や山中さんのように持久力がある選手が多いんです!」

「そうなのか……。グリーンゼッケンとはなんだ?」

「ロードレースではグリーンゼッケンとレッドゼッケン、イエローゼッケンがあります。グリーンは平坦で1番の選手に与えられるゼッケン。レッドは山で1番。イエローはその大会の優勝者に与えられるゼッケン。いわゆる名誉みたいなものです!! そのゼッケンをとると名が知られるんですよ!!」

「ほう!! 今の話聞いてわかったが… オレら無理じゃん。」

「そうですね!! w w 非常に相性が悪いです!! 並みのスプリンターじゃな

いので!」

「オレの愛車が……。」

「えっ?」

「この勝負に棄権したり負けたりしたらジャイアントが奪われる…。勝つしかジャイアントを守れない!!」

「そんなこと言つてたんすか?」

「そうなんだよ…。」

「また新しいの買えばいいじゃないですか!!!」

「そういう問題じゃねーよ…。」

「あつ! 1人いるじゃん!! 対抗できるの! 佐々木竜司!!」

「彼はクライマーじゃないの?」

「佐々木はオールラウンダーです! 平坦も山も走れる万能タイプです!」

「それは頼もしい! さすがエース!」

「あつ!! でも1人余っちゃいますね!!」

「そうか…。ならオレと佐々木でやるよ。」

「嫌ですよ!!! 僕も生でツインスプリント見たいですよ!!」

「お前はクライマーだろ。ダメだろ。」

「山中さんですよ w」

「そうだけ…。オレに勝負挑んできたから強制参加しないといけないし…。エースが

いないとクライマーのオレは厳しい!!」

「山中さん……。気合い入ってますね!!」

「気合い? 負けたらジャイアントがなくなるから必死さ!!」

「では…… 佐々木に明日いけるか聞いてみます!! いけなかったら僕と山中さんで

W」

「お前と組んだら負けるからやだ。」

数分後。

中嶋から電話がかかってきたからでる。

「で……。どうだった?」

「ちえっ……。 佐々木行けるってさ……。」

「良かった良かった!!」

「やだっすよー!! 競争やりたかったよ!」

「仕方ないじゃないか。スプリンター2人やし……。 山なら良かったけどな……。」

「山で勝負しないか聞いてくださいよ!」

「連絡先知らないし。」

「山中さん! 僕は競争出来ないけど行っていいですか?」

「好きにすれば。」

「ありがとうございます!! では! また明日!!」  
ガシャン!!

「はあー。めんどくさいことに巻き込まれたな。明日土曜で学校休みやったのに…。バイト疲れたから寝るか…。」

翌日。11時50分ぐらい。

山中は沼津駅に待機し、菅原兄弟が来るのを待ってた。その時佐々木と中嶋がやってきた。2人ともピチピチなシャツにスパッツみたいなものを着てた。

「お前ら…。その格好はなんだ?」

「これはロードレース専用のユニホームみたいなやつです!!」

「そうなんです。これを着ることによって軽量化もそうですが、風の抵抗を抑えられるんですよ。」

「ロードにとつて風は強敵ですから!!」

「そうなんだ…。オレ…。バリバリ私服で来ちゃったよ…。」

「仕方ないですよ! 山中さんはロード初心者なんで!! 部が結成した時は一緒に買いに行きましょう!!」

会話をしたら前から菅原兄弟が来た。

「来たか。山中大地。」

「来たか。山中大地。」

「だから… 被るのはやめてくれ。」

「山中大地。お前。そんな格好でやるのか。走りづらいぞ。」

「ユニホームっていうやつ持っていないからな!! 初心者なんで!!」

「……。お前。ちよつと来い。」

「なんだ。」

「純太。アレをだせ。山中大地。これを貸してやる。」

純太が持っていたリュックの中には前の学校で使っていたユニホームが入っていた。

「その公衆トイレで着替えてこい。あと、ヘルメットはその小柄のヤツから借りろ。」

「中嶋悠斗だつちゆうの!!」

山中は公衆トイレの中の個室で着替える。菅原兄弟から借りたユニホームにローマ字でHAKONEGAKUENと書いてあった。

「箱根学園って… 神奈川の名門高校じゃなかったけ?」

山中は借りたユニホームを着て4人の前に現れた。佐々木と中嶋は山中が着てる



ユニホームを見て驚愕する。

「箱根学園……。」

「ゆう君……。この人達……。」

「そうだ。俺たちは……箱根学園自転車競技部に所属してた。」

「オレと兄さんは箱根学園のインターハイ出場候補だった……。しかし、あの男が来て俺たちは箱根学園から追放されてしまった。その男の名は……。」

「宮崎浩輔。」

佐々木と中嶋はその名を聞いて顔が険しくなったのは佐々木である。佐々木の別人格が出て来てしまった。

「宮崎浩輔……。あのやろう!!!」

「おい!! 佐々木!! やめろ!!」

中嶋は佐々木を必死に止めようとした。その様子を見た菅原兄弟はやはりという顔をしてた。1人だけ話がついていけない山中。

「おい!! 箱根学園にいるんだな!! みやぎきーー だいすけーー!!!」

「お前のことは知ってる。佐々木竜司。お前は熱海ヶ丘中学の2年からエースを任せられていた。噂では聞いていたが……。去年の大会……。」

「それ以上言うな!! 菅原さん!!」

中嶋は佐々木が菅原に殴りかからないように必死に止めていた。

「おい!!! お前らしい加減にしろ!!!」

山中が怒鳴りだす。

「箱根学園とか… 宮崎浩輔とか… オレは知らねーんだよ!!! 過去にどんなことあったか知らんが… そもそもオレと勝負するために集まったんだろ!!! 身内話は終わってからにしろ!!!」

4人は静まりかえり佐々木はこの一言によって正気に戻る。

「そうだな。オレの目的は山中大地。お前だからな。純太。ルールを説明しろ。」

「国道414号線を伊豆半島沿いに向かい、県道17号線にぶつかったら右折し、淡島ホテルがゴールだ。海沿いをずっと走る感じだ。あと、信号は厳守だ。先についたほうがゴール。」

「わかった。だいぶ距離あるな。」

「山中さん。ロードレースは100km以上余裕で走る時ありますよ! それに比べたら序の口ですよ!!!」

「メンバーは。俺たち2人だ。」

「オレと佐々木だ!!!」

「山中大地に佐々木竜司。そこの小柄はなんのために来た?」

「だから!! 中嶋悠斗だ!! オレは後ろから貴方達の走りを見たいんですよ!!!  
やるんでしょ? ツインスプリント!!」

「……………」 お前。ギア上げの狂人クライマー。去年の静岡県中学生大会の山岳リザルト1番の男か。」

「あら。知ってるじゃないですか!! ツインスプリントさんよ!!!」

「情報網をなめるな。」

「兄さん。準備しよ。」

「そうだな。」

「山中さん。よろしくお願ひします。」

「わざわざオレのジャイアントのために付き合ってくれてありがとな。勝とうぜ!

佐々木!!」

「はいっ!!」

「ツインスプリントvs二重人格の竜司に負けず嫌いで闘争心溢れる山中さん!! ド  
ちらも凄いメンツだ!! この勝負!! 見てる僕もすげー興奮する!!!」

「では!! スタートです!!」

菅原兄弟ペアと佐々木山中ペアのジャイアントを賭けたスプリント対決が始まるのである。

## もう一つのペダル 菅原兄弟 v s 佐々木山中ペア

## 第4話 菅原兄弟 v s 佐々木山中ペア

山中のジャイアントを賭けたスプリント勝負のスタートをきる。国道414号を右折し、街中の車道は乗用車やバス、トラックが走っているため車間距離を保ちながら両者はゆっくり走る。

「山中さん。この街中は山中さんが前を走ってもらっていいのですか？僕は後ろで走りますから。」

「わかった。」

「純太。お前はずつと前を走れ。」

「わかった。兄さん。」

「なあ……。菅原よ。お前は転校生か。」

「ああ。そうだ。山中大地。」

「街の区間は少ししゃべらないか？」

「……………。良いだろう。車も結構走ってるし信号も多いからな。」

「クラスはどこだ？ オレはAだ。」

「オレはBで、純太はCだ。」

「お前は何故ジャイアントを狙うんだ？」

「フレームがカッコイイからな。あと…お前。彼女いるよな。」

「お前…　　そういうの興味あるとは思ってなかったが…　　意外やな。」

「純太はもう彼女いるが…オレはできない。モテないんだ。同じ顔なのに…。」

「やめろよ。兄さん!!　　兄さんもいつかはできるよ!!　　僕はそう信じてる!!」

「オレは…ロード以外はクズなんだ…。モテないんだ…。○Tなんだ…。」

「兄さんも卒業できるよ!!　　兄さんロードではめっちゃカッコイイよ!!」

　この双子のやり取りに山中も笑いを堪えることができずに笑ってしまった。

「はは!!　　面白いな!!　　双子でも性格が正反対だな!!　　なんか安心したよ!」

「ネガティブ思考の勘太にポジティブ思考の純太か。こいつらにもお茶目なところあるんだな。」

「そろそろお話は終わりにしようか。」

「そうだな。兄さん。」

「急にスイッチが入った!!　　ここから真の勝負が始まるんだな!!」

「山中さん!!　　後ろについてもらっていいですか!!　　僕が引きます!!」

「純太。全力で引き離せ。」

街中を抜けて、海沿いの道に入る。 気候が晴れで気温は4月並みで西から強風が吹く。海沿いの道であるため風が自転車乗りにとって強敵である。

佐々木は身長が高い分風の抵抗がすごいが、持ち前の手脚の長さでケイデンスを武器に走る。 平坦でも力強い走りを見せる。 後ろで走ってた山中は佐々木の走りを見て圧感。

「すげー。佐々木の後ろについてるが… 前の佐々木が風避けになつてクライマーのオレだけど…凄く早く走れてる!!」

「ここからカーブが続く。純太。バイクコントロールをしっかりとしろ。あと… 風に気をつけろ。」

「兄さん。しっかりとついてきてください!」

「……。で。中嶋悠斗…。いつまでついて来てる。」

「あなた達のツインスプリントを見たいからついて来てるんですよ!!! 僕はクライ

マーで平坦は早く走れないんで!」

「お前がいると…。ツインスプリントが出せない。まだやらないが…。」

「そうなんすか!! トリプルスプリントのほうが早いですよ!!!」

「そういう問題じゃない。」

「佐々木……。変わろうか？」

「いや。山中さんは前に出ないでください！僕の後ろにくっついてもらえば心配いらな  
いです。」

「しかし……。山中さん……。よくついていますね……。初心者ならついていくのに精一杯だ  
と思います……。」

カーブ道が終わり17号線に入るまではほぼ直線であり信号があんまりないためこ  
こで菅原兄弟が動く！

「やるか。」

「兄さん。」

後ろについていた中嶋は前を走ってる双子の様子が変わったと感じた。横で走って  
た佐々木山中ペアの後ろにつく。

菅原兄弟の異変に気付いた佐々木山中ペアは警戒態勢に入る。

「中嶋悠斗。お前が見たかったツインスプリント。見せてやるよ！」  
「!!!」

菅原兄弟が下ハンを構えて2人同時に体勢を更に低くしタイムを競うタイムトラベ  
ルみたいに風の抵抗を最大限になくし走る。何より前を走る純太の後輪と後ろの勘太  
の前輪がほぼくっついている。タイミング、速さが少しでもずれると落車の危険性が高

い。見事にシンクロして走る…その姿は菅原兄弟しかできない。至難の技である。

その光景を見た佐々木、山中、中嶋は目の前に走る菅原兄弟を見て驚愕。

「あれが…『ツインスプリント』。すげー!!　ハコガクのインターハイ候補に選ばれる理由がわかりますよ!!」

「すごいねー。ゆう君。山中さん…。」

だが、山中はこの不利な状況で菅原兄弟のツインスプリントを見て感動してる佐々木と中嶋に怒鳴る。

「オレのこのジャイアントが!!　やつらの手に渡ってしまっぞ!!　そうだったらオレは…自転車競技部に入れなくなるぞ!!　それでいいのか?　お前ら!」

この山中の言葉に佐々木の闘志が燃える。

「すみません!　山中さん!　僕…　全力で引きます!!」

「山中さんのスイッチが入っちゃいましたね!!　あなたの本気は僕が1番わかります!」

この山中の言葉が佐々木の別人格が現れてしまう。

「おーい!!　先輩ヅラしてるんじゃないぞ!　初心者がよ!!　おめー　オレの引き

についていくのが精一杯のくせによー!!　テメエーのジャイアントが奪われようがオレには関係ねーんだよ!!」



別人格の佐々木が現れ口調が悪くなっても山中は冷静に言う。

「お前は。あの2人に勝ちたいと思わないのか？」

「!!?」

「佐々木の別人格が… 山中さんの言葉に反応してる！ あの別人格の佐々木は中学

時代。誰の言葉も聞かずに味方を捨てていく。」

「オレはあいつらに勝ちたい。佐々木。お前はエースだ。エースなら誰よりも早くゴールしたいと思わないのか？ エースの誇りとプライドを持って！」

「なんだ？ こいつ？ 初心者のか？ オレのことをわかってるかのようにならぬ？ こいつ？ うぜー!!! だけどー！ たしかにこいつが言ってるこ

とも一理ある。仕方ねー!! 今回は特別だ!! 犬っころ!!」

「おいつ…。お前。気に入った!!! オレの引きについていける自信はあるか!!!」

「ああ!! オレはお前と一緒に勝ちたいからな!!」

「振り落とされるなよ！ 初心者!!!」

この2人のやり取りに後ろで見てた中嶋はあの別人格の佐々木を説得することができた山中のカリスマ性に驚きを隠せなかった。

「山中さん!! あなたつていう人は!! あの別人格の佐々木の心を動かした!! 何よりあなたの負けたくないという一念!! その想いが波及してる!!」

佐々木の力強い走りに山中もしがみつく。

一瞬にして中嶋は置いていかれた。

「佐々木!! 山中さん!! 必ず勝ってください!!!」

その頃。菅原兄弟は残り2.5 km地点にいた。

「淡島が見てきたね。兄さん。」

「ああ!!」

勘太は後ろをみたが… 佐々木山中ペアが見えずに少し寂しい顔になった。

「山中大地。お前と闘いたかった。最後のゴールスプリントで…。残念だ…。」

「純太。まだ引けるか? このまま離してゴールする。」

「……。兄さん…。いいんだな?」

「ああ……。ロードレースは一番速いやつが勝者だ。それ以外は… 無意味だ。」

はるか後ろで走ってた佐々木山中ペアは…。

「おーい!!! 初心者!!! お前の脚は大丈夫か!!!」

「お前が速すぎるから楽に走らせてもらっているよ!!!」

「初心者のくせになかなかやるじやない!!? やつらが見えねーな!!」

「ああ!! 佐々木!! オレのことは気にせず…… 思い切り走れ!!」

「おいおい……。 お前……。 死ぬぞ!!」

「死んでもよ……。 負けたくねーんだよ!」

「この初心者!!! 正気か?? オレのケイデンスは今120回転だ。これでも7割ぐらいしか力を出してない。全力でやったら……こいつの心拍数といい……脚がいかれるぞ!!」

「お前の想いを託してオレが単独でゴールをとってくるよ!!! これ以上お前が走ったら危険だ!!!」

佐々木の言葉に山中は笑ってしまふ。

「よせよ……。 最初に言つたろ……。 佐々木とオレと一緒にゴールするんだよ……。 1人でゴールしても意味ねー。 2人でゴールしてこそ!! 勝利なんだ!!!」

「こいつ……。 なんとゆう初心者だ!!!」

「死んでも知らねーからな!! 行くぞ!!」

佐々木は全力で菅原兄弟を追いかけ山中もついていく。

「あと500m。兄さん。」

「ああ…。オレらの勝ちだな…。」

「兄さん。山中大地は初心者なんです。初心者に無理がありますよ。この勝負。いくら佐々木竜司がいても僕達のツインスプリントに追いつけません。」

「ああ…。そうだな。」

その時。後ろからロードバイクの車輪の音がわずかに聞こえる。この道沿いを自転車で走る人はなかなかない。

「兄さん…。車輪の音がしますよね。別のロードバイク乗りが走ってるんじゃないんですか??」

「だと…。いいが…。そのままの場合もあるぞ……。」

「いやいや。ありえませんかよ！ 兄さん！ だいぶ差がひらきましたよ！」

その時。後ろから聞き慣れた声が聞こえる。

「おおおー！ い!!! 追いついたぞ!! 双子やろう!!!」

「ああ……。そうだな……。」

「!?!?!」

「おいおい…。嘘だろ……。」

「なんで!! あなたたちがここに！」

そして、残り400mの地点で両者が並ぶ!!

「おいおい…。早すぎだろ!!」

ツインスプリント!!!

オレを全力にさせたからな

!

「さすが…。佐々木竜司。」

「さすが…。佐々木竜司。」

「ここに居る3人はここまでついて来てる山中のことを共通して感じてることは…。

「この男!! ただの初心者じゃね!!」

「おい…。菅原勘太…。最後の勝負だ…。」

「山中大地。期待以上の男だ。ここまで来たことは褒める。」

「山中大地。あなたは…。すごいです!」

「初心者!!! オレのケイデンスに良くついてこれた!! だが… オレはここまでだ

!

佐々木は正気に戻り疲れ切った表情をした。

「山中さ…。あなたがゴールしてください…。別人格の僕があなたを引いてくれました…。ロードレースは仲良く2人でゴールするというのは…。できないんです…。誰が一番にゴールするか…。そういう競技なんです!」

佐々木は全力でハイケイダンスをしたため、膝にかなりの苦痛があった。その姿を見た山中は察した。

「佐々木……。すまん……。約束守れそうにないか……。また次は一緒にゴールしたい……。ここまでありがとう……。別人格の佐々木にも感謝する！」

「菅原勘太……。お前……。オレとサシで勝負したいんだろ？ 本当は……。」「!!!」

「なら……。残りの200m!! 全力で行くぞ！菅原勘太!!」

「お前の脚も……。やばいじゃないか……。息もすごい上がってるのに……。まだやるのか!!! 山中大地!!!」

「この時を待ってたぞ!! 山中大地。」

「そうこないとな!!」

「純太……。行ってくる……。佐々木竜司は膝がやられてるから一緒に引いてくれ。」

「兄さん!! 勝ってよ!!」

「ああ!!!」

「竜司!!」

「は……。い。」

「絶対勝ってくる!!」

150mのゴールスプリントが始まる!!

山中は僅かな力を振り絞り走る。勘太もゴールスプリントの体勢になる。

〔中嶋はたしか… 言つてたな…。下ハンをもつてダンシングしたほうが早く走れるつて!〕

菅原勘太のようにスプリンターじゃないし… ロードレースの経験もないが…だが…俺にはこれしかない!! 絶対に負けたくねー!!という気持ちだ!!」

〔山中大地…。最初は興味半分でお前に勝負を挑んだが… 期待以上の男だ!! ヤツの勝ちたいという執念! 何より! やつはロードレーサーだ!!〕

山中は膝が苦痛になるぐらいハイケイデンスで回した佐々木やオレたちの勝利を一番願っている中嶋の気持ちを背負いゴールを目指す。

菅原勘太は純太と一緒に生み出した『ツインスプリント』の誇り。スプリンターなら誰よりも速く先にゴールしたい。2つの気持ちが上がりゴールを目指す。

残り50m。 40m。 30m。

両者とも僅かな差!!!

〔勝ちたい!! 絶対に負けたくない!! 最後まで回れ!! 俺の脚!!〕

〔純太!! お前は最高の弟だ!! 兄さんはゴールをとる!! 誰よりも先に!!〕

そのころ…県道17号線に入ったあたりでゆっくりとペダルを回してた中嶋。

「今頃…。 ゴールしたかな。 山中さん！ 僕はあなたが勝った姿を見たいです！！」

そして… ついに決着がついた。

勝者は勝ち誇ったように片手をガッツポーズし、敗者は敵に称賛の握手をおくった。

「山中大地…。 キミは…。 ロードレーサーだ!!! この勝負…。 参ったよ…。」

「やった…。 初めて…。 レースに勝った!!!」

山中は興奮と疲労があり力が抜けて横の草むらに落車した。 勘太はブレーキをかけて山中のところに駆けつける。 勘太はブレーキをか

「おいっ…。 大丈夫か？」

「すまん…。 なあ…。 菅原勘太よ。」

「なんだ。」

「自転車って…。 楽しいな。」

「ああ。 そうだな。」



すぐに菅原純太と佐々木が到着した。

「兄さん!! どうだった?」

「……………」

「すまんな……………」

「……………」

「兄さんはカッコイイよ!! 悔しいけど……………」

「また頑張ろう!」

「ああ!!」

「山中さん……………」

「勝ちましたね!」

「ありがとう……………」

「竜司……………」

「お前の別人格の佐々木竜司にも感謝するよ……………」

佐々木、山中、菅原兄弟と共にクールダウンしながら近くのコンビニでドリンクを買い、近くのベンチに座り込んだ。

「山中大地。実はさ……………」

「なんだ?」

「もしお前が負けた場合ジャイアント奪うって言ったが……………」

「あれは嘘だ。」

「は……………」

「えー!!」

「昨日の放課後に中嶋悠斗が佐々木竜司を連れてお前のクラスの教室に行っただろ。それで自転車競技部というワードを聞いたから……………」

「気になったんだ。だから……………」

「先回りしてお前のジャイアントの前で待機してたんだ。」

「なんで… オレの自転車がジャイアントとわかったんだ？」

「純太がお前の彼女と一緒にイチヤイチャしてるところを裏の山道で見たからだ。青のフレームのジャイアントと確認したからな。」

「なるほどな…」。 なーんだ!! あの時のお前らガチな目してたからビビったよ。」

「すまん。 山中大地。」

「すまん。 山中大地。」

「気にすんなって…。 でも… お前らと勝負して自転車の楽しさがわかった…。 何回

も言うが… 被るなよ…。」

「オレたちを自転車競技部に入部したい。 いいか？ 山中大地。」

「兄さんと同様に!!」

「ああ!! もちろん! 歓迎だ!!」

「よろしくな。 大地。」

こうして菅原兄弟と佐々木山中ペアのジャイアントを賭けた勝負? のスプリント対決は佐々木山中ペアが勝利し幕を閉じた。

山中はこの勝負で自転車の楽しさを知る。 彼の成長の第一歩を踏み出す。

「皆さん!! なんて いないの!!!?」

淡島ホテル前に着いたが1人だけ取り残された中嶋悠斗であった。

## もう一つのペダル

## 第5話

## 新メンバー続出!!

## 第5話 新メンバー続出!!

あのスプリント勝負から2日後。

山中の脚は筋肉痛になっており歩くのも痛い状態であった…。登校時の時である。

「ああー!! 筋肉痛やばい…。無茶しちゃったよ。全力でペダルを回しちゃったからな……。…」

後ろから歩いてきたのは菅原兄弟である。

「おはよう。大地。」

「山中さん! おはようございます!」

「なんだ…。菅原兄弟か…。…」

「おとといの勝負の時に脚にきたのか?」

「当たり前だろ…。あんだだけ全力でペダルを回したからな…。…」

「まあ…。仕方ないことだ。お前の走りはすごい気迫と勝利の執念を感じたからな。」

「兄さん! ごめん!! 先に行くね!」

「ああ……。」

菅原兄弟の弟の純太の彼女が待っていた。兄の勘太はボソボソとぼやく。

「純太。お前が羨ましい。」

「なんか言ったか？　兄さんよ。」

「なんでもない。大地。今日の放課後少し時間があるか？」

「ああ……。今日はバイトないから大丈夫だ。なんだ？」

「それは……。放課後の楽しみだ。」

「……。わかったよ。」

「じゃあ。また放課後な。」

「ああ……。」

「気になるが……。また勝負とか言い出すんじゃないか？　リベンジ的なやつ！

オレの脚が動かねーよ!!」

山中は少しモヤモヤしながら放課後まで過ごすのである。

放課後。

「あつ……。山中さん！　兄さんに山中大地を連れてこいって言われたので来ました

！」

「なんだ…。純太のほうか。」

「で…。勘太はオレに何の用だよ。」

「それは…。バラすなって言われてるから…。言えません!!」

「意外に頑固な部分があるな…。兄さんは。」

山中は純太と共に学校に裏門に連れていかれた。そこには見慣れない顔が3人いた。

「来たか。大地。紹介しよう。」

「こいつらは？ 誰だ？」

「この3人は…。自転車競技部に興味がある一年だ。オレが勧誘した。」

「おいおい…。まだ…。自転車競技部もないんだぜ。勧誘してくれたのはありがたいが…。」

「そうなのか？ 大地。」

「ああ…。」

「8人いれば…。部活できるよな。インターハイは6人いれば出れるからな。」

「そうなんだ…。」

「ああ。」

「どうやってそこにいる3人を勧誘したん？」

「SNSだ。この3人のプロフィールを見て誘ってみたんだ。」

「なるほどな…。」

「兄さん！ さすが！」

「とにかく。自己紹介を頼む。」

1人は眼鏡をかけて勉強が出来そうな真面目で優等生っぽい男が先に自己紹介をする。

「はじめまして。僕は沼津南高校1年B組の熊野友成といいます。ロードは中学1年か  
らやっています。僕は山も平坦も走るオールラウンダータイプです。よろしくお願  
いします。」

「ああ…。よろしく…。」

横にいた身長が150cmぐらいの小柄で愛嬌がある美男子系の男が次に自己紹介  
をする。

「はじめましてです！ 僕は… 北上雄介といいまーす!! 山なら… 負けない

よー!! ちなみに僕は… 中嶋悠斗が大嫌いです!!

山岳リザルトとられたからね。」

「ああ…。よろしくな…。そんなにあいつが嫌いか？」

「うん。大嫌い!!」

「そうか…。仲良くしてやれよ…。で…。そっちは…。」

「……………」

「自己紹介してくれないか？」

「……………」

「すまん…。大地。こいつは多村純太郎。ロード経験者ではないが…。ロードレースに興味があるらしいんだ。」

「そうなのか…。よろしくな。」

「……………」

「なんだ…。こいつ…。一言も喋らないじゃないか！ 極度の人見知りか？ こいつ

!!」

「今日呼び出した理由はこれだ。大地。」

「ああ…。競争じゃなくて良かったよ…。」

その時。佐々木と中嶋が歩いてきた。

「あつ…。！ 山中さんに菅原さん達！ お疲れ様です!!」

「山中さん。菅原さんお疲れ様ですー。」

「けつ…。タイミング悪すぎだな。大地。」

「ああ…。」



北上は中嶋を見た瞬間！　顔が険しくなる。

「あれあれー。誰かと思えば…。狂人クライマーじゃーん。」

「うん？　お前…。誰だ？」

「はあー??　覚えてないのー？　中嶋ー？」

「全く!!!」

「去年の大会…。お前にコケにされてうざかったんだよ!!」

「???　あつ…　思い出した！　どチビやろう!!」

「どチビ…。　気にくわないな!!」

「ちよつと!!　やめたまえ!!　これからチームメイトになるというのに…。チームの輪を乱す行為は良くない！」

「ふん…。熊野君。君に言われたくないな…。オールラウンダータイプとか言いながら君のこと知らないんだよねー。ロード経験者とか言ってるけどー。」

「くつ…。それは…。」

「やめろ。」

突然今まで何も喋らなかつた多村の一言が周りの雰囲気が変わつた。

「……。」

この冷たい空気を変えようとした山中。

「まあまあ……。仲良くやろうぜ! まだ……部は結成してないが……メンバーは

集まつたし……あとは理事長とか生徒会に申請すれば部は結成できるから!! 勘太!

ありがとな!」

「ああ。」

北上が山中に挑発する。

「ちよつと……。山中さんでしたっけ? あなたが……仕切ってますが……部長

にもなる気なんですか?」

「部長? オレは初心者だ。部長は経験者になるべきではないのか?」

「へえー。たしかにあなたみたいなの初心者には部長は向いてませんよ! ちなみに僕は菅

原勘太さんが部長が良いと思いますがね!」

この北上の発言にキレた中嶋。

「おい。どチビ。山中さんはお前にとつて先輩だ。山中さんの実力わかつてねークセにバカにすんじゃないぞ。」

「へえー。中嶋ー。ロードレースの世界では速い奴が強者。いくら歳上だろうが…。自分が一番速ければ上下関係なんて関係ないんだよー。山なんか特にそうじゃないの？」

中嶋。」

「それは少し違うな。どチビ。たしかにお前の言ってることは間違っていないが…でもー上手く言えないが…。山中さんは凄いなだー！」

「はあ…。お前が認めてる山中さんの実力を是非!! この目でみたいなー。」

「ちよつ…。中嶋!! オレの脚が筋肉痛って言うのに…。」

「オレな…。脚が筋肉痛なんだ…。また今度にしてくれないか？」

「言い訳ですか？ 山中さん!？」

「言い訳じゃない！ 本当だ！」

「初心者だから…。自信ないんですか？ この僕に勝てないと…。」

「山中さんならできます!!」

「中嶋ー!! お前のせいで…!! だが… ここで逃げたら北上にバカにされるだろ…。なら…。やるしかないか…。脚痛いが…。」

「大地。本当にいいのか？」

「本当は…。やりたくないけど…。ここで逃げたらあいつにバカにされそうな気がするからな!!」

「あまり…… 無理するなよ。」

「ああ……」

「大丈夫なんでしょうか？ 山中さんの脚……。2日前限界までペダルを回して脚に来てるはずですが……。」

「大丈夫だ。純太。山中大地の凄さはお前も知ってるだろ。」

「……。そうですね！ 兄さん！」

佐々木と中嶋は山中に対して感じてゐることはあつた。

「山中さん……。僕もあなたがどんなに苦しくても誰にも負けたくないという気持ちは強いのです！ 2日前……。山中さんと一緒に走って凄く思いましたー！」

「僕はあなたと初めて一緒に競争してこの人はただモンじゃないと！ そして！ あなたが別人格の佐々木の心を動かしたあの言葉！ それは確信に変わりました！ だから！ あんなどチビに負けないでください!!」

「山中さん！ あなたは山が得意ですか？」

「ああ。北上！ オレはクライマーだ！」

「あなたがクライマー!! なら……。ちようどいいですね!!」

「来い！ 北上！ オレは勝つ！ 筋肉痛だろうがな!! ！ その山の山頂がゴールだ!!」

「良いでしょう!!」

なかなか傾斜があるさか道…。

大好物ですよ!」

山中大地と北上雄介のクライム勝負が始まるのである。

## もう一つのペダル

## 第6話

## ハイケイデンスクライ

マー!

## 第6話 ハイケイデンスクライマー!!

北上に勝負を挑まれた山中。山中は2日前のスプリント勝負で筋肉痛になりハンデがありすぎる。それでも勝負をする。

「めんどくさいことになったが… やるしかないよな!」

「あなたの凄いところを見せてくださいよ!!」

「こいつ。小柄だけど…闘争心がやべえ。」

「では。行きましようか! 山中さん!」

学校の裏山の傾斜20。もある山道勝負が始まる。

太。

スタートをきるのは菅原勘

「大丈夫か? 本当に?」

「ここで引いたら負けだ。勝負に挑まれたなら…」

負ける気がしない。」

「そうか。お前の強さはその闘争心だよな。」

「では。行きましようか。」

「ああ。」

「ちよつと待つてくれ！ 僕も走つていいかい??」

「お前に用がねーんだよ！ 中嶋！」

「どチビと山中さんの走りを見たいんですよ!!」

「去年見ただろ！ だが… あれから強くなった僕の実力。 お前に見せてやるわ

！」

山中と北上の裏山勝負がスタートをきる。

先に仕掛けたのは北上。

「あれっ…。 どうしたんですか？ 初心者クライマーさん！」

「ちよつと様子見だ！」

「とかいいながら…。 本音は…。 スゲーいてーよ。脚がちぎれそうだ…。」

「様子見ですか…。 あなたがしなくても僕はあなたを離して登るよ！ あと1. 8 k

m！」

「力で圧倒する気か…。」

後ろから追走してた中嶋は山中のことを心配する。

「山中さん…。 本当は脚が痛いんですね…。 こいつ…。 去年見たが並みのクライ

「マーじゃありませんよ!!」

「山中さん……。あなたに一つアドバイスしますよ。山は弱者は墮とされ強者だけが生き残る……。デスマッチなんですよ!」

「くっ……。見かけによらず口は悪いやつだな。しかし、ヤツの言ってることは間違えな  
い……。」

「だったら……。オレは墮とされないように生き残るわ!　そして!　お前に勝ち

たいからな!!　北上雄介!」

「急に雰囲気が変わった!　なんだ?　このプレッシャーは!!」

「脚がいてーとかそんなのどうでもいいわ。この脚が砕かれようがこいつに勝ちたい。  
それだけだな。」

「残り1.2km。両者の差は少しひらいているが北上が先頭を走っている。」

「ち……。なかなか縮まんね……。ここからは傾斜が少し上がる。20。でもなかなかツ  
ライが……。ここからは更にツラくなる!!」

「さて。そろそろやるか。僕の本気をね!」

「なんだ。隠し玉をここで出すのか……。」

「このタイミングで北上の本気を出したら……。オレに勝機はない……。さて……。どうする  
!」



「僕は… 傾斜がツライ坂ほど本気になれるタイプなんです。残り約1km。あなたは… ジ・エンドです！」

「ジ・エンドになってたまるかよ！」

山中は思い切りペダルを回す。だが… 脚が痛いせいか思ったように登れない。

「くそっ…。どんどん差がひらいていく！ 傾斜が上がったせいか… 脚にくる…。」

「見てくださいいよ！ 僕の本気!!」

「やべえ…。」

「ハイケイデンスクライム第1弾！」

「なんだ…。あのケイデンス！ 異常だ！」

「僕は… あのインターハイを見てあの人みたいな凄いクライマーになりたいとあの人の走りを研究し、一生懸命練習して習得したハイケイデンスクライムだ！」

北上のハイケイデンスクライムを見た中嶋は驚いた。

「この走り…。こいつ…。あの人のフォームと全く一緒だ！ 山中さん…。これは

やばいです!!」

「くそー!!! 速すぎて追いつけねー！」

いつの間にかかなりの差がつけられおいあげるのにかなり厳しい状況にたたされた。

「勝ちましたね。この傾斜で堕ちました。僕のハイケイデンス。それに……あの人は勝負する前から脚が限界だった!! 初心者ながら頑張りましたね。」

「あと500m! 余裕だわ!」

「動けよ!! オレの脚!! くそー!」

山中はかなりの差がつけられたせいか……肉体も精神も限界に達した。下を向いてしまう山中。その様子を見た中嶋は……

「あなたの勝ちたい執念はどこにいったんですか?!? 僕が知ってる山中さんはこんなところ

で負けない人です!! たしかに……。北上は実力も経験もあります!

しかし、あなたは誰よりもハートが強い方です!! それがあなたの武器であり、誰よりも先に登りたいと強く思う人が最後は勝つんです!!」

「中嶋……………」

「たしかに……。差はだいぶひらいてしまってますが……逆転できます!! 今の山中さんなら!!」

「そうか……。目が覚めたぜ!」

「そうです! 山中さんならできる!! 僕はそう信じてますから!」

「ありがとな…。中嶋…。オレは絶対追いついて勝ちに行く!!」  
「うおおお!!!」

山中は吹っ切れたようにペダルを回し北上の差を縮めにいく。

「残り100m! 山は勝負は正直だ。肉体と精神が強くないヤツはすぐ墮ちる。だから… 僕は今まで他のクライマー達を墮とした。実力を見せつけることで精神的ダメージを与えることができるからな。」

北上の後ろから車輪の音が聞こえる。後ろを向いて確認する。

「中嶋が登ってきたのか。」

「ん? 違うな。青いフレームにジャイアント? 他のロードバイク乗りが来たのか。」

か。」

「ほう…。待たせたな…。北上…。」

「!!!」

「嘘だろ!! 僕はあなたを墮とした!! なぜあなたがここまで来た!!」

「それは… お前に勝ちたいからだ…。」

「脚はとつくに限界に来てるはず! 精神的に墮ちたはず! なぜあなたが!!」

「はあ……。ここまでだな……。悔しいが……。脚が限界だ……。動けね……」  
山中は北上に並んだ瞬間に脚が動かなくなり落車する。脚を痙攣して気を失っていた。

北上は山中の姿を見て呆然としてた。

あと20mの山頂ゴール前で追いついたからである。

後ろから中嶋が登ってきた。

「倒れていた山中のところにすぐ駆けつける。」

「山中さん!! 気を失っている……。今すぐ救急車を呼ばないと!!」

「……。」

「おい!! 北上!! 病院に電話しろ!」

「……。」

「何やってんだよ!! 早くしろよ!」

「ああ……。」

その時。山中の意識が戻った。

「やめろ……。オレは大丈夫だ……。」

「山中さん!! 無茶してはいけません!」

「たかが……。ちよつとした競争のために大ごとにするなよ……。」

「しかし!!」

「オレは… 大丈夫だ…。 もう少しこうやって… 青い空を見たいからな…。」

「……………。 わかりました…。」

「北上…。 まだ… 競争中だろ…。 今回は… お前の勝ちだ…。 すぐそこが山頂だ…。」

「……………」

北上は黙りながら残りの20mを登り決着がついた。 すぐ歩きながら山中と中嶋のところに駆けつける。

「……………。 すみませんでした…。」

北上は頭を下げて泣き目になっていた。

「なんで……………。 謝るんだよ…。」

「僕はあなたが競争前から脚が筋肉痛だとわかっていながら… 無理に競争を押し付けてしまいました…。 そして、あなたを見下していました…。 すみませんでした!!」「競争を受けたのはオレだし…。 お前のせいじゃねーよ…。 オレが無理しちゃったっていうことだ…。 気にするなよ…。」

「すみません……………」

「だから…。 もういいよ…。」

「山中先輩!! あなたは練習すれば凄くクライマーになります!! 僕はあなたと勝

負してわかりました！ 中嶋が山中先輩のことを認めた理由もわかります!!」

「褒めてるのかよ…。でもな…。オレは…。この勝負でいろんなことを学べた。お前らに追いつきたいって…。北上に最初に言われてそう思えた…。」

「山中さん!! 強くなりましょ!! そして!一緒にインターハイに行きたいです!」

「山中先輩! これからよろしくお願いします!! 今まではすみませんでした!!」

「ああ!! よろしくな! 北上雄介!」

山中と北上は握手をした。

「あつ…。ちなみに中嶋ー!! お前は!! 大嫌いだからなー!!!」

「イケメンなのに残念な男だな! 北上!」

「お前ら…。仲良くしろよ…。」

北上と山中の裏山クライム勝負を制したのは北上。山中は中嶋の一言によって限界まで回し惜しくも負けてしまった。しかし、彼にとつて失っていた気持ちを取り戻すことができた。

## もう一つのペダル 第7話 沼津南高校自転車競技

部！ 結成!!

もう一つのペダル

第7話 沼津南高校自転車競技部！ 結成!!

山中と北上のクライム対決から一週間後。

放課後の学校。四月の暖かい風が吹き夕焼け空が綺麗で、少し先には海が見え、絶景。

誰もいない教室で山中大地は外を見ながらたそがれていた。

「なんか…。落ち着く…。」

「山中さん!!」

「なんだ？ 中嶋か…。もう少し一人でいたい気分なんだよ。」

「今日も綺麗ですね。」

「ああ。ここから見る景色は好きなんだ。」

「山中さんにゆう君！」

「なんだ。竜司も来たのか…。」

「佐々木! 補習おつ!!」

「大変だったよー。数B苦手だからさー。」

「ちやんと勉強しないとダメだぞ。」

「大地。なんだ。話とは。」

「山中さん!! お疲れ様です!」

「菅原兄弟か。それはまだだ。」

「遅れてすみません!! お疲れ様です!!」

山中先輩!!」

「僕も遅れてすみません。北上に勉強を教えたため遅れました。」

「……………」

「北上に熊野に多村か。みんな自転車は得意なのに、勉強は苦手なんだな……。」

「よし。集まったな。では……そろそろ自転車競技部。結成する。」

「この日が来ましたね!! ついに!!」

「ああ。ちなみに顧問の先生も決まってる。といつても……形だけな。」

「大地。たしかにな。日本はヨーロッパとは違いロードレース競技人口者が少ない。だ

から、指導者も数少ない。」

「ああ。一応顧問はつけないと部活作れないから……自分達で考え自分達で部を作つ



ていくんだ。なんか… 楽しいと思わないか？」

「はい！ 山中さん！」

「そうですねー。」

「そうだな。大地。」

「早速だが… 部長を決めようか。」

「はい！！」

「中嶋？」

「もちろん！！ 山中さんでしょ！！ みんなはどう思う？」

「賛成ですー。」

「大地が適任だな。」

「兄さんと一緒です！」

「山中先輩が良いと思います！」

「そうですね。僕も賛成です。」

「…………… やだ。」

多村と山中以外の6人はビビる。

「！！？」

！！中嶋と北上はキレた口調で言う。

「いつもは無口のお前が急になにをいいたすんだ!!?」

「純太郎!! 山中先輩以外に他に誰が部長をやるんだ? 逆に聞くんが!」

「……………」 僕。」

山中は思わず笑ってしまった。

「ははは!! 多村。謎多き男。お前…。オールラウンダーだろ!!」

他の6人は驚いていた。

「多村純太郎…。ロードは経験ないんじゃない?」

「話が違いますよ! 菅原さん!!」

「……………」 なんてわかつたんですか。」

「実はな…。昨日の夜お前が裏山を登った姿を見ちまつたんだ。」

「隠し通そうと思ったが…。無理だ…。あえてバラした……………」

「なんだ。隠し通せば良かったのに…。なぜ?」

「僕がこのチームを1番にしたいからです。」

「そうか。昨日のバイト終わりにお前を見かけたから追っかけてみたんだ。竜司のように平坦も山も力強く走ってたからな。追いつけなくて諦めたがな w w。」

「そうなんですか…。バレてしまったら仕方ないですね…。僕は去年。富士山の向う側の中学生山梨県自転車競技部大会で優勝した…。」

「勘太よ。お前の情報網はこんなもんか？」

「大地。俺のミスだ。山梨県のデータは… なかった…。」

「ほう!! 多村純太郎!! 佐々木のライバルだな!!」

「ゆう君…。そうだね…。」

「多村純太郎よ。何故… あん時経験者じゃないと言った？」

「僕は…道の上で証明したかった…。自分が…このチームにエースだつて…。」

「なるほど。自転車乗りらしい答えだな。」

「しかし! 僕も含めてオールラウンダーは3人いますよ! インターハイは6人出場

!。この中から1人落選…。そうなりたくない!! 僕は!!」

「熊野君…。佐々木君も僕も…エース級の実力者…。熊野君はエース級の実力あるの

?」

「あります!! 僕だつて!!」

「まあまあ… そう騒ぐな。クライマーもだ。1人落選する。いまのところオレが落

選候補だ。」

「僕は山中さんと一緒にインターハイにいきたいんだ!」

「僕も山中先輩を全力でサポートしたいです! 中嶋となんてごめんだ!!」

「純太よ。お前も落選候補になるかもしれないぞ。いくらスプリンターが2人いても安心

するな。」

「わかってるよ。兄さん。レースコースの地形によつてメンバーを変えることもあるからね。」

「みんなの士気はありそうで安心したよ。話を戻すが… オレか多村か。部長を決めな」といけないからな。」

「山中さん…。あなたの実力もそうですが… ロードレースにおける作戦やセオリー。相手の分析やメンバーの調子など管理することができますか?」

「多村…。オレはお前に譲りたい…。」

「この山中の一言で周りがざわつき始める。」

「何言ってるんですか!!!? 部長は2年生の誰かじゃないといけないですよ!」

「山中先輩!! あなたが良いです!」

「おいおい…。北上は速い奴が1番なら上下関係は関係ないって言わなかったか?」

「たしかにそうですか!! でも…。周りを魅了する何かをあなたが持つてるんです!!」

チームを作るために必要なのは…あなたみたいなチームの精神的支柱な人! いくら… 実力者であってもチームの輪を乱すことがあつてはなりたない。インター

ハイは! 6人で3日間走る!! チームの結束は不可欠です!」

「僕も北上君の言う通りだと思います。個人戦なら己の実力しかありませんが… チーム

戦はそれぞれの力が結束し勝利を掴む。それがインターハイですからね。」

「それは…。君たちの意見…。僕はエース…。エースをゴールに叩き込む走りを君達はできるの…?」

「それは……。」

「わかった…。こうしよう。オレがインターハイまで強くなったらオレが部長になる  
いうのはどうだ? 多村?」

「……。 といいますと?」

「たしかに多村の言う通り…。 実力も経験もない…。 初心者だ。 そんな初心者に部長  
なんて任せられないのはわかる。 しかし、オレがお前より強くなればまた話は変わるだ  
ろ?」

「……。 なるほど。 このチームのエースを越したら山中さんがエースになるとい  
とですか? 面白いですね…。 わかりました。」

「なら…。 決まりだな。」

「くっ……。」

「沼津南高校自転車競技部の部長は多村純太郎だ。 1年だが… 頑張れよ! 多村

!」

「……。 はい。」

周りは納得していない様子で普段は無口で何を考えているかわからない。ミステリアスな多村純太郎が部長になる。副部長は菅原勘太に決まった。

多村と菅原は理事長室や生徒会室に行き部活申請の手続きのために行く。他のメンバーは帰らずに教室に残っていた。

「なんで…。山中さんは多村に譲ったんですか!!!」

「山中さ…。あなたが適任だったのに…。」

「山中先輩!! そうですよ!」

「私も残念です…。」

「山中さん!! 兄さんも… あなたのことを慕っているのに…。なんでですか?」

「おい。お前ら。矛盾してるぞ。」

「!!!????  
!!!!」

「自転車競技は実力があるやつが称賛されるスポーツじゃないのか? お前らはオレ

を慕ってくれてるしそのほうがチーム的に良いだろう。しかし、オレはこのチームの最弱だ。初心者だ。この間の勝負で…すげー感じたんだ。実力がなきや…。インターハ

イに出場もできないし、優勝もとれない。楽しいだけじゃ…勝てないで。それを教えたのはお前らだろ?」

「……………」

「だからよ…。オレが強くなつてインターハイに出場し、全国の実力者に負けない走りをするんだ!そして!オレ達が優勝する!!」

「山中さんは… はるか先の目標を見据えて…。かつ… 自分を追い込んで!」

「なあ。 インターハイに行くぞ!! オレ達の力で! やつたろうぜ!!」

「はい! 山中さん!」

「はい!」

「山中先輩!」

「はい!」

「山中さん! やりましょう!」

6人でハイタッチをして決意を固めた。手続きを終えた2人は教室の外で見守っていた。

「なあ。多村純太郎。アレが山中大地という人間だ。ヤツの想いは周りを巻き込みチームの雰囲気をよくするヤツだ。お前も。あんな風に行けるか?」

「……。僕のやり方と。山中さんのやり方は違うので。僕なりにやるつもりです。」  
「そうか。万が一……。チームの輪を乱すことがあればお前を部長から降ろすからな。」  
「わかっています……。」

こうして沼津南高校自転車競技部としてスタートをきる。



## もう一つのペダル 第8話 初練習!!

## 第8話 初練習!!

放課後。沼津南高校自転車競技部の初練習が始まる。顧問の岩本は練習開始時に挨拶し、生徒達に自由にやらせる方針で任せた。部長の多村純太郎は紹介したいやつがいるということでも2人紹介する。

「みなさん…。マネージャー希望の女の子が2名いますので紹介します。」

「はじめまして! 坂田有未です! よろしくお願いします!! 簡単に自己紹介しますが…。女子自転車競技の社会人チームに今も所属しております!!」

「……。みほで一す! しくよろです!」

「これからもよろしく願います。僕が部長の多村純太郎に副部長は菅原勘太さんです。現在部員は8人いてマネージャーを含めて10人です。」

「あっ!! 山中さんの彼女さんじゃないですか!!?」

「えっ…。そうなんですか?」

「恥ずかしいからやめろ。中嶋。」

「では…。みなさん早速ですが…。レースを行います。8人いるので4人1組になってほしいです。誰と組むかはみなさんの自由です。」

「多村…。コースは？」

「そうですね…。学校前の県道144号線を走り380号線にぶつかったら…沼津駅のほうに向かい、国道414号線を曲がりまた戻る感じで…。」

「多村君。山岳区間があまりないのではないのか。」

「僕は先に言いますが…。皆さんをエース級の選手に育成したいと思います。あと、出来れば平坦も山も走れるようにしてもらいたいです。」

「多村純太郎。お前は何が狙いだ？　ロードレースはそれぞれの役割があり…。それに

あったオーダーを出す。クライマーやスプリンターもいなきやダメだ。」

「皆さんをオールラウンダーにしたいと言ってるのではなく…。箱学に勝つためには

皆さんがエースにならなきやいけないのです。」

「なるほど。あの福富さんが良く言っていたな。6人全員がエースだつて…。」

「箱学出身の菅原さん達は良くわかるはずですよ。インターハイに優勝するというのはそういうことなんです。」

「なら。俺が決めていいか？　多村よ。」

「任せます…。」

勘太がメンバー編成を決めることにする。

「では。多村。熊野。中嶋。純太。この1組。

佐々木。北上。大地。オレ。この編成でいく。」

「……。理由はありますか？ 勘太さん。」

「そうだな。まず。おまえの実力を見たいのが一つ。自分がエースと名乗ってるからな。あとは、なんとなくバランス良くした。」

「……。そうですか……。」

「始めようか。大地はレーパンとか持ってないからこの間貸したヤツ持ってきたから着てくれ。」

「ああ。ありがとな。」

「ねえ……。大地……。自転車頑張ってるね。」

「ああ。やるって決めたから頑張るよ。」

「大地……。少したくましく見えるよ。」

坂田が山中に話しかけてくる。

「山中先輩！ みほさんと付き合ってるんですね！！ 羨ましいです！」

「おう……。坂田さんだっけ？ 自転車経験者なのになんでマネージャーやりたいの？」

「この学校はまだ女子自転車競技部がないので……。私の経験をみんなに伝えたいな  
と思つて……。」

「そうか。ありがとうな。女子がいると華があつていいからな w」

「それほどでも……。あつ……。あと。練習終わつたら時間ありますか?」

「えつ……。なんで?」

「それは後ほど!! 早く着替えたほうが良いですよー!」

「ああ……。」

他のメンバーも着替えてボトルに水を入れて自転車に乗りスタート地点の校門前に  
立つ。

「改めて言います。さっき言ったコースを3周走ります。街中とかも走るので信号は厳  
守でお願いします。事故だけはおきないように走ってください。あと……。タイムで  
競いたいと思います。信号で止まった場合は時間を止めてください。走っている時の  
タイムでお願いします。時間を測るのは各組のエースが持参してください。僕が測  
ります。」

「このチームは佐々木が頼む。」

「はい!」

「ではいきますか。皆さん。」

スタートをしようとした時…… 山中がみんなを止める。

「待て。みんな。このスタートが俺たちの自転車競技部の始まりだ。みんな!!」

「ですね!! 山中さん!」

「山中さん……」

「はい! 山中先輩!!」

「山中さん。」

「……………」

「そうだな。大地。」

「山中さん!!」

そして。ミニレースが始まる。

最初は少し下り平坦区間に入る。

それぞれのスプリンター達が先頭を走る。

各組指揮をするのはタイムを測るエースの2人。 多村と佐々木。

「純太さん……。引いてもらっていいですか?」

「勘太さん!! 引いてください!」

「純太さんはどちらかというとルーラータイプですよ。平坦をある一定の速度で走るこ  
とができる。それがツインスプリントで勘太さんを引いて走る理由。 あつてますか

「？」

「…………。そうですね。」

「おいおい。多村純太郎よ。何が言いたい？」

「兄の勘太さんはどちらかというところゴール前で勝負する。天性のスプリンタータイプですよね。優れた瞬発力と力強い走り。しかし、あなたはゴール前で競う選手なので純太さんみたいに一定の速度で長く走ることにはできませんよね。」

「…………。お前。見抜いてるのか？」

「当たり前です。脚を見ればわかりますよ。こちらはエースとアシスト。ルーラーにクライマーがいますよ。どう対抗しますか？ 勘太さん!!」

「たしかに…。こつちは…エースとスプリンター。クライマー2人…。アシストとルーラーがいる多村チームは平坦道が多いこのコース。かなり有利。しかし、多村よ…。なぜ、オレがこの編成にしたか…。後々わかる。」

「純太さん。差をつけます。お話はこのままでにします。レースなんで。」

「わかった…。兄さん…。ごめん!!」

「しかけたか。純太。今なら追いつく!」

勘太は追いつこうとしたが、信号が赤になる。

「しまった!! これを狙っていたのか!」

佐々木が指示する。

「勘太さん。ここから先は全力で引いてもらっていいですか。そのあと僕が引きます。」

「しかし、お前はエースだ。序盤で脚を使ったらダメだ。」

「僕に考えがあります。しかし、まだ早いです。とつておきは最後に出します。」

「お前も同じ考えをしてるのか。佐々木。」

「当たり前ですよ。」

「追いつきますよ。勘太さん！」

「ああ。クライマーの2人!! ついてこれるか?? 少し頑張ってくれ。」

「勘太。頼むわ。」

「はい! 大丈夫です!!」

「仕方ないか…。純太がいなくてもできるが…オレも1人でこつそり開発した…。鬼引きを見せてやる!! うらうらうらー!!」

勘太は険しい顔をし、力強くかつ大胆にメンバー達を引いていく。

「多村純太郎よ。お前は… 少し誤解してるぞ。たしかにお前が言う通りにスプリンタータイプだ。ゴール前でしか競えないし純太みたいに一定の速度で平坦は走れないが… そんな俺だからこそ! 短時間だが全力でメンバーを引くことができる!」

後ろで走っていた山中も北上もついていくのに精一杯である。

「勘太……。早すぎて脚が……。」

「勘太先輩。すごい!!」

目の前に走る多村チームをとらえ、あつという間に追い抜き佐々木チームが有利になる。

追い抜かれた多村チーム。多村は次のオーダーを出す。

「なるほど。勘太さんの能力を使い僕達の差をこのタイミングでひらくということか。しかし、長くは続かないし全力で引いてたから脚が使えなくなります。おそらく、勘太さんはもう無理でしょう。次はエースが引くんですか。クライマー2人に使えなくなつたスプリンターを連れて。」

「なあ……。多村よ。」

「なんだ? 中嶋君。」

「お前……。慢心してると負けるぞ。オレら」

「なぜ?」

「ぶつちやけな。1人ダークホースがいますよ。むこうは。」

「ほう。だれですか?」

「山中さんだ。」



「ほう。皆さん… 山中先輩のことを相当信頼してますね。彼はクライマーですよ。平坦が多いこのコースはクライマーの活躍の場はあまりありませんし、初心者ですよ。」

「お前にはわからないか。」

「僕も山中さんを警戒してます。」

「兄さんも僕もある意味山中さんがダークホースだと思えます。」

「なら。潰してやりますよ。1周目は捨てます。2周目から追いかけます。3周目で追い抜き、終盤でゴールします。プラーンは頭の中で練りました。では、皆さん脚を休めてください。」

勘太の引きで沼津の街中を通り、登り区間の手間まで引いた。勘太の引きのおかげで多村達とだいぶ差をひらいた。

「……………。はっはっはっ……………」

「勘太さん…。よくここまで…。北上君！ お願い!!」

「わかった！ ついてきてください！」

「多村達と差はひらいた…。勘太さんのおかげです…。 1周目はなんとか大丈夫そうですね。」

「しかし… なんでむこうは追いつこうとしない？ メンバーは恵まれているのに

…。なぜだ？ ひっかかるが… このまま何も問題がなければいけると思うが…。」

1周目は佐々木チームが先に通り、2周目目に突入。5分ぐらい遅れて多村チームも通過する。2周目に入った多村はオーダーを出す。

「2周目に入りました。ここまで休めたと思うので5分もある差を目標1分まで縮めません。純太さん。限界まで2周目は引いてください。それで1分差まで縮めることができます。」

「まさか…。多村君。君は…。」

「そうです。ルーラータイプを2周目で捨てます。ロードレースは誰をどう使うかが勝敗を分けます。いけますか？ 純太さん。」

「……。やるよ。」

「あと…あなたは兄さんを超えたくないんですか？ 今のままでは満足いきませんよ

ね？」

「……。兄さんはすごいからいいんだ…。」

「本来のスプリンターなら…誰よりも速く強く走りたいたいと思いますが… ずっと兄に利用されるがままに…兄に勝ちを譲ってしまう。そんなんでいいんですか？」

「…………… いやだ。」

「ですよ。純太さんなら兄を超えることはできます。あなたならできる！」  
後ろで走っていた中嶋は感じる。

「この人… 自分がゴールするために人をうまく利用する！ その人の弱みを話しいように誘導する!! 彼は…頭もキレルペテン師！」

「皆さん…。大丈夫ですか？ ついていけますよね？」

純太の今まで以上にすごい引きを見せ2周目の平坦区間が終わる時に、純太は力を使えば果たし多村チームから離れる。

「多村君…。君は少し…考え方はズレているが… たしかに君に言われたとおりに僕は兄さんを超えたい気持ちはある…。でも。兄さんと仲良く走れることが出来れば一番良いかな…。今は少し疲れた…。」

純太が離れ登り区間は中嶋が引いて走る。

「あと10秒。縮められますか？ 中嶋君。」

「おい。多村。一つ言うが… オレはお前の召使いではないと言っとく!!!」

「召使い？ そんなことないです。キミは捨てないで最後まで残しますから。」

「てめっ…。」

多村チームは先頭を走る佐々木チームとのタイム差を40秒まで縮める。

「3周目に入りました。下りが終わったなら熊野君。キミがこの平坦区間を走り佐々木君達を追い抜き、登りで中嶋君が僕のアシストで僕がゴールをとる。これで勝てますよ。」  
「なんで…僕が平坦を走るのですか？僕はこのレースのアシストなんです!! 多村君!!何か考えでもあるのですか？」

「僕はインターハイで熊野君をエースアシストにしたいと思つてます。キミの持久力はこのチームで1番だと思つています。アシストはゴール前の数キロまで走らなきゃいけないし、エースを最高の位置まで運ぶ役割があります。キミが今やる最高の位置は僕達を登り区間前まで運び、佐々木君達を抜くこと。それが…このチームが勝利するためのアシストではないんですか？」

「……。たしかにそうですね。君に期待されるのは意外でした。本当に僕をインターハイのエースアシストとして走れるのですか？」

「この勝負に勝つたらキミをエースアシストとして走れることを約束します。」

「わかりました! ならやりましょう!」

「くっ…。またかよ…。多村…。お前というヤツはどこまで人をうまく利用して…。」  
「では。行きましょう。」

「この熊野友成。ありあまる体力に根気の走りを見せましょう。皆さん来てください。」

熊野が先頭に2人を引いて前と差を縮める。

先を走っていた佐々木チームは佐々木を先頭にずつと引いていた。

「平坦区間ももうすぐで終わります。あとはクライマー達が引けば僕達の勝ちです。」

「ああ…。佐々木。よく引いてくれた。」

「竜司。すまん。オレらを引いてくれて。」

「佐々木!! ありがとな!!」

「なあ…。このまま俺達が勝つて終わると思うか? 佐々木。」

「そうですね…。1周目終えたあたりからずつと気になってるんです…。」

「ああ。なんか胸騒ぎがするんだ。さつきから。」

その時うしろを振り返った勘太。100m前に熊野が先頭で引いている姿が見えた。

「おい。どうゆうことだ。3人しかいない。しかも、熊野が引いてる。」

「やはり…。なにか策があったみたいですね。話してる場合じゃない!! 行きましよう

!!」

「ああ。来るぞ!」

「ついに……。捉えました!! 先頭!」

「よくやった。熊野君。このまま抜いてください!!」

両者が並ぶ。佐々木もペダルを更に回そうとするが、今までずっと引いていたため疲労が溜まっていた。

「代われ。オレが残り引く!! 充分休めたぞ!! このために脚を休めていた!!」

佐々木に代わり勘太が再び引きの体勢に入る。しかし、熊野は並んで走る。

「なんだ。こいつ!! オレのスプリントによくついてきてる!! 熊野!!」

「僕はこの勝負に勝ち…。インターハイでエースアシストとして多村君をゴール前まで

運びます!!」

「お前…。なかなかやるな…。」

「インターハイに出たいからです!! 多村君の期待に裏切らない走りをお願いします!」

平坦区間残り300m。

両者とも互角に走り、山岳区間まで運ぶ。

「あとは… 頼むぞ!! 佐々木! 大地! 北上!」

「最高の位置まで…運びました…。あとは…頼みました…。多村君。中嶋君。」

「北上君。頼む!」

「中嶋君。頼みますよ。あとは君次第です。」

「よう。中嶋!!!」

「どチビ!!」

「相変わらずイライラさせるね。キミは…。」

「まさかな…。お前と再び勝負する時きたか…。」

「ごめんね…。北上君…。山中さん…。あとは頼むよ…。」

佐々木は今までずっと引いてたせいか…脚に少し痛みがきてた。

「??？」

「えっ…。佐々木…?」

「どうして!! 佐々木!!」

「やはり… 予定どおりでしたね。勘太さんと佐々木君がこの平坦区間でずっと引いてたから脚にきてるのは…わかっていました。エースが落ちた今… 僕達の勝ちですね…。」

「誰がエースっていった?」

「??？」

「このチームのエースは… オレだ!!」

「そうですよ! 多村!!」

「なぜ!! 佐々木君がエースじゃないのか!?!」

「!!?」

「エースはこのハンドルについてある時計を身につけている。最初からこれが狙いで竜司

も勘太も引いてくれた。」

「……。なるほど。あなたはずっと脚をためていたのか。勘太さんは最初からこれが狙いだったのですね……。」

「さあ…… 学校まで残り2km!! やろうぜ!我がチームのエースさんよ!!」

「ほうー。面白いですね。その心意気消してやりましょう。」

「山中先輩!! 僕が最高の位置までアシストしますよ!! なんかエースアシストになつた気分ですわ!!! 今!!!」

「キタキタ!! この高揚する気分!! 最高です!! どチビに負けてたまるか!!」

「いくぞ!! 中嶋!! ハイケイデンスクライム第1弾!!」

「最大!! ギア!! うららららー!!」

中嶋と北上は両者とも一步も譲らずに思い切りペダルを回し、エースを最高の位置まで運ぶ。山を登り終えて学校までの信号もない平坦道を残り400m地点まで運ぶ! 両者とも並んでいた。

「あとは…… お願いします!! 勘太さんや佐々木や僕の想いを届けてください!!」

「お前のやり方に気に食わなかったが…… 我がチームのエースと名乗るなら山中さんを超えてみせろ!!! このペテン師やろう!」



両者ともエースの背中を押しゴールを託す。

「ありがとう!! 北上! 行ってくるわ!」

「誰が……ペテン師ですか……。僕は……。あなた達を利用したからね!!! 己の勝ちのためにね!!!」

「やつと……本性見せやがったな。多村!」

「そうです。僕がエース。エースを勝利を導くのが弱者達の仕事ですから。」

この発言に笑う山中。

「ならよ……。その弱者に負けた気分をお前に今ここで感じてもらうよ!!!」

「ふん……。僕はあなたが気にくわないです。他の弱者とは違い……目立っていますから。更に気にくわないのはその目です。弱者のクセに強者に食らいつくその目。僕は今……あなたのその目を絶望の目に変えてやりますよ!!!」

多村が思い切りダンシングして山中を離す。

「オレはな……。あの日のバイト終わりにお前を追いかけたが……。追いつけなかった……。なんかよくわかんねーが……。悔しかった。だから! 今回は負けるわけにいかねーんよ!!!」

「弱者の叫び……。醜いです。兄を超えようと必死になる人やバカ真面目で走りが凡人な人。弱者のクセに悪口を言う人。弱者は強者にふれ伏せば良いのです。」

「オレは…… こいつに勝ちたい!!みんなの想いを背負ってるんだ!!」

山中は更にペダルを回し多村に追いつく。

「弱者のクセに…… 生意気なんだよ!!! 山中大地!!!」

「オレは…… 勝つんだ! みんなのために!」

残り50m。 先についたやつが勝者になる。

「うおお!!!」

「カスが!!!」

ついに決着がつく。

勝者は両手を上げて天をみる。

敗者は呆然で勝者を見つめていた。

「やったぞ!!! 竜司! 勘太! 北上!」

「……………」

すぐに北上と中嶋がゴールする。結果をマネージャー達に聞いてすぐ山中のところにいく。

「山中先輩!! やりましたね!!」

「山中さん!! おめでとうございます!! 今回は敵でしたが…心の底では応援してました!!」

その後他のメンバーも戻り山中の勝利を祝った。負けた多村は近くのベンチに座りたそがれていた。

「みなさん。クールダウンしてください!」

あと、皆さんが走ってる時にウイダーを買ってきましたー!! お金は徴収しますよー」

「えー!! 奢りじゃないんすかー?」

「運動後のエネルギー摂取は大事ですよ!!あと、なんか食べてくださいね!」

山中は多村の横に座る。

「ほらよ。ウイダー飲めよ。」

「……。ありがとうございます。」

「オレはちよつと着替えてくるから。」

「あ…。一ついいですか?」

「なんだ?」

「オレ… やめます。」

「どうしてだ?」

「弱者だからです…。あなたが強者です…。弱者に存在価値はないと思うので…。」

「おい。そんな理由でやめるのかよ。」

「ロードは強者が勝つスポーツです。弱者はやっても意味ないです。」

バジ!!!

山中は多村の頬を叩く。

その様子を見た他のメンバーは驚いていた。

「おい。お前。なんか勘違いしてるよな…。弱者に存在価値がない？ ふざけんな!!」

たしかにロードレースは実力がある奴が勝つっていうのは…。わかってる。だから…みんな練習して強くなりたいて思うんじゃないのか？ 弱者とか強者とかそ

んなんにとらわれるなよ…。ロードレースはチームスポーツだろ。そうやって人のことをバカにするようなことはするんじゃないやね。あと、今回の勝負だけで部活やめるのか？

まだ…：始まったばかりなんだぜ。沼津南高校自転車競技部はな。」

「……………」 少し頭を冷やしてきます。あと…勘太さんに総括よろしくお願いします。」

多村は自転車に再び乗り校門を出てどっかに行ってしまった。

「大地。何があった？」

「いや。多村が部活やめるっていうからさ。」

「そうか…。ヤツなら戻ってくるよ。」

「だどいいがな…。」

こうして自転車競技部初めての練習が終わる。

「あつ… 山中さーん!! まだその格好でいてもらっていいですか?」

「えつ… なんで? 坂田さん?」

「私はこれからあなたと勝負したいんです!」

「あつ…! 思い出した!! 練習後時間あるって聞いたのはそういうことかい!!」

「はい!!! わたし… こう見えて… この近辺の自転車レースで1番なんですよ!!」

「えつ? オールラウンダー?」

「そうです!!」

「マジか!!」

「はい!!! 勝負を挑みます!! 今日のゴールスプリントを見て山中先輩は練習すればオールラウンダーになれると思いましたが!!」

次回話に続く!!

## もう一つのペダル

## 第9話

## 新たな能力!!

## 第9話 新たな能力!!

初練習を終えた沼津南自転車競技部。練習後にマネージャーの坂田から山中に勝負を挑む!!

「山中先輩! ゴール前で競えるクライマーはいないですよ w」

「そうなのか?」

「ゴール前はスプリンターやエースの選手が競うことがあります。ヒルクライムは別ですが…。あなたはこの平坦の400m。あの多村君と競って、勝ちました。だから、あなたはオールラウンダーの素質があると私は思うんです!!」

「なるほど…。たしかにオールラウンダーは平坦や坂道。どちらもこなせるからな。」

「そうですね! あなたの過去の戦いぶりを中嶋君から聞いてますから!」

「あいつ…。余計なこといいやがって…。」

「そろそろやりませんか?」

「ちよつと待ってくれ…。今レースが終わったばかりだ。急には無理だ。」

「何言ってるんですか？ レースは100km以上走るんですよ。完走するための持久力が必要。山中さんは持久力が弱点です!!」

「持久力？ たしかに今まで定期的に運動してた訳でもないし…。」

「そうです！ ロードレースは過酷なスポーツとも言われてますから！」

「そうなのか…。」

「ちなみに私は… 静岡県の中でナンバーワンの選手ですからね！」

「えっ？」

「ナンバーワンの選手に勝ったらカッコいいですよ!! 山中先輩！」

「待て待て。最弱のオレがナンバーワンに勝てる訳ないだろ…。」

「男気がないわね…。女子に負けたくないでしょ？ 誰にも負けたくないという気持ちが

ありますよね？ 山中さん。」

「たしかにそうだけだな…。 仕方ないな…。 わかった。やってやろう。ただし！

本気だ!!」

「わかってますよ!!」

坂田は着替えてロードバイクを持ってきて、校門前に立つ。

「制服きてたからわからなかったが… 意外に身体細いんだな…。」

「なに失礼なこといってるんですか！ スマートでしょ！」

「たしかにそうだが…。」

「本当にナンバーワンの実力があるのか？ 坂田さん…。」

「コースは少し変更して裏山を登り下つたらさつき山中さんが走つてた平坦道に出ます。あとはさつきと一緒に走ります。要するに一周走る感じですよ。私が一番あなたの実力が確かめたい場所はゴール前の400mですよ！」

「わかつた…。では行こうか。」

「ちなみに… 山中さんにハンデをやりませう。わたしは5分後にスタートします。」

「おいおい…。余裕な顔してるな。」

「そうですか？」

「まあ…。いこうか。」

山中が先に出発する。坂田は5分後にスタートをきる。坂田は校門前にある木

を見た。

「バレバレですよ。中嶋君。」

「げっ…。隠れてたのに…。バレバレでしたか…。レースだつて聞いちゃったもんなんですよ。」

「あなたの話は本当ですか？」

「はい。僕は最初はクライマーだと思つていましたが…。ゴール前の勝負では菅原勘



太さんや多村に勝ってますからね。」

「この目で確かめますよ。」

その頃。山中は裏山の中腹付近を走っていた。

「5分もあればだいぶ差がついちやうよな。大丈夫かよ…。しかし、余裕な顔してたから勝つ自信がありそうやな。」

5分後。坂田がスタートする。何故かその後ろに中嶋がついている。

「なんで…。ついてきてるの?」

「なんか気になっちゃって…。有未ちゃんの走りが見たくて!!」

「あなたのことは知ってるわ。去年の男子大会で山岳賞をとった『ギア上げの狂人クライマー』ですからね。」

「いやー。そんなに有名なんすかー。僕。なら。やりません? 山頂まで!!」

「あなたに興味ないわ。あなたみたいに波離れた登板能力あるわけでもないし。」

「えー。僕は有未ちゃんのこと好きなんだけどなー。僕が勝ったら付き合う!!」

「なっ…。中嶋君。本気?」

「ああ!! 僕はいつでも本気だよ!!」

「正直あなたのこと… 自転車以外興味ないわ!!」  
「そうこないとな!!」

坂田と中嶋のクライム勝負が始まる!

その頃。山中は山を下り沼津の街に向かっていった。

「今頃どこらへんにいるのか? わからんが…いつ来てもおかしくない状況。こうして

1人で平坦道を走ってるのは初めてだな。」

前にロードバイクで走ってる男がいた。

「悪いが… この人の後ろについて風避けになってもらよう!」

山中はその後ろについて走る。信号が赤になり止まった。すると前を走ってた

男が振り向いた。

「やべ…。後ろについてたのバレたか!」

「あれ。山中さん。こんなところでどうしたんですか?」

「あれ? 多村じゃん。今…競争してるんだ。」

「だれとですか?」

「マネージャーの女の子とな。」

「……………」  
坂田さんか。彼女は速いですよ。」

「そんなにか?」

「そうですね。全国レベルの実力の持ち主で女子自転車競技の世界では有名なほうです。」

「マジか…。それ聞いて更に燃えてきたよ!」

「……………。一つ聞いていいですか?」

「なんだ?」

「僕はあなたのことが嫌いであのレース中に失礼なことを言ってしまった。人を見下すような態度や発言をする後輩のことを嫌いにならないんですか?」

「たしかにな…。お前みたいなヤツは嫌いになるだろう。しかし、お前は仲間なんだ。考え方や価値観は人それぞれ違う。それを尊重していくのが人間じゃないのか?」

「そうですねか…。」

「それより! お前は部長なんだから! 戻ってこいよ!! お前の後ろについて走るの  
は悪い気がしてきたから! 先に行くからな!」

「まったくください。僕があなたを引きます。今のあなたでは彼女と太刀打ちできないです。なぜなら、山中さんの実力や技術。体力面を考えて勝てないです。」

「それじゃ…。競争にならんだろ。2対1じゃ。」

「僕も彼女も同じ考えをしているかもしれないが…。あなたはオールラウンダーになるべきです。ゴール前のあの闘争心と執念。ゴール前で競う選手に重要な心前です。彼

女もあのゴールスプリントを見て感じたことでしょう。だから、勝負を仕掛けたんじゃないんですか? あくまでも僕は山中さんのアシストです。」

「そんなこと言ってたな。」

「ロード経験者ならわかります。僕はインターハイであなたと一緒に走りたいと決心がつかしました。何故なら、あなたは…。誰にも負けない選手に成長できると確信したからです!!」

「褒めてるのかよ…。それは…。オレが実力ついたら言っただけじゃあ! 悪いが

…。平坦はまだ苦手なほうなんだ…。引いてくれるか!!」

「そうですね。僕の後ろについて走ってましたからね。」

「ははは……。」

「いきますよ!!」

「おう!!」

山中は多村と一緒に走ることになる。

その頃。山頂勝負の決着がついていた。

中嶋は息を切らしながら下を向いていた。

「なんだ……。あの登板能力……。女の子と思えない走り……。山中さ……。ん。あれは危険ですよ!!」

山を降りた坂田は山中に追いつくためにペダルを回す。

「ごめんね。中嶋君。君の告白は嬉しかったよ。しかし、今はレース中だし自転車に集中したいの。」

平坦区間が終わり、学校まで少し傾斜がある坂道を登る。

「学校まであと3kmです。僕はあなたを坂道を登り学校までの400mの平坦まで引きます。山中さん。脚は大丈夫ですか？」

「ああ。多村が引いてくれたおかげで脚のコンディションは大丈夫だ！」

「なら良かったです。そして……追いついてきましたね。坂田さん……。」

後ろから坂田が追いついてきた。

「あれ？ 多村君？ なんで山中先輩のことを引いてるんですか？ 卑怯ですよ！」

「坂田さん……。あなたはゴールスプリントで山中さんと競うのが目的ですよね。」

「……………。凶星です!!」

「山中さんは僕と一回競ったんだ。全力で。あの場所で。君も経験者ならわかるだろ？」

「たしかにそうですね。山中さんは一回全力で走ってますし…。そして、全力の走りと同じ場所でやろうとしてますからね。それより… 多村君は私が来るのを待ってたよね。」

「そうだね。やはり予想が的中しました。あなたの走りは見たことありますが…まだ本気じゃないんですよね。」

「……。言つときますが…。こう見えて6割ぐらいの力であなた達に追いつきました。全力はゴール前でだすつもりでしたから。」

「何故。選手としてやらないんですか。」

「この学校に女子自転車競技部がないから。」

「……………。本当にそれだけか？理由は？」

「……。それだけですから!!」

「そうですね…。山中さんをゴール前の400mまで引くつもりなんで。」

「そうですね…。なら。400mで仕掛けますから。先に宣言しますか。」

「僕をブロックしないのか。」

「ブロックしようがされようが関係ないですから。あなたが目的じゃないので。」

「そうですね。」

多村を山中を引いて走るが坂田はそれにひつつくように走る。

「僕が山中さんを引いて良かったです。山中さん1人では無理でしょう。こうなることを予測して良かったです。」

「多村君。君は頭もキレるし実力もある選手だとわかってる。しかし……山中先輩も運が良かったですね。多村君に引いてもらえて。」

ゴール前の400m地点。

「ありがとな！ 多村！」

「この時を待ってました！」

一瞬の出来事である。並走してたはずの坂田がゴール前の400mになった途端にダンシングし、20mも差がひらいた。

「なんだ……。くそはやい!!」

山中も対抗し、全力でペダルを回すが……。差がどんどんひらいていく。

「山中さん。私はね……。『閃光の有未』と呼ばれていたわ。その由来は閃光のように素早く速く走る。先頭で走ってた選手は気づいたら私がゴールしてる。それが私の得意な走り方よ!!」

5秒間で100mの差がひらき絶望的な状況。しかし、山中は諦めていなかった。

「なあ……。諦めてたまるかよ!!!」

山中も必死にペダルを回す。それでも少ししか差が縮まらない。

「オレの脚。動け!! 動け!! 回せ!! 回せ!! 回せ!! 回せ!! オレはあいつに勝ちたい!! 勝たなきゃいけないんだ!! やるんじゃないのか!! 山中大地!!」

その時。山中の目の色が変わり獲物をとらえるかのように今までと違う走りをしてた。

一気に差を縮める。残り30m地点で両者が並ぶ。山中の様子を見た坂田は驚いた。

そして、坂田と山中は同着ゴールした。

「この人…。まさか…。」

「山中先輩?」

「……………」

「山中先輩。聞こえていますか?」

「……………」

ワンテンポ遅れて山中は気づいた。

「あれ? いつの間にゴールしてたんだ。オレ。で……どっちが一番だったんだ

?」

「えっ…。 あっ…。 同着でした。」



「なんだ……。おしかったな……。」

「あと……。クールダウンお願いします……。」

「そうだな……。なんか疲れちゃった……。」

山中は一人でクールダウンしにいった。

多村もつき、坂田と合流する。

「ねえ……。多村君。話したいことがある。」

「なんですか?」

「山中先輩のことだけ……。」

「山中さんがどうした?」

「彼……。稀に見る『オーラ』。人によってオーラが見えるって聞かないかしら?」

「たしかにですね。芸能人でオーラが出てる人がいるって聞きますが……。本当か嘘かわからないですが……。」

「山中先輩は……。闘争心と勝利への執着心、諦めない心。その3つが重なりオーラとして力が発揮する。新たな能力を身につけてしまったわね……。」

「誰だつて……。能力は持つてます。山中さんは能力を生み出すことができました。しかも、誰も真似することができない山中さんだけの能力を。」

「やはり… 彼はオールラウンダーにすべきだと思います。有未はね。多村君は？」

「僕は山中さんは実力。技術。皆さんより劣っています… 練習すれば身につきます。何より山中さんの長所は精神力。ロードレースにとつて一番肝心な部分を誰よりも優れています。僕もオールラウンダーにすべき選手だと確信していますから。」

「なら。決まりだね！ 楽しみだね！」

「ああ…。」

「何故。坂田さんの実力は全国レベルなのに選手に戻らないのか謎が深まるが…：それは後々わかることかもしれない。そのままかだと思うが…： あいつが絡んでいるのでは？」

クールダウンから戻ってきた山中。多村に話しかける。

「そうだ。多村。改めて確認させてもらうが自転車競技部に戻ってきてくれるか？」

「そのつもりでいます。僕はあなたにいろいろ教えたことがたくさんありますし、何より一緒にインターハイで走りたいからです。」

「そうこないとな!!」

「数々の無礼。申し訳ございませんでした。」

「気にするな。あと、明日皆んなに心配かけたから謝れよ。」

「はい。あと。やっぱり。あなたが部長になってほしいです。僕にはむいていません。」

「……。 やめとく。」

「えっ……。」

「おまえも成長するんだ。そういった意味でもな。オレもだけど……皆んなで成長していかないとダメだろ。」

「たしかにそうですね……。頑張ります。」

「頼んだぜ。多村！」

「はい!!」

遠目で見てた坂田はそんな2人の会話を見て笑顔になる。

「良かった！ これで問題解決だね。そういえば……。 中嶋君戻ってきてないね。」

その頃中嶋は……。

「うああああん!!」

裏山の山頂で坂田に登りで負けた悔しさと告白してフラれた悲しみで子供のよう

泣いていたのである。

こうして坂田と対決したことで山中の新たな能力を生み出すことが出来たのである。

## もう一つのペダル

## 第10話

## 合宿開始!!

## 第10話 合宿開始!!

初めて練習した日から約3カ月後。

あれから沼津南高校自転車競技部は様々なレースやイベントに参加して個々のタイトルもそうだが、勝ちや負けを経験して練習に励む。初心者だった山中大地はオールラウンダー組の多村や佐々木、熊野のサポートがあり、苦手な平坦を克服した。オールラウンダーのポジションになる。

スプリンターの菅原兄弟も静岡県内では負けなしの成績を残し、名が知れ渡る。

クライマーの中嶋と北上はお互い競いあっており、いつもヒルクライムレースで好成績を残してた。前に比べたらどちらも成長した。

学校も夏休みに入り静岡県インターハイ予選大会があと1週間をきる。予選メンバーを決めるために多村は合宿を行い、8人いる部員から6人予選メンバーを選ぶ。

多村は練習後の総括でみんなに話す。

「皆さん。今日もお疲れ様です。明後日から2泊3日で合宿を行います。場所は東京の大手町です。」

おかしな発言してる多村に驚く他の部員。

「ちなみに… 合宿というのは。今年のインターハイのコースを3日間走破することです。ようするに、インターハイの模擬体験みたいな感じですよ。」

「なるほど。しかし、ホテルの予約とか荷物とかどうするんだい？ 多村君。」

「熊野君。その点は大丈夫です。宿泊するホテルの予約もとってありますし、荷物は僕の兄が車で運んでくれます。なるべく荷物は最小限でお願いします。8人分の部屋を用意してあります。」

「多村君！ なんで私達の予約もしてないの!!？」

「使えない後輩だね。」

マネージャーの2人は多村にキレる。

「やっぱり… 行きたいんですね…。行くって言うかと思って、ちゃんと予約はとってありますよ。ww しかし、兄の車で移動してください。マネージャーも大事ですから。」

「焦ったわよ…。しっかりして！」

坂田にキレられる多村に笑いが起きる。

「では。予算はこのぐらいなんで。僕が皆さんのお金の徴収します。あと、ロードの手入れは必ずしてから合宿当日集合してください。あと、補給食とボトルは絶対持つて

きてください。勘太さん。何かありますか？」

「そうだな。荷物を多村家に明日預けるのはどうだ？」

「……。そうですね。わかりました。」

その時。顧問の岩本が来て話す。

「みんな！ お疲れ様！ たまにしか顔出せなくてすまん。みんな。安心してくれ。うちの学校にマイクロバスがあるんだ。」

「先生。お疲れ様です。ちなみに先生も一緒に行くんですか？」

「ああ。一応顧問だからな。」

「……。わかりました。ではよろしくお願いします。」

「オレがマイクロバスを運転するよ。大型免許持つてるから大丈夫だ。」

「わかりました。荷物は先生に預けてください。ロードバイクを乗せるスペースはありますよね？先生。」

「もちろんだ！ しかし、倒れないように揃えろよ!!」

「大丈夫です。自転車を解体して入れる袋がありますから問題ありません。山中さんは持つてないと思うので家にあるのをあげます。」

「ありがとう。多村。」

「では。明後日の早朝8時にここ集合をお願いします。遅刻は厳禁をお願いします。」

総括が終わり、更衣室で着替えて帰る準備をする。

「山中さん。明後日が楽しみですね！」

「中嶋。そうだな。」

「山中さん……。僕はインターハイの3日間一緒にゴールしたいのが僕の夢です。」

「そうか。仲良くゴールできないのが……。ロードレースじゃないのか？」

「一般論で言うともうさかもしれないが……。山中さんと初めてあの場所であった時はこの人と一緒に走りたい。インターハイの3日間走りきりたいって！順位とか関係なく山中さんと一緒にゴールしたいんです！」

「オレも正直初めて本格的なレースを走るからな。正直ワクワクしてるし……。完走もしたいな。3日間。予選メンバーに選ばれるかもわからんけどな……。」

「ですよね!! もし選ばれなかったとしても皆さんのサポートしますから！」

「正直お前には感謝してるんだ。自転車に対してこんなに真剣に向き合ってる自分がいからな。良いメンバーに恵まれてる。お前がいなかったら……。何もなく普通の高校生活をおくっていたかもな。」

「何恥ずかしいこというんすか……。オレも山中さんがこんなに成長するなんて……。思っていたいなかったですし、僕は山中さんが強くなつていく姿を見て楽しかったですよ！」



「そうか。今日はもう帰るぞ。」

「そうですね。」

山中と中嶋は帰宅する。

2日後。早朝8時

時間通りに集合して、マイクロバスで大手町に行く。2時間ぐらいかけて大手町に着く。

解体した自転車を組み立てたりして走る準備をする。みんなが終わったあたりで多村が話す。

「皆さん。準備は大丈夫ですか？」

「大丈夫そうなら話すぞ。」

「まず。コース説明します。インターハイ1日目のコースは国道1号線を川崎方面に走り、あの駅伝で有名な芦ノ湖がゴールです。」

「駅伝のロードレースバージョン的なやつかな？　1日目は。」

「北上君。そうですね。このコースは平坦区間がメインで箱根山を登り芦ノ湖に行くコースですね。皆さんご存知だと思いますが……。」

「よし。わかるみたいだから。行くぞ。」

「待ってください！ 勘太さん。ちなみに今回の予選メンバーはオールラウンダー3人にスプリンター1人か2人。クライマー1人か2人。」

で行こうと思っております。この合宿の意味を忘れないでくださいね。」

「わかつてるぜ！ 多村！」

「中嶋！ お前に負けないからな！」

「僕はアシストとして走るんです…。そして、有名になるんです！」

「僕も…。 インターハイにいききたいな…。」

「兄さんと一緒にインターハイで走りたい!!」

「いよいよだな。初心者だったオレがここまで強くなれたのもみんなのおかげさ。感謝してる。しかし、まず…この第1関門をクリアしなきゃダメだな。」

「大地。オレはお前と一緒に走りたい。もし… お前がエースとして走るなら2日目のアシストをやりたい。そして、お前を1番でゴールした姿を見たいな。」

「勘太。ああ!!」

多村が山中に近寄り小声で話す。

「山中さん…。ここだけの話ですが…。 あなたは予選メンバー確定です…。」

「えっ？」

「でも、エースかアシストにさせるかはまだ決まっていけないので。」

「なんでオレは確定なんだ？」

「僕は何故…… あなたをこの3カ月間……。県内の大きなレースやイベントに出さなかつたのか。それは……。敵に知られないようにしたんです。僕達は敵から警戒されやすいメンバーが多いからです。例えるなら……。菅原さん達や中嶋君に佐々木君に僕。

過去の大会にタイトルをとった選手が揃ってるからです。」

「たしかにな……。言われてみれば……。」

「だからこそ!!あなたがこのチームのジョーカーなんです！」

「ジョーカー?」

「そうです。無名の選手だからこそ……。警戒が甘いですし……。何より過去のデータがない……。だから……ジョーカーなんです。」

「なるほどな。そういうことか。オレも3カ月間。ずっと疑問に思っていたことが……。今、解明したよ。」

「おい。多村。まだか。みんな待ちくたびれてるぞ!!」

「すみません。勘太さん。では山中さん。行きましようか。」

「ああ……。」

合宿1日目のスタートをきる。

## もう一つのペダル

## 第11話

## 合宿1日目!!

## 第11話 合宿1日目!!

大手町を出発し芦ノ湖までのコースで1日目が始まる。東京の街中を最初に走り、多摩川を越えて神奈川県に入る。横浜を通り、湘南海岸沿いの平坦道を小田原まで走り箱根の登りに入る。箱根山の山頂まで登り、下っていくと、1日目のゴールの芦ノ湖が見える。

多村が最初のオーダーを出す。

「東京の区間は菅原純太さんが引いてください。川崎から湘南海岸沿いまで平坦もありますが、少し坂道があります。その時はまた指示します。」

「多村君！ わかったよ!! 僕の引きを見せますよ!!」

「まさか…… あれをやるのか？ 純太。」

「やるよ!! 兄さん!!」

純太は下ハンを持ってスプリント体勢になる。

「皆さん。ついていきますか？」

「純太さん！ まさか!!」

「僕は… 多村君のあの言葉のおかげで… 兄さんみたいにカッコいいスプリンターになりたいと思えたんだ！ 今までは僕が兄さんを引いて最高の位置まで運び、兄さんがゴールする。僕は脇役。兄さんが主役。それでいいんだって今まで思っていました。しかし、本当は僕だって!! 1番になりたい…。スプリンターなら誰よりも速く走りたい!! 君のおかげでそう思えるようになった。」

純太のプリント体勢は兄のゴールスプリントする時と同じ体勢。佐々木と山中は純太の姿を見て感じてた。

「純太さん…。あなたは… ルーラータイプで平坦道を一定の速度で走る方だと思っていましたが…。ゴールを狙いに行くような力強い走り。勘太さんみたいな走りです…。」

「そうか…。お前も成長したんだな。」

「おい！ 純太！ あの時のスプリント対決を思い出すよな!!」

「山中さんと佐々木君のペアで走ってましたからね！ よくご存知かと！ 僕の実力！」

「純太さん…。すごいです。」

純太は東京の街中を全力で仲間を引いて走る。横を見るとレインボーブリッジが見

えた。

「あれが…レインボーブリッジですか!! よくテレビで見るやつ!!」

「はしやぎ過ぎだろ! 中嶋!!」

「うるせー!! 北上!!」

「なんだと!!」

「おい。お前ら。練習中だぞ。純太の引きについていけ。」

「すみません…。勘太さん。」

ちよくちよく信号が赤になることがあるが、タイムロスした分純太は思い切り引く。

〔川崎まで… あと3km。僕は全力で引きます!!! 兄さん! 見てて!!〕

「穏やかで温厚な純太さんが…まるで肉食動物のように獲物をとらえるかのように走る。」

誰もが純太の走りに魅了してた。

〔それが… お前の真の姿か!! 純太!!〕

多摩川大橋が見え橋が上がっていく。

〔この川を渡りきるまでが僕のアピールポイントだ!! 兄さんと一緒にインターハイ

にいきたいんだ!! そのため走る! 最後の1cmまで!!〕

横風が強い橋の上でも微動だせず目標に向かって走る。

「うおお!!」

多摩川を渡り神奈川県に入る。純太は疲れた表情で後ろに入る。

「兄さ……ん。どうだった…。」

「ああ。純太! お前はやっぱり最高の弟だ! いつかは超されそうだな。」

「ははっ……。」

純太はいつもより長時間全力で走ったため力が抜けて落車しそうになるが、山中が倒れそうになる純太を支えた。

「すみません……。慣れないことをしちったので……。無理しちやいました…。」

「気にするな。純太! やればできる奴だな!

まだ始まったばかりだぜ! 合宿は!」

「そうですね……。」

多村は次のオーダーを出す。

「純太さんのおかげでここまで順調に行けました。では… 次は熊野君が平坦部分を引いて、少し傾斜がある坂道は北上君に頼みます。湘南海岸に出るまでは2人でコンタクトをとり、僕達を引いてください。」

「わかったよ!! 多村!」



「少し待ってください！ 多村君！」

「なんですか？」

「なんで…僕がアシストじゃないんですか？」

「熊野君。君はアシストというよりルーラータイプです。純太さんより劣りますが…  
あなたは平坦の方が速く見えるんです。」

「3カ月前のあのレースもそうでした!! 中学生の時は僕がエースをアシストしてました! 先輩から称賛されてた! このチームのエースアシストは僕がなりたいたいです!」

「僕は熊野君は真面目だしロードに関して僕より知識があります。走りも前に比べたら良くなっています。しかし、僕はあなたをエースアシストとしてインターハイで走らせたいと思えないんです。」

「くっ……。じゃあ! どうしたらなれるんでしょうか!! エースアシストに!!」

「厳しいことをいいますが… あなたは頭でつかちの超真面目君ですね。そんなんだから新しいことに挑戦しようと思えないし、変化もしようとしなない。それが君の弱点です!」

「くっ……。」

「熊野。多村の言ってることも一理ある。過去は過去だ。今を考えろ。あと、オーダー

出されたなら実行しろ。」

「勘太さんまで……。」

「なら頼みます。熊野君。」

「なら……。僕が湘南海岸まで引きます！ 走りで証明します!! 僕もこのチームの戦力になれることを!!」

「熊野！ 坂道はオレが引くオーダーだぞ。」

「ここでアピールしなければ…… インターハイに出れない!! ならやりますよ!」

「走りで証明したいなら…… 純太さんみたいに最後まで全力で走ってください。熊野君!」

「君に見せてやる!! 僕の実力を!」

熊野は先頭で走り、チームを全力で引く。

「彼みたいな人間は厳しいことを言えばすぐ行動して実行するタイプなので…… 凶とでるか吉とでるか。熊野君……。君はどうする?」

「皆さん……。僕もインターハイに行きたいんです……。だから! プライドをかけて皆さんを湘南海岸までの道のりまでアシストします!!」

「なら……。頼みます。熊野君。」

熊野はチームを引っ張り横浜駅前を通り、海岸までの道のりを引く。しばらく走つ

て多村は熊野に対して感じる。

「なんだ。熊野君。君はロングライドタイプか。平坦も登りもペースを落とさず一定の速度で長く走れるタイプ。インターハイで使える場面があるかもしれないが…スタミナがあるだけで他に優れている能力はない。」

「熊野!! そんなもんかよ!」

「山中さん?」

「平坦や坂道の走り方を最初から教えてくれたり、一緒によく走ってたよな!! その時よくお前はエースアシストになりたいって話してたろ! こんなんじや多村や勘太にアピール出来ないぞ! 自転車が好きなんだろ!!」

「山中さん……。僕は…。このチームのエースアシストでインターハイで走れると思いますか?」

「絶対と言えないし適当なことも言わないが… 一つ言えることは自転車が好きだという気持ちを持てば可能性はある!! そう… お前から教えてもらったからな!!」

「そうでした。僕は心の奥底にある気持ちを忘れていました。僕は…自転車が好きなんです!!楽しいんです!! 山中さん…!!」

多村は熊野の雰囲気が変わったことを感じる。

「熊野君。」

「僕は自転車が好きだから!! だから! 走るんだ!!」

「僕の悪いクセかもしれない。エースアシストとして走るだけしか考えていなかったが…そこではない!ただ純粋に自転車が好きだという気持ちでぶつけて走りたい!」

熊野は笑いながらひたすら湘南海岸に向けて全力でペダルを回し、湘南海岸まで一定の速度でチームを引いていく。

「ははっ。凄く今の時間楽しかったです。だって。このチームの先頭で走っていましたから!! あと… 海沿いの道に入ったので風が気持ちいいですね。これがロードバイクの楽しさなんですよね。」

多村はスピードメーターを見て驚きを隠せなかった。信号待ちは別だが速度が時速30kmを基準で走っていたからである。

「熊野君。君に申し訳ないことを言ってしまった。謝ります…。」

「気にしないでください。多村君。僕はなんか清々しい気持ちです。こうして皆さんと一緒に走ることが楽しいんです。」

「そうですか。熊野君…。まだまだありますから休んでください。」

湘南海岸沿いの道に入り小田原までの平坦道に入る。しかし、ここの区間は風が強く、自転車乗りにとって至難の場所である。

「僕にとってここから勝負だと思っています。小田原までの平坦区間は勘太さん。小

田原から箱根山の山頂までは中嶋君。2人の力が試される区間です。いけますか？」  
「いけるぞ。多村。」

「多村!! 山が恋しいですよ!! 早く登りたいもん!!」

北上が多村に質問する。

「なんで!! 中嶋が山を引くんだよ!! オレもクライマーだ!!」

「そうですね。どちらでも良いのですが… 先に中嶋君が思いついたんで…」

「なっ……! オレが引きたい! 皆さんを!」

「はっ! お前じゃ途中でバテそうだな!」

「なんだと!!」

「おい。お前ら。2回目だぞ。次はないと思え。中嶋。北上。」

「はっ……! すみません…。」

勘太にまたキレられる2人である。

「勘太。頼むぜ!!」

「ああ。大地。オレがこのチームのエーススプリンターだからな。恥ない走りをする。」

勘太はこの3カ月間で短所を克服し、自分自身エーススプリンターと名乗るぐらい成長した。最高時速50kmと表示された。

「兄さんはやっぱりすごい…。まだまだだな。僕。でも…。超すよ!! 兄さん!!」

勘太が小田原までの平坦区間を凄い速度で走り小田原の市街地に入る。

平坦区間を終えて多村がオーダーを話す。

「大手町から小田原までの長い平坦区間を引いてくれた純太さん。熊野君。勘太さん。お疲れ様です。ここからはクライマーお待ちかねの山岳ステージです。山頂までは中嶋君か北上君かどちらか任せます。さてどっちが引きますか? 市街地抜けてるまで決めてください。」

「オレが引きたいです!! 箱根は1回登ったことあるんでわかりますよ!」

「オレもあるぞ! 中嶋!」

「どチビ!」

「狂人が…。」

勘太の怒りが爆発しそうになるが、山中が肩を叩いて止める。

「お前ら。勘太に怒られるぞ。」

「だって…。クライマーならってっぺんを誰よりも先頭で走りたいですよ!」

「そうです! こいつより先に山を登りたいと思うじゃないですか!」

山中は2人の話を聞いて笑いだす。

「ははは。お前ら面白いな…。わかった。お前ら競争してこい!! チームはオレが

引つ張るから自由に走れ。」

「えっ？ いやいや!! 山中さんがエース候補だということに… エースさんはゴール前じゃないと!!」

「山中先輩が引いてもらうのは… 悪いです! 普通こういうのは後輩の役目ですよね!」

「良いよな!! 勘太! 多村!」

「大地。お前。正気か?」

「……………」

「あっ…。ただし! どっちが先に山頂についたか報告は絶対にしろ!! 不正はなしだ! した場合お前らインターハイメンバーから外すからな!!」

「あっ…。はい…。」

「はい……………」

「わかりました。中嶋君。北上君。ここからは自由に走ることを許可します。山中さんが言ったとおり不正したらインターハイメンバーから外します。オーダー変更で山中さんが箱根山の山頂まで引いてもらいます。」

中嶋と北上は自由に走る許可が得たがなかなかいかない。勘太が2人の背中を叩き

話す。

「大地は前こんなこと言ってた。あの2人と戦ったがどちらも強いって褒めてたぞ。元クライマーだからこそ期待してるんだ。お前らのこと!!」

「山中さん…。あなたの期待に裏切らない走りをして良い結果を届けます!!」

「山中先輩…。僕はあの時…。山中さんの凄さに触れて一緒にインターハイにいきたいと思えた。山中さんと一緒に走りたいんだ!」

「お前ら…。楽しんでこい!!」

「はい! 山中さん!」

「山中先輩!! 行つてきます!!」

クライマーの2人は箱根の山頂を目指し登る。 見送る山中。

「大地。何故あんなことした?」

「あいつらは…。オレがよく知ってるからな。実力を。あと…。ああゆうタイプはもつと強くなる気がするんだよな。」

「クライマーだからわかるということか。」

「まあ…。そうかもな!」

「どちらにせよ。山岳リザルトはこの箱根の頂上だから良いか。」

「どちらかがこの山で山岳賞をとる姿を想像すると嬉しいからな。」



「たしかにそうだな。」

山中はチームを連れて坂道を引いていく。

中嶋と北上は口喧嘩しながら登っていた。

「邪魔なんだよ!! どチビ!」

「お前ビリビリー! 中嶋!」

「おい! 見ろよ! いつの間に標高300mだけ!! 傾斜がきつくなるぞ!! 耐え

られるか? どチビ!」

「お前がな!!」

2人とも凄い激しい闘いをする。

しばらく登っていくとカーブが多くなり更に傾斜もきつくなる。

「くそ…。なかなかいい勝負してるよな…。」

「ああ…。お前…。そろそろ本気にならないのか? 傾斜がきつくなつたぞ!」

「お前もな…。」

「なあ…。箱根の頂上は標高874mだ。あそこが俺たちの山岳リザルトだぜ!! な

んか賭けないか?」

「箱根の山を制する者は天下を制す と言われてるぐらいだからな…! いいぜ!

やるか!!」

「20000円分なんか奢るのはどうだ!？」

「20000円かよ。いろんなもん食えるよな…。いいぜ! やってやるわ!!」

お互いハイタッチして山頂の標高874mまで本気で走る。

「進化したギア上げクライム見せてやる!」

「ハイケイデンスクライム第2弾!!」

中嶋は傾斜が上がることでギアを上げて一漕ぎに脚力を使いけっこう進む。普通はギアを下げて坂道を登るのがセオリーだが…彼の持久力と軽さがあるためギアを上げても関係ないのである。

一方。北上はギアを最大まで軽くしてケイデンスで山をスラスラと登っていく。どちらも対称的だが、共通してる箇所は持久力と軽さ。クライマーの体質的に相性が良い。

「ちっ。なかなか差が開かぬーな!!」

「そうだな…。こんなに関してのに何故だ!! ギア上げて走るクライマーは諸刃の

剣だぞ!!」

「逆にそんなにハイケイデンスしてたら脚が痛くなるぞ!!」

「やべっ…。心臓もバクバクするし…脚も少しきてるわ…。」

「久々に本気で走ってるから…膝が痛くなってきた…。しかも第2弾やるのも久々す

ぎぎて……。」

「おいっ……。いつの間に山頂まであと500mだぞ!! どチビ!! 苦しいか!

脚痛いか!!」

「ばーろう……。こんだけ回せばきてるに決まってるじゃん……。お前もだろ……。」

「ああ!! あつたりめーだ!」

「お前とこんなに熱い勝負をするのはちようど1年ぶりだからな。楽しいぜ! オレ

のライバル!!」

「ライバル? そんな風に思ってるのか。」

「そうだ! 残りの400m。本気で来い!!」

「うらー……!!」

「なら…… 第3弾いくか!!」

両者は全力で山頂を目指し登る!!

「オレはな……。こうして本気で山を登ることが楽しすぎてたまんねー。山中さんに自由に走れって言われたんだ! 本当はこんなことできないんだけどな! だから! 負けるわけにいかねーんだよ!!」

「オレのライバルよ!! 去年お前に負けて悔しかった!! だから今まで以上に練習

して強くなって……。またお前と勝負してる。正直この場面を作ってくれた山中先輩に

感謝してます!!」

「最後の一滴まで出ろ!!!」

「こいつに勝つ!!!」

そして、箱根山国道1号線の標高874m地点の看板が見える!!

2人の山頂勝負が決まった。

クライマーの勝負はいつもこうだ。勝者は天を見ながら喜び敗者は地面を見て疲れた表情をする。

「やりました!! 山中先輩!!! あなたにこの場を設けてくれたことに感謝しております

!!」

「くそっ……。すみません……。山中さん……。」

勝者は北上が制し敗者は中嶋。

「まあ……。中嶋……。良い勝負だったな……。」

「はあはあはあ……。そうだな……。」

中嶋は北上に握手を求める。

「お前……。あの敗北から相当練習したんだ……。これでオレとお前の真剣勝負は1勝1敗だな。オレも強くなるぜ……。」

「ああ!!」

「北上!!! もし…お前がインターハイで走ることがあったら…山中さんを頼むぞ!」

「わかってる!! 山中先輩に恥しない走りをするよ!!」

2人は握手をし、芦ノ湖までの下り坂を下っていく。

その頃。山中は山頂の1km手間でチームを引いてた。

「山頂勝負が決まったところかな。大地。」

「かもな…。」

「なんか…。すまん。大地。」

「大丈夫さ! それより多村。オーダーはあるか?」

「はい。そろそろ国道1号線の山頂になります。山頂に到達したら佐々木君と僕が芦ノ湖のゴールまで全力で走ります。山中さんは途中でクライマーの2人を拾ってください。下り終わったら平坦道なので勘太さんがチームを連れてフィニッシュしてください。」

「ああ。わかった。多村。」

山頂に到達した途端。佐々木と多村が飛び出しアシストとエースがいく。

佐々木はダウンヒルでもハイケイデンスで回し時速80kmはでてる。多村も佐々

木にしがみつぎ佐々木についていく。

「佐々木君！ あんまスピードが出ると危ないから若干抑えた方が良いでしょう。」

「……。僕がエースアシストなんすね……。」

「今日はね。山中さんがこの箱根の山を引いてくれたから……。予定変更です。」

「……。そうですか。」

ゆつくり下っていたクライマー2人を一瞬で追い抜きゴールの芦ノ湖まで走る。

「途中でフランクがあるので気をつけてください!!」

「いちいちうるせーんだよ!! エース気取りがよ!!」

別人格の佐々木が現れる。

「君の別人格は生で見ました。あなたの場合はもつと速くなるんですよね?」

「はあ? オレがエースなのに! なんてお前のアシストをしなければならねーんだよー!」

「仕方ないことです。レースは臨機応変に考えなければいけませんから。」

「フランクでおまえのこと捨てて先にゴールするからな!!」

フランクにはいる。時速70kmもでてるロードバイク。下手すると落車がしやすいリスクがあるが、佐々木は持ち前のバイクコントロールをしフランクを突破する。

「さすがに。ちぎっただろ! エース気取りさんよー!!」

佐々木は後ろを振り向いたが、多村はついていた。

「佐々木君。君の走りを見てコピーしたから。フランクも問題なくついてこれたよ。」

「おいおい…。コピーだど!!」

「僕は他の人の走り方や体勢、フォーム。ケイデンスやハンドルの握り方まで一瞬見ただけで真似できちゃうんです!! だから。君が得意なハイケイデンスだつて!!」

多村は佐々木の真似をする。

「こいつ…。ただのエース気取りじゃね!! 天才かよ…。この男は!」

「ゴールまであと1km。もう少し引いてくれますか?」

「お前…。面白い男やな。」

佐々木は思い切りゴール前の500m前まで引いて多村はラストスパートに入る。

あつという間に多村は1日目のゴールをする。

大手町から芦ノ湖までのタイムを見る。

「これぐらいですか。1日目は上々でしたね。思ったより。」

佐々木もすぐに到着する。

「おい。お前。オレと組まねーか? エースとアシストだよ!!」

「そうですね…。検討しときます。」

「はあー!? このチームにお前みたいな優秀なやついるのかよ!!」

「はい。1人います。」

「誰だ?」

「山中大地。彼の力は僕より凄いものを持ってますよ。」

「へえ。そいつの走りを見てみたいな。」

「明日あたり見れるかもしれないよ。」

「そいつは期待だな…。」

ちようど勘太達がゴール地点に着く。

「お疲れ様です。」

「きましたねー。」

佐々木は普段通りになる。勘太は多村に話しかける。

「で。タイムはどうだった? 多村。」

「こんな感じでした。」

「なるほどな。まあまあな結果だな。みんな良く頑張った。」

「皆さんのおかげです。あと、山頂勝負はどっちが勝ったのですか?」

「北上だ。」

「そうですか…。差は?」

「僅差だ。」



「わかりました。2人ともお疲れ様です。」

「楽しかったぜ!! 白熱した勝負は久々やったからな。」

「中嶋と勝負できて良かったです!」

「そうですか。あの874mの山頂が1日目の山岳リザルトになるみたいなので… あの意味良い経験をしましたね。」

「そうなの?」

「山岳リザルトになるところを登ったのか!俺たち!!」

その時。マイクロバスが到着してマネージャー達が降りてきた。

「皆さん!! お疲れ様です!! これを食べてください!!!」

袋の中には大量のコンビニおにぎりがあった。

「こんなにあるのか…。」

「運動後の食事は大事ですから!!」

「ああ…。」

大量のおにぎりを食べながら合宿1日目の練習が終わる。食べながら多村が総括する。

「今日はお疲れ様でした。明日の2日目のコース説明をします。明日は山を下り僕達の地元の沼津を通り、国道139号線を北上し富士五湖のほうに行きます。国道358号

線で甲府方面に向かい、2日目のゴールは甲府です。約110kmあるコースです。実は今日のコースも100kmもありました。今日は平坦が中心でしたが、明日は坂道が中心になるかもしれません。クライマー達が活躍するかもしれませんね。では。締めます。」

総括を終えて芦ノ湖近くのホテルに宿泊することになった。1日が終わり2日目に突入する！

## 第12話

## 合宿2日目！

## 前編

もう一つのペダル

第12話 合宿2日目!!

前編。

AM 7時 ホテル内

山中と菅原勘太、純太と一緒にホテルの朝食のバイキングに食べ物をも皿に盛り付けていた。勘太と純太はたくさん食べ物を盛っていたから山中は質問した。

「朝からそんなに食べて腹痛くならないのか?」

「大地。自転車乗りはたくさん食べることが一番大事なんだ。」

「山中さん!! 自転車はかなりのカロリーを消費します。逆に食べておかないと途中でバテます!」

「そうか……。でもいくらなんでも…。食べすぎではないか? あと…。ご飯の量がえげつないぞ…。」

菅原兄弟はどんぶりの中に思い切りご飯が盛ってた。山中は絶句する。

「……………」

山中達の席の隣に中嶋と佐々木、北上、熊野が来た。

「おはようございます!! 山中さん!」

「おはようございますー。みなさんー。」

「山中先輩! おはようございます!」

「おはようございます!」

「おはよう! 一年組達!!」

山中はふと気づいた。

「あれ? 多村は?」

「あいつ。1人部屋がいいゆうてオレらと一緒にじゃないんですよ!」

「まったく…。あいつは何を考えているかわからないな。」

そして、多村はどこに行ったかわからずみんなで朝食を食べた。

AM8時 ホテルの外

昨日の夜に多村が8時に集合というメールを全員に送られていたため集合した。

しかし、本人がいなかったから、車の中に荷物を積み込んでいた。山中はボソツ

とつぶやく。

「ふう…。荷物ものせたし。あとは多村を待つだけけど…。なかなか来ないな。」

「まったく。何をやってるんだ。」

「兄さんが仕切っちゃえば？」

その時、多村が自転車でみんなの前に来た。

多村は汗を流しており、息が上がっていた。

「すみません…。遅れました…。」

「時間厳守とか言つてたくせに…。自分が遅れてるんじゃないよ!!」

中嶋は多村にキレたが、山中は冷静に話す。

「良い汗かいてるじゃん。朝練を一人でやってたんだろ？」

「そうですね…。5時に起きて朝食を食べてから今まで朝練してましたから…。」

「多村。朝練してたことは良いことだ。しかし、3時間弱走つてきて、今日の練習はちや

んと出来るのか？」

「勘太さん…。僕は今日の練習は走りませんから。」

周りのみんなは驚いた。

「えっ? 走らないのか？」

「ええ。説明は今から言いますから。」

多村はマネージャー達も集めみんなの前で今日の練習内容を話す。

「コースは昨日説明した通りに走ります。今日は6人で走ってもらいます。」

勘太が多村の説明の途中でツツコム。

「おい。8人いるのに6人で走るといふことは、多村ともう1人誰か抜けるんだよな?」

「はい。その1人は佐々木君です。」

「周りはざわつき始める。真つ先に多村に話しかけたの佐々木である。」

「純ちゃん!　なんで?」

「それは、このチームの更なる強化のために必要なことです。」

「なるほど。多村と佐々木はこのチームの主戦力であるからか?」

「勘太さん。30%ぐらい正解ですが…　なにより…　いろんなパターンを試したいと思っんです。特にオールラウンダー組は。あと、昨日もそうですが、僕がオーダーを出してたので、僕なしでどこまでやれるか試したいんです。佐々木君は本当に申し訳ないが、チームのために今日は我慢してくれないか?」

「……。わかったよ。純ちゃん。」

「ありがとうございます。佐々木君。では、僕たちは先に次のホテルに到着してます。タイムは僕が測りますから。ロードより車のほうが速いから先に到着して待ってますから。あと、補給食とボトルを忘れずに。準備が出来たら言ってください。」

多村、佐々木が抜けた6人で走ることに成り、指揮するのが勘太になった。

「よし。今日はオレが指揮する。まず、山を下ったら沼津の街に入り、そして、富士宮あ

たりまで平坦区間になる。おそらく、この区間のどこかしらリザルトラインがあると想定する。だから、ここはオレらが引く。平坦区間が終わったらまた指揮する。」

「兄さん。僕が引くよ！」

「頼む。」

そして、準備が整ったところで多村に報告し、スタートラインに立つ。

「では。2日目を開始します。」

多村がストツプウオッチを押し、6人は一斉に走り出す。多村達は車に乗りホテルに向かう。

純太が先にチームを引いていた。

「みなさん……。ここからは気をつけてくださいいね。ダウルヒルが始まりますから。あと、僕のダウルヒルについてきてくださいいね。」

「純太。あれを久々にやるのか。オレらが密かに研究し、習得した「ツインダウルヒル」これは、オレらにしか出来ないやつだが：他のやつにやらせて大丈夫か？」

「僕の言う通りにやって見てください。真っ直ぐ一直線で車間感覚は拳二つ分。あとは、弱めにブレーキしてください。」

「純太？　これで大丈夫か？」

「そうですね！　大丈夫ですよ！　山中さん！」

「下りになりますので陣形を崩さずにさっき言ったとおりにやってください!」

純太の言う通りに陣形をし、スムーズに下る。 勘太はこのダウルヒルに感激する。

「純太! 凄いじゃないか!!純太のオリジナルダウルヒル!! ツインダウルヒルより無駄がなく、安全でスムーズに下り、そして、何より速い!! 時速70kmはある!

普通なら下りはスピードが出るし、下手にブレーキを踏むと前に倒れてしまう。微妙な加減でコントロール出来るのは素晴らしいことだ。純太は凄いやつだ。そのうち越されそうで不安になるな…。」

純太のダウルヒルにより、思っていたより早く沼津の街に入る。 市街地に入り、

勘太は指揮する。

「長いダウルヒルも終わり、これから平坦区間に入る。市街地抜けたらオレが引く。」

「兄さん。一つわがまま言っていていいかい?」

「なんだ? 純太。」

「スプリント対決しない?」

「!?。おい。純太。一応理由を聞く。」

「実は……。多村君から言われてるんだ。」

「多村にか? 何故だ?」



「どちらかをインターハイメンバーにするて。そして、このスプリント対決でメンバーを決めると。」

「!!!」  
全員驚いた。

「純太さん！ あなた達2人しかスプリンターがいないのに！ どちらかしか選ば

れないておかしいでしょ!!」

「中嶋君。本当の話さ。スプリンターは1人しかいらないと。」

「そんな…。変な話もあるんですね。」

「そんなに嘆くことじゃない。理由は単純だ。多村はチーム内最速のスプリンターが欲しいんだろ。オレは弟より速いからな。それを証明してくる。」

「兄さん……。本当は2人でインターハイでツインスプリントをして、2人でグリーンゼッケンをとりたかった。悲しいけど…。しようがないことだよな。」

「この2人がスプリント対決。何を考えているんだ?? 多村君は。ということとは…今日の練習の趣旨がわかってきました！」

熊野は何かわかったかのように考えてた。

しかし、このスプリント対決で納得してなかったのは山中である。

「おまえらは2人で一つだろ！ 多村は何を考えているのかわからない!!」

山中は自分が一番実力や経験がないのにインターハイメンバーの枠に入ったのに、菅

原兄弟の場合は実力、経験もある強者なのに、どちらかメンバーから外れることだ。自分が多村に言われて、メンバーになるのに、この2人に関しては、実力勝負で速いやつがメンバーに入れる。多村のやり方に苛立ちを感じた。しかし、その苛立ちは勘太の一言でなくなる。

「大地。スプリンターというのは最速の称号だ。誰でも欲しい。だから、一番になるんだ。あと、純太はこの3カ月でだいぶ変わった。前まではオレと同じことをしてたが、さっきのダウルヒルのように純太が独自に開発した。純太は新たな挑戦をしてるのだ。」

「勘太……」

「それに……。純太にすぐに先を越されそうな感じがする。オレも出来るということを見せないとな。」

「勘太も本当は2人で出場したいと思ってるよな……。オレはスプリンターじゃないしスプリンターの気持ちもわからないが……。勘太の言うことは正論かもしれない。勝負の世界はそんなに甘くないということだな……」

「兄さん……。やるしかないよね。」

「ああ。」

純太は一粒涙をながし、気を取り直して戦闘態勢に入る。勘太も下ハンをかまえた。

「兄さん。富士宮市の看板がゴールだ。そこまでガチなスプリント対決だ！」

「ああ。わかった。熊野。チームを引いてもらっていいか？」

「わかりました!! 気をつけてください!!」

そして、大地は菅原兄弟の肩を軽く叩き一言言う。

「楽しんでこいよ!!」

「ああ。大地。」

「はい! 山中さん!」

2人のインターハイメンバーの柀を賭けたスプリント対決が始まる。

## 第13話

## 合宿2日目!!

## 後編

多村と佐々木抜ききの6人で芦ノ湖から甲府までの約100kmの距離を走る。沼津までの長い下りは純太が独自に開発したダウルヒルの引きにより、兄の勘太にプレッシャーを与える。そして、富士宮までの平坦区間を勘太がチームを引くことになったが、しかし、純太が多村からこのスプリント対決でメンバーを決めるということ、勘太と純太はインハイメンバーを賭けたスプリント対決が始まる!!

「楽しんでこいよ!!」

「ああ。大地。」

「はい。山中さん!」

勘太と純太はチームを残し、インハイメンバーを賭けたスプリント対決が始まる。

「なあ。純太。市街地を抜けるまで少し話さないかい?」

「いいよ。」

「なあ。オレのことをどう思っていたか? 自転車を始めたところから。」

「兄さんはカッコイイし、誰よりも一番速いと思っっているから。」

「そうか……。いつもそれしか言わないが…それはお前の本音か？ それともお世辞なのか？ この際だからお前が思っていることをこの市街地を抜けるまで間接的に言っつけてほしい。」

「………………。嫉妬してた…………。」

「嫉妬…？　なんでだ？」

「兄さんは…。小学生の頃から地元の良い成績を残し、中学生になると静岡県の自転車競技の中で名が知られるようになった…。僕はほとんど2番目。何故なら…

兄さんを勝たせるために…。」

「それは…オレらが開発したツインスプリントで純太が引いて俺が取りに行くというスタイルだろ。」

「僕は…兄さんみたいに天性のスプリントセンスはない。何故なら…脚質が違うから!!逆に僕がゴールを取りに行くことも出来るさ…。でも…。ゴール前の勝負強さは僕にはないんだ…。どちらかというと…ルーラータイプだからさ…。」

純太が泣きながら喋る。勘太は純太の本当の気持ちを聞いて考えていた。

「たしかにな…。双子だけ…脚質が違う。オレはスプリンターみたいに瞬発力重視かもしれないが…純太はある程度の速度で平坦を走る。スプリンターでもあるが…ルーラーっぽい要素はある。ゴール前で競うとなると難しい部分はある。」

「そうか…。お前はやっぱりオレと同じ血が流れていて感心したよ。」

「だって。双子じゃん。僕たち。」

「それもそうだけど… 誰よりも最速で走りたいという個々の気持ちはな。」

「えっ…。」

「オレはな。純太の引きは最強だと思うし、純太は昔から柔軟な思考を持ち、かつ、ツインスプリントの産みの親も純太だ。覚えているか？ 小学生の頃のあの大会？」

「いろんな大会に出てるからわからないよ。」

「小4のころ。オレが先頭で走ってたが、道路の石に車輪があたり落車した。後ろからドンドン後続の自転車もくる。脚に思いきり擦り傷を負い、治療してもらった。その時、医師にはレースは続行するなど言われたが、後ろから純太が来て 兄さんを優勝させる！と言った。医師に無理やりお願いして純太のあの引きで先頭まで追いつき最後の50mぐらいで純太はわざと失速しオレに勝たせた。本当はお前が優勝していいはずだ。だが、しかし、お前はケガしてる状態のオレを優勝に導いた。」

「あの時の純太は本当にかっこ良かったし、スプリンターとしての闘争心に溢れていた。」

「そんなことあったよね…。」

「オレは思う。オレにはあるが、純太にないもの。オレにはないが、純太にあるもの。そ

れがあつて俺たち2人じゃないのか？ だからよ…。 ツインスプリントやらないか

？ 富士宮まで。 引き分けになれば多村も決める要素がないだろ。これが菅原勘太と菅原純太というスタイルがあるんだからさ。」

「兄さん…。 わかつたよ。 ツインスプリントやろう!!」

「それでこそ！ 菅原兄弟のスタイルだ。」

2人はツインスプリントの態勢になり、隣に走っていたスクーターより速い速度で走り、富士宮市まで走る。 富士宮市の看板が見えてきた。

「よし。 並ぶぞ。 こうして並んでゴールすれば良い。 そうすれば引き分けになるだろ。」

「わかつた。」

富士宮市の看板下の寸前に来て、引き分けになったかと思いきや…。

勘太は看板を通りすぎた時に違和感を感じた。それは同着するはずの純太がいないこと。後ろに振り返るとそこに看板の手前に純太が止まり、涙を流しながら勘太を見ていた。

「なんでだよ……。 なんでだよ!!」

その声は周りにも聞こえるぐらいでかい声。

「やっぱり……。 兄さんは……。 インターハイに出てほしい……。」

「だから…。引き分けにすればいいと言ったじゃん!!  
うの!! 年に一度しかないインターハイ!!  
多村に言えば説得できたとい

純太は出たくないのか?」

「出たいさ!! でもっ。兄さん! 兄さん一人でインターハイに出て、有名になってほしい。僕は兄さんが活躍する姿を見たいんだ!!  
全国に兄さんの名が広がるように応援してるよ!」

「純太…。お前っていうやつは…。」

勘太は自転車を止めて純太に抱きついた。

勘太は弟の言葉に涙が出た。

「お前の分を背負ってインターハイ走る。そして、お前が欲しいグリーンゼッケンを取ってくるから。約束しよう。グリーンゼッケンをとったらお前につけてやる。」

「うん!! 約束だよ。」

こうして2人のスプリント対決はついた。兄の勘太に希望を託した純太。勘太は弟の純太にグリーンゼッケンを取りにいくと約束をする。後ろから、山中と熊野、北

上と中嶋が来た。山中は結果を聞く。

「どつちが勝ったんだ?」

「大地。オレが勝った。だから、任せろ。」



「そっか……。細かいことは練習が終わったあとにきこう。今は甲府に行くぞ。」

山中達は富士宮市街地を走り、平坦区間を終えて国道139号線を北上する。右を見ると富士山が見えて、周りには茶畑がある。それを抜けると林道を走る。この区間は坂道が多いため、クライマーの中嶋と北上が交代しながら、チームを引つ張る。林道をつつぎると、富士五湖の西湖が見える。そこから国道358号線を登り、甲府方面に向かう。山のとつぺんが山岳リザルトになる。山を下ると甲府盆地が見え、アルプスの山々が見える。甲府市街地が2日目のゴールになる。

山を下る途中に勘太が最後の指揮をとる。

「クライマーの2人は御苦労だった。あとは下つてすぐゴールだ。ここからはエースとアシストの見せ場だ。純太のダウンヒルで下り終えたらアシストは熊野。エースは大い。お願いできるか？」

「山中先輩のアシストなら任せてください！今、ここが僕の最大の見せ場ですから!!」

「勘太。任せろ。」

「お前らは自由にやってくれ。オレらはダウンがてらにホテルまでゆっくり走つて帰るから。」

そして、甲府盆地に突入し、熊野と山中はホテルに向けて1秒でも早く到着するためにチームを残して走る。

「行くぞ!! 熊野! ラスト数何キロ頼むぞ!!」

「はい!! 任せてください!!」

市街地に入り、信号やクルマの交通量を気にしながら出来るだけ全力で走る。

山中は熊野に質問する。

「なあ。熊野は前エースアシストにこだわっていたが…理由はなんだ?」

「それは…。最初から最後まで話すと長くなるので省略しますが… 間接的に言いますと… 僕の当時の師匠のおかげです。」

「そうか…。お前にとってエースアシストとはなんだ?」

「なんで急にそんなこと言うんですか? まだ練習中ですよ!」

「そうなんだけどさ…。よく一緒にこの3カ月過ごしていたからさ。こうゆう話はこの場でしか話せないから。」

「そうですね…。エースを優勝に導く。最後の数キロぐらいしか活躍する場所ないけど…見えないところの縁の下の力持ちっていう感じがして、やりがいもあり僕にむいてるポジションかなと。」

「そうか。なら。昨日、地図で見たことさ。ホテルの300m前まで信号がある。それを過ぎるとホテルまで信号がない。その信号までオレを引いてくれないか?」

「わかりました。あと3km弱全力で引きましょう!! ついて来てくださいいね!」

すると、熊野は下ハンを持ち、更にダンシングをし始めた。

「なんだ…。熊野が風除けになり、列車のような轟音が鳴る。しかも、すげー楽に走れる。」

あつというまに残り1kmをきる。運が良く信号にあたることなくストレートに進んだ。

「すごいじゃん!! 熊野!」

「……………」

「無反応かよ。集中してるのかな。」

「もしかしたら…。こいつがエースアシストに選ばれた理由はこれなのか…。これだとは断言出来ないが…。詳しいことはまた後ほど聞いてみよう。今は残りの300mのことを考える。」

熊野は残りの300mまで全力で引いて、力が抜けるように山中の腰に手をそえた。

「残り……。300m。しつかり…引きました!! 1秒でも早く多村君のところへ

!! 出し切ってください!! お願います!」

「残り300m!! 出しきる!!」

300m先には先に到着してた多村と佐々木が待っている。山中の姿が見えていた。

「来るぞ!! 山中さんのゴールスプリント!! 君が今日走らせなかった最大の理由は今、この瞬間を君の別人格の記憶にインプットしてほしい。この何秒間のために。」

「えっ…。そうなの!!」

「話してるヒマはないぞ。ちゃんと目ん玉に焼き付けるんだな。」

山中はダンシングして山中の闘争心を最大にあげ、目の前のゴールに向けて走る。

あつというまにホテルの前に到達し、佐々木は山中のゴールスプリントのあの気迫に鳥肌がたった。佐々木は山中の姿を間近に見たのは初めてだった。

「はっはっはっ。多村。タイムは？」

「このぐらいですね。予想通りのタイムでした。お疲れ様です。」

「そうか…。でもロスしなくて良かった。」

熊野が到着する。

「お疲れ様です。熊野君。」

「君にはいくつか話したいことがあるんで！飯が食い終わったら一緒に話しますよ！」

「ああ……。わかりました…。」

数分後に菅原兄弟や北上と中嶋が到着した。

「お疲れ様です。皆さん。2日目はなかなかハードだったと思いますので、これからの時間は自由に過ごしてください。あと、マネージャー達がポカリとおにぎり、お菓子を買ってきてくれたみたいなので食べてください。運動後の食事は大事ですので。」

6人は地面に座りながら、ポカリとおにぎりとお菓子を食べながら、話してた。

「今日の練習はハードだったな…。北上。」

「久々だよ…。こんなに走ったのは…。中嶋も脚プルプルやないか…。」

「あつたり前じゃん…。お前もな!」

菅原純太は多村にスプリント対決の報告をしにいった。

「多村君。僕の負け。兄さんが勝った。」

「そうですか。ちなみにどれぐらいの差でしたか?」

「僅か数メートル単位。」

「そうですか…。結構良い勝負をされたのですね…。純太さん。すみませんが…。明日はマネージャー達と一緒に行動してください。」

「わかった…。」

山中達と喋っていた勘太は純太の様子を見ていた。

「純太…。お前の分まで頑張ると誓う。」

多村は皆んなを集めて明日のコース説明をする。

「みなさん。お疲れ様です。明日のコース説明だけしますね。明日は甲府から東京、大手町まで走るコースです。ちなみに国道20号線。甲州街道で東京方面へ走り、半蔵門で皇居の周りを走り、大手町がゴールになります。このコースは特殊で、山岳リザルトが、東京都と神奈川県の間境。スプリントラインが、東京都調布市味の素スタジアム前となります。山岳とスプリントリザルトが逆になるという異例なコースになっております。」

明日はクライマーが先に仕事をして、スプリンターの勘太さんが東京都に入った引張るという形になります。今日はゆっくり休んでください。」

多村の総括が終わり、合宿2日目の幕を閉じた。

## 第14話 合宿3日目!! 前編

14話 合宿3日目!! 前編

AM8時 ホテル内

中嶋と北上は2人で炎天下の中でロードバイクの手入れをしながら、話していた。

「お前のロードはカッコいいな。」

「だろ! 北上はLOOKだな。カッコいいよな! 白いしきれいだな!」

「なんでLOOKなん? それはある人のマネをしたからさ!!」

「だれだよ!」

「ハコガクの真波山岳よ!」

「そうか…。ちなみにお前もあのインターハイの富士山の五合目に見に行ったのか?」

「当たり前よ! あの人のマネをしたくなかったからな。お前はギアを上げて登るんだろ。真波さんみたいな走りじゃないのか?」

「まあーな。このロードはあの人とお揃やからな。オレら…ある意味パクってるよな。ロードにしろクライムも。」

「本当だな w w」

この2人の様子を遠目で見ていた勘太は安心してた。

「あいつら… 仲が良いな…。」

「兄さん!!」

「おっ。純太か。」

「兄さん。今日も頑張ってるね。」

「ああ。」

他のメンバーも続々と集まり合宿最終日が始まる。多村が1枚の書類を持っていた。

「皆さん。おはようございます。いよいよ合宿も最終日になりました。始めたいところですが…重大な話があります。」

「多村。その紙は?」

「インハイ予選メンバーを発表します。」

周りは動揺し始めた。北上は多村に強い口調でいう。

「おい! 話が違うじゃないか?」

「違いますと?」

「だってよ! 合宿終わったらインハイメンバー発表するんじゃない?!」



「そんなこと一言も言ってませんよ。この合宿でインハイメンバーを6人選ぶとはいいいましたが。」

「それでは… 発表します。」

「おい!!」

「1番 多村純太郎。オールラウンダー。」

「2番 佐々木竜司。オールラウンダー。」

「3番 北上雄介。エースクライマー。」

「4番 菅原勘太。エースプリンター。」

「嘘だろ…。オレがエースクライマーなの…。一日目のあれが認められたのか!」

「エースプリンターに恥じない走りをするし、純太の分を背負って走る。」

「多村君のアシストか。僕はー。」

「5番 中嶋悠斗。パンチャークライマー。」

「パンチャークライマーということは…。ブロックやアタックメインのクライマーか。」

面白そうなポジションをくれたな!!」

「6番 山中大地。ジョーカー。」

みんなで息があったように声を揃える。

「ジョーカー!!!」

「おいおい。ジョーカーでランプではないんだからさ。ジョーカーというポジションは専門用語ではきかんよ。」

「まあ。中嶋君。選んだ理由は今から話す。1人1人の役割を言うから。」

「まずは、僕と佐々木君はゴール前に競うポジションだから省略。北上君。君は一日目の山岳リザルトをとる。そして、2日目はチームを牽引して山岳区間はチームのために引つ張つてほしい。勘太さんは、1日目のスプリントラインをとり、先頭集団に入る。勘太さん。ここかなり重要なので期待してます。あとは、3日目の東京を走るときはよろしく願います。そして、5番の中嶋君。君が活躍する場合は…3日目の山岳リザルト。ここで僕は勝負を仕掛けるつもりでいます。だからこそ…君の力をかりたい。詳細はまたあとで話す。何より6番の山中さんはジョーカーですので…臨機応変に対応し、勝負どころで使います。」

「まー。多村に任せるよ。それは。」

「でも。これは予選突破してインハイ出場するのを前提に話してるので…。必ず予選突破しましょう。」

「予選のメンバーは考えてあるのか？」

「それは…当日話します。インターハイは補欠もいれることが出来るので、全員選手登録はしておきます。では、そろそろ始めましょうか。ちなみに熊野君と純太さんはマ

ネージャー達と一緒に行動してください。」

「……………。わかりました。」

「りようかい。多村君。」

インハイメンバーの6人で走る。合宿最終日が始まる。

甲府盆地を抜けると山岳区間が始まる。ここは北上に引いてもらうことになる。そして、肝心な相模湖から高尾までのつづら折りの坂道になる。そこで多村は中嶋にオーダーを出す。

「中嶋君。北上君と勝負してください。」

「えっ。勝負するのか?」

「パンチャーはここぞという時に力を発揮するんですよ。その練習です。」

「だつてよ! 中嶋。」

「また中嶋と勝負するのか。ここまでチームを引っ張ってきて、脚が若干きてるというのにやるのか? 多村?」

「あなたは良きライバルであり、お互いの強みを発揮できる場ではないのですか?」

「たしかに。オレがエースクライマーじゃないのが気に食わないし、そもそもパンチャーで地味なポジションじゃないか。」

「ギア上げの狂人クライマーじゃないか? ま。ハイケイデンスのオレはエースクラ

イマーに似合ってるからな。」

「はっ? なめるなよ! お前はエースクライマーのくせに勝負しないのか?」

「はっ。オレはエースクライマーだからこそ!ここまでの山岳区間をお前らの為に引つ張つてやったじゃないか!!パンチャーやろうに言われたくね。」

勘太は怒りを爆発した。

「お前ら。いい加減にしろ。自分がやるべきことをしつかりこなせ。」

「すみません…。勘太さん。」

「ハワワ…。これから行きますから!!」

「勘太さん。ありがとうございます。」

「こうしないと奴らは黙らないからな。」

北上と中嶋は神奈川と東京の県境の山頂を目指す。2人が飛び出した直後に

「なあ? オレも参戦していいか?多村?」

「?? 山中さん…。なぜ?」

「ジョーカーは一か八かだろ。」

「素晴らしいでしたが…あなたの力を使うところはここじゃない。」

「いいじゃないか。やらせてくれないか?」

「山中さんなら何か狙いがあつてやるんですね?それなら許可しますが…。」

「ありがとうよ。少し運動してくるか！」

勘太は山中に話しかける。

「何を考えているのか？」

「そうだな…。久々に競争したいからね。」

「そうか…。だが…本番はそんな自由なことは出来ないぞ。」

「練習だからこそやるんだよ。あと…今しか出来ないことがあるからな。」

「……。そうか。行ってこい。それと…あの2人を蹴散らしてこい!!」

勘太は山中の背中を押し、山中を行かせた。

「大地はきつと…あの2人に何かを伝えたいことがあるのではないのか。」

「すみませんが…佐々木君。この登りはよろしくお願いします。」

「わかったよ…。純ちゃん。」

佐々木は多村と勘太をつれて登る。そして、北上と中嶋は互いにつづら折りの山道を登る。

「そんなもんかよ！ エースクライマーさんよ!! オレはまだまだ序の口だ!!」

「うるせーな…。お前も脚がプルプルしててではないか！ 限界か？」

「連日の疲れが溜まつてるんだよ！」

「それはオレも同じだ！」

その時。2人の背後に異様なプレッシャーを感じた。それは過去に感じたことがあるプレッシャー。振り返ると山中が登ってる姿が見えた。

「山中さん!! 登ってきたのですね!」

「山中先輩!」

「よう。仲良く登ってるか? 悪いが先に行くわ。そして、山頂とるから。」

山中は更に加速した。慌てた2人は山中にしがみつく。

「山中さん…。速すぎですよ…。」

「ついていくのが…やつとだ…。」

「そうかー。なら。もっと加速するわ。」

山中は更に加速し、一瞬で2人を引き離す。

「くそー。はえー。」

「力を温存していたのですね!」

2人は必死にペダルを回すが、差がどんどん開いていく。

「山中さん…。あなたはこの3カ月…。だいぶ成長しましたね…。」

「あの気迫と闘争心は凄い圧を感じる。」

「なあ。中嶋。」

「なんだ?」

「山中さんはもしかしたら…オレらに勝負を挑むつもりだな。」

「当たり前だろ！ あの人の性格はわかってるからな！！ だから、こんなところで負けたくないわ！！」

「なら…協調するか。オレら… 昨日の山岳区間をチームを引いて疲労が溜まつてる。あの人に勝つためにはそれしかない。」

「だな。なら… やろうか！！」

「ああー！」

中嶋と北上の残りの力を振り絞って、山中に勝負に挑む。仲が悪いと評判だった2人が初めて協調する。しかし、山中ははるか先にいる。お互い励まし合いながら登る。

「北上！！ オレの引きについていけてるか？

きついようならいつてくれ！」

「大丈夫だ！！ そのままいつてくれ！」

北上は中嶋の引きを感じた。

「こいつ…。ギアを上げる時…。一瞬ダンシングして少しでもロスを削るようにしなやかで豪快な走りをしてる。普通なら…こんな傾斜がキツいところでギアを上げない。これが…中嶋悠斗のクライム！！」

「代われ！ エースクライマーの引きを見せてやるよ！！」

「見てろよ！」

「おう!! 頼む!」

「いつ見てもこいつのバカみたいなハイケイダンスには驚かされるぜ。まるで小野田さん!このケイダンスで山を登るクライマーなんて…。まるで化け物だな!!」

「すげーじゃん。北上!」

「だろ!!」

2人の協調により山中の姿をとらえる。山中は後ろを振り向きボヤク。

「来ると思ってたよ。 さあ!! 山頂まで競争だ!!」

北上と中嶋は汗が吹き出るぐらい必死に山中に追いついた。

「来ましたよ……。山中さん…。」

「あなたの好きな競争をやりましょう!」

「ウォーミングアップは済んだようだな。なら… 擬似山岳賞勝負!! やろうか!」

「

「さあ! 楽しみましょう!! 山頂まで!」

「エースクライマーの僕がとりますよ!」

「お前らに見せてやるよ。そして、絶対に勝つ!!」

県境の山頂まで残り1km。3人の戦いが始まる!! 先に仕掛けたのは中嶋。ギ

アを更にかけて残りの力を振り絞る。



「なんか。懐かしいですね！山中さん！」

「何がだよ。」

「山中さんと初めて学校の裏山を登ったときですよ!!」

「懐かしいな。」

「ですよね！あの時と同じ高揚感ですよ！」

「お前らしいな…。」

「待てよ…。山中さん…。中嶋…。」

「北上と最初勝負したときも裏山。オレが山頂寸前で落車したやつか。」

「懐かしいっすね。山中先輩！」

「どちらも共通して言えるのは… お前らに勝ってないからだ。1度も。」

「まさか。山中さん…。リベンジマッチですか？」

「ああ。そうよ。」

「それに…。一日目の箱根では北上に負けてる…。リベンジだ！北上！」

「おいおい。さつきまで協調してたのに…ここで仲間割れかよ…。しかし、山中さんが3人で競うというなら…。やりましたよ！エースクライマーとして2人を蹴散らしましょう。」

「エースクライマーでばっか言ってるが…気に入ってるのか!!」

「ええ! このチームで速く山を登ることが出来るクライマーですから!! それは名誉ですよ!」

残りの800mの山頂まで3人登る。どちらも限界の限界までペダルを回す。3人共通していえるのは勝ちたいという執念である。

残りの500m。3人はここの力を振り絞り山頂を目指す!

中嶋は更にギアを上げて2人をブロックする。何故なら、ポジションを維持するたぬにやるからだ。

「2人に言いますが…パンチャーというのはアタックを阻止したり、自分がアタックを仕掛けるもんだぜ。オレを抜くことが出来れば良いんだがな。」

「くそ。これでは厳しい。だが…中嶋。オレの走りに魅了されるなよ!」

北上は中嶋と並びブロックをさせまいと、必死にしがみつく。山中は2人の後ろについて、仕掛けようとしぬい。

残り100m。山中がついに仕掛ける。2人の横をすり抜け、山頂まで必死にペダルを回す。2人は山中のオーラに圧倒された。

「これが… 山中さんの真骨頂!!」

「凄い…。あのころとは違う!!」

「最大ギアマックス!!」

「ハイケイデンスクライム第3弾!」

「本気の本気で来やがったな…。北上と中嶋と対等に勝負出来るようになった。ここま  
でこれたのはお前ら2人がいたからなんだよ。感謝する。だから、オレがお前らに3カ  
月間成長したということを証明する!!」

いよいよ東京と神奈川の県境に到達寸前。

「オレは…。この山頂をとる!!」

「もらー!!! とるぞ! 山頂!」

「オレがエースクライマーだ!」

そして、勝者が決まる。敗者は苦しそうに息を吐きながら下を向いてた。

「やった…。やったぞ!」

「悔しい…。悔しい!!」

「久々に感じる敗北…。」

僅かな差で山中が山頂をとった。3人とも並走し、中嶋と北上はバイクを出したが、  
山中は山頂までペダルを踏んでいた。

中嶋と北上は山中を称賛した。

「やっぱり…。山中さんには構わないや!」

「悔しいですけど… この勝負をして学ぶことがたくさんありました！ ありがとうございます！  
ございました!!」

「やっとな…リベンジ出来たよ…。お前らに勝ったのは初めてだからな。これで、1勝1  
敗だな。」

「そうですね！ またやりましょうよ！ 凄く楽しかったです!!」

「そうですね。また3人で!!」

「勘太達が来るまで…お前らは休んでろよ。オレがこの下りの区間は引つ張ってやるか  
ら。」

山中は2人を連れて、勘太達が来るまでゆっくり高尾までの下り坂を下がっていく。

中嶋と北上はこの勝負の敗北で感じる。

「1日目も3日目の山岳リザルト…。北上に負けてる。クソ!! 悔しい!!」

中嶋はこの2つの戦いで敗北してるため悔し涙を流した。

「エースクライマーという慢心が今回の敗因。山中さんは3カ月間で必死に努力して強  
くなった。それを証明するするために、山頂勝負を仕掛けたのか。」

「山中さん…。次は負けませんから。」

「ああ。楽しみにしてるよ!」

「さて。北上と中嶋の勝負を終えたし、あとは東京の平坦区間。ここで役割を果たさな

いとな。」

こうして山中と中嶋、北上の山頂勝負は山中が制し、ゴールに向けて走る。

## 第15話 合宿3日目!! 後編

### 第15話 合宿3日目! 後編

合宿3日目は甲府から東京の大手町まで走る。山岳区間は北上がチームを引く。多村が中嶋と北上を3日目の山岳リザルトの東京と神奈川の県境の山頂まで競争を求めたが、山中も参戦することになる。それぞれの想いをペダルに込めて山頂を目指す。山中が山頂を制し、東京の平坦区間に入る。

佐々木と多村、勘太と合流した山中達は陣形を再び整え調布市の味の素スタジアムのスプリントラインまでのオーダーを出す。

「誰が山頂をとりましたか?」

「山中さんだ。」

「そうですか。わかりました…。ちなみに山中さんはまだ走れますか?」

「ああ。走れるさ。何かオーダーあるか?」

「そうですね…。クライマー達をひいてもらえますか? 僕達は先に行きます。」

「つまり、佐々木と多村、勘太でゴールをとりに行くということか?」

「ここからは平坦道が多いので、役目を終えたクライマー達を、大手町まで引つ張っても

「らえれば大丈夫です。」

「わかった。あとは任せたぞ。」

「はい。では、行きましようか。」

佐々木、多村、勘太は3人で平坦区間を走る。山中達を残して走る。

「今、多摩川を渡り甲州街道を東京方面に行きます。調布あたりまで僕が引きます。2人は脚を休めてください。」

「待て。エースがチームを引くのか？それじゃゴール前競えないじゃないか。」

「純ちゃん。脚を休めたほうがいいよ。」

「一番で勘太さんがスプリントラインをとってほしい。それが、僕の考えている作戦。皇居あたりまでは脚を休めるさ。」

「なるほどねー。」

「勘太さんは少し休んでください！」

多摩川を渡り終わり、20号線をしばらく真つ直ぐ走る。多村は勘太のフォームになる。

「おい。それはオレのフォームだな…。」

「勘太のフォームや走り方、そして、勘太さんのクセなど。研究して真似しました。」

多村は勘太のスプリントの体勢で平坦を淡々と走る。佐々木も勘太もついていくの

に精一杯。勘太の走りを真似した多村に驚愕。

「こいつ…。人の走りを見て、それを自分の技にする。まるでオレがもう1人いるような。生まれ持った天才かよ。」

多村の引きによって調布市内に入る。

「勘太さん!! 四ツ谷まで全力で引いてください!!」

「えっ。待てよ。話が違くないか？」

「本来なら八王子から四ツ谷あたりまで引いてほしかったのですが… 山中さんが山頂勝負をしたから、急遽作戦変更にしたんです。ちなみに、最速で味の素スタジアムを突破してほしいという意味です。」

「そうなのか。四ツ谷まで引いてやる。」

「本当は…大地がエースでオレがアシストでゴールは大地がとってほしかかった。でも、多村のオーダーだと叶いそうにないな…。」

勘太達は順調に甲州街道を走る。

そのころ。山中達はまだ府中あたりを走っていた。3人で会話しながら走っていた。

「しかし、多村は相変わらず冷たいやつですよね!! 山中さん!」

「何か策でもあるんじゃないのか？」



「だといいですけどね!!」

「何故。俺たちは3人のオールラウンダーに1人のスプリンターという異例なメンバーなのか。オレには理解ができない。流石にオールラウンダー3人は多い気がする。」

「たしかにそうだよな。北上。」

「なあ。お前から1ついいか？」

「なんですか？」

「多村はオレをジョーカーでいつてたよな。ジョーカーなら勝負どころで使うのに…なんでオレがここにいいのかわからない。」

「たしかにそうですよね…。役目を終えたクライマーたちを引いて大手町まで行けっておかしな話ですよね。」

「山中さんに負担をかけないためじゃないのか？ 中嶋。」

「山岳勝負したし、そういうことなのか？」

「なあ。お前らに1つオレのわがまま聞いてもらっていいか？」

「なんですか？」

「オレが…最速で3日目のゴールを狙いにいつてきていいか？」

「えっ…。マジで言ってますか？」

「はるか先にいる3人に追いつく気ですか!?!いくら山中さんといえど無茶がありますよ

!!

「そんなのやってみなきゃわからないだろ。」

それに：昨日純太に言われたんだ。勘太とオレがゴール争いに絡んでほしいとな。あいつもそれを望んでいると思う。」

「勘太さんと山中さんは仲が良いですからね…。」

「なら……。中嶋！ やることは1つだろ！」

「そうだな!! 俺たちが平坦を引きますよ！クライマーだけど：平坦も走ってみせませよ!!」 ついてきてくださいよ!!」

「さて！ お前らはあの勝負で脚がいつてるんじゃないのか!? それにクライマーだろ！」

「そんなの関係ありませんよ！ クライマーだろうがスプリンターだろうが：エースをゴールを届けるのがオレらの仕事ですから!!」

「そうですね！ 平坦区間でもハイケイデンスで回しますよ！僕の後ろについてくださいー！」

「2人ともすまん…。オレのわがままをきいてくれて。ゴールはお前らの想いをムダにしない走りをする！」

「ハイケイデンススプリント第一弾だ！」

「ギアを上げて平坦も走る！ もらー！ー！」

北上と中嶋は脚に痛みを感じているのにペダルを回す。それは、2人が信頼してる先輩が1番でゴールをとってほしいという想いがあるから。山中もこの2人の必死の引きに魅了される。

「オレのために無茶させてすまん。オレは良い後輩を持ったな。あと…ありがとう。」

北上と中嶋が2人で山中を引いていく。

佐々木達は新宿の街中を走っていた。信号が多いためゆっくり進んでいる。

「すーいーい！ ここが歌舞伎町ー！」

「佐々木君。もうすぐで四ツ谷ですから…そろそろ準備をお願いします。」

「はいー！ 純ちゃん！ 任せてよー！」

「多村。四ツ谷まで引いたらオレはどうすればいいか？」

「そうですね。そのままゴールに向けてダウンをしてください。勘太さんの役目は終

わるので。」

「…わかった。」

「オレの役目はここで終わりか…。」

そして、勘太達は四ツ谷駅まで走り、勘太は佐々木にバトンタッチして、多村と佐々木の2人でゴールの大手町まで飛び出す。

「しかし…。疲れたな…。純太みたいに長距離を全力でペダルを回すのは苦手だからな…。かなり過酷なレースだったな。」

「少し休むか…。」

すると、後ろから以前感じたことがある気配を感じる。勘太は後ろを振り向いたが…車しか走っていない。

「まさかな…。そんなことはありえないと思うがな。」

しかし、その気配はどんどん近づいて来てる。ロードの車輪の音が密かに聞こえる。

また後ろを振り向くとそこにはポロポロになった北上と中嶋、後ろには山中が全力で走っていた。勘太は呆然する。

「あとは…。お願いします…。山中さん。」

「勘太さんまで追いつきました…。あとはお願いします!。」

「勘太!! 今すぐオレを引いてくれ! 詳しい話は走りながら言う!。」

「お前ら…。ウソだろ。ここまで来るなんて思ってもいなかった! しかも平坦で!。」

中嶋と北上は山中の背中を押して、想いを託す。

「最高のポジションまで引きました! ゴールをとってきてください!。」

「あとはお願ひします!! オレ達の想いを!そして、山中さんの想いも背負って走っ

てくださいい！」

「ああ!! ありがとう! 中嶋! 北上! お前らは良い後輩だ!! 絶対! ゴールをとつてくる!! だから! 楽しみにしてろ!」

北上と中嶋は山中に想いを託し、脚に限界がきていたため、バランスを崩しガードレールの草むらに落車する。2人が落車した音は山中の耳に入る。勘太は後ろを一瞬振り返り、前の佐々木と多村を追いかける。

「勘太! お前と交わした約束を果たす時が来たな!!」

「ああ!! 中嶋と北上を称賛したいところだが…今それどころではない。だいぶ差が開いている。しかし! まだ間に合う!」

「そうだな! 勘太の脚は大丈夫か?」

「お前がこの場に来てくれたから絶好調だ。オレの引きを見せてやる。」

半蔵門から皇居を半周し、大手町のゴールを目指す。ここからは勘太が最後のスプリントをする。それは、まるで闘将のごとく力強い豪快な引きをする。

その頃、佐々木と多村は日比谷あたりを走っていた。多村は佐々木に話しかける。

「あそこのフランクまで頼みます。」

「わかったよ!」

多村は何かの虫の騒ぎなのか後ろを振り向く。首を横にふり前を向く。しかし、多村

は気になりまた後ろを振り向く。

「純ちゃん! そろそろフランクに入るよ! 準備してね!」

「ああ。1つ気になることがあるんです。」

「何?」

「ちなみに:山中さんが来ると思う?」

「えっ。北上君と中嶋君を連れて、僕たちより遅れてゴールするんじゃないの?」

「だと。いいんですが:。」

すると、後ろからロードバイクの車輪の音が聞こえる。しかも凄く速い速度で後ろから迫る。

「大地! フランクまであと200mだ! そこからは頼む!!」

「ああ! 追いつくぞ!!」

一瞬にして佐々木と多村を抜き去る。勘太と山中は2人が近くにいたのに気づかずに通り過ぎる。多村は焦る。

「佐々木君!」

別人格の佐々木竜司が現れる。

「抜かれちゃったな!!!」

おい! この前のコピーやろう!! ついてこいよ!」

「別人格の佐々木君!」

「フランクについてこれるか!!?」

フランク寸前に勘太は山中の腰に手を添えて山中に託す。

「大地!! 残りの数百メートル!! 全力でペダルを回せ!! 北上と中嶋が託した想

いを無駄にするんじゃないよ!! 絶対勝ってこい!!」

「ああ!! 絶対勝ってくる!!」

山中はフランクを突破し、大手町のゴールまで一心不乱に走りだす。しかし、勘太の隣に佐々木と多村が走り、フランクを突破していく。

「残念だな!!! スプリンターさんよ!」

「なあ…。そんな!! 大地!!」

勘太はブロックにいかうとするが、勘太は東京の平坦道を引つ張り、山中を全力で引いたから脚に限界を感じた。

「気づかなかった…。どこら辺で抜いたかわからない。後ろにいたのか。これはやばいぞ。大地!!」

山中を捉えた佐々木。佐々木は山中をブロックする。

「さあ。出ろよ! コピーやろう!」

「佐々木君。キミ。抜かれてるよ!」

山中はオーラを全開に出し、ただひたすらゴールに向かう。佐々木がブロックをして

も無意味である。多村も全力の走りをする。

残り100m。大手町の交差点がインターハイ3日目、がゴールである。その先にバスで先に到着してた純太と熊野、マネージャー達が待っていた。純太と熊野は叫ぶ。

「山中さん!! 勝ってください!!」

「多村君!! もう少しですよ!!」

「北上…。中嶋…。お前らには感謝してもしきれないほど感謝してる。また、借りを作ってしまったな。だが…。その借りは返す!!」

勘太…。お前は前から言ってたな。オレのアシストでお前を優勝に貢献する走りをするって。実はオレもそれが楽しみでここまで来たんだ。お前らが引つ張ってもらえたおかげでここにいる。だから…。託された想いを背負い走るんだ!」

「山中さん! あなたがこの場にいることが奇跡! 北上君と中嶋君、勘太さんがこの人を引つ張ってきたのか…。凄いですね…。やっぱりこのチームは何かが違う。」

大手町の交差点を真つ先にゴールしたのは山中。山中は右手を挙げて叫ぶ。

「やったぞ!! 北上! 中嶋! 勘太!」

多村と佐々木が到着し、山中に称賛する。

「山中さん…。あなたはこのゴールスプリントで素晴らしい走りをしました。何より



北上君と中嶋君、勘太さんを褒めたいと思います。お疲れ様です。」

「なんでオレとお前がゴールスプリント対決したんだという顔だな。」

「……凶星です。」

「北上と中嶋の必死の引きのおかげだからな……。あいつらの精神力はすごいぞ。」

「そうですか……。あとで称賛しましょう。」

「おい！ コピーやろう！ 負けてるんじゃないよよ！」

「すみません。佐々木君。僕のアシストしてくれてありがとう。」

「まったく!! 次は負けんじゃねーぞ！」

「山中っていうやつ……。オレがブロックしたが……。一瞬でコース変更し、抜きやがった。

あいつのバイクコントロールもそうだが……。ゴール前のあの気迫はただモンじゃねー。

こりや……。すげー奴になりそうだな……。」

佐々木は普段の人格に戻り山中に話しかける。

「すごかったですー！ 山中さん！」

「すげー疲れたよ……。でも、最高の気分だ。佐々木もお疲れ様。」

「お疲れ様です!!」

勘太が到着し、山中のところに駆け寄る。

「どうだった？ 大地。」

「やったよ! 勘太!」

勘太と山中は拳を合わせて喜びあう。

「大地! インハイでもやろうな!」

「ああ! その時はよろしく!」

北上と中嶋は落車したあと、少し休んでから、近くの公園のベンチで寝そべっていた。

「山中さん…。多村に勝ったかな?」

「あの人なら勝つよ。北上。」

「そうだな! 俺たちはもう少し休もうか。」

「ああ…。そうだな…。」

山中のもとにマネージャーの坂田、みほがタオルを持っていき、話しかける。

「無茶しましたね。山中先輩。」

「そうだな。でも、楽しかったよ。この3日間。いろいろありがとうな。2人とも。」

「こちらこそありがとうがとうございました! 3日間お疲れ様でした!」

「純太。やったぞ。」

「兄さん! かつこよかったよ!」

「あの約束は果たすから。」

「佐々木君。多村君。お疲れ様です。」

「熊野君。ありがとう。」

「熊野君……。ごめんね。」

「正直。僕はインハイメンバーに選ばれなくて悔しいです。それは、純太さんも同じだと思います。しかし、僕はあなた達がインハイでこのチームを優勝に導くことが出来ると思っっています。だから、次は負けなideてください！」

「熊野君……。わかりました。インハイで全国の強豪校達に勝ちにいけます。」

「熊野君。応援してくれてありがとう。」

こうして合宿3日間を終了した。あとで北上と中嶋を回収し、3日間の疲れを癒すのである。

## 第16話 東京観光!!

## 第16話 東京観光!

3日目の夜。 某ホテル。

3日間の合宿を終えてみんなを集めてミーティングを始める。

「みなさん。3日間お疲れ様です。予想以上の出来でした。それに今回の合宿で皆さんも僕も含めてたくさん学ぶことができました。」

来週の日曜日にインターハイ予選大会があります。そのメンバーを発表します。」

「予選メンバーから先に決めるんじゃないのか? 普通は…。しかも…まだ出場すると決まったわけでもないのに。」

「この3日間はインターハイ本大会の実際のコースを走ったのです。実践を踏まえた練習です。予選と本大会ではだいぶ違いますから。」

「そうか。なら発表してくれ。」

「206番。北上雄介。 205番。菅原純太。 204番。菅原勘太。 203番。熊野友成。 202番。佐々木竜司。 201番。多村純太郎。」

「おい。オレと山中さん入れてないぞ!」

「中嶋君。予選メンバーも6人しか入れませんよ。しかも、中嶋君と山中さんのデータを他校に知られたくないというのもありますからわざと入れてないんです。」

「といたしますと?」

「山中さんはオールラウンダーで、しかも朝に話したとおりにジョーカーですから。この予選大会で知られてしまえば、本番で使えません。ジョーカーの意味がなくなりま

す。中嶋君に聞かしては君のその独特なクライムを見せたくないというのが正直なところ。予選大会当日は他県の学校が視察に来ますからね。だから、予選大会では使わな

いのです。」

「そういうことか。それなら納得いくわ!」

「予選大会はどちらかという平坦道がほとんどなので、平坦に強い純太さんと熊野君の力を借るつもりですが、大丈夫ですか?」

「わかったよ。」

「わかりました! 本大会に出場させるために走りましょう!」

「ありがとうございます。この話は後々するつもりです。ということでは:明日の予定を話します。明日は東京観光をしようと思います。要するに自由行動ですね。荷造りは明日の朝までに済ましてください。僕は静岡に帰ってやることがあるので、みなさんにご自由に。最低終電までに帰ってきてください。明後日からまた練習を再開します。」

では、お疲れ様でした。」

「多村はいいのかよ！ 都会だぜ！ 遊びに行かないと損するぞ！」

「北上君。僕は学校の宿題をやるので帰ります。中嶋君や熊野君、佐々木君と一緒に駆けばいいんじゃないですか？」

「ま。そうだな。」

「そんなわけで明日は充実したオフをとってください。」

山中と勘太、純太は一緒にホテルの浴場に入りに行く。裸になり、身体を洗い湯船に浸かる。

「ふうー。疲れたー。」

「今日はオレも疲れたな。」

「僕はバスの中でマネージャー達と一緒に遊んでたよー。ランプとか… 王様ゲームとかして疲れたー。」

「……。純太。俺たちは100kmぐらいの道のりをロードで走ってきたんだぞ。」

「ロードのほうが楽しいじゃん！でも…マネージャー達の恋話とか意外に楽しいよー。山中さんと知り合ったキツカケとかドラマチックで憧れますねー！ うらやましいよー 山中さん!!」

「みほの奴……。そんなこと話したのか……。」

「純太……。お前は良いよな。うらやましいよ。オレなんかマネージャーと話したことない……。モテないからな……。」

勘太は落ち込んでしまう。山中は純太に小声で話す。

「勘太はこの話題になると落ち込んでうんだぞ……。あんまそういう話はするなよ……。」

「面白いから良いじゃないですかー！　こうゆう話はプライベートでもしましょうよ。」

「お前な……。」

その時。中嶋と北上が入ってきた。

「あら。菅原兄弟と山中さんじゃないですか!？」

「お疲れ様です!!」

「お前らも風呂か！　身体洗ってから湯船に入れよ!」

中嶋と北上が身体を洗い終えて湯船につかる。2人は練習で落車をしたせいかとどこどこにキズが何ヶ所かあった。

「しみるー。傷口が……。」

「我慢我慢……。」

「大丈夫か？　こんなにキズがあるが……。」

「ケガは日常茶飯事ですよ！ 慣れてはいますが…やっぱり…痛い…。」

「辛抱がたらんやつだな…。」

「本当は痛いんだろ！」

中嶋は北上の傷口をつつく。

「いってーな！ やったな!!」

「いてー！ てめえー！」

北上と中嶋は浴槽の湯で水かけをやり始める。その光景を見た勘太はガチギレする。

「おまえら!!! いい加減にしろ!!!」

勘太は北上と中嶋の身体を投げる。その湯は山中達にもかかる。

「ぶはー！ 勘太さん！ 何すんすか！」

「いくら先輩だろうが…許しませんよ！」

「これは体罰だ！」

「なあ…。純太。出ようか…。」

「兄さんのスイッチが入っちゃったみたいだから出ますか…。ほっときましょう…。」

山中と純太は浴場から出る。北上と中嶋、勘太は水かけ合戦を始める。そのあと、ホテルの従業員に怒られる3人である。



佐々木と多村はホテルの屋上の展望台で東京の夜景を見た。

「ねえー。トモちゃん！ あそこがスカイツリーだね！ 綺麗だねー！」

「ト……トモちゃん？」

「友成のトモだからトモちゃん!!」

「あつ……。そうですか……。」

「あれが……首都高速道路!! かつこいいな。あれに乗ってみたい！」

「乗ってみたい……乗り物じゃありませんから！ 車が走る道ですよ！」

「そうなの……。でもカッコいいよね。」

「そうなんですか……。」

「ねえ。トモちゃん。ごめんね。」

「急に謝ってどうしたんですか!!？」

「インハイメンバーに僕がなったこと。」

「何故そう思うのです？ 逆に。」

「僕がエースアシストだから。」

「そういうことですか……。僕はもう気にしてませんよ。あの時つい言っちゃいましたが、佐々木君が誰よりも早く多村君か山中さんをゴール前まで運んでくれれば、充分です。それに……来年もありますから。また、更に強くなつてインハイメンバーの座をとり

にいくと目標をたてる事が出来ましたから。」

「トモちゃん……。僕も負けないよ。」

佐々木と熊野は握手を交わして再び東京の夜景を2人で黄昏ていた。

翌日。部員それぞれ東京観光を始める。

山中と菅原兄弟は東京スカイツリーの展望台に上がると、東京のビル群や遠くに富士山が見え、関東平野も一望できる。東京観光の定番な場所である。

「すげーな！　これが東京の街か!!」

「そうだな。」

「こんなに高いのに沼津の街が見えないな。」

「純太。沼津は箱根の山々が邪魔で見えないと思うんだけどな。」

「たしかに……。」

「東京って凄いやな。沼津とは違うよ!」

「そうだな。大地。」

「なあ。俺たちはインハイで東京から神奈川、静岡、山梨を通り、また東京に戻って来るんだよな。3日間です。」

「ああ。ここから見ればよくわかるが……俺たちはこの広い平坦区間を走り、あの山を

登っていくんだ。自転車で。」

「たしかにな。俺たち3日間走ったんだよ！凄いと思うよ。」

「そうだな。大地。絶対勝とうな。」

「ああ！ このスカイツリーのようにてっぺんを取ろうぜ！！」

「ああ！！」

「僕も忘れないですよ！」

「純太……。そうだな！ お前も仲間だもんな！」

「インハイに出れなくても……。心の中ではてっぺんをとる気持ちで僕も戦うよ！！」

「純太！ ありがとうな！」

「山中さん！ やりましょう！！ 僕たちの底力を見せましょう！」

「そうだな！！」

3人は手を合わせてスカイツリーの展望台でインハイで優勝することを誓うのである。

その頃。熊野と佐々木は秋葉原の電気街を散歩してた。

「ここが秋葉原！ そして、これが歩行者天国！！ 写真で見た光景と一緒だ！」

「うああ。凄いね！ トモちゃん！」

「佐々木君。アレがメイド喫茶だよ！ 寄つていかないかい？」

「えっ……。僕は遠慮するよ……。」

「せっかく秋葉原に来たんだし……行きましょうよ!!」

「あんまそういうところは……。」

「沼津にはないんですよ！ メイド喫茶！ これは行かないと損だよ！」

熊野は佐々木の背中を押しながらメイド喫茶に入るのである。

「えええ!!! だれか助けてー!!」

中嶋と北上は若者の街の渋谷を散策してた。

「よーし!! ナンパだ!!」

「おいおい……! やめろよー!!」

「渋谷に来たならナンパしなきゃ損損!!女の子のメアドゲットするぜ!!」

「オレは知らないからな……。」

「あれあれ? 逃げるのかな? かな? 逃げ腰のエースクライマーさん……。」

W

「なんだと! この狂人が!!」

「なんだと! なら!勝負だ!」

「勝負だと？ くだらない…。」

「やっぱ逃げるんだ〜。」

「くっ…。やればいいんだろ！」

「1人でも多く女の子のメアドゲットした奴が勝ちだ!! どうだ!!」

「そんな勝負かよ…。ヘドが出る…。」

「やるんじゃないんですか〜？」

「くそっ…。やればいいんだろ!! 勝ったら特典はあるのかよ！」

「それは勝ったやつが決めるんだよ！」

「そうか…。なら…。受けて立つ！」

中嶋と北上の渋谷の街中でナンパバトルが始まる。

P M 5時。東京駅前。

東京駅で集合して電車に乗り沼津の街に帰る。

「みんな。東京観光は楽しんだか？」

「はい！ 楽しかったですよ！ 山中さん！」

「おう！ 熊野…。お前が持つてるやつはなんだ？」

「これは…。フィギュアとメイド喫茶のお土産ですよ!!」

「メイド喫茶に行ったのか…。佐々木と一緒に行動してたもんな。佐々木はなんか…。顔

「が死んでるぞ?」

「山中さん…。もう秋葉原はゴリゴリなんです。 疲れましたー。」

「そりや…。お疲れ様…。」

「くそく!! なんで1人もメアドゲット出来なかったんだよー!!」

「これだから狂人は…。普通に女の子と接すればメアドもらえるんだよ。」

「お前! 5人もメアド交換してんじゃん! ロードでもナンパでもこいつに負けるなんて!! 悔しいー!!」

「お前らも…。いろいろ大変だったんだな。」

山中はボソツとつぶやいた。 勘太が山中のところに駆け寄り、少し離れた場所で話す。

「大地。東京観光は楽しかったな。」

「ああ。楽しかったな。」

「なあ…。多村についてお前は思う?」

「そうだな…。あいつなりにチームのために頑張っていると思うよ。少し気にくわないところもあるけど、何か考えがあつての行動なんだろう。」

「だといいが…。前にあーゆうタイプの人間を見たことがあるからな。今はきつと…:そいつがとある学校のトップに君臨しこの高校自転車競技界に名を広めていく存在にな

るだろう。悪い意味でな…。」

「そうなのか…。ちなみにだれなんだ？」

「宮崎浩輔。」

「始めて競争した時にそんな話題になってたな。そいつはお前らに何かやったのか？」

「ああ。だが…。今ここでは話せないんだ。これは俺たちだけでなく…ここにいろやつらほとんど関わってるからな。だから、この話をするとチームの和が乱れる。また…今度ゆっくり話すよ。」

「ああ。わかったよ。」

沼津南高校自転車競技部の合宿3日間と東京観光が終わるのである。

## 第17話 宮崎浩輔!!

### 第17話

宮崎浩輔

東京合宿を終えて、沼津南高校自転車競技部はインターハイ予選まであと3日間調整を始める。初日は、予選メンバーに選ばれている山中と中嶋以外の6人は予選で走るコースを確認し、シミュレーションをしながら走る。

「熊野君! あと2km先までお願いします!! あと、佐々木君がチームを引っ張りゴールまで運んでください!」

「わかりました! 多村君!」

「純ちゃん! 任せて!」

多村の正確な指示により、チーム内が機能し多村の思い通りに走る。その時、後ろで走っている菅原兄弟は感じていた。

「あの時と違うな…。去年は悲惨な目にあつたことを思い出す。」

「そうだね…。」

「多村。練習が終わったら話したいことがある。大丈夫か?」



「わかりました。」

その後、予選のコースを走りきり、沼津南高校に戻り、多村の総括を始める。

「皆さん。今日はお疲れ様でした。タイムも良く、このままいけば予選も突破出来ると思います。しかし、ロードレースは天候や気温、道の状況、選手のコンディション、予期もせぬことが起きたり、わかりません。油断は禁物ですので気を引き締めて予選大会に挑みましょう。マネージャーと山中さん、中嶋君。いつもサポートをしてくれてありがとうございます。予選大会もよろしく願います。あと2日間は個々のコンディションを整えてください。大会前日は必ず休んでください。では、総括を終わります。」

総括を終えて、菅原兄弟は多村のところに駆けつける。

「勘太さん。なんですか?」

「予選大会前の皆さんで練習するのは今日が最後だから、忠告したいことがあつてな。」

「なんですか?」

「宮崎浩輔は知っているか?」

「はい。名前は聞いたことはあります。彼は中学1年からレギュラーの座をとり、3年生で静岡県大会で優勝し、全国大会では個人成績で3位に入賞したというのは知つてま

す。彼が所属している箱根学園で1年生でありながら、主将のポジションについた。箱根学園前代未聞の1年生から箱根学園の主将を務めることになる。彼は我々にとつて脅威的な相手になると思っております。」

「そうか……。やつは…なんで1年生で主将になれたか…。知ってるか?」

「それは、実力もそうですが…箱根学園という名門チームを引つ張ることができるカリスマ性があるからではないでしょうか?」

「では…。質問を変えよう。なんで、元箱根学園に所属してたオレらが自転車競技部もなかった高校に来たのか。」

「まさか。何か裏でもあるんですか?」

「そう。やつは…俺たちを追い払った。それは…自分の地位を守りたいというのと、やつが気に入れる人間は皆、やつの手によって追い出されてしまったからだ。」

「!!?!」

「何故、1年生で主将になれたのか。それは、先輩潰しを行っていたからだ。例えば、宮崎の前に務めていた主将は、宮崎の手により、主将のバイクを細工し練習中に大怪我をさせ、脚や腰、肩を骨折しインハイ予選まで治療が間に合わずに、その人はケガで引退。そして、やつは主将の座を勝ちとった。あいつの汚いやり方だな。」

「そんな……。でも…。なんで…勘太さんがそこまで知ってるんですか?」

「俺たちはその光景を見てしまったからだ。そして、俺たちも全治3ヶ月のケガをした。もちろん、宮崎の手によって。口封じのためにな。最終的に俺たちは箱根学園を追放されるハメになる。」

「そんなことがあったのですか…。」

「これはまだ、序の口だ。ヤツの汚いやり方はな。他もあるが、多すぎるから話すと時間がかかる。」

「そうですか…。」

「最後に一つだけ。これだけは肝にめいじてほしい。レース中、俺たちの身に何が起きるかわからない。だから気をつけろ。」

「わかりました…。」

その時。山中が遠くから呼ぶ。

「おーい!! 勘太と純太!! 早くしろよ!

腹ペコなんだよー!!」

「すまない。大地。すぐ着替えてから行く!」

「話はそれだけだ。お疲れ様。」

「お疲れ様です…。」

菅原兄弟は部室の更衣室に走り出す。多村は一人で考えこむ。

「たしかに……。過去に実績がある選手達がこの高校に集まっているのか。それは、勘太さんに自転車競技部に誘われた時から感じてた。こちら辺に住んでいて自転車競技をやっているなら、普通は箱根学園に行きたいと思う。なのに、何故、自転車競技部もなかった高校に行ったのか。ま。これは……。全部あの人が出たことか……。」

多村はポツケの中に入ってるスマホを取り出し、ある人物に電話をかける。

「もしもし。お久しぶりです。今、練習が終わりました。」  
「ご苦勞様。順調にやってるか？」

「もちろんですよ。宮崎さん。」

「ふっ。沼津南高校のデータを明日持ってきてほしい。予選大会は、絶対お前らを勝たせるからよ。本大会楽しみに待ってるぞ。」

「わかりました。では。失礼します。」

多村は電話をきり、更衣室に向かう。

翌日。多村はある場所に呼ばれていた。そこは、箱根学園。1人の男が多村にも

とにやってくる。宮崎浩輔である。

「来たか。多村。」

「これが…沼津南高校のデータです。」

「どれどれ…。見せてみる。」

沼津南高校の選手達のデータが書かれている書類を見ながら、宮崎は笑みを浮かべる。

「ははは。こいつらもいるのか。こりゃー楽しみだな。」

「菅原兄弟ですか？」

「ああ。こいつらは元チームメイトだったやつだからよ。まさか…。こんなところにいるとは…。偶然だな。ははは。」

「そうですか。」

「それと…。この佐々木っていうやつ。前に見たことがあるな…。」

「佐々木君を？」

「思い出した!! 2年前の大会で優勝争いしたやつだ! もちろん…オレが優勝したかな。ははは。面白いチームだな。ここは!」

「そうですか…。」

「他のやつも…見たことある顔ばかりだな…。これで交渉は成立だな。あの約束は守る。安心しろ。お前らのチームを予選大会で優勝させてやるよ。」

「はい。お願いします。」

「おれはそろそろ練習が始まるから…なんかあったらお前に連絡する。じゃあな！」

多村は自転車に乗り、箱根の山を登り沼津の街に帰る。

「宮崎さん…。あなたにあげたデータに1人だけ入れていない。山中大地。あの人のデータは…未知数だから…僕も予測不可能。僕は…あなたを利用して予選を突破し、そして、僕達が1番になる。宮崎さん…。あなたは僕の手駒になつてもらいますよ…。」

インターハイ予選大会当日。

沼津南高校の初めて走るインターハイ予選大会。年一回の自転車競技にとつてビッグイベントであり、この大会で予選を突破し、全国大会で走るために他の選手達は必死に練習をしている。だから、会場の緊張感は凄いのである。この状況を一番楽しみにしていたのは中嶋である。

「すげー…！これがインターハイ予選大会の雰囲気!!」　　ピリピリ感じるよ！」

「だらしなないぞ！　中嶋!!　お前は今日走らないよな!!」　　少し黙つてくんないか？」

「だって!!　インハイが始まるんだぜ!　そりゃ!　楽しみでたまんねーよ!」

「はいはい。わかったから。少し離れてろ。そういえば…山中さんを見かけないな…。」

多村が部員を集めて紙を持ちながら話す。

「いよいよ。インターハイ予選大会です。オーダーは個々にメールで送つてあるので…それを読んでください。そして、覚えておいてください。僕も指示するので。あと、一〇だけ言いますが…。山中さんは予選大会に参加しなさいです。」

「!!!」

多村の思いもよらない発言に周りは驚く。

「なんでだよ!! 補欠メンバーにいらてるんじゃないのかよ!」

「たしかに入れてはいます。しかし、合宿で言いましたよね。僕。」

「ジョーカーか。」

「そうです。彼は僕達の切り札なので…。」

勘太はこの言葉を聞いて、納得した表情で言う。

「そうだな。大地は予選大会に欠席させた判断は正しかったな。多村。」

「どういうことですか!!? 勘太さん!」

「見ろ。スタート地点に立ってる傍観者達を。あの中に一人だけ…俺たちが知ってるやつがいる。」

スタート地点に立っていたのは宮崎浩輔。傍観者として偵察に来ていたのである。

勘太は宮崎を見下すような目で見つめる。それに気づいた宮崎は笑いながら勘太を見つめる。

「あいつ!! ふざけやがって!」

「兄さん。やめて。」

「純太もあいつのこと!! 気にくわないだろ!!」

「そうだけど…今は予選を通過することに集中しようよ。」

「たしかな…。おれとしたことが…。我を忘れそうになったよ。」

佐々木は感情を抑えることが出来なく、別人格の佐々木が現れる。佐々木は今にでも宮崎に殴りにいくような勢いがあった。それを阻止しようとする熊野。

「あいつのせいで……。オレは……。オレは……。クソ野郎が!!!」

「やめてください!! 佐々木君!」

「はなせよ!! クソ雑魚が!!」

佐々木は熊野の胸を殴り、熊野は倒れるが…熊野はすぐに立ち上がり、阻止しにいく。

「こんなところで……。君の夢も…僕の夢も…。皆んなの夢も!! むだにしないでください!!」

熊野は力強く佐々木を抑えた。佐々木は普通の人格に戻り冷静になった。



「はっはっはっ……。ごめん。熊野君。殴っちゃってごめん。少し頭を冷やしてくるよ。」  
「いいよ……。痛かったけど……。予選大会に集中しよう。」

多村は宮崎の方を見ながら考えていた。

「あなたのことですから……。この大会に来ると思っていましたよ。そういうことを想定して、山中さんを予選大会に一切関わらないようにしました。しかし……。僕達を絶対予選を勝たせるとはいいましたが……。何故、そう言いきれるのか。気にはなりますが……。勘太さんが言ってくれたことも頭に入れつつ、予選大会を走りましょう。」

数分後。スタート直前の時間になり、選手達がスタートラインに集まる。沼津南高校は初出場校ということもあり、集団の一番後ろにいた。勘太はみんなの拳を合わせる。

「ここからがスタートだ。俺たちのロードレース!!だから……。気合い入れていくぞ!」

「はい! 勘太さん!」

「いきましよう! 勘太さん!」

「兄さん! いかう!」

「僕も……。気合い入れて頑張るよ!」

「……………」

スタートの合図でインターハイ予選大会が始まるのである。

## 第18話 予選大会開始!

### 第18話 予選大会開始!!

ついにインターハイ静岡県予選大会が始まる。メンバーは多村、熊野、菅原兄弟、佐々木、北上の6人で走る。しかし、このメンバーは予選大会限定であり、全国大会に出場するメンバーは菅原純太と熊野を抜いて、中嶋と山中が入ることになる。これは、多村の作戦である。

ホイッスルが鳴り、次々に他の選手達も走り出す。最初はパレードランでゆっくり走るが、3km過ぎたあたりからインターハイ予選大会の始まりである。多村が最初のオーダーを言う。

「パレードランが終わりましたら、勘太さんと純太さんはスインスプリントで先頭に追いついてください。僕たちは後で追いつきますから。チームを気にせず走ってください。」

「ああ。しかし、大丈夫か?」

「その辺は大丈夫です。先頭に追いつくことで他の選手達にプレッシャーを与えること

が出来ますから。」

「おまえのオーダーを信じるぞ。」

「さて、僕たちを勝たせると宮崎さんはおつしやつていました。これは…僕のオーダーではなく、宮崎さんが考えたプラン。だから、きつと何か裏があるに違いない。油断するとやばいことになりそうな予感がします…。」

パレードランを終えてから、他のスプリンター達はスピードを上げて最初のスプリンターインをとりに行く。それは、グリーンゼッケンをとることによって、チームのアドバンテージになり、他の選手より優位なポジションにつくことが出来るからである。ここで、起用するのは菅原兄弟である。そして、ついに菅原兄弟のスインスプリントの体制に入る。

「必ず…グリーンゼッケンをとってくるから待っている。」

「兄さん…。これが僕達の最初の仕事だ！」

「お願いします。勘太さん。純太さん。」

「ああ!!」

菅原兄弟は最後尾から先頭にいるスプリンターの選手を追いかける。チームに残った4人は最後尾で集団にくっついていく。チームに

「多村君。なんで、2人のスプリンターを送ったのです？」

「それは、彼らが一番速くスプリントラインをとつてくると確信してるからです。それに、ここに残っているのは北上君を除くオールラウンダーの選手が3人がある。あと、僕達は最後尾で走っているため無駄な体力を使うことなく走れる。今は我慢ドキです。彼らがとつてきてからが本当の勝負だと思つていますから。」

「そうですか……。それが、君の考えるオーダーなんですね。」

「全てを計算しての……このオーダーといい、予選限定のメンバーであるのですか……。多村君はロードを知り尽くしている。彼がいると心強いですね……。」

菅原兄弟のツインスプリントは周りのスプリンター達に衝撃を与えていた。シンク口しているかのような走る姿といい、息の合った連携でスムーズに走れているからである。

「こいつら！　クソはえー！」

「なんだよ！　あの連携プレーは！」

「あんなんでよく車輪がぶつからないよな……。あれはかなり難易度が高い技だ……。」

「これであと先頭にいるスプリンターだけですね。兄さん。」

「ああ。そこまで頼むぞ。」

そして、ついに先頭にいるスプリンターを捉えた。先頭で走ってる選手は驚きを隠せなかった。一瞬で抜き去り、勘太がスプリントラインに向けて、全力で走る。

「一瞬で抜かれた…。くそ!! 追いついてやる!!」

しかし、純太はブロックをする。

「無駄ですよ。」

「邪魔だ!! どけよ!!」

「あなたを一瞬だけでも押さえ込めば、僕達の勝ちですから。」

「クソ…。最後尾にいたヤツらが何故ここにいるんだよ!!」

「それは…。あなたが達が実力不足だからでありますからね。あと…。あなたの走りも後ろから見ていましたが、立派でしたよ。」

「おまえ…。どこかで見たことがあるな。」

「菅原純太と申します。以後御身を知りを。それと…。あれは僕の兄さんなんです。」

「…………… おまえ! もしかして!!」

「では…。僕はチームに戻りますね。」

そして、勘太はドン凸で誰よりも速くスプリントラインを割ることができた。勘太は指を上げて大声で叫ぶ。

「やったぞ! 純太! 久々のツインスプリント! 大地に報告したかったな。これでチームのために貢献したぞ! 多村!」

アナウンスが流れて周りで見えた傍観者達は声をあげて叫ぶ。

「只今、グリーンゼツケンをとった選手はエントリーナンバー204番。沼津南高校2年生の菅原勘太選手です!」

「熱海高の杉本、清水商業の瀬、浜松高の喜多見という強力なスプリンターを抜いて一位かよ! 無名な高校に!」

「聞いた話によると…今年から部が結成されたばかりの高校なんだつてよ!」

「そうなのかよ! すげーな!」

隣にいた傍観者の1人がパンフレットを見ながら話している。

「こいつつて… 去年名門の箱学にいたヤツじゃないか。なぜ。こんな無名な高校にいるんだ?」

その情報は集団で走っていた多村達に伝わり、沼津南高校は集団の中で首位に立つ。

そして、多村はすぐにオーダーを出す。

「ここで皆さんとはお別れですね…。では…。山岳区間は北上君に引いてもらい、そのままゴールに行きましょう。」

後ろにいた他の選手達は多村の言葉にキレる。

「こいつ!! 余裕ぶつて!! グリーンゼツケンとったからて。調子こくんじゃねーよ!」

「俺達。清水商業の力を見せてやるよ！」

多村はため息をついて首を振る。

「僕達とあなた達では実力の差がありますから。正直、あなた達のこと視野に入れてないので。だから。優勝するのは僕達です。あとは、頑張つてゴールしてください。」

「そうゆう態度がうぜーんだよ！」

「なら。証明しますよ。力で。」

多村はオーダーを出し、佐々木を先頭で引いてもらい集団を置いていく。他の選手も沼津南高校の4人を追いつこうとするが、追いつけない。

「こいつら!! バケモンかよ！」

「なんでこんな速いヤツらが…今年からいるんだよ……。」

「俺たち……。ここで終わりだ……。予選3連覇出来ないのかよ!! クソー！」

「先輩……。まだ…諦めるのは早いですよ！」

「そうだな……。まだ決まったわけじゃねー!! 勝負はまだわからないよな！」

その時、目の前に一本のペットボトルが転がっており、それに気付かずペットボトルを踏んでしまい、落車をしてしまう。先頭にいた選手が落車をしたため、後続の選手達もつられて落車をする。ドミノ倒しのように次々と二次被害にあう選手が多くなる。

一部の選手は落車をせずに進んでいた。

先に走っていた沼津南高校は集団落車が起きていることを知るのには、山岳区間に突入した時である。

「え。集団落車!! そんなことがあるのかよ!!」

「集団落車なんて…ロードレースでは日常茶飯事です…。」

「純ちゃん! これでだいぶ有利になったね!このまま行けば予選突破できるよ!」

「そうですね…。」

「まさかとは思いますが…宮崎さん。あなたが仕込んだのですか。それに…他の選手達のデータを隅々見ましたが…途中から調子が悪くなってるように見えました。これも…宮崎さんが仕込んだシナリオなのか。」

沼津南高校は山岳区間を北上がチームが引つ張りダウンヒルになり、最後のゴールスプリントの場面に突入する。多村は最後のオーダーを言い、佐々木と多村の2人でゴールをし、沼津南高校が優勝する。

「今年のインターハイ予選大会優勝校は…沼津南高校です!! 初出場でありながら…静岡県内の強豪校達を圧倒的な差で優勝をとりました! まさに…ダークホースです!!」

周りに見えてた観客達も驚いていた。

「すげーな!! 初出場の高校が優勝するなんて! すげーよ!」



「圧倒的な差で勝つなんて！ ありえないでしょ!!」

「しかも1位から6位までの選手。みんな沼津南の選手だし!! 独占状態だったな!」

沼津南高校の予選メンバー達は、休憩所で多村の総括が始まる。

「皆さん。大変良くやりました!! これで本大会の出場権をとりました! 皆さんのおかげでここまで来れました…。感謝します。あと…。熊野君と純太さんは今回でインハイは終わりますが…。予選大会優勝させるために走ってくれてありがとうございます。」

「今更。何を言ってるのです。多村君。僕達に分まで頑張ってきてほしいのです。」

「また来年もあるし、それまで成長するよ!そして、来年こそは兄さんと一緒に走るから!! 頑張ってきてね!!」

「お2人もありがとうございます…。熊野君や純太さんの想いも背負って走ります。それと…。2人の代わりに走る山中さんと中嶋君。あの2人にバトンタッチですね。」

「このメンバーが良かったな。多村。」

「北上君。それは叶わないですよ。本大会は山岳区間が沢山あります。この間走ってきてわかりますよね。」

「たしかにそうだな…。」

「全国大会まであと2週間あります。全国の強豪校達を蹴散らして優勝をもぎ取るために個々の力が大事になります。なので、この2週間は個人練習を中心にやっつけていきたいなと思います! 今日皆さん良く頑張つて走つてくれたので:総括はここまでにして、ゆっくり休んでください。表彰式には遅れないようにしてくださいね。」

多村の総括を終えて他の選手達はそれぞれ違う場所で待機する。

多村はある人物のところに駆けつける。

「あなたのオーダー通りにやりました。」

「ご苦労様。2週間後のインターハイもよろしくお願いしますよ。多村。」

「一ついいですか?」

「あの集団落車についてあなたはどう思いますか?」

「あれは:。誰かがペットボトルを落として落車したんじゃないのか?」

「そうですね:。今まであんなことはなかったんですけどね:。」

「そんなことを気にしてるのか。運が悪かったただけだろ。ロードレースならありえる話ではないか。」

「たしかにそうですね:。」

「ま。おまえらと本大会で戦う時を楽しみにしてるよ。」

「そうですね。では。失礼します。宮崎さん。」

宮崎は多村と話を終えて会場を後にしようとしてたら…。

「おい。」

「??」

「久しぶりだな。宮崎。」

「これはこれは…。菅原勘太さんじゃないですか！ 今日優勝おめでとうございます。」

「その顔。見るだけでうざい。何故。ここにいる？」

「何故って。偵察に決まってるじゃないか。元箱根学園のスプリンターさんよ！」  
「てめえ!!」

勘太は宮崎の胸ぐらをつかみ殴りかかろうとしてたら純太が来た。

「兄さん！やめて！」

「純太！」

「あらあら。弟君も久々に見たな。しかし、君達同じ顔してるね。あ。双子か。」  
「いい加減にしろよ!!」

「こんなところでケンカしたらインターハイ行けなくなるよ！」

「くっ…。そうだな…。」

多村は宮崎の胸ぐらをはなす。

「痛いじゃないすか。やめてくださいよ!」

「お前みたいなヤツに言われたくない。汚い手を使って勝利しようというヤツにな。」

「はて。なんのことでしょうか?」

「二つだけ。あなた達に教えましょう。あなた達のチーム内に一人スパイがいますよ。それに：君達の情報は全て知っていますからね。オレはその情報が本物か否かを判断しに偵察に来たんだ。精々頑張るんだな! 沼津南高校! 勝つのはハコガクだからな!」

宮崎はその言葉を残して会場を後にした。勘太は追いかけてみようとしたが、アナウンスで表彰式が始まるということで諦めた。

表彰式を終えて、勘太は部員だけを集めて話を始める。

「ここにいる4人に話したいことがある。それは…この中にハコガクにオレ達の情報を教えているヤツはいるか?」

「勘太さん。それはどうゆうことですか?」

「偵察でハコガクの生徒がいたからな。気になったから聞いてみた。」

「僕は教えてないよ。」

「ハコガクに知り合いがないから教えてないです。」

「教えるわけじゃないじゃないすか!」

「……………」

「多村？ 黙っているが？」

「教えていません。敵にデータを送るのは言語道断なので。」

「そうか。オレの思い過しか。今の話は気にしなくて良いぞ。それより… あと2週間後のインターハイに向けて練習だな。」

「そうですね！」

「勘太さんと宮崎さんがあつてしまいましたか…。これは…ヤバイですね。このタイミングで僕が教えていることを知れ渡るとチームの士気を下げることになる。すみません…。勘太さん…。」

沼津南高校は全国大会出場をつかみ、あと2週間後に備える。

その頃。山中と中嶋は学校の裏山で登りの練習を行っていた。

# 第19話 山中大地 v s 杉山光輝

## 第19話 山中大地 v s 杉山光輝

インターハイ全国大会1週間前の休日。この日は部活とバイトがオフで、午前中に彼女のミホを自宅を招いて過ごしており、午後から久々にサイクリングに行こうとしてた。沼津南高校のジャージを着て出掛けようとした時に、電話が鳴ってとったら中学時代の杉山光輝という彼の親友からだった。

「よう。久々だな！大地!!」

「久々だな。光輝！ お前が電話してくるなんて珍しいな！」

「久々に会いたいと思ってさ。」

「そうか。これからサイクリングに行こうとしてるんだ。お前も一緒に行くか？」

「サイクリング？ いいよ。自転車はスポーツ自転車みたいなヤツなん？」

「そうだね！ ロードバイクだけど。」

「ロードバイクなんだ！ 実は…オレもロードバイク持つてるんだ！」

「そうなの！ なら行こうよ!!」

「行こう！行こう！」

「お前の家てたしか沼津駅の方だよな？」

「中学の時と変わんないよ！」

「そうか！ なら。沼津駅に行くわ。」

「わかった。またあとで。」

彼はそう言つて電話を切つた。山中はすぐに沼津駅の方に向かうのである。

数分後。沼津駅。

駅の前に杉山光輝が待つていたため、山中は駆けつけた。

「よー！ 大地！」

「光輝！ 卒業式以来だよな！ お前は名古屋のの高校に進学したんじゃないの？」

「そうだよ。昨日と今日と明日の二泊三日で実家に帰つてるんだ。今は親の送りで一人暮らししてるからさ。」

「そうか…。中学の時と変わんないな。」

「そうかな？ 大地こそ変わんないね。でも…少したくましくなった気がするけど…なんか運動部でもやってるの？」

「ああ…。今年の四月から自転車競技部という部活に入ったんだ。1週間後に全国大会

に出場するんだよ。その大会にオレも出場するんだ！」

「へえー。そうなんだ。だから、ジャージ姿なんだね。」

「ははは。」

「実はさ…。その全国大会に出るんだな…。愛知県代表として。」

「えっ？」

「オレが名古屋の高校に進学した理由は…自転車競技部の強豪校だったからね。だから、インターハイに出たいと思って、必死に練習して努力したら、2年生でありながら、部員が60人いて、その6人の中の1人に選ばれたんだ。全国大会ではライバルだね！！」

「すごいな…。光輝…。」

「そろそろサイクリングでも始めようか。」

「ああ。そうだな。」

山中と杉山はロードバイクで箱根方面に走っていく。 ゆっくり走りながら、山中

は杉山に数々な質問を問いかける。

「なあ。光輝。お前はいつからロードレースを始めたんだ？」

「中学生の頃かな。あの頃言ってなかったっけ？ 週3ぐらい趣味でサイクリングに行ってるって？ だから、部活とかなんもしてなかったんだよね。」



「そんな事言つてたな。」

「あれは、僕が当時所属してた草チームに入っていて、数々のロードレースの大会とか出場してたよ。」

「そうか。オレはまだ4カ月ぐらいだな…。」

「でも！ 凄いじゃん!! 4カ月でインハイメンバーに選ばれるなんて!」

「でも部員は8人しかいないんだぜ。その中の1人に選ばれただけだよ…。周りは経験者ばかりで全国大会規模で入賞してるやつもいるんだ。」

「そんな凄いヤツらに囲まれながらに4カ月しか始めてない大地が選ばれた方が凄いと  
思うけどな!」

「そんなに褒めないでくれよ。インターハイよろしくな。」

「ああ!! そろそろ箱根の山だね…。」

「もう…箱根か…。」

「ねえ? 力試しでさ…箱根の山頂まで競争しないか?」

「えっ? 光輝。箱根の山頂の標高は872mで結構激坂な山道だぞ? 大丈夫かよ  
?」

「オレがクライマーじゃなければそんな事は言わないよ。クライマーだからこそやりた  
いんだ! 箱根の山頂を誰よりも速く登りたいんだよ!」

「前も中嶋と北上も言ってたな…。箱根の山頂を登りきる事はクライマーにとつて名誉だと…。それに…インハイの一日目もこの山を登るしな…。ちようどいいだろ。光輝のクライムセンスも見てみたいもんだし…強豪校出身の実力を知る良い機会かもな。」

「わかった。その勝負。受けてたとう。オレもクライマーだからな。」

「そうか!! ならちようどいい!」

芦ノ湖を過ぎたあたりで勝負をすることになった。インハイ一日目の山岳リザルトである箱根山の山頂を目指して2人は競争することになる。そして、芦ノ湖のちよつとした平坦区間を通つてから戦いの幕が開く。

「行くよ!! 大地!!」

「ああ!! いこうか。光輝!」

2人は互いに健闘のハイタッチをした。最初は2人とも様子見をしてた。どちらか先に仕掛けるか疑うように。

「オレと同じ速度で登ってるのか!! 初心者と思えないクライムセンスだよ!」

「光輝こそ…。オレだから…。力抜いてる訳じゃないよな!!」

「そんなことはしないよ。本気だったらもつと速く登れるし…。大地はそれについていけないと思うよ。」

「なら…。その本気を出してくれよ！ オレも本気になるからよ！」

「大地…。敵に塩を送るようなことはしない方がいいよ…。オレが本気になったことを後悔させてやるよ!!」

杉山はギアを2段ぐらい上げて加速した。山中もギアを上げて杉山と並ぶように走る。しかし、それに気づいた杉山はさらにギアを上げる。山中も合わせるように再び並ぶ。

「大地。なかなかやるではないか。まるで…オレを離さないようにひつついているな。だが…オレはまだまだこんなのは序の口。こんな基本的なことをしてるようじゃ…全  
国の舞台に立てない。それを応用して自分の武器を作らないと立てないのさ!!」

その瞬間。杉山はギアをマックスに上げると同時にダンシングを始めた。山中は杉山の背中に羽が生えてるのかのように見えた。力強くスムーズに進んでいて、鳥が飛んでるかのように感じた。危機感を感じた山中はケイデンスを上げて杉山と距離を縮める。

「なんだ…。この速さは…。何より…。あのクライム…。なんだろ。よくわからないけど…。かなわない相手と戦っている気分だ。」

しかし、杉山は手を抜くこともなく、更に加速する。山中との差は50mぐらいの差で開いていた。山中の中に眠る闘争心が膨れ上がる。

「光輝…。正直お前はすげー奴だな…。さすが強豪校出身の実力はある。しかし…オレはどんな状況であれ…負けたくねーんだ!! お前を抜いて勝ちにいく!!」

山中は精神統一をして、杉山の差を更に縮める。杉山は山中のプレッシャーに驚きを隠せなかった。

「なんだろ…。このプレッシャーは…。走りは基本というか凡人っぽい走りに見えるが…しかし、この感じ! 大地がでかく見える!! 眠りから覚めた野獣のように!!」

それは一瞬の出来事で杉山と並んでいた。杉山は背すじに鳥肌がたち、目の色を変え、更に加速。しかし、アタックをしようとしても山中の差は開かない。

「大地…。よくついてきてるな…。お前のその力はどこから湧いてくるんだよ!!」

「……………」

無言でただひたすらに箱根さんの山頂という場所を目指して一心不乱に登る。その時。杉山は初めて感じたのである。自分より脅威な敵であると。杉山も真骨頂に達する。

標高は872m地点まで残り200m地点まで登っていたのであった。お互いに最後の力を振り絞る山頂を目指す!

「大地! 残りの数百メートル! 全力で行くぞ!! 一瞬たりとも気を抜くなよ!!」

「ああ!! そのつもりだ!!」

両者とも己の力を最大限に引き出し登る。

「しかし…。大地…。こいつは…本当に4カ月前からロードを始めたとは思えない…。いくら初心者でもこの箱根の激坂を登れてる自体凄いことなんだ…。」

「なんだ？この感覚…。多村と競争した時みたいな高揚感。なんだろう？身体の中からメラメラ燃える感覚。不思議なことに脚も痛くないし…心臓もバクバクしていない。体重がないようか感じだ。」

残り20m。山頂まですぐそこ。

「大地!!!!」

「光輝!!!! オレは絶対勝つ!!!」

そして、決着がついた。

「はっはっはっはっ…。きつ…。」

「脚が重い…。」

「お前の勝ちだ…。大地…。」

「勝っちゃったのか…。オレが負けたように思ったけど…。」

「いや…。お前の勝ちだ…。車輪一個ぶんの僅差だ…。完敗だよ…。」

「そうか…。箱根山を登ったのは2回目だったけど…。今回は…全力で回したから疲れたよ…。」

「前もこの箱根山の872m登ったことあるのかよ…。だから…初心者でも登れたのかよ。」

「そうだな…。それより…引き返そうか…。流石にこんなに一生懸命漕いだサイクリングは初めてだから…。疲れた。」

「このまま下ると小田原に行つてしまうから引き返すか…。」

山中と杉山の勝負は山中が勝利した。

夕方。沼津駅。

2人はそのまま沼津まで帰り近くのベンチに座りながら会話する。

「今日は楽しかったな…。久々にこんな勝負をしたから良かったよ…。」

「全くだよ…。お前が競争しようとか言うから余計に疲れたわ。」

「ははは。でも…良かったじゃないか!」

「悪くはなかったな。」

「一つ聞いていいか?」

「なんだ?」

「なんであの激坂を楽々と登れるんだ?一般人はヒルクライムの大会とか出てても…あの激坂を速く登れることは出来ないのだ。ある程度経験を積んでる人でなければ箱根

なんて登ることが出来ない。4カ月しか始めてないのにあそこまで登れるのは凄いだぞ。才能なのか努力して身についたのか…疑問に感じてたんだ。」

「オレは…大会に1回も出場したことがないんだ。実は1年間あの箱根山の激坂みたいな山が近所にあつてな。学校の登下校時はママチャリで通ってたんだ。多分…それかもな。」

「ママチャリでか!! あの激坂をか?」

「ああ。最初はきつかったけど…だんだん慣れてきて、このロードバイクを買う寸前ぐらいになるとスイスイ登れるようになった。ロードにしたらめっちゃ楽に感じたよ。」

「なるほどな…。そうゆうことか…。」

「ママチャリでこの激坂のような道を登っていたと思うと…ぞつとするよ。自然に鍛えられたということだな。」

「光輝。久々に会えて嬉しかった。まさかお前も自転車競技部に入ってるなんて…思わなかったよ。また…1週間後。インハイでまたあおうな。」

「おう! 最後に…お前はどこの高校だっけ?」

「沼津南高校だよ。また来週な!」

山中はそれだけ言って帰ってしまった。

「ちよっ……。大地。沼津南高校？ たしか……今年初出場の高校というのは聞いてたな……。どちらにせよ来週が楽しみだな!!」

杉山も実家に戻ろうとした時に、1人の青年が話しかけた。

「そのジャージは……。名古屋校の自転車競技部の方ですか？」

「あー。そうだけど……。君は……。」

次回話に続く。



## 第20話

## インターハイが始まる！

## 第20話

インターハイが始まる!!

あれから1週間後。

ついにインターハイ全国大会が始まる。

3日間で東京の大手町を南西方向に神奈川県を通り、箱根山を登り静岡県へ。そして、富士山を少し登り、山梨県の甲府方面に進み、東に向かってまた大手町に戻るコースである。3日間かけて走り総合優勝した高校が王者となる。それは、1日平均100kmの距離をロードバイクで走るため過酷なレースである。だからこそ、インターハイで優勝するために努力をし全力で走る。ただひたすら前に向かって走る。それが、ロードレースの面白さであるのだ。

AM 8時45分 大手町 スタートまであと15分

沼津南高校は出場する多村と佐々木、菅原勘太、北上と中嶋、山中はローラーを使ってアップを開始してた。補欠の菅原純太と熊野はマネージャーの2人と一緒に補給食やボトルの準備。出場する選手達のロードバイクの点検をしてた。全国から集まって

きた20校のチームも準備に取り掛かっていた。

「いよいよこの時が来ましたね。山中さん!」

「ああ。中嶋。頑張ろうな。」

「はい!!」

「純太。1日目のスプリントライン。絶対とつてこのレースが終わったらお前にグリーンゼッケンをつけてあげる。」

「兄さん…。僕達の夢を実現してきて!」

「ああ!! 絶対に実現させる!」

「ともちゃん…。頑張ってくるね。」

「頑張ってください! 多村君を誰よりも速くゴール出来るようにアシストしてください!! 期待しますよ! 佐々木君!」

「ありがとう。ともちゃん!」

「ああ。夏ってなんでこんな暑いんだろう…。こんな暑い時に走りたくないな…。」

「北上君。少し君に話したいことがあります。時間とつていいですか?」

「なんだよ! 多村!」

「今日は…山岳賞を狙いに行かないでください。チームを引っ張ってほしいです。」

「はくくあ?? お前正気か?」

「僕はいつでも正気ですよ。」

「ふざけんなよ! 誰よりも速く山頂をとりたいのがクライマーというもんだ。それはお前もわかるだろ!!」

「気持ちわかりますが…君が活躍する場は今日ではないと判断したからです。それは、箱根学園の美影良和に千葉県総北高校の大坂坂道、京都伏見の難波拓也、名古屋高校の杉山光輝といった強力なクライマー達が山岳リザルトを目指して登ります。なので…今日の山岳リザルトを目指して登ってもらうのは…山中さんです。」

「!!?」

「それは…… 大番狂わせを狙うためです。」

「大番狂わせ?」

「彼は今日までに公式試合に1度も出場していない。周りの選手達は無名な選手で実力もわからない。何より、ギャラリー達も山中大地が山岳賞をとれると誰も思わない。そこで、僕達沼津南高校の名前を知らしめるために彼を起用します。要するに起爆剤をつけるということですよ。ギャラリー達を味方につけて他の選手達に精神的なプレッシャーを与える。応援の力というのは結構デカイですよ。」

「なるほどな……。それで山中さんを山岳賞を狙いに行かせるというわけか。」

「あなたならあの人が勝負事になるとどうなるかわかりますよね?」

「……………。たしかにな!! 1日目の大事なこの山岳賞! 山中さんが適任かもな!!」

「理解してくれてありがとうございます。そろそろレースが始まるのでみなさんを集めてスタートラインに立ちますか。」

多村と北上は他の部員とマネージャーを呼び、今日のレースの詳細を話す。山中が山岳リザルトをとりに行くオーダーに関して誰も反対せずに起用した。そして、いよいよインターハイが始まるのである!!

その頃。箱根学園は…。

「みなさん。いよいよインターハイ全国大会が始まりますよ。狙うのは総合優勝。箱根学園の名を恥じない結果を残してくださいね。」

「わかりました。宮崎君。」

「そうそう。桐谷君はグリーンゼツケンをとってきてね。期待してるよ。」

「わかってますって。」

桐谷英二。箱根学園3年生のエーススプリンター。彼は神奈川県大会2位の実績を持ち、全国に知られている強力なスプリンター。彼ね別名は『ダイヤモンスピア』

「ちなみに桐谷君。君も知ってる選手がこのスプリントラインで競うことになる。」

「ツインスプリントか。」

「そう。しかし、あの双子の兄の方。君なら彼がどれぐらいの実力があるか。わかるよね？」

「わかってるさ。グリーンゼッケンはオレのものだからな。誰にもとさせない。」

「頼みますよ。」

宮崎は桐谷の肩を叩いてスタートラインに向かう。他の選手達も行くのである。

その頃。総北高校は…。

キャプテンの大坂坂道を筆頭に他の選手達に鼓舞をふるっていた。

「目指すは…総合優勝!! 5年ぶりの総合優勝を目指して頑張るぞ!! 今年の俺たちは強いぞ!! 最強で最強なメンバーが揃ってる!あの地獄の合宿を乗り越えてきた君達なら出来る!! 行こうぜ! インターハイ!」

「おー!!!」

京都伏見では…。

キャプテンの嵐山慶喜。彼は関西では負けなしのエース。その名を聞いた物は怖気ついちゃうぐらいの強者である。別名は『負け知らずのエース』

「僕達の関西魂を見せる時が来たな。行くで。京伏の底力を見させるで!」

「そうだな。慶喜! お前なら1日目のゴール1番でいけるで。」

「そうプレッシャーをかけんなや。家斉。」

彼は菊川家斉。彼のエースアシスト。この2人は親友であり、ゴール争いでは負けなし。ついた別名は『関西一の運び屋』

名古屋高の杉山光輝は山中を探しに見回してた。山中を見つけた杉山は声をかける。

「1週間ぶりだな。大地。」

「そうだな。光輝。」

「今日の山岳賞争い。リベンジの時だね。」

「ああ……。そうだな……。」

「どうした? 大地。まさか…怖気ついてるじゃねーのか? 」

「そんな訳ねーよ。緊張してるだけだ。」

「そりゃそーだな! 年に一回のインターハイ。緊張してもおかしくない! オレも緊張してるからな! 」

「そうだよな。お互い頑張ろうぜ…。」

その時。多村が山中の肩を叩き話す。

「山中さん…。杉山さんと知り合いなんですか? 」

「知り合いというより友達だな。」

「そうですか……。……。」

「急に黙ってどうした？」

「いや。なんでもありません。今日の山岳リザルトはよろしくお願いします。」

「おう。任せろ。」

「まさか…。山中さんの友達が杉山光輝とは…。彼は全国レベルのクライマー。今日の山岳賞争いを山中さんに適任して良かった。しかし、困ったことになったな。宮崎さんの情報網に山中さんのデータがインプットされてないか。あの人のことだからやりかねない。正直…。このインターハイはあの人のためのインターハイになるのではないか。その点を確かめる良い機会でもある。」

「おーい!! 多村!! そろそろ集合だつてよ!!」

「ああ! 今行く!」

「高校生自転車競技部全国大会男子の部。インターハイ全国大会がまもなく始まります。選手はスタートラインについてください。」

沼津南高校自転車競技部は初出場の高校のため最後尾からのスタートになる。先頭にいるのは箱根学園。2番目に総北高校。9番目に京都伏見。15番目に名古屋高校。20番目は沼津南高校である。全国から集まった強豪校同士の戦いが始まる。

「始まる前に…。山中さん。ハイタッチしていいですか？」

「なんだよ。急に。」

「あなたと出会って2人から自転車競技部は始まり、部員やマネージャー、顧問も加わり、予選大会を突破して…今ここにいます。それは…山中さんのおかげなんですよ。みんなはあなたについて来たから全国の舞台に立てる。だから…感謝します。」

「オレはそんな大したことやってないし…感謝されるあれもないと思うけど…でも、自分は今ここにすることが奇跡だと思う。周りの支えがなければこの場にいないと思う。だから…感謝するのはオレの方なんだ。お前が自転車の世界に連れてくれたからオレの世界も変わった。全国大会に出場するなら優勝するしかないっしょ!! 中嶋!!」

「はい!!」

この2人のハイタッチとともにインターハイが始まるのである。



## 第21話 最速！最強！

インターハイ全国大会が遂に開幕。3日間かけて東京の大手町から神奈川、静岡、山梨を通り大手町に戻るコースである。総合距離は約350km。この距離を3日間かけてロードバイクで走る。3日目の大手町のゴールに一番先に着いたチームが総合優勝になる。この過酷なレースを走ることが出来るのは難しい。全国の強豪校達はこの3日間を完走し、優勝を目指すのである。

その1日目のコースは東京の大手町から東海道を神奈川県横浜や、湘南海岸、小田原の長い平坦道走り、小田原から箱根山の山頂を登る。山頂を過ぎるとすぐ芦ノ湖があり、1日目のゴールがある。1日目のポイントは長い平坦道でどれだけ速く走れるか。そして、標高872mある箱根山をどう攻略するか。1日目の優勝を目指して各高校の選手達は走る。このインターハイは1日目のスプリントラインを速く走った選手が所属するチームは先頭で集団をコントロールすることが出来る。コントロールすれば優勝する可能性が高くなるからだ。だから、この1日目のスプリントラインは各高校の最速屋を出すのである。それぐらい最初のスプリントラインは大事な場面である。

そこで、沼津南高校はエーススプリンターの菅原勘太を出す。

「そろそろパレードランも終わり各高校のスプリンター達が出ます。勘太さん! よろしくお願いします!」

「ああ。任せろ。一つ質問いいか?」

「なんですか?」

「今日のスプリントラインは横浜だよな。」

「はい。」

「そのあとは湘南海岸を通り小田原までの長い平坦道。ここでは誰がチームを引くんか?」

「中嶋君に引いてもらいますよ。」

「え?多村。正気か?」

「正気ですよ。」

「クライマーの彼を何故…長い平坦道を走らせるんだ。アホか?」

「中嶋君。行けますよね?」

「ああ!! 行けるさ!」

「おい。中嶋。コイツになんか弱みでも握られてるのか?」

「いえ。そんなんじゃないですよ。勘太さん。安心してください。あとで見せますから」

…。話しているうちにパレードランが終わっちゃいましたよ！各高校のスプリンター達が動いてますよ！勘太さん！行っただ方がよろしいのではないですか!!」

「あつ…。オレとしたことが…。多村。オレがこのスプリントラインを走ってきたら理由を聞かせてもらう。行ってくる!!」

山中が勘太の肩を叩く。

「勘太。純太のために必ずグリーンゼッケンとつてこいよ。約束だからな。」

「ああ!!」

山中は勘太の背中を押した。

勘太は先頭にいるスプリンターを追いかける。勘太は各高校のスプリンター達を次々と抜いていく。

「なんだあいつ！ 最後尾の沼津南高校のスプリンター！ クソはえー!!」

「追いつけねー!!」

その時。勘太の横に宮崎浩輔が近寄る。

「あれれ…。？ あなた一人で先頭に追いつくつもりですか？」

「宮崎！ テメエ！」

「なんであなたが一人で走ってるんですか？ ツインスプリントで有名なあなたが…弟君無しで走ってるなんて珍しいですね。」

「うるせー! お前は引っ込んでろ!」

勘太は宮崎を置いていこうとするが…宮崎は勘太に引っ付いてくる。

「お前。オレをブロックする気か。それとも…お前がこのスプリントラインを走るのか?」

「いや。ブロックする気もないし…スプリントラインも狙いにいきませんよ。少しあなたと話したかっただけですよ。元箱学のエーススprinter候補さーん w w  
」

「てめっ…!!」

「それに…ウチからは桐谷君がスプリントラインを目指して走ってるので。パレードランが終わったらすぐ行きましたよー w 僕たちが先頭にいたから今頃もう遙か先に走ってるかもねー w w  
」

勘太はその言葉を聞いた瞬間に加速する。勘太の背中を見ながら宮崎は笑っていた。

「ははは!! 落ちこぼれのスprinterがああ桐谷君に勝てる訳ないじゃん!! 後ろでゆっくり脚を休めたほうがいいのにな!! あ桐谷君はあなたがいた時とは違いますから。桐谷君の方が実力は上だよ。」

勘太はひたすらペダルを回し先頭にいる桐谷を追う。しかし、なかなか先頭が見えな

い。

「くそ!! 8割ぐらい力を使っても追いつけない…。あの桐谷さんが…。ここまで速くなつてるとは思つてもいかなかった!」

勘太がまだ箱根学園に所属してた頃の話になる。

当時の箱根学園は部員が100人を超えており、その中でインターハイメンバーに選ばれるのはごくわずかであった。勘太が高校1年の頃は純太と同様に将来有望なスプリンターとして先輩から賞賛されていた。

「菅原兄弟! 早すぎだろ!」

「1年と思えないあの走り! こりゃ! 2年後か…いや…1年後にはインターハイメンバーに選ばれるんじゃないか!」

当時は菅原兄弟は新人戦で勘太が1位で純太が2位と優秀な成績を残していた。

「今回の新人戦! 1位と2位おめでとう!」

「部長。ありがとうございます!」

「それと…宮崎! 3位おめでとう! 新人戦で箱学の1年がワンツースリーで入賞!

これは前代未聞の快挙だ! 3人ともよくやった!」

「ありがとうございます!」

「兄さん! やったね!」

「……………」

「おい! 桐谷! こいつらに表彰状を渡してやれ!!」

「はい!」

当時の桐谷英二はインハイメンバー候補でもなく…チーム内で最弱な方であった。これといった成績も残してもいなく…ただ箱根学園の自転車競技部に所属してるといふ感じであった。

桐谷は3人の表彰状を渡した。

「3人ともおめでとう。」

「桐谷さん。ありがとうございます。」

「先輩! ありがとうございます!」

「ありがとうございます。」

「よし! お前らもあの3人に負けないように日々精進しろよ!!」

「はい!!!」

この日の練習後。箱学の部員達は自分達が着ていたジャージを桐谷に渡す。

「おい! 洗濯当番! 今日もよろしくな!」

「桐谷! これ! 洗濯しといて。」

「……はい。」

そう。彼はチーム内では洗濯係であった。

桐谷は1人で渋々と洗濯機にジャージを入れて洗濯を開始する。

「くそ!! なんで……。オレが洗濯係にならなきゃいけないんだ! おれだって……。インハイに行きたい! けど……。あの1年の3人が新人戦でワンツースリーで入賞したら:オレにインハイに行けるチャンスなんかないじゃないか! オレは:なんのために箱学に入學して自転車をやっているのか:わからなくなってきた……。もう……。やめようかな……。毎日のように洗濯係やらされて疲れた……。」

「桐谷先輩! まだ残ってたんですか?」

「なんだ……。宮崎か……。洗濯物なら預かるよ。」

「洗濯係になってるんですか!?! 初めて知りましたよ!」

「洗濯係だよ……。入学してからですつとな!」

「そうなんですか! ははは!」

「おい。オレをバカにしに来たのか!」

「いやいや! バカにはしてませんよ! ただ:あなたに丁度いいやと思っちゃいました!!」

「なんだと？」

「ちなみに：桐谷先輩はインターハイに出たいに思いませんか？」

「出たいさ!! 洗濯係なんてやりたくない! オレはこの箱学で自転車がやりたくて入ってきたんだ!!」

「そうですよね…。なら…。あなたがインターハイに出場出来るようにしましょう! 僕が!!」

「どーやって!!」

「僕があなたを鍛えさせる。それだけですよ! やりますか? やらないですか?」

「オレがお前の指導を受ければインターハイに出れるんだろうな?」

「その点は保証しますよ。その代わり：あなたがずっと洗濯係になつてた事実を顧問に言っちゃっていいですか? それが：僕があなたの先生役になる条件ですね。」

「ああ! チクツてくれ! それで来年か再来年にインターハイに出れるようなら何でもするさ!!」

「そうですか。なら。交渉は成立ですね。」

それから桐谷は宮崎と共に特訓をするようになった。宮崎が顧問に桐谷が今まで洗濯係をずっとやらされてた事実を話した。この事は知らなかったという。桐谷にずっと洗濯を押し付けていた部員は1カ月間部活に顔を出すことがなかった。



そんなある日。

「桐谷さん……。菅原兄弟に勝ちたいと思いませんか？」

「あの菅原兄弟か……。同じスプリンターだから……。勝ちたいな。」

「なら。僕が次の大会であなたが勝てるようにしますよ。」

「そうか！ 頑張るわ!!」

「では……。そろそろ練習に行きますか。」

「ああー!」

結果的に桐谷が出場した大会は菅原兄弟が途中で落車をし……。他のチーム達も集団落車 that 起きたため……。初優勝を果たす。

「残り2キロ……。そろそろ横浜だ……。」

勘太はついに先頭で走っていた桐谷をとられた。勘太は更に加速し一気に距離を縮める。

「来たか。菅原。」

「桐谷さん……。お久しぶりです……。すみませんが……。お先に失礼します……。」

勘太は更に加速したが……。桐谷はついてくる。

「待てよ。菅原。少し話そうぜ!」

「グリーンゼツケンをとってくるので…邪魔しないでくださいよ。」

「この人に構ってる時間なんてない。残りの1.5km! 全力で走ることだ!!」

「うおおお!!!」

勘太はダンシングをして桐谷の差を開く。しかし、また桐谷が追いつく。

「息が上がってるね! 最後尾から先頭まで全力で走ってきたから疲れが溜まってるんじゃないのか!!」

「オレの今の状況をわかってる…。この人はこの1年間で何があつたんだ…!」

「お前が本気出すなら…。オレも本気だそうかなー。ちなみにオレ…5割しか力使っていないから。オレの別名…。何か知ってる? ダイヤモンドスピアだよ!!」

桐谷は鋭い槍が一直線に突進するかのように空気抵抗がないかのように力強い走りをする。その様子を見た勘太は驚きを隠せなかった。

「なんだ…。この異様な走り方は…。しかも…すごい速い…。1年間でこんな走りが出て来るとは…。相当練習したんですね…。桐谷さん!」

「負けてたまるかよ!!」

勘太は更に加速し、桐谷を更に縮める。

「ははは! 必死だね! もう限界だろ!! 今はおれが最速で最強なんだよ!」

「くそっ…。なかなか縮まんね…。残り1km…。少しでも縮まらないと勝機がねー!!」

「勘太は必死にペダルを回すが…差は縮まるどころか…開いていく。勘太は最後尾から先頭の桐谷まで全力でペダルを回していたため脚に痛みがきてた。」

「くそ…。ここまではかよ!! あと少しだったのにな…。正直もう限界だ…。」

勘太は気持ちが悪く弱っていたせいも失速。前に走ってた桐谷は勝利を確信する。

「菅原は落ちた!! オレのスプリントを見て諦めたか!! オレは…このインターハイに出るために必死に練習し努力した!! オレがお前に勝った日からオレは注目されるようになり…それからは更に更に練習した!自分が強くなっていくのが快感に思えた。こうしてインハイの初日で先頭に走っている。それは!! オレが1番最強のスプリンターという証だ!」

「純太…。大地…。すまん…。オレはもう限界だ…。力が入らね…。」

その時。沿道に純太が叫んでいた。

「兄さん!!! ここまで諦めるな!!! まだ行ける!!!」

純太は手を差し伸べて勘太は純太の手をタッチする。純太の手に温もりを感じた。まるで…勘太の心のタスキのように。

「…………… 純太!! 兄ちゃんは…バカだな…。まだ決まったわけでもねーのに…諦めて

た。諦めたらそこで終わりだよな…。オレは…。ここで諦めるような男ではない!!  
まだ行けるぞ! 菅原勘太!」

「残りの500m! 限界突破でペダルを回して必ずグリーンゼツケンをとってくる! 純太!! 大地!! 菅原勘太の底力を見せてやるよ!! 動け! 俺の脚!!」

勘太は更に加速。100mも離れていた差を縮めるために限界に近い脚を全力で回す!

「見てろよ!! 箱学! お前らに絶対グリーンゼツケンを渡さない!!」

「このまま行けば俺の勝ちだ! 念願のグリーンゼツケン!! この時のためにオレは人の5倍ぐらい練習してきた!」

後ろから車輪の音が聞こえる。桐谷は後ろを向いた。

「来たか…。菅原。そう簡単に勝たせてくれないか…。ならば…。蹴散らすだけだ!」

「追いついたぜ!! 桐谷さん!!」

1日目のスプリントラインまであと200m。勘太と桐谷の最期のスプリントライ  
ン対決が始まる!

「オレは…。インターハイに出るために必死に努力した! そして! 今ここでお前とス

プリントラインを賭けた勝負をしてる！ 気持ちが高ぶるね！！」

「オレは誓ったんだ……インターハイの初日にプリントラインをとって純太にグリーンゼッケンをつけてあげると！オレが沼津南高校のエーススプリンターだ！！」

「オレが勝つ!!!」

「絶対に勝つ!!!」

両者のプライドを賭けて残りの数十m走る！

そして、決着が着く。

「インターハイ1日目！ 最速でスプリントラインでゴールした選手は204番！沼津南高校菅原勘太選手です!! 2位の桐谷英二選手とは0.5秒差です!!」

「はっはっはっ……。やったぞ……。やったぞ!! 純太!!!」

「そんな……。嘘だろ……。オレが……負けた……。そんなバカな!! オレが先にゴールしたはずだ!! 認めない……。認めないぞ!!」

「桐谷さん……。ようやくあなたとゆつくり話す時が来ましたね。あなたが負けた理由を教えます。それは……想いです。」

「想い……。どうゆうことだよ!」

「僕は仲間の想いを背負って走っていたからです…。何より…気持ちで負けなかった。」

「気持ち……。仲間の思い……。そんな物でオレに勝てた……。そんなのオレの辞書に存在しないんだよ!!」

「いつも洗濯係だったことは知っています…。それに…あなたが去年の秋の大会で優勝した後に貴方の態度は変わってしまった!憎しみと復讐にしか感じなかった。今までオレのことをバカにしてた部員達に見返すかのように。」

「お前に何がわかるんだよ……。オレがこの一年半洗濯係にされて…どれだけ辛かったことか!! 入学した時から…先輩に期待されてたお前に… オレの辛さがわかるのかよ!!」

「僕には貴方の辛さはわからないかもしれない。しかし、あなたは…洗濯係でいた時は誰よりも優しく…困っている部員がいたら励ましていましたよね…。あの頃の貴方は…今より素晴らしいものを持っていた。力を得たかわりに…失ってしまった貴方の心!!」

「心……。? そんなもんは捨てた!インハイに出るならどんな手段を使ってもチームメイトを蹴散らす。そんなんじや…お前みたいな才能あるヤツに勝てないてわかったんだよ!! お前と話してたらイライラしてきた。自分が勝ったからって…敗者に話

しかけるんじゃないよ…。今回は…お前の勝ちだ…。あと2日もある。次は勝つからな。」

「最後にこれだけ言わせてください。桐谷さん。貴方の心の底に眠ってる優しさは無くさないでください。」

「ちつ…。いちいちうぜーんだよ。」

「このスプリント勝負の結果は山中達に伝わる。」

「勘太…!!!」

「勘太さん！ やりましたね！」

「やっぱすげーよ！ 勘太さん！」

「勘太さーん！ さすがですね！」

「勘太さんのおかげで集団の先頭に行けます。では皆さん先頭に行きましょう。」

沼津南高校は最後尾で走っていたが…勘太がグリーンゼッケンをとってきたことで…集団の先頭で集団をコントロールすることが出来る。沼津南高校の後ろに走るのは箱根学園である。

「あらあら…。最後尾にいた沼津南高校さんが僕たち箱学の前にいるなんてありえないでしょー。」

「宮崎さん。これはこれで良かったのではないのでしょうか？」

「俺たちが…山岳区間に入るまでにこの集団の先頭にいるのも…疲れるしね。ま。良いでしよう。しばらく休ませてもらいますか。」

「しかし…沼津南高校の6番の選手…。僕のデータベースにないけど…どーゆうことかな？ 多村ー!!!」

沼津南高校は勘太の活躍により、優位なポジションをとることが出来た。そして、小田原までの長い平坦区間に突入する!

次回話に続く…。



## 第22話 波乱な展開!

### 第22話 波乱な展開!

沼津南高校達は戸塚あたりを走っている。後ろには箱学や総北、京伏といった強豪校達が集団の中にいる。菅原勘太がスプリントラインをとってきたおかげで：沼津南高校は先頭で集団をコントロールすることが出来る。

そして、各高校の役目を終えたスプリンター達は集団の中に加わるのである。そこには：グリーンゼツケンをとってきた勘太の姿が見えた。

「勘太!! 良くやったな!!」

「大地!! 僅差で箱学のスプリンターに勝った。しかし：最後尾から先頭まで全力でペダルを回して疲れた…。純太と違って長距離を同じ速度で走れないからきつかった。日々練習してきた成果が出たから良かった。」

「そうか。いつかは…一人でゴールをとりにいけるようロングライドの練習してたからな。練習したことは無駄じゃないな。」

「そうだな。」

「見たか!! 箱学!!」

「誰かと思えば…中嶋君じゃないか。」

「めっちゃ久々ですね。宮崎さん。」

「あれ？君は予選大会に出なかつたよね。君のデータは把握してるから問題無いけどね。」

「あんたさー!! オレと勝負しないか？ 小田原の長い平坦区間まで!! オレは宮崎

さんと1度だけ勝負したかつたんすよ!!」

「はい？ 僕は箱学の1番ですよ？ あなたにはこの1番の意味がわかりますよね？」

「あつたりまえよ！ それはあんたが1番をつけてるだけだろ！」

「ははは!!! キミは面白いねー!! 気に入ったよ！ キミのその無謀さに w」

「おい！ 中嶋！ こんなヤツの相手になるな！ しかも…お前はクライマーだろ！」

「勘太さん…。僕は…多村からオーダーをもらつてるんすよ。僕だけに!! それを今実

行するんすよ!! いいよな！ 多村！」

「許可します。しかし…勘太さん。あなたも一緒に走つてください。」

沼津南高校達は驚く。

「おいおい…。勘太さんが今グリーンゼッケンをとつてきて疲れが溜まつてるのに…休

む時間もなく走らせるのかよ!! それはいくら勘太さんでも厳しいんじゃないか!

「よせよ。北上。やらせてくれ! 多村!!」

「わかりました。そのかわり箱学から1人だけかメンバーを選んでいいですよ。」

「僕1人で行くからいいや。ここでみんなの脚を使わせるのもあれだし。僕は今日活躍する場所がないから少し運動してくるか。ここは谷中君。キミがチームを引つ張ってもらっていい?」

「わかったよ! 暴れてこいよ!」

「ありがと〜ね!! 頼みますよ。」

「2対1でハンデがあるんじゃないか。」

「あらら。君わかつてるね。勘太くん!!」

「てめえ!! オレはお前と戦う時を待ってた!! それが今だからだ! だから…勝負だ

!宮崎!!」

「ははっ。何が狙いか知らんけど…。僕は勝つからね。」

「中嶋くんに元スプリンター君か…。こりや波乱な展開になりそうだね。」

「では…行きしようか!! 勘太さん!」

「ああ!!」

「ぶははははは!!!」

中嶋と勘太、宮崎は飛び出す。

「多村！　なんで2人も行かせたんだよ!! 4人で後ろの集団をコントロールするなんて  
敵しいでしょ！」

「たしかにそうですね。しかし…箱学も僕達と状況が一緒ですよ。僕はこの勝負を何故  
仕掛けたか。キミは気づいてるかな？　先頭に走っていたスプリンター達に1人この  
場にいないことを。」

「……!!　まさか!!」

「そのまさかですよ。」

「僕が引きますよ！　勘太さん!!」

「無茶はよせ。」

「何言ってるんすか？　勘太さんはさっきのスプリント対決で疲れてるので…湘南海岸  
に入るまで休んでくださいよー。」

「クライマーのキミが…僕を止めるなんてムリだろーね。」

「宮崎さん!!　僕はあなたみたいな大物と対戦すると燃えるタイプなんですよ!!」

「そうなんですかー。　ww　ここは平坦が多いコースなのに…キミがこの勝負に挑む  
なんて…意外ですねー。」

「僕が…湘南海岸まで競争を挑むか…それはこの区間は坂道が少しあるんでね！　海沿

いの道になるとほぼ平坦道になるんすよ！」

「なるほど…。多村君が君を起用した理由がわかったよ。しかし…僕はね…平坦も坂道もこなすオールラウンダーなんですよ。それに…箱学のエースナンバーの僕に…勝てると思うんですか？」

「そんなあなただからこそ！ オレは挑みたいんですよ！！」

「面白いなく。気に入った！ 己の無謀さを知るがいいよー w w」

その時。後ろから見慣れた黄色いジャージ姿が3人を抜く！ 千葉県代表の総北だ。3人はすぐに反応し宮崎は総北に話かける。

「やはり来ましたかー。あなた達も。」

「久しぶりだなー!! こうすけー!!」

「キミはいつも僕達を困らせる。やつかいだねー。門倉くーん！ 真中くーん！

」

総北高校3年のエーススプリンターの門倉翔。彼は箱学のエーススプリンターの桐谷と実力は同格であり、千葉県の大大会では良い成績を残しており、関東大会では桐谷と1位と2位を争う。

「宮崎君。この先に桐谷が先頭に走ってるんだろ。だから…追ってるんだよ。」

「そうだよー。しかし、なんで君達のエースと2人で先頭に追いつこうとしてるの？」

君達がスプリント対決を仕掛けないことは凄く気になってたけど……どうゆうことかな  
く? 総北さんよー!!」

総北高校2年生でチームのエースを任されている真中勇気。彼は宮崎と面識があり、小学生の頃からライバル的な存在である。

「こうすけ! 俺たちはキャプテンの大阪さんを筆頭に史上最強の総北を築き上げた。打倒箱学を目標に今まで練習してきた! 王者奪還してやるさ!」

「勇気君。キミとは10年の付き合いだ。君達に負けるような箱学じゃないよ。キミはいつも僕と同じ場所にいる。王者奪還したいならやってみなよ! 総北さんよー!!」

「言われなくてやってやるさ!」

「そろそろお話は終わりにして……行きましようか!! 沼津さんと総北さんよ!」

「行きますよ! 勘太さん!」

「行くぞ! 中嶋! 前にいる桐谷さんに追いつくぞ!」

「見せてやりますか! 勇気さん!」

「翔! こうすけに負けない走りをしてくれ!」

「やれやれ……面白い展開になりましたが……僕は……君達に負けるような一番ではない!!」

最初に仕掛けたのは総北。翔は後ろのエースを連れて先頭で単独に走っている桐谷を追う。それにつられて宮崎も総北と並ぶ。しかし、中嶋と勘太は彼らと差が開いてしまう。

「中嶋!! やつぱりクライマーのお前にはこのオーダーは無理だ! 多村は何を考えているんだ!! ここはオレがいかないとやばいだろ!!」

しかし、中嶋は勘太と違って冷静であった。

「勘太さん…。このオーダーを志願のは…僕なんですから…。」

「お前…! 何故! このオーダーを受けた! この状況は佐々木か大地が適任だろ!」

「多村はこんなことを言っていましたよ! ゴールを狙いにいけてよ!」

「!!!???  
」

「多村はきつと…集団をコントロールして1日目を終わらせるつもりなんすよ! それ…勘太さんがスプリントラインをとってきてから急遽変えたオーダー。本来なら山岳賞は山中さんにとらせる予定でしたがね…。何故…クライマーにスプリンターがこの場にいるのか。少し考えて見れば勘太さんならわかるはずですよ!!」

「……！ 今前に走ってるスプリンター2人に箱学と総北のエース。中嶋。そーゆうことか……！」

「勘太さんならすぐ理解すると思いましたがよ!!」

「中嶋。前の合宿の時みたいに平坦で少し走ってくれないか？ お前が引いてるあいだに……オレは脚を休ませてもらう。」

その頃。多村達は……。

「多村！ 総北の2人が後ろから飛び出して……追わないつもりかよ！ あれからだいぶ時間が経ってるぞ!!」

「追うつもりはありません。むしろ……好都合ですよ。」

「どこが……好都合なんだよ！ しかも……前には箱学と総北のエースが走ってるんだ！」

「この山岳区間を単独で走り一日目の優勝なんて……あり得るんだぞ!!」

「北上くん。この場にいるメンツだけで4人でゴールに行けると思いますか？」

「クライマーにオールラウンダー3人でいけるでしょ?」

「いや。この状況で出来ないと思います。このまま集団をコントロールすればどーなるか？ 君ならわかりますね。」



「……!。お前……。そーゆうことか!。」

「わかつていただけましたか。」

「だが! この作戦は一か八かだぞ!。」

「ええ。覚悟は決まっていますよ。」

「なあ〜? その話。ワイ達に引き受けてくれないか?。」

多村は後ろを向いた。そこには京都伏見の嵐山と菊川がいた。

「あなたは…京伏の嵐山さんと菊川さん。僕達の話聞いてたんですか?。」

「せやよ! おたくのエーススプリンターさん! 速いですわー! 予想外でした

!こりや参りました。」

「家斉。挑発してはいかんわ。あんたらの企みは予想はできる。しかし…このままあんたらの思う通りにいけるとかぎりらんわ。ここは…協調するというのはどうや? 沼津

南さん。」

多村は少し沈黙するが…即決であった。

「わかりました。協調しましょう。あなた達も打倒箱学という目標は一緒ですもんね。」

その話を聞いてた箱学の谷中が集団を抜けようとしたが… 嵐山が止めに行く。

「箱学さん。すまんが……。あんたらに勝つ為にワイ達は練習してるんや。邪魔はさせんよ!!」

「邪魔だ!! どけよ!!」

沼津南と京伏が集団をコントロールする。しかし、それに反対したのは北上である。

「多村!! 勘太さんがとってきてくれたこのポジションを無駄にする気かよ!」

「無駄ではありませんよ。集団の先頭にいるだけでも勘太さんの役目は果たしてまよ。」

それに……ロードレースでは臨機応変に対応しなければならない。それはキミもわかるはずですよ。最良な判断だと思えますから。」

「ほな。そーゆうことやつて。ちっちゃい人〜。」

「ちっちゃい人じゃな〜い!!」

その後。宮崎は桐谷と合流し総北と箱学の平坦区間の勝負が始まる。しかし、小田原の市街地までお互い並走する。4人は箱根の山に突入するところに来た。

「桐谷君。お疲れ様よ。ここまで単独で走ってきてどんな気分だった?」

「湘南の海風が気持ち良くて最高よ! しかし……アイツに負けたのは悔しいんだよな〜!!」

「全くだよ!! まっ。でも…キミは良い仕事をしてきたから良しとするか。ここからは…山岳区間だ。キミはゴール前まで脚を休めてほしい。一日目のゴールはキミに託したいが…行けますか?」

「どーゆうことだ?」

「僕たち…はめられたんだよ。この状況を多村純太郎の作戦にね。」

「はめられた?」

「沼津南にはクライマーとスプリンターが後ろで走っている。そして、はるか後ろで集団をコントロールしてるのも沼津南。僕が言いたいの…集団をコントロールしてるということ…は…後続で走る選手達は彼らより先に行けない。もちろん…箱根のあの4人もね。つまり…総北の2人に僕達。そして、沼津南の6人で箱根山を超えた先にあるゴール争いをする。僕が何を言いたいか…キミにわかるだろ?」

「こつちには…美影や今泉という優秀なクライマーなしで箱根を登らないといけない! あんたが山を登らないといけないのか!」

「そういうことです。つまり…最悪な状況というわけ。しかし…諦めるのはまだ早いですよ…。」

「あんたが次言いたいことは…山を登り終えた後のダウンとゴールまでの平坦を走り…オレが一日目のゴールをとりに行けということだな!」

「ビンゴ!! それは総北も同じ条件。そして…沼津南は元スプリンター君が今日のゴール争いに絡むということだ!!」

「ははは…。そりや…。面白いわ…。こんなに早く菅原とリベンジする時が来るとは…思ってもいなかったよ…。うけてたとう!!箱学の4番を背負って走ろうではないか!!」

箱学の2人を盗み聞きをしてた総北の2人。

「だつてよ! 勇気君!!」

「どんな状況であろうが…やることは変わらないよ。打倒箱学のためにどのチームも必死にやつてきた。ならば…5年前の奇跡の総合優勝を果たそうではないか! むしろ…やる気になりましたよ。翔! 1日目のゴールをとつてきてください! オレはお前を箱根の山を登つて引つ張つてやる。ついて来てください!」

「おうよ!」

「こうすけー!! お前らに行かせてたまるかよ!!」

「君達と張り合うなんて…面白いですね!」

「俺たち総北はこのために練習をきて来たんだ! こうすけの好きにはさせない!」

「勇気! 山岳区間は頼むよ!!」

「しかし…あの子来てないね…。なんだけ僕達を煽つといて来ないなんて…。それに…」

元スプリンターの彼も……」

「菅原か……。アイツは……スプリントラインをとった時には脚が限界だった。あいつは……弟と違ってゴール前の数キロで真の力を発揮するタイプだ。インハイの1日目の長い平坦区間で彼が単独で走ることは出来はしない。もちろん……この場面で彼がここに來ることも不可能だ。箱学にいた時から知ってたぞ。」

「キミはそのまさかを……信じないのかい？」

「まさか……。そんなことは出来るはずは……。」

その時。菅原と中嶋が土壇場で4人に追いつく！

「待たせたな……！ 箱学と総北！」

「こんな……凄い人達と勝負出来るなんてワクワクしますわ！ 山岳勝負!! どこが制するか楽しみで仕方ないっす！」

「全く……君達は僕達の邪魔をしてくる……。厄介な敵だな!! 残念だけど……箱学のホームグラウンドである箱根の地で負けるような俺たちではない!!」

「宮崎！ 桐谷さん！ そして！ 総北の門倉さんと真中さん！ 沼津南高校の底力を  
見せてやる!!」

打倒箱学のために集団をコントロールする沼津南と京都伏見。そして、先頭で走る6  
人の激闘が箱根山で開始する。

次回話に続く…。

## 第23話 箱根の勝負!!

### 第23話 箱根の勝負!!

小田原までの平坦道まで先頭集団に追いつく中嶋と菅原勘太。先頭には箱根学園の2年で主将を務める宮崎浩輔とエーススプリンターの桐谷英二。総北高校3年のエーススプリンターの門倉翔と2年のエースである真中勇氣。箱根の山岳区間を競うことになる。

後ろの集団をコントロールする沼津南高校と京都伏見高校。この2校が集団を引つ張ることにより沼津南はポジションを現状維持することが出来る。新たなオーダーを多村が出す。

「そろそろ山岳区間に入りますし…クライマー達は前で引つ張ってほしいと思います。僕達オールラウンダー組は後ろから各高校のクライマー達が出ないようにブロックします。京伏さん達も出てください。」

「ああ。わかったわー！岸と若林!! 山岳区間はオレらを引いてくれや。万が一なことが起きたら…阻止してこいよー！それで…沼津さんは誰が引くん？」

「こちらからは…北上君と山中さんを出します。2人は優秀なクライマーなんで。」

「そりゃ！ 安心やな。わいらも関西では名が知れてるクライマーや。岸！ 頼むで！」

「慶喜！ 任せろや！ こんなデカイ大会で大暴れ出来るやんて胸が高ぶるわ！」

彼は京都伏見3年の岸吉宗。関西では1番のクライマーとして名が知られている。そのスタイルはシンプルで息も切らすこともなく…傾斜がある坂道でもスイスイ登れる。天性のクライマーである。

「あなたのことは知ってますよ！ 去年のインハイに出場していましたね！ 2日目の山岳賞とって凄かったですよ！」

「見にきてくれたんや！ おおきに！ 君は…沼津南のエースクライマーなんやつて？」

「そうですよ！ あなたと一緒にインターハイで走れると思ってもいなかったですよ！」

「そりゃ良かったな！ しかし…今年の京伏は慶喜や家斉を筆頭に良いチームになったで。あんたらのチームは初出場でありながら予選大会で単独で優勝したと聞いたとる。そのチームが団体のデカイ集団を引いとる。こりゃ…凄いチームやな…。なんか秘訣でもあるん？」



「岸！ お話しはそこまでにせいや！ そろそろ山に入るで！ そろそろ準備せなあか  
んやろ。」

「すまん！すまん！ 今日のレース終わったらゆつくり話そうや！」

「時間があつたらですね…。」

「北上君。山中さん！ 前に出てください！ 後ろは任せてください！」

「任せろ！ 多村！」

「なあ！ 多村！ 一つオレのワガママを言っつていいかい？」

「山中さん…。なんででしょうか？」

「オレがこの山岳賞をとりに行く！ 勘太がグリーンならオレはレッドをとりに行くよ  
！」

「それはダメです。さつきも言いましたが…この集団を引いてコントロールしないとい  
けない状況。もし…あなたがこの場にいなくなると北上君の負担が大きい。3日間を  
350kmを走るインターハイ。配分を考えて3日間を走破しなければならぬ。こ  
のチームは誰1人も欠けてはいけませんよ。特にあなたはこんなところでリタイ  
アなんかされたらたまらないです。」

「それがどーした？」

「どーゆうことですか？」

「多村は気づいていないのか？オレの後ろにくつついてるヤツがいるんだ。なあ…。光輝!!」

「バレてたか…。 大地!!」

山中の後ろについてたのは杉山光輝。彼は山中とこの山岳賞勝負を挑むために沼津南の後ろについていたのである。

「なるほど。そーゆうことですか。山中さん。しかし…それでも許可はしません！あなたの役目は今日じゃない！」

「沼津南高校の多村純太郎君。キミのことは知ってるよ。キミの実力は勿論だが知的なプレイヤーというのも知ってる。しかし…思うようにいかせないよ。これは…キャプテンからの指示だからね！」

「なるほど。後ろにいる100人のデカイ集団をコントロールしてる沼津南と京伏。その中にはゴールまで残りわずかなこの山岳区間でクライマーを出し、ゴールを狙いにい

くチームも少なからずいる。つまり……ここが勝負というわけか。しかし……先頭は今頃箱根の中腹あたりを走っているだろう。ならば……最良の方法は……。」

多村は考えた末に答えを出す。

「ならば…… 杉山さんと山中さんの2人で先頭に追いつけというのはどーでしょう？」

「先頭に？ 多村君。キミは僕と手を組むつもりかい？」

「いや。杉山さん。あなたの本音は山中さんと勝負したいだけですよね？」

「……。」

「それに……あなたのチームにとっても都合で良いと思います。win-winになると思いませんか？」

「まー。そーなるかもね。ウチも優勝を狙いにいく気持ちはあるから。」

「嵐山さんもよろしいですか？」

「……………」

「ならば……山中さん。行ってください。先頭にいる中嶋君と勘太さんまで必死にペダルを回してください！ そして!! 山岳賞を！ とつてきてください!!」

多村は山中の背中を押して送り出す。

「多村……。ありがとうな……。オレのワガママを聞いてくれて……。多村的には……。いかせたくなかった。けど……。オレは……。自転車が純粹に楽しい。年に一回しかないインターハイならば……。楽しみたい。つまらないインターハイはやりたくないだ！だから……。オレが3日間走破出来ようか否か関係ない!!オレを送ってくれたチームに感謝する！そして！絶対山岳賞をとってくる！」

山中を見届けた北上は後ろで感じていた。

「あの時と全く一緒だ！ 合宿の1日目。あなたが僕と中嶋に山岳勝負をしてこいと  
言ってくれたように。あの時はあなたが僕達を送り出しましたが……。今日は僕があなた  
を送り出します！山中さん！ 箱根山のヒルクライム！ 存分に楽しんできてくださ  
い！ 良い結果が聞けるよう期待してます!!」

京伏の嵐山が多村に話しかける。

「あんたも鬼畜な人やね。先頭とは3分弱も離れているのに……。あんたらのクライマーを  
先頭に追いついて……。さらに標高872mの山頂にある山岳賞をとりに行くとか……。出来  
はしないわ！99.99%無理やわ！」

「ならば……。僕はその0.01%の可能性を信じたいと思うんです。」

「そんなこと出来る人は過去に1人しか見たことがないわ。」

「その1人が達成出来るのならば…彼は2人目になります。」

「ははは!! そんなアホな!! あの人みたいな独特なクライムセンスがあればえーんやけどな!!」

「彼は正直。平凡なクライマーです。」

「平凡なクライマーを出すなんて!! キミも変な賭けに出たんやな!!」

「しかし…。あの人は全国のどの選手にも持ってない…。逆を言えば彼にしか持つてない潜在能力がある。それを僕が良く知ってますから。」

「そんな…マンガみたいな能力がある奴が沼津さんにおるのならば…尊敬しますわー!! 正直無理やと思うけどね。」

「不可能を可能にする。それが…彼なんです。結果を楽しみにしましょう。嵐山さん。それでわかると思うので。」

「いやー。結果は既にわかりきってることや。期待はせんぞ。ははは。」

その頃。先頭集団は中嶋が勘太を引いてた。

「やっと箱根の中腹あたりです! 勘太さん! この長い坂道で疲れてませんか!」

「ああ！ お前のおかげで楽に登れる！ オレのことは気にせず登ってくれ！」  
「はい!!」

「あらあら。中嶋くん！ キミは…去年の中学生静岡県大会の山岳賞をとってることは知ってるんですよ。キミがこんなところにもおかしくない話だけどきどき。僕も。キミ以上にもっと速く登れるんですよ。」

宮崎はダンシングをして中嶋を離す。それを追うように総北の真中も箱根を阻止する。

「こうすけ！ オレはお前の実力も走り方のクセも研究してるんだぜ！ お前達に行かせるかよ！」

「キミはいつも邪魔ばかりする。キミと同じことは僕もやってるんだよ！」  
「お互い様だな！」

宮崎と真中は並行するように登っていく。後ろで見てた中嶋は感じる。

「すげーや!! エースの2人がこの箱根を登ってるなんて滅多に見れない光景だな！ このシチュエーションにいるオレ!! すげー楽しい！ この2人に負けたくないで思っ！」

「待つてくださいいよ!! お2人共！ オレも混ぜてくださいいよ!! 楽しみましようよ！」

もつと!! もつと!!」

宮崎と真中は中嶋の姿を見て感じる。

「中嶋くーん。なんでキミは笑いながら登っているんだーい? しかも…ギアを上げて登ってる!! こいつ……。この状況を楽しんでる。可笑しい中嶋くーん。」

「なんだ? この子。さつきから俺たちについてきてるけど…並みのクライマーではないというのはわかった。しかし、これからゴール争いになるというのに普通ならピリピリする場面だけど…それを楽しんでる? 彼は一体何を考えているんだ? 予測不能だ。」

「キミらに用はない。バイバーイ!」

宮崎は更に傾斜が上がる坂道でギアを上げて登る! 真中も負けじとしがみつく!

「こうすけ! までよ!!」

あつという間に差が開いてしまうが…中嶋は笑顔を見せる。後ろで走ってる勘太は中嶋の姿に引いてしまう。

「何回もアタックされても…笑顔を見せる…。普通なら…勘弁してくれと思う場面だけど…ヤツはアタックされても構わないという思考だ。それで…更にギアを上げ…すぐ追いついてしまう。さつきからその繰り返し。これが中嶋悠斗の真骨頂なのか!」

「うっは!!! 楽しすぎる!! 興奮するよ!! この状況! 傾斜も更になると同時にアタックを仕掛けるなんて! さすが…箱学と総北のエースだ!! もっとアタックしても良いんですよ? すぐに追いつきますから!」

宮崎と真中はゾツとする。中嶋の姿にドン引きするというより脅威を感じた。

「ぶぶぶ。更に気に入ったよ! 中嶋くん! キミの望み通りアタックしまくって! 墮としてやるよ!!」

「なんなんだ! まさに狂人!!」

この3人の駆け引きがしばらく続くのである。

山中と杉山は先頭に追いつくように必死にペダルを回す。

「絶望的だけど…楽しいな! 光輝!」

「あつたり前よ! お前とまた箱根の山を登ってるなんて! 奇跡だよ!」

「そう来ないとな! 山頂までバテるなよ! 光輝!!」

「お前もバテるなよ! 楽しみは最後にとっておくべきだよな!!」



2人はひたすら回す。全力で回す。そこにはコイツに負けたくないというプライドしかない。どんな状況であろうが関係ない。純粹に楽しんでいるからだ。

しばらくしてついに箱根の山岳勝負がクライマックスを迎える!!

次回話に続く…!

## 第24話 2人の山岳賞!

## 第24話 2人の山岳賞!

箱学の宮崎と桐谷。総北の門倉と真中。沼津南の中嶋と菅原勘太の6人でゴール争いの前の箱根の山岳区間で駆け引きを続けていた。一方…集団を率いる沼津南と京伏。この2校は後ろにいる他校の選手達を先に行かせまいと集団をコントロールする。しかし、沼津南の山中と名古屋高の杉山は箱根の山頂である山岳リザルトの勝負を挑みに行く。

「光輝! 大丈夫か!」

「ああ! オレは正直! コンディションが抜群の1日目でお前と勝負したいんだ! だから…絶好調だよ!」

「なら良かった!! しかし…前に走ってる6人に追いつけるか?」

「ロードやってる人間なら誰しも3分もある差を山岳区間で縮めることは不可能と判断するだろう! しかし! 今の俺たちはそんなことを気にせずに登ってるだろ!」

「たしかにそうだな! オレは純粹に山岳賞を狙いに今は全力で登っている。そして、後ろで走ってる仲間の期待を裏切りたくないんだ。わずかな希望を信じてオレを送り

でした。ならば：オレは全力でペダルを回して山岳賞をとる！ それは：お前も同じだろ！」

「オレも先輩達に期待されてるから負ける訳にはいかないんだよね！ 2年はオレしか出場してないんだ！ 全国の舞台に行けなかった後輩や先輩達が沢山いる。オレはインハイメンバーの6人に選ばれた1人だ！ ならば：仲間達がオレに託された想いは無駄にしたくない。だからこそ！お前に勝ちたいだ！」

「お互い背負っているもんは一緒だな！ さつきもお前が話していたが：不可能ならば可能にすれば良い。それを証明する良いきっかけにもなるな！」

「そうだな！ 差はだいぶ開いている！いけるか？ 大地！」

「ああ！オレは絶対調だ！山岳賞勝負を楽しみたいんだ！お前もそのつもりだろ？」

「最初からそのつもりだ！ 限界まで回せよ！そして！！絶対に負けない！！」

「オレも負けない！！」

山中と杉山は鼓舞しながら箱根の山頂を目指して登っていく。

その頃。先頭では…。

「中嶋くーん！ なかなかやるじゃない？ 君はどこまで速く登れるの？」

「オレはこう見えて…まだ本気じゃないすから。何故なら…勘太さんを山頂まで引つ張らないと行けないんでね。」

「そうかな? 君。実は結構脚にきてるんじゃないかな? 全力でスプリントラインをとってきた彼をゴール前に備えて苦手な平坦区間に箱根の山を引いてる。相当脚にきてると思うんだけどね?」

「ははは…。そんなことないですね! オレはあんたと闘いたいからこの場にいるんすよ!」

勘太は後ろで感じてた。

「たしかに…。中嶋の脚は結構きてると思う。海風が強い平坦区間に傾斜がきつい山岳区間を1人で走っているからだ。さつきから宮崎や真中さんがアタックを仕掛ける度に脚が震えている。それに…今こうして山を楽に登れているのは…中嶋が俺のことを想って引いてもらってる。後ろから誰か…ウチのチームメイトが来て中嶋と代わってあげることが出来れば良いが現実的に考えて厳しい。正直…この状況はウチにとって厳しい!」

「宮崎さん…。オレは…もう1人この場に来ると思うんすよ。」

「はい?」

「さつきから感じてるんすけど…。後ろからすごい圧を感じるんすよね…。それはオレにしかわからない圧ですよ。」

「キミは何を言っているのかサッパリわからないな。」

「あなたにはわからないと思いますね。」

「キミ〜？ この暑さと疲れでおかしくなっちゃったのかな〜？」

「中嶋！ もしかして…：大地がこの場に来るといえるのか!? だが…：そんなことはいくら大地でも厳しいと思うが…。」

「山頂まではあと2kmだね。ここでわけのわからないことを言ってる中嶋くんを置いていこうか。そろそろ…：本気出そうかな。僕も！ 桐谷君！ ついてこれる〜？」

「ああ！ 宮崎君が山岳区間で引いてもらったおかげで脚はだいぶ回復した！ ここで切り離してゴールにいくぞ！」

「りょーかい!! ゴールにいくぞか！」

総北もゴールに向けて動き出す！

「翔！ 俺たちも行くぞ！」

「箱学も動いたんでいきましよう!」

箱学と総北は一気に加速する。

「待ってくださいよ! ……っ。」

「中嶋!!」

「すみません…。追いつきますから…。」

「何回も箱学と総北のアタックのせい…。中嶋の脚はもう限界だ! このまま中嶋が全力で走ったらリタイヤになる!…ここは止めるべきだ!」

「お前は充分頑張った! オレをここまで引いてくれたおかげでオレの脚は回復した!

あとはオレに任せろ! お前は休め!!」

「オレは…多村のオーダーで勘太さんを山頂まで引かないといけないんです。だから…まだ休むわけにはいかない!」

「お前…。」

「それに…オレは信じていますから! 山中さんが助けに来てくれることを!」

「大地が来ると言うのか? 後ろにいる集団から1人でここまで登ってくるというのか? だいぶ差は開いている。いくら大地でも無理がある! もう一度言うが…もう休

め! あとは…オレに任せろ!」

勘太は中嶋をおいていこうとするが…中嶋は止める。

「待つてくださいよ…。せめてあと一分待つてください…。それまではペダルを緩めません！ 山中さんなら絶対来ると信じてますから!! お願います！ もし…来なかつたら責任は負います！」

「……!! そこまで言うなら否定はしない。可能性は…0に近いが賭けるしかない！」

「ありがとうございます！ それまでは…少しでも差が縮めるよう全力で引きます！」

その頃。集団を引いている沼津南高達は京都伏見のクライマー達と交代で引いてた。

「岸さん！ そろそろ傾斜が急になるので代わってください！ 後ろのブロックをお願いします！」

「任せてや！ 北上君!! ここは死守せなきゃあかんからね！ 後ろもイライラしてるだろうな!!」

後ろの選手達もヤジが飛ぶ。

「くそ!! 沼津と京伏が邪魔で前に行けん！ お前ら邪魔なんだよ!!」

「このまま集団を率いてゴールする気かよ！ こんなんじやレースにならんぞ！」

その時。箱学のクライマーの小泉隼也が話しかける。

「集団を引いているのは…良いかもしれないけど…2日目の対策とか考えてるの？  
沼津さんと京伏さん！」

「考えておるよ！ このまま行けば沼津とわい達は8位スタートになるからねー！ それに…沼津さんは先に3人いる。沼津さん的には好都合にだけど…わい達京伏は現地  
点で誰も先頭争いに絡んでいない。つまり…どーゆうことか…わかるかな〜？」

多村はつぶやく。

「あなた達もここからゴール争いに行くんですよね？ 嵐山さん。菊川さん。あなた達  
が先頭争いに行くための協調なんですよね？」

「せやよ!! 君はわかかっていなながら…協調なんてしたん？ 普通ならせんやろー！」

「いや。むしろ協調をのみました。なぜなら、さっき山頂を目指して登っていった山中  
さん。実は…ウチのエースなんです。ゴール前になると真の力を発揮する方なんで  
すよ。箱根の山頂を登りきるとすぐゴールである1日目のコース。そこで…僕は彼を  
起用した。嵐山さん。菊川さん。つまり…どーゆうことかわかりますか？京伏の立場  
はむしろ絶望的だと思いますけどね！」

「なあ…。家斉！」

「任せろ！」



しかし、多村と佐々木が止めに入る。

「あなた達を行かせない。少しの間ブロックさせてもらいますよ！」

「純ちゃん!! ここは止めよう！」

「邪魔や! 沼津!!」

「それに…貴方達が行つてしまうと…後ろにいる集団達が出ちやいますよ。どちらにせよ…貴方達は僕達と一緒にゴールするしか選択肢がないですからね。」

「くそつ……。」

嵐山と菊川は諦めた。

「多村というやつ…。こいつ…。全てを計算しての作戦なのか…。まんまとこいつの作戦にハマつてしまうた…。」

「頼みますよ…。山中さん。あなたしか…頼みの綱がありません。今日のすべての結果は貴方にかかっています! だから…絶対に山頂をとってゴールしてください!!」

その頃。山中と杉山は必死にペダルを漕いでた。山中は気づく!

「あれ? あの後ろ姿は…中嶋と勘太! あいつらが何故ここにいる!!」

山中は更にギアを上げて追い詰める。中嶋は背後からの異変に気づく。

「来ましたよ!! 山中さんが!」

勘太は後ろを振り向くと山中の姿が見えた。

「大地!! ……。本当に来たんだな……。」

山中は更にペースを上げて中嶋達に追いつく。

「中嶋!! 勘太!!」

「山中さん! 待つてましたよ! あなたが……この場に来てくれることを!」

そして山中は2人と並ぶ。

「……まで登つて来て疲れが溜まっていると思うが……一刻を争う事態が起きている!

先頭には箱学と総北の4人が走っている! 差は少し開いているが……大地!! まだ……いけるか?」

「オレは……山岳リザルトを目指している。それが……多村のオーダーだからだ! それに……名古屋高の杉山と一緒に登ってきた! 悪いが……このまま行かせてもらおう!」

「山中さん!! 待つてください! オレは……もう……平坦も坂道も勘太さんを引いてだいぶ疲れが来ます! それに……先頭に追いつけません! ここは……山中さんが勘太さんを引いて1日目のゴールをとってきてください! それに……先頭はもうすぐで山頂に着く頃。今から山岳賞を狙いについても厳しいです!」

「そんなのやってみなきやわからないではないか?」

「!!?」

「オレは…今…絶好調なんだ!! だから真剣に山岳賞に狙いにいきたい!」

「しかし……!」

勘太は中嶋の肩を叩く。

「中嶋…。オレに考えがある。大地!! オレを引いてくれ!! 2人で山岳賞を狙いにいくぞ!! お前の全力の引きにオレも全力でついていく!! そして…ゴールを狙うぞ!」

「ぞ!大地!! それなら大丈夫か!」

「勘太!!」

「勘太の眼は真剣だ…。となると…。」

「大地…。悔しいが…今回はお預けだ! この状況でお前と1対1の真剣勝負をすることは出来なくなつた。また…次回のお楽しみにしとく。それに…君のクライマーは限界にきてる。このまま全力で先頭に追いつこうとすると…彼は途中でリタイアになる。そんなことは大地もそうだけど…チームメイトも困るだろ? だから…オレは彼を引いていく!」

「光輝……。わかつた…。」

「大地!!」

杉山は山中の背中に手を添える。

「オレはお前にオレの想いを託す！　そして！先頭に必ず抜いて山岳賞を絶対とつてこい！！」

「ああ！！　オレが…レッドゼツケンをとつてきたら…お前にプレゼントする！！　それが…俺たちの山岳賞だからな！！　勘太！！　先頭にいこう！！」

「ああ！！」

杉山は山中の背中を押して送り出す。杉山は中嶋を引いてゴールを目指す。

「山中さん……。勘太さん……。頼みますよ……。あなた達が一番でゴールしてくれることを期待します……。オレは少し休もうかな……。」

中嶋は一気に力が抜けて落車しそうになる。しかし、杉山は中嶋の肩を持つ。

「キミ。ボロボロだね。よくここまで頑張ったよ…。敵チームだけど…ゴールまで一緒に走るぞ。お前のペースに合わせるから。脚を休めとけ。」

「すみません…。ありがとうございます…。」

「大地…。お前らのチームの為に全力で山岳賞とゴールをとつて来いよ！　出来なかったら…オレは許さないぞ！！」

箱学と総北は山頂まで残り僅かのところに来てた。

「山頂まであと500mですね〜！　桐谷君！　脚の方は大丈夫かい？」

「ああ！ 大丈夫さ！ あとは…ゴールスプリントするだけだろ！ 任せろ！」

「翔もいけるか？」

「勇気さん！ 今日のために必死に練習してきたんで1日目の総合優勝やりますよ！」

「その心構えだ！」

「そう言えば…さつきから後ろから声援が聞こえるけど…誰かここに登ってきてるのかな？ 中嶋君はもう脚が限界にだったし、彼は来ないと思うけどね。」

「沼津南は堕ちたよ。宮崎君。最初のスプリントラインで精一杯だったんでしょーね。」  
「つまり一発屋と言うわけか。ははは。そりや面白いわー。」

ここにいる4人は誰しも沼津南がこの土壇場で追いつくと想像してなかった。周りで観戦する傍観者達の声援が騒ぎ出す。

「なんだ！ 凄い勢いで登って来てるぞ！」

「2人組で来てる！ しかも…箱学と総北を抜くような勢いだ!!」  
「あのジャージは!!」

宮崎は異変に気付き後ろを振り向くとそこには…。

「勘太!! 箱学と総北をとらえたぞ！」

「大地!! 一気にあの4人を抜け! 山頂までもうすぐだ! 待たせたな! 宮崎

!!!?」  
「何故…君達がこの場に来るんだ!それに…206番!!」

山中は更に加速して箱学と総北の4人を抜いていく!

「勇気君!!」

「翔! オレの引きについてこい!!」

「なんだ…。あの庄は…。あの206番…!只者ではない!」

「待てよ!! 沼津!!」

「中嶋君と代わって206番が走ってる?どーゆうことかな? 彼は…はるか後

ろから単独で傾斜が急な坂を登ってきたのかな?」

しかも…走りは平凡に見える。凄く集中してた。多村。あんな選手がいるなんて

聞いてないんだけどね。」

「宮崎君! これはヤバイ!」

「わかってるって!! 本気で行くぞ!」

宮崎と真中は山中を追う。

「キミー!! どこから来たの?」

「……………」

山中は宮崎の声は聞こえていなく、ただひたすら数百メートル先の箱根の山頂を目指して登る。

「なんだ？ このプレッシャーは！」

山中は持ち前の闘争心と気迫で勘太を引つ張りながらペダルを漕ぐ。宮崎と真中は加速するが…気づいたら50mも差が開いていた。後ろの2人は感じた。

「こんなに速く登っても追いつけない…。なんだ…あの206番は!!」

「はーあ？ 山岳リザルトも沼津南だと!! そんな…はずは!!」

箱学と総北の4人を抜き、一気に差を開いた山中大地。そして、1日目の山岳リザルトの結果が決まる。

「インターハイ1日目の山岳賞は…沼津南高校206番の山中大地選手です! 2位は同じく沼津南高校の204番。菅原勘太選手です!」

周りの観客達は騒ぐ。

「すげー!! グリーンもレッドも沼津南がとってる!! このチーム半端ねーよ!!」

「凄い気迫を感じた!! あの206番!」

「今回のインターハイ! 面白くなってきたな! 1日目のゴール争いも楽しみだな!」

「大地!! まだ喜ぶのは早い! 本当の勝負はここからだ!! 代われ! ここからはオレが引く!!」

「勘太! オレが引く!!」

「今日のゴールは…お前に任せる!!」

「なんでだ! 勘太がゴールを狙いにいくほうが良いだろ!!」

「オレは残りの300mあたりまで全力で引きお前をゴールに叩きこみたい! それに…あの約束を果たす時が今だからだ!」

「勘太…。それもそうだな!! お前もそれが楽しみでゴール争いに絡みたいんだろ!

ならば…一番でゴールするさ!」

宮崎はこの結果に満足していない様子だ。

「やっぱりー。僕がゴールしにいくわ。桐谷くーん! ゴール前まで限界まで引け!」

「宮崎君! あんたは脚を休めたほうが良いんじゃないか!」

「何いつてんの? キミ? キミはこのままで良いと思ってるの?」

「それは良くないけどさ…。本来はオレがゴールするんじゃない?」

「そんなことはどーでも良いんだよ! キミは脚がちぎれるまで引け!」

「わかったよ…。」



〔沼津南!!

僕を本気にされちゃったねー。

君達にゴールは譲る気はないよ!!

〕

次回話に続く…!

## 第25話 運命の1日目の総合優勝!

第25話 運命の1日目の優勝!

山岳勝負は山中大地が制し、沼津南の士気が上がる。沼津南に対抗する箱学と総北。ついに宮崎が本気を出す。

「沼津南! 待ちなよ!! 1日目のゴールは譲れないよ!」

「宮崎君! キミがゴールをとりに行くのは…オレは反対だ! 山を登り脚に少しきてるんじゃないか! ここは…オレが行くべきだよ!!」

宮崎は桐谷の頭を掴む。

「キミは…悔しくないの…。平坦も山も沼津南にとられて…。箱学のプライドはないのかな? そんな気持ちでインハイに挑むなら…僕は…キミを今ここで落車させてリタイアしてもらおうよ!!」

「…!! わかったよ…。全力でこのダウンとゴール前の平坦道を引くよ…。」

「宮崎君…。ガチな眼をしてる…。」

「話してるヒマはないんだよ! 限界まで引けよ!! それがキミの今の仕事なんだよ!」

「勇気君!! 沼津南はグリーンゼツケンをとつてきた菅原さんが206番を引いてる！  
それに…箱学は桐谷さんが宮崎さんを引いてる！」

勇気君は…さつき箱根の激坂を登つてきて疲れが溜まつてる！　ここは…僕が下りで全力で引いて勇気君がゴールした方が良いのではないのか？」

「翔！　こうすけがゴールするのか？」

「さつきから後ろから見てますが…桐谷さんが宮崎さんを引いてます！　あの感じだと宮崎さんが残りの数百メートルあたりで離すでしょう。」

「そっか…。翔！　作戦変更だ！　オレがゴールをとりにいく！　それに…エーススプリンター同士がアシストしてる状況だ！　ならば…翔！　オレをゴールの前まで導いてくれないか！」

「わかった！　ついてきてくださいよ！」

「勘太！　楽しいか！」

「!!？」

「ゴール前のこの状況を楽しんでるか！　大地は!!　変わってるな…。普通ならゴール前は楽しむ場面ではないんだが…。」

「なあ! 大地…。逆に聞くが…なんでお前は楽しんでるんだ?」

「お前と一回やってみたかったんだ。ゴール争い。オレは…今まで公式試合に出場したこともないし…ロードレースってどういう感じなのか。ロードレースの楽しさとは何か。いまいち実感してなかった。だが…それは今わかった。チームのみんなと同じ方向に向かつて誰よりも速くゴールしたいからだ!それに…この6人で走れることが凄く楽しいんだよ!」

「大地…。」

「そうか…。大地は今回のインターハイは特別な想いがあるのか…。ならば…オレの今やるべきは一つじゃないか!」

「なあ…。ツインスプリントをやるぞ!」

「!! それはお前達だけの技じゃないのかよ!!」

「たしかにそうだけど…お前の気持ちを聞いたら更にやる気が出た。少し難しいが…今の大地なら出来ると思う! それに…箱学も総北も本気出してくる! だから…オレらも本気出さないと勝てない!」

「…! わかった! やろう!」

「オレが普段やってるツインスプリントの体勢をやるから真似するんだ!」

「……。 とうか?」

「そうだ！ もうすぐで下りが終わる！ そこからが本当の勝負だ！ 行くぞ！ 大地！」

「ああ!!」

そこに箱学が追いつく！

「あらあら〜！ スプリンター君!! 206番をつれてゴールする気なの〜？ やらせないよ!! ほらほら!!」

宮崎は山中の肩をわざとぶつける。山中は倒れそうになるがガードレールが壁になり倒れなかった。山中は肩をかすり傷を負うが気にせず走る。

「いてっ!! てめえ!!」

「大地!! 大丈夫か！ 宮崎！てめえ！」

「はははっ！ 君達はここで負けるんだよ！」

「勘太！ 気にするな！ オレは大丈夫だ！」

宮崎はまた山中をぶつけようとするが…勘太が抑える。

「お前の好きにさせるか！」

「ならば…キミを倒そうか!! ほれ〜！」

宮崎は勘太をぶつけようとするが…勘太は避けて宮崎が倒れそうになるが…体勢を

崩さなかった。

「避けたねー。ならば…君達をここで落車させるよ！」

「大地！ いまだ！」

「ああ!!」

勘太と山中はツインスプリントの体勢になり宮崎の妨害を避けるために一気に加速する。

「ほう〜。下りが終わるタイミングでやってきたか〜!! 桐谷君。作戦変更で〜ここまででいいよ。ここからは…僕1人でいくよ！」

「ゴールまであと1km弱もあるのに…いくのかよ!! 300m前まで引いてやるさ！」

「キミはわかってないな。僕の本気を見たいなら…後ろからついてきなよ。多分ついてくれないと思うけど。1kmもあれば充分だよ。」

宮崎はここで始めてアウターを変えギアを変える！

「!!」 嘘だろ…。今までアウターをしなかつたのかよ!! ギアを変速せずに湘南の海岸沿いと箱根山を走っていたのか!!」

すると…宮崎はアウターを変えた瞬間にもものすごい速さで加速する。桐谷は追いつこうとするが…一瞬で50mも差がついてしまう。桐谷の隣に総北の2人がくる。

「桐谷さんが減速しました！ 下りが終わったタイミングで宮崎さんが飛び出しましたよ！ 勇気さん！ どーしますか!？」

「翔！ その桐谷さんを抑えてこい！ オレもここからいくよ！」

「しかし!! まだ貴方がでる場面ではありませんよ！」

「翔！ オレは…こうすけと対戦したいんだよ。いかせてくれよ。」

「勇気さんは宮崎さんのライバルですもんね…。わかりました…。しかし！ 絶対一番でゴールしてきてください!! チーム総北の期待を裏切らないでください!!」

「最初からそのつもりだ!!」

門倉は真中の背中を押して真中を送り出す。

桐谷はブロックしようとするが無駄だった。

「桐谷さん…。すみませんが…僕はあなたをブロックします！」

「ちえっ！ 総北もここで出したのかよ…。」

「宮崎さんも出ましたね！ あの2人はライバル同士ですから…僕達が勝負の邪魔したらいけないじゃないですか？」

「たしかにな…。宮崎君！ 頼んだよ！」

その頃。山頂近くで走っていた多村達は、集団をそのまま引いてた。

「そろそろ…ゴール争いになりますね。」

「純ちゃん!! 勘太さんと山中さんが先頭を走っているんだよね?」

「そうですね…。彼らは強いですから。実力的にいうと僕と佐々木君が上かもしれないけど…僕達にない強さをあの2人は持っているんです。だから…今日は彼達に1日目のゴールを託そうと最初から考えていましたから。」

「そうなの? あつ…でも、何故中嶋君は小田原までの平坦道と箱根山の激坂をいかせたの?」

「ええ。僕は3週間前ぐらい前の練習の時に…彼に平坦もそこそこ走れるように練習してほしいと言いました。彼は最初は反対してましたが…僕が平坦を彼のスタイルを保ちながら速く走れるコツを教えたら…そこから彼は練習するようになった。彼の武器は…ギアを変速しながら走るスタイルであり…大一番で真の力を発揮するタイプ。そこで…今日起用したんですよ。」

「つまり…純ちゃんは悠斗くんのギアを変速する走りを平坦でも活かせると思つて練習をさせたというわけ?」

「そうです。ギアを自由自在使える中嶋君だからこそ出来る技。だから…練習次第では平坦も坂でも走るオールラウンダーになるのではと僕なりに考えたのです。」

「純ちゃんはそこまで考えていての…このオーダーだったんだね…。」



「でも…。このオーダーは、一か八かの賭けですから。この賭けの全ては山中さんにかかっています。だから…負けないでください。」

「そうだね。純ちゃん。山中さん！ あの時貴方と一緒に菅原さん達と競争した時みたいに…最後まで諦めない走りをしてください！」

多村と佐々木が話していたら…そこには名古屋高の杉山と中嶋がゆつくりと走っていた。

「やつと来たよ！ 沼津南達が！」

中嶋は疲れと暑さのせいか下をむいていた。杉山の一言で後ろを振り返る。

「多村達…」

「中嶋君。キミの姿を見ればわかります。あの箱学と総北のエースについていくのに精一杯だったと思います。良く頑張りました。」

「多村…。お前のオーダーは鬼畜だけど…オレ…。すげー楽しかったぜ…」

「杉山さんは…何故…彼を連れてるんですか？それに…山中さんと山岳賞勝負をするはずだったのでは？」

「リタイアしそうになってたからさ…。それに…彼の言葉を聞いたらほっとくわけにいかないと思うって…」

「そうですか……」

「それに……大地が今日の1日目のゴールをして……あの表彰台の1番上にあがる姿を想像したら……応援したくなってきた。名古屋高はもう沼津南や京伏達がブロックして1日目をとるのはゼロだからね。だから……大地の親友としてロード初心者の彼を見届けたい。そんな気がしたから。」

「……そうですか。」

「山中さんは敵チームの心を動かす力があるのですか……。やはり……彼をこのインハイに絞らせて出場させたのは正解でしたね。それに……宮崎さんは……彼の走りを間近で見てる頃だと。結果が楽しみですよ。」

1日目のゴールまであと500m地点。ゴールゲートが遠目に見えるぐらいの距離にいた。先頭で勘太の提案のツインスプリントで離していたが……後ろから単独で走る宮崎と真中の姿が見えた。それを確認した勘太は最後の力を振り絞る。

「まずい!! お互いのアシストを離して箱学と総北のエースが凄い勢いで来てる!! このままではまずい!!」

「大地!! オレがギリギリまで引く! オレが行けと合図した瞬間ゴールまで限界まで

ペダルを回せ!! それが…今日のラストオーダーだ!

「ああ!!」

「捕まえたぞ!! 沼津南!!」

「かゝんたゝくゝん!!それにゝ訳の分からないやつ!! 僕がゝ1日目をとるんだよ

!」

「しかしゝあの206番ゝ。菅原兄弟が開発したツインスプリントをやってるんだねゝ。彼ら双子にしかできない技をあの206番は再現してるゝ?彼は一体何もんだゝ?」

その差は30mになる。

「今だ! 行け! 大地! 俺たちの想い…。夢を…。全て託した!!」

勘太はボロボロになった手で山中の背中を押した。

「いってくる!」

勘太はすぐに宮崎のブロックをする。

「お前だけは絶対!! 優勝させない!」

「キミは邪魔なんだよ!! ザコが!!」

一瞬ぶつかるが…勘太が懸命にブロックをする。しかし…宮崎はかわしていく。

「させるか!!」

「きーみはーここでご退場しろ!!」

勘太は再びブロックするが…宮崎に飛ばされる。勘太はスピードが出ていたため横に倒れそうになるが…再びバランスを整える。

「あぶねー!! でも…オレの今日の最後の仕事はした…。あとは頼んだ! 大地!!」

〔邪魔が入って…2秒無駄にしちゃったねー。勇気君と差が開いちゃったじゃないかー。けど…2秒なら…一気に入けるよー〕

「さくて! 最後のとっておきく! 解放だ!!」

宮崎はここで始めてダンシングの姿勢で猛スピードで先頭を追う!

ゴールまであと100m。真中が山中と並走する。

「俺たち総北が!! 1日目をとる!!」

〔この206番!! 後ろから感じていたけど…走りは平凡。なのに…凄い圧を感じる。山岳賞の時と違って彼の圧は更に膨れ上がっている!! 彼はきつとゴール前になると

燃えるタイプかもしれないね！」

「みんながオレに託してくれた想いは絶対に…無駄にはしない!!」

そこに…宮崎が必死にペダルを漕いで2人を追い詰める!!

「君たちにくるゴールは譲らないよ!! 箱学の1番として…ゴールするよ!! 最後の勝負だ!!」

「僕が優勝するんだよ!! 勇気くんに206番!! 僕はねくキミ達と違って箱学のエースナンバー1番なんだよね。1番を背負うからにはく1番でゴールしないとけないんだよ!!」

「大坂さんはオレにエースナンバーをくれた。そして…先輩や後輩、同期のメンバー達の支えがあつてインターハイに出ている。このオレを信用してくれる仲間達に恩返しをしたいんだ!! だから…その証として1日目の総合優勝するんだ!!」

「ロードレースも何も知らないオレをここまで導いてくれたチームメイトやマネージャー達に感謝してもしきれないぐらい感謝してる!! 弟に誓った1日目のスプリントラインをとって、オレと一度ゴール争いでアシストをしたいと約束した勘太。平坦と箱根の山を1人で勘太を引っ張ってくれた中嶋。そして、オレの1日目のゴールを信じて送り出した多村と集団を引っ張っている北上と佐々木。共通して言えるのは…みんなオレに今日の優勝を託してくれた!! オレは…その想いを背負って走る!! それしかオレには出来ないんだ! 感謝を形にするには!!」

ゴール20m前で3人が並び最後の力を出す。周りの声援もピークに達する。

「箱学は!! 常に王者だ!!!」

「俺たち総北は強い!!!」

「ここで出すんだ!! 全てを!!」

そして、1日目の総合優勝が決まる。

「エントリーナンバー11番!! 総北高校2年生の真中勇氣選手がインターハイ1日目

の総合優勝です!!」

「うおおおおお!!!  
やりましたよ!!」

大坂さん!!!」

「続きまして…2位は206番の山中大地選手。3位は1番の宮崎浩輔選手です!!  
ビデオ判定の結果で数センチ単位で決まりました!今回の1日目の総合優勝争いは僅  
差でした!」

「ははは…:僕が3位!!!  
くそー!そんなこと…あつてはいけないんだよ!!」

山中は下をむいたままスピードを落としていった。すぐに勘太が4位でゴールす  
る。勘太は大地と合流する。

「大地…:。」

山中は下をずっとむいたままマネージャー達のもとに駆けつける。マネージャー達  
にタオルと水をもらった。

「山中先輩…。お疲れ様です…。タオルと水です。勘太先輩もお疲れ様です。」

「ありがとう…。」

「ありがとう。未希さん。」

山中は自転車を降りて人気がない場所にいかうとする。その様子を気づいた勘太は自転車を降りて山中を心配するかのようについて行く。そこに純太が来る。

「兄さん。どこにいくの?」

「純太…。今は熊野やマネージャー達に大地と一緒にトイレにいつてくるって伝えたい。」

「……。わかったよ…。」

山中と勘太は人気がない場所に着いて少し落ち着いてから山中は言葉を発した。

「勘太。凄く悔しい。」

「大地…。お前は良く頑張った…。」

勘太はフォローしようとするが…山中は涙を流しながら話す。



「オレは……みんなにゴールを任された……。みんなの期待に応えようと必死にペダルを漕いだ!! なのに……一番になれなかった……。悔しいよ……。悔しいよ!!!」

「大地……。オレも悔しい。お前を優勝に導くことが出来なかったことに。悔しいさ!! ごめん……。大地……。オレがもつと……。もつと……。頑張れば……。大地を優勝に導くことができたのに!!」

「うあああああ!!!」

勘太は山中を抱きしめながら2人で悔し涙を流した。2人の気が済むまで泣いていたのである。

次回話に続く……。

## 第26話 反省!

### 第26話 反省!

インターハイ大会の1日目の先頭争いを制したのは千葉県代表総北高校である。過去に1回総合優勝を果たした高校であり、優勝した年の翌年には入部希望者が多くなった。それから毎年インターハイでは常連校として出場をしている。

2位は静岡県代表の沼津南高校。初出場でありながらグリーンゼッケンとレッドゼッケンをとった。惜しく2位で終わってしまったが：2日目も3日目の結果に期待が高まる。

3位は神奈川県代表の箱根学園。ここは優勝候補の一つであり：過去のタイトルも素晴らしい成績を残している。全員が「エース」という指針の元に切磋琢磨しながら日々の練習に励んでいる。

優勝争いが終わった後には、後続の選手達がゴールを通過し、インターハイ1日目が終わる。沼津南と京都伏見は他の高校達の選手の集団達をコントロールをしたため7位から10位で終わる。

走り終えた多村達は沼津南高校のベースに寄る。多村は少し悲しげな表情をしてた。

「今…皆んな無事にゴールしました。本当にお疲れ様です。まず…中嶋君のマツサージとケアをお願いします。彼は一人で湘南と箱根を総北と箱学のエース級の選手達にしがみつきました。中嶋君と山中さんと勘太さんの頑張りがあつての今日の結果です。悔しいですが…胸を張って表彰台上がりましょう。ちなみに…勘太さんと山中さんはどこにいますか？」

「兄さんと山中さんならトイレに行つたよ！」

「そうですか…。あの2人に少し話したいことがあります…。それにもうすぐ表彰台上立つ時間がせまつてるので…純太さん。あの2人を呼んできてもらつていいですか？」

「わかつた。」

その時。勘太と山中が戻ってきた。

「みんな来たか。お疲れ様。」

山中は黙りながら涙目になってた。

「一旦…。少し離れた場所に行きましようか？ 2人だけに話したいことがあるので。他の皆さんは…：食料と水分補給とストレッチをしてください。」

多村と山中と勘太は少し離れた場所に移動する。

「2人とも…：本当にお疲れ様です。先に貴方達に謝らないといけないことがあります。」  
「なんだ？」

「僕のオーダーミスでこういう結果になりました…。本当に申し訳ございません…。」

「多村のオーダーはギャンブル性があるオーダーだったけど悪くはなかったと思う。それに…：合宿の時にあのコースを走って良かったと思う。そのおかげで中嶋と大地もあの激坂を登れてくれたのだから。だから気にするな。2位になってしまったのは…：オレらの責任だから。」

「少し無茶をさせてしまいました。明日はなるべく貴方達の脚を使わせないオーダーを考えます。」

「お前達も集団を率いていたんだろ。本当にお疲れ様。」

「多村…：。ごめん…：。オレの力不足で…：。」

「山中さん!! 貴方は…先頭と3分差もありながら…山岳賞をとり更にゴール争いでは2位で入賞しました! 初出場でありながら…素晴らしい成績を残しました。だから…胸を張って表彰台上がりましょう! 誰も貴方のことは責めていない…。僕はそう思います! だから…泣かないでください!!」

「そつか…。ありがとうな…。でも…オレは悔しいんだ!! チームのみんなに託された想いを背負って走ったが…優勝できなかった。だから! あと2日間で名誉挽回したいし…チームの力になりたいと勘太と誓った。だから…あと2日間よろしくな!」

「(こちら)そよろしくお願ひします。山中さん…。貴方は敗北の悔しさを知って良かったと思います。負けを知らない人は成長しない。だから…今日を糧に貴方に成長してほしいです。僕も貴方のサポートはしますし…貴方も僕達のサポートをしてください。それが…自転車競技というスポーツですから。」

「ああ…。頑張るさ!」

その頃。1日目を優勝した総北は…。

「やったな!! 2人とも!! 良くやったよ! 今日のMVPは翔と勇気だ!」

「大坂さん! ありがとうございます! 僕は…大坂さんに恩返しがしたくて…このイン

ターハイを走っています。貴方がいなければ…僕は…ここまでついていけなかった。だから…感謝してます!」

「勇氣…。そんなに褒めるなよ…。照れるだろ…。でも…お前が入学して来た時に比べたら良い顔になったな…。あの時のお前は…本当に生意気な後輩だったもんな…。」

「やめてくださいよー。」

このやりとりにチームメイトのみんなが笑う。門倉翔は大坂とハイタッチする。

「坂道!!」

「翔! やったな!」

「ああ! でも…本当はスプリント対決したかったよ…。」

「そうだよな…。本当はお前に行かせなかったけど…前には箱学が走ってた。そこで…お前が行ってしまうといけないなと瞬時に判断した。しかし…あの時。箱学の宮崎と桐谷が仕掛けたにいったからこそこしかないと思った。だから…2人だけで先頭争いに絡んでほしいとね。オレの采配が身を結んで良かったよ。少し辛かったと思うが…ありがとうがとな。」

「ああ!でも…やっぱり…坂道には構わないや…。瞬時の状況判断とお前独自の勘に…何回も救われたよ。だから…明日もオレと勇氣を存分に使ってくれ!お前がずっと夢

見てたインターハイ総合優勝！ その夢を叶えるためにあと2日走るさ！」

「ああ！ 頼りにしてる！ 翔！ 他の皆さんもお疲れ様！！ もう少ししたら表彰式が始まる。それまで休んでくれ。」

「はい！！」

箱学のベースでは冷たい空気になってた。

「あの…宮崎さん…。お水をどうぞ…。」

「いらんわ!!! 君みたいなの…マネージャーに僕の気持ちなんて理解出来ないだろ？ 邪魔だからうせろよ。」

「すみません…。」

「おい!! 宮崎君!! その態度はないだろ！ マネージャーも一生懸命サポートしてもらってるんだよ！ 謝れよ!!」

「キミに僕の何がわかるのかな？ あのさ君達が集団から抜け出せば…こんならなかつたんだよ？ この意味わかる？ 谷中く〜ん!!」

「あの時は…沼津南と京伏がブロックし…誰も前に出れなかつた状況だったんだよ！」

「それは言い訳だよね〜? 谷中く〜ん?」

「言い訳じゃないさ!! それに…僕達の責任みたいに宮崎君はいいですが…貴方が一番でゴール出来なかったのが問題だと思えます!! 貴方がもつと頑張ればこうゆう結果にならなかつた! 人を責めるより…自分を責めてほしいよ!」

宮崎は谷中の胸ぐらに掴み思い切り殴る。

倒れた谷中は宮崎に冷たい目線を送る。

「キミに言われる権限はないんだよ。僕達箱学が3位で…。総北はともかくあの初出場の沼津南が僕より先にゴールしてるなんて…ありえないよね〜? それに谷中く〜ん? キミはさ…誰のおかげで…この場にいると思ってるの〜? キミが僕にまだ文句を言うのならば…キミは今すぐここでリタイアさせるよ? ね〜? 谷中く〜ん? 答えなよ!!」

「…………。わかつたよ…。宮崎君…。オレが悪かつた。しかし!! 桐谷さんには責めないでくださいよ!! 僕は! 貴方達の関係性は知っていますから!!」

「…………。それはキミの言う通りかもしれないね…。ほら。キミの頬が赤くなってるよ。アイシングでもすれば〜?」

宮崎はアイスを谷中に投げる。

「宮崎君が殴ってきたからだろ…………。いたつ…………。」



「まあ…。切り替えていきしよう。いつまでもよくよくよしては何も始まらない…。それにくよくよく考えたらしくウチ。今日はボクと桐谷君以外の4人は脚をあまり使わせてないよね。明日のメインは…山岳区間。美影くん。今泉くん。明日はよろしく頼みますよ?」

「ああ。任せな!今日は…僕の走りを魅了してくれるお客さんがいなかった…。明日は僕のクライムに魅了されるが良い!」

「まーた始まりましたよ。美影さんの変なクセ。こうすけくん。任せて。僕も明日の山岳区間楽しみなんだ。思う存分走りますよ。」

「頼りにしてるよ。」

そんなことをしてうちに表彰式の時間になった。活躍した選手達の紹介が始まる。

「インターハイ1日目のグリーンゼッケンはエントリーナンバー204番! 静岡県代表沼津南高校の菅原勘太選手です! レッドゼッケンはエントリーナンバー206番! 同じく沼津南高校の山中大地選手です! こちらにどうぞ!」

表彰式に上がる菅原勘太と山中。

「では…今日の感想を一言ずつお願いします!」

「皆さん! この表彰式にご観賞いただきありがとうございます! 僕は双子の弟がいます! インターハイの1日目で必ずグリーンゼツケンをとると約束をしました!

その約束が実つて弟が喜んでと思います! だから…このゼツケンには弟につけさせます。皆さん応援ありがとうございます!」

「兄さん…!」

「菅原勘太選手! ありがとうございます! 次は山中大地選手お願いします!」

「オレは…山岳賞をとれて嬉しいです。しかし、この山岳賞と一緒に途中まで競争した名古屋高の杉山光輝に譲ろうと思います。何故なら…自分のチームメイトがリタイアしそうになるところを助けてくれたお礼に彼に譲ります。このレッドゼツケンは…2人でとつた山岳賞ですから。」

「そうですか…。2人もありがとうございます!! 次は今日の3位から1位の順に発表していきます! それでは…どうぞ!」

真中と宮崎が表彰台上がってくる。

「では…発表します! 3位はエントリーナンバー1番の神奈川県代表箱根学園の宮崎浩輔選手! 2位は先程レッドゼツケンを獲得した山中大地選手! 1位はエントリーナンバー11番! 千葉県代表総北高校の真中勇氣選手です!! それでは…一言ず

つお願いします。まずは……3位の宮崎浩輔選手からよろしくお願いします！」

「皆さん。応援ありがとうございます。絶対王者の箱学が3位なんて……ありえないですよ？　こういう結果になってしまったのも……まだ練習量が足りないということですよ。まだ2日もあるので……頑張つていきます。目指すは総合優勝なんです。応援よろしくお願いします。」

「ありがとうございます！　2位の山中大地選手！また一言よろしくお願いします！」  
「そうですね……。正直悔しいという気持ちしかありません。あと2日間チームに貢献できる走りが出来たら良いなと思つてます。」

「ありがとうございます！　本当の総合優勝の総北高校の真中勇氣選手お願いします！」

「僕達総北高校は！全員の力を合わせて走るというチームの目標でこれまで練習してきました！5年前の総合優勝を目標に……明日も明後日も走ります！　応援よろしくお願いします！」

周りからヤジが飛ぶ。

「良いぞ!!　総北!!」

「総北は良いチームだと評判があるから……応援したくなつた！」

「頑張れ総北!!」

「勇気くーん! キミとは〜これで12勝12敗か〜。キミはいつも僕が追い抜けば〜すぐボクを追いつく。それでこそ〜キミらしいけどさ〜1番納得してないのは〜! 206番! 多村のデータベースになかった選手だね〜。まさかね〜。多村くーん! キミは〜これが狙いだっただのかな〜?」

こうして表彰式が終わる。山中と勘太はチームメイト達と合流する。

「2人ともかつこよかったです! 勘太さんと山中さんが2人で表彰台に立つてる姿感動しました!」

「寄せよ…。恥ずかしいだろ…。」

「ありがとな! 北上!」

「純太!」

「兄さん!」

「このゼッケンはお前にあげる。本当はそれをつけて明日も走らないといけないけど…大会本部に言ったら許可がとれた。このゼッケンは2人のゼッケンだからな。それと…スプリントラインの数メートル前に諦めかけてたオレに声を掛けてくれて凄く励み

になった。純太がいなければとれなかった。ありがとうな。」

「兄さんが一番カッコいいよ！だつて：ちやんと約束を守ってくれたから!!それだけでも充分だよ！　また：明日も兄さん達のサポートするからね！」

「ありがとう。」

そこに：杉山光輝が来る。

「すみません……。勝手に邪魔しちゃいますが：彼の様子が気になって見にきました。」

「それだけかよ？　光輝？」

「：っ。まーお前にも用があつたからな。」

「さつきはありがとうございました。杉山さん。中嶋君は今ケアしてもらつてだいぶ回復しています。彼なら大丈夫ですよ。」

「それなら良かった！　大地！ゴール前の2位は残念だったけど：山岳賞おめでとう！　本当は：お前と真剣勝負をしたかつたけど：また今度だな！　それに：オレにレッドゼツケンを譲らなくて良いよ！これはお前がとつたゼツケンだ！　それをつけて明日走ってくれ！」

「でも……。」

「杉山さん。貴方は僕達のチームメイトを助けてくれて本当に感謝しています。確かに山

中山さんが山岳賞をとりましたが……この山岳賞の陰には杉山さんのあの行動があつたからなんです。普通なら……リタイアしそうな選手がいても誰も助けられないでしょう。でも……貴方は助けた。そのスポーツマンシップに僕は感激しました。中山さんが貴方にレッドゼツケンを譲るのは貴方への感謝の印です。だから……僕からも受け取ってくれるようお願いします。」

「多村君……。キミまでも……。」

「このゼツケンは2人でとつた山岳賞。だから……受け取ってくれないか?」

「わかつたよ。親友にチームメイトに言われたら断る理由なんてないさ。オレは……やるなら正々堂々と勝負したいからな。自転車乗りならフェアに勝負する。それが……オレのモットーだから。これで……チャラだな!あの彼が明日の朝まで回復出来るよう祈ってるよ。オレはそろそろいくからじゃあな!」

「ああ!」

山中はレッドゼツケンを杉山に譲り去っていった。そして、多村の総括が始まる。

「では……皆さん。最後に総括をします。明日の2日目は山岳区間が多いコースになつております。なので……クライマー達の仕事が多いです。現地点で考えているのは……まず僕達は山中さんと勘太さんを平坦区間に入る前に合流します。インターハイ2日目からは順位順にスタートするのでなるべく早く6人体制になる必要があります。明日の

キーマンは北上君と佐々木君です。みんなの力を合わせて2日目を乗り越えていきたいと思います。」

「いよいよエースクライマーの出番だな！山中さんや中嶋に負けないように…頑張るから！！」

「純ちゃん！ 任せて！」

「2人ともヤル気満々で何よりです。では…総括を終わります。本当にお疲れ様でした！」

多村は総括を終えるとある場所に向かった。そこには宮崎浩輔が待ち構えていた。

「多村く〜ん？ 君に〜聞きたいことがあるから呼び出したんだけど〜？」

「なんとなく貴方が言いたいことはわかりますよ。」

「なら話が早いやく。あれは〜どーゆうことかな〜？」

「それは…貴方達に勝つためですよ。」

「彼は〜何処の出身かな〜？ 僕が君からもらったデータベースにないんだよね〜。わ

ざとかな〜？」

「わざと貴方に206番のデータをあげなかった。それが…僕の作戦ですから。」

「ははっ…。まんまと…キミの作戦にはめられて…僕はうんざりしてるんだよ。キミ達を予選大会を勝たせてあげたのにね? ボクとキミが交わした約束と違うじゃないか。」

宮崎は多村の胸ぐらを掴む。

「なあ? キミ達みたいなく落ちこぼれしかいない集団がさく調子に乗ってるんじゃないよ!! ボクの計画を邪魔するようなヤツらはみくんなボクの手で抑えてるんだよね。つまりドーゆう意味かわかるかな?」

「ボクは…貴方みたいな外道な人が箱学の一番を背負つてることが一番気に入らないですよ! あなたのせいで…僕の兄は…地獄を見た! あんたが許せない! だから…兄が果たせなかったインターハイを僕が走ると誓ったんだ!!」

「てめえ!!」

宮崎が多村を殴りかかりそうになった時に…表彰式の時にいたお客さん達の声が聞こえてきたため宮崎は手を離れた。

「こんなところで…僕が違反したら元も子もないね。命拾いしたね。たむらくん。まっ…せいぜい頑張るんだな。沼津南高校さんよ!! はははは!!」

宮崎はそう言い残してこの場を去った。

「僕は…兄さんの夢を壊した宮崎さんが許せない。箱学を倒して…僕達が優勝して兄さ



んに喜んでもらいたい！そのためにも僕はインターハイを走る。そう決めたんだから。」

こうしてインターハイ1日目が終わる。

次回話に続く…。

## 第27話 中嶋リタイヤ!?

## 第27話 中嶋リタイヤ!?

沼津南高校は菅原勘太と山中大地、中嶋悠斗の活躍により1日目は総合2位で終わる。箱学や総北や京都伏見といった強豪校達に存在感を示した。多村はこれを狙っての作戦であり、沼津南に声援を送るお客さんが多くなつた。そんな中…一つ問題が起きる。中嶋が1日目のコースをほとんど全力で走っていたため脚と膝のコンディションが良くなかつた。

「…っ。膝を曲げると痛いわ…。」

「大丈夫か?」

「北上…。お前にだけ言っておく。オレは明日リタイヤするつもりで2日目を走破したい。やれるところはやる。もし…途中で脚が使えなくなつたら…山中さんや沼津南達を引つ張つてくれ。」

「…。オレはお前と3日間完走したい! それに…まだお前の力が必要なんだ! こんなところで終わるようなお前じゃないだろ!」

「…っ。少し無理しちやつたかな…。オレは充分仕事したし…悔いはない。沼津南が総

合優勝する姿を見たいんだ！オレの分をお前に託したいと思う。頼むよ！！」

「…っ。わかった…。でも！明日は全力で走れ！！ そうしないとオレが許さないぞ  
！」

「ああ！！ 頑張るさー！」

不安を抱えながら迎えた2日目。天候は曇りで気温は30℃。風は少し吹いていたが走りやすい環境であった。2日目のスタート地点は1日目のゴールゲートからのスタートになる。最初に走るの2位の山中。次に走るの5位の菅原勘太。他の4人は7位スタートでデカイ集団と共に走り出す。沼津南高校のベースに集まった部員達は多村の総括が始める。

「皆さん。おはようございます！2日目のコースは比較的に山岳区間が多く1番距離が長いコースです。ここを制しないと3日目の総合優勝は出来ないと思っています。厳しい戦いになりますが…皆さんの力を出し合い2日目を無事6人で完走したいと思っています。それに…今日のキーマンの佐々木君と北上君にはオーダーをメールで流していますので…確認してください。」

「わかったよ！ 純ちゃん！」

「任せな！ 昨日活躍できなかったぶん…思い切り暴れるぞ！！」

そこに…中嶋が多村に話しかける。

「多村!! 1ついいか?」

「どうしました?」

「2日目の山岳賞を狙いにいっていいか?」

「!!?。中嶋君。キミは…今日活躍する場所がないですし…それに…貴方は昨日奮闘して脚と膝にきてるのでは? 許可は出来ません!! それに…貴方はまだこんなところでリタイヤなんかされたら困ります!」

「そうか…。ならば…せめて皆んなを山岳区間を引っ張りたい。チームの力になりたいんだよ!」

「……………。わかりました。無理はしないでくださいね。その時はサポートしますから。」

「ありがとう。」

「中嶋…。お前は…本当にリタイヤする気なのか?」

「北上。なんか浮かない顔をしてるけど…なんかあつたか？」

「山中さん…。いえつ。特にありません…。」

「そうか…。ならば良いんだけどさ。今日頑張れよ!!」

「ありがとうございます！」

するとそこに…京伏の嵐山が沼津南のベースに入ってくる。

「やあー。沼津さん。今日もよろしく頼むで。」

「嵐山さん…。何か用があるんですか？」

「いやー。昨日は散々あんたらの作戦にやられもうたから…戦線布告やで。今日はあんたらと正々堂々と勝負したいんでね。」

「そうですか…。受けてたちますよ。嵐山さん達の本気を楽しみにしてますよ。でも…負けるつもりはありませんから。」

「そう来なきやなく！ 楽しみやで！」

嵐山はそういつてベースを後にする。

「さて。そろそろいきましようか。」

6人は円陣を組む。

「いくぞ! 沼津南高校!!」

「おー!!!」

6人はスタート地点に向かう。

1位の真中と2位の山中。3位の宮崎が先頭に立つ。

「山中さんですよね?」

「あんたは…総北の真中君だよね?」

「はい。そうです! 昨日の貴方の走りを見てましたが…素晴らしかったです。3分差もあつたタイムを…山岳区間で僕達を抜けての山岳賞。それに…ゴール前でも貴方と勝負し、山中さんは2位。普通なら…そんなことは出来ません。貴方の力は何処から出るんですか? 昨日のゴールからずっと気になってました。話しかけるタイミングもなかつたので今聞きました。」

「いや。そんな特別な力はないよ。ロードを初めてまだ4ヶ月しかたつてないし…初心者みたいなもんだね…。強いて言うなら…純粹にロードレースを楽しんでいるからかな?」

「そうなんですか…。質問に答えてくれてありがとうございます！今後…貴方とまた勝負出来る時を楽しみにしてます。今日もよろしくお願いします！」

「こちらこそよろしく！ 昨日は負けちゃったけど…今日は負けないからな！」

「僕達も負けませんよ！」

真中と山中はお互いの健闘を祈るように握手をした。このやりとりを密かに宮崎が聞いていた。

「ロードを初めて4ヶ月？ それで…山岳賞をとって先頭争いに絡んでのく2位？

多村くんが…彼をこの大会のために絞らせたのはくこうゆうことかな。この206番。只者ではない。ゴール前のあの気迫といい…あのオーラ。僕等にないく違う力を感じる。警戒しなきゃいけない相手ですね。」

「ゆうきくん？ キミとはく12勝12敗。今日こそキミくに勝つよ!!」

「こうすけ！ オレも負けなさいさ！」

山中のもとにマネージャーの未希と美穂が来る。

「山中先輩!! ボトルと補給食忘れていますよ!!」

「あつ…！ 忘れてた!! 未希ちゃんありがとう!!」

「それに…勝ってくださいよ！期待してますから！」

「おお！ 頑張るさ！」

「大地…。」

「なんだ？ 美穂？」

「頑張つて…。私は…大地が自転車競技部に入つて嬉しかった。大地は私の自慢の彼氏だもん。大地は4カ月でだいぶ変わった。だから…私は大地が優勝する姿を見たい。大地のファンの第1号だもん！ 負けたら許さないよ!!」

「……ありがとう。美穂のおかげもあつてオレは今この場に立つてるんだ。だから…絶対勝つから！ 約束だ!!」

「うん!!」

「それでは！ インターハイ2日目が開幕します！ 今日ほどの高校が先にゴールするか楽しみです！ では…1位の方からスタートいたします!!」

山中と勘太はハイタッチをしてそれぞれのスタート位置に着く。

「大地!! すぐお前に追いつくから。沼津までのダウンはオレが前で引く。だから…少し待つてろ！」



「ああ！ 今日も頑張ろう！」

「それでは…インターハイ2日目。開幕です!!」

インターハイ2日目が始まる。真中と山中、宮崎は同時スタートで走り始める。10秒後に4位の門倉がスタートし、その5秒後に5位の菅原勘太がスタートする。他の4人は1分後にスタートする。

「いよいよ…。2日目が始まります。まず…山中さんと勘太さんとなるべく早く合流しなければなりません！」 集団のことは気にせずいきますよ!! ここは…僕が引きますよ!!」

「純ちゃんが引くの!!」

「佐々木君。このスタートと共に戦いが始まるのです。京都伏見や箱学、総北や他の選手達が一斉に出ます!! だから…ここはボクが皆さんを引っ張らないといけない！」

「わかった！」

「いきますよ!!」

沼津南高校はスタートする。スタートしたと同時に京伏と箱学、総北の選手は陣形を組んで先頭にいる選手達を追う。沼津南は多村を中心に先頭を追う。少しすると…何かおかしいと感じた北上は後ろを振り返った。

「多村!! 中嶋が…中嶋が来てない!」

「どーゆうことですか!!」

多村は後ろを振り返ると中嶋の姿が見えない。多村は険しい表情になる。

「このままいきます!! なるべく早く山中さんと勘太さんと合流しなければならぬ。」  
すると…北上はブチ切れる。

「昨日あれだけ頑張った中嶋を置いていくつもりかよ!! 事の原因はお前の無茶なオーダーのせいでこうなったんだ!!」

「今はそんなことを言っている場合ではないことも…キミもわかるだろ!!」  
あまり感情を表に出さない多村が大声で北上に怒鳴る。

「多村!!」

「僕たちは今! 総北や箱学、京都伏見達の強豪校達に勝たないといけないんだ! ロードレースは臨機応変に対応し、状況を理解しないとイケない!! 中嶋君一人のために僕たちが下がるわけにイケないだろ!!」

「くそっ！」

「それに…後ろにはデカイ集団が走っている。かわりに助けにいったとしても…先頭に戻っていくなんて不可能だ!! こーなると5人で戦わないといけない!!」

「ならば…僕が…それをやろうかな〜?」

「佐々木君? キミは正気でいつてる? それとも冗談かな?」

「僕は本気だよ。だって…友達なんだもん。」

「友達? キミはこのインターハイをどんな気持ちで走ってるの?」

「僕は6人で最後まで完走したいから…みんなのサポートをしてるんだよ。みんな僕の友達だから。」

「そんな理由でインターハイを走ってる佐々木君に幻滅しました。ならば…好きにすれば良いさ。あとは…4人でインターハイを走りますから。そんなキミにラストオーダーを出します。不可能を可能にしてください!! キミの力で!! そして!! 必ずチームに合流しろ!! 佐々木君!!」

多村は少し手を震えながら佐々木の背中をさすった。佐々木は多村の僅かな手の震えを感じたせいかわざわざと佐々木の目の色が変わる。

「純ちゃん…。凄い厳しいこと言われたけど…。純ちゃんは僕に僅かな期待と希望を望んでいる。ならば…。やるべきは…。ひとつしかないね!!」

「純ちゃん!!。いつてくる!!」

佐々木は一気にスピードを落とした。その様子を見てた他の選手達が驚く。

「なんだなんだ?。なんで…。スピード落としたんだ?」

「まさか…。沼津南の選手が2人もリタイアするなんて…。」

「これはチャンスだぜ!!。沼津南は一発屋かよ!!」

多村と北上は2人で勘太と山中と合流するために走っていった。

その頃…。スタート地点から1km離れたあたりで中嶋はゆっくりペダルを漕ぎながら走ってた。

「くそ!!!。昨日の膝の痛みがあるせいか…。ペダルに全然力が入らない。オレは…。こんなところで終わるわけにはいかないんだ!。2日目をリタイアする覚悟は出来てはいた

けど……こんな序盤で……しかもチームに置いてかれてしまった……。くそ！ まわれよ！ オレの脚!! まだ……まだ……走りたいんだ！ インターハイを!!」

中嶋はペダルを漕ぐが少ししか進まない。後ろを振り返ると回収車が走ってきた。回収車が来るということはリタイアを意味する。中嶋は少しずつペダルを回すが……思ったように力が出ない。中嶋はもう諦めかけていた。

〔回収車がきた……。オレは山中さんとインターハイ3日間一緒に完走することを楽しみにしてたけど……ここまでか……皆んな……頼んだよ！ それに……力不足でゴメン……。〕

「キミ？リタイアかね？」

「はっ……。」

「待つてください!! 中嶋君はまだ走れるよ!!」

そこに現れたのは佐々木であった。

「佐々木……。なんでっ……。お前がそこにいるんだよ!! 多村も……2日目のキーマンは

佐々木と北上で言ってたじゃん!! なんぞっ……オーダーを無視してここに来てるんだよ! オレは……ここでリタイアする!! お前の実力なら先頭に多村達に追いつける! だから……オレがりタイアするということが多村に伝える!!」

佐々木は中嶋のところに駆けつける。

「ゆうくん!! 僕はキミの友達であり……僕とキミの夢を一緒に叶えたいから迎えに来たんだよ!! こんなどころで諦めないで! ボクがキミを先頭まで引つ張るから!!」

「佐々木…… お前……」

「ゆうくん! いこ!」

「ああ!!」

「佐々木……。オレは……おまえに救われて嬉しい! だから……少しだけ……頼む!」

佐々木と中嶋は最下位からゆっくりと走っていく。中嶋は涙目になりながら……佐々木に話しかける。

「佐々木……。ありがとう……。オレは昨日の夜からずっと2日目でリタイアすることしか考えていなかったが……お前の言葉を聞いてまだ走りたいと思えた!! オレは……沼津南のみんなが好きなんだ! だから……最後まで皆んなと一緒に走りたい!!」

「そうだね！」

その後。佐々木と中嶋はお互いを励ましながら先頭集団に追いつくために走るのがある。

その頃。多村と北上は山中と勘太と合流する。

「勘太さん！山中さん！佐々木君と中嶋君はリタイヤしました…。残念ながら4人で走るようになります。今いるメンバーで2日目を走り切りましょう!!」

「それはどうゆうことだ？多村!!」

「勘太さん…。すみませんが…中嶋君は…昨日の疲労でのリタイヤ。佐々木君は…不調でリタイヤしました…。」

その時。山中は笑いながら多村に話す。

「ははは!! 多村…お前…ウソがバレバレなんだよ! 佐々木も中嶋もリタイヤするわけじゃないか!! 中嶋はオレと3日間完走したいという目標があつて…佐々

木はこんなこと言つてたな…。沼津南のみんなが友達。友達なら…友達が苦しんでる時は自分が助けて…自分が苦しんでる時は…友達に助けてもらう。それがヤツの哲学なんだつてよ。だから…佐々木は中嶋をつれてここに戻つてくると思うんだよ。困つている奴がいれば助ける。アイツはそーゆうヤツなんだよ。」

「山中さん…。あなたは気づいてるんですね!？」

「お前の口調といい…雰囲気でわかるさ。それに…お前も僅かに信じてるんじゃないのかな…。アイツらがこの場に戻つてくるつて。それに…昨日のあの場面でオレを山岳賞をとつてゴールを狙いにいけなんて言わないでしょ。」

「………。山中さん。あなたには…敵いませんね…。不可能を可能にする。それが…この4カ月間あなたから教えてもらった。だから…僕はあの2人が戻つてくることを信じたんです。」

「そつつか…。ならば…佐々木と中嶋が戻ってきたら祝福しないといけないな。」

「そうですね…。」

「佐々木君…。中嶋君…。必ずここに戻つてきてください!! このまま4人でいくと総北と箱学達と戦えない…。なるべく早く来てください! ボクは貴方達を信じています!」



沼津南は4人で強豪校達と競うのである。

次回話に続く…。

## 中嶋の覚悟!

佐々木と中嶋は最後尾から先頭集団で走っている沼津南と箱学、総北を追う。しかし、京都伏見率いるデカイ集団を抜かなければ先頭集団に行くのは不可能である。そのことはわかりきっていた。だが、彼らは諦めていない。何故なら、沼津南高校のメンバーに必ず合流すると誓ったのだから。

「大丈夫か? 佐々木?」

「大丈夫だよ……!」 それに……ここからは山岳区間。富士山の中腹を通り、本栖湖、精進湖で甲府方面に曲がり、国道369号線で山を越えて甲府盆地に入るコース。途中で傾斜が急なところがあると純ちゃんから聞いた。僕は合宿の時……この2日目のコースを走っていない……。ゆうくんはこのコースを走っているから山を攻略するポイントがあれば教えてくれないかな?」

「ああ!! 当然さ! 行くぞ!! 佐々木!!」

「うん!!」

2人の過酷な戦いが始まる。

2日目のコースは比較的に山岳区間が多い。6人で力を合わせながら登れば疲労は軽減するが、佐々木と中嶋の2人で山を攻略しなければならぬ。中嶋は昨日の箱根山の活躍で脚に負担が来てるため、ほぼ使い物にならなかつた。自失佐々木1人でヒルクライムするようなのだ。

中嶋の体調を見ながら佐々木もスピードを調節する。しかし、あまり遅すぎるとチムと合流出来ない。その加減が難しい。

「ぐあつ……」

中嶋の膝に激痛が走る。

「大丈夫!? ゆうくん!! 早すぎたかな……」

「オレのことは気にするな!! もう少しスピード出しても良いぞ!! オレは腹をくくつたんだ!! 2度と自転車が漕げなくなつても良い!! 絶対に沼津南に追いつくと決めたんだ!! だからよ……せめて……最後の仕事をさせてくれよ……。その時まで休ませてもらうぞ!! 別人格の佐々木になるんだ!! 時を一刻争うこの状況!! 最下位!! ここから死ぬ気でペダルをまわさないと一生追いつけない!!

こんな痛み!! 耐えてみせるさ!!」

「ゆうくん…!! キミは…!!」

「わかったよ…。ゆうくん…。この人格の時に最後に言うよ…。ゆうくん!! キミを助けにいつて良かったよ!! だって…。最高の友達なんだもん!!」

「オレも…おまえは最高の友達だ!!」

「うん!!」

佐々木は一粒涙を流してスイッチが入る。そして、別人格の佐々木が現れる。

「なんだ?なんで…オレが最下位なんだよ!! こんなボロクソになってるヤツを連れてるんだよ!! 主人格さんよ。こいつ…使いもんにならねーから! 置いていくぜ!!」

別人格の佐々木は中嶋を置いていこうとするが…中嶋は必死に後ろについてくる。

「おい！ おまえ！　なんでひつついてくるんだよ！おまえは裏山の時に戦った奴か。　たしか…狂人君だったっけ？」

「そうだよ……。あの狂人だよ……。久々に別人格の佐々木のお出ましか……。　おい！　おまえ！　オレを精進湖まで引つ張つてくれ！　そうしないと…チームに合流出来ない！！」

「お前…。このオレに命令してるのか？　　おまえ…。そんな脚でいったら脚もげるぞ。それに…ケイデンスを上げてめいっばいペダルをまわす。心拍数が急上昇して死ぬぞ。」

「死んでも良いさ。チームに合流するまではな！」

「!!？」

「こいつ…。正気かよ!!」  
ハハハ……。あの時と一緒に走った時と同じ顔をしてやがる…。おもしれー! コイツの限界突破が見たいぜ!!」

「わかったよー! ついてこいよ!! このひよっこが!!」  
「最初からそのつもりだ!!」

佐々木はケイデンスを上げて中嶋を引つ張つる。中嶋も必死に膝の激痛に耐えながらついていく。

その時…沼津南は箱学と総北は膠着状態でいた。しかし、沼津南は4人で山を攻略しており、エースクライマーの北上を筆頭にチームを引つ張っていた。

「あれれ。沼津南の2人はいつ来るのかな?」  
リタイアしたのかな?」  
かな

「宮崎。おまえの挑発には乗らないぞ。」

「落ちこぼれ勘太くん。やっぱり君たちは落ちこぼれの集団だな。はははははは。良くここまで来たよ。北上くんも苦しそうだし……。立って続けに続く山岳区間。そりや……。いくらエースクライマーであつても……。脚に来るわな。だつて……。クライマーが一人しかないからね。君たちは。はははははは!!」

「そうか。クライマーは一人か……。宮崎。お前は完璧に俺たちのデータを分析してるみたいだが……。オマエは一つ見落としてるところがあるぞ！」

「はーい？ 負け犬の遠吠えかな？」

「あの2人は必ず合流する!! その時まで俺たち全員でフォローしあうんだ!! だからな! 6人全員の力を合わせて走るんだよ!!」

「キミはバカなのかな? 後ろには京都伏見達が1000人ぐらいのデカイ集団を作つて僕達を追いつこうとしてるし。あの狂人君も昨日のあの様子だと。途中で

リタイアするよ。最下位から100人抜きなんてあり得ないでしょう。キミはこの1年間で大馬鹿になったのかな。　　かなく?」

「大馬鹿はお前だ。宮崎。不可能を可能にする。それが…沼津南高校なんだよ!!」

「プププ。キミとは話にならないわ!　　そろそろ…精進湖か。良し!!　　美影くんと今泉くん!!　　出番だぞ〜!」

「オケー。宮崎君!　　待ちに待ったよ!　　僕が羽ばたく時が!」

「美影先輩…。相変わらず痛いお方だ…。　　わかったよ。」

「箱学が出ます!!　　キャプテン!　　どうしますか?」

「わかった。ならば…オレが出よう。キャプテンらしいことを昨日してないからな。みんな!　　ついていけるか!」

「はい!!」



総北も大坂を筆頭に動き始める!!

「北上君！　行けるかい!!」

「言われなくても行けるさ!!　オレが：エースクライマーなんだ!」

沼津南は出ようとするが人数の問題と北上の疲労で少し出遅れてしまう。　とつさに反応したのは多村。　多村の迅速な判断で遅れを取り返す。

「すまん…。多村…。」

「大丈夫ですよ…。少し休んでください。富士宮からここまで1人でチームを引っ張っているので乳酸が溜まっているでしょう。行けそうでしたら：交代をお願いします。」

「ああ。悪りー。」

「佐々木君…。中嶋君…。君たちが来てくれることを信じています!だから：早くここまで来て欲しいです!」

佐々木と中嶋達は佐々木のハイケイデンスクライムによって山梨県に入り本栖湖まで来た。途中で夏の暑さと疲労でリタイアしてる選手がチラホラ見かけた。それに、スピードが落ちてチームに置いていかれた選手も10人ぐらい見かけた。20人ぐらいを抜き去り徐々に先頭との距離を縮めていった。

中嶋は佐々木の引きになんとかしがつく膝の激痛と戦いながら走っている。給水ポイントには熊野と純太が立っていた。

「佐々木君!! 中嶋君!! 給水です!! 受け取ってください!!」

「おお!! サンキューな!! コイツにボトル2本渡してくれ!! それと顔面に水をかける用にもう1本な!!」

「はい!!」

一瞬の出来事であったが…熊野と純太は2人にボトルを渡した。そして、中嶋は顔にボトルを思い切り水をかけて空になったボトルを道に落とした。

「なかなかやるじゃねーか!! お前!! オレのケイデンスについて来れるなんてたいした野郎だ! だが…まだまだこれからだぜ!」

「ああ…。日々の練習が報われてる気がするよ…。佐々木…。水をかけてスッキリし

たから…もう少しケイダンスを上げていいぞ…。まだ…こんなところで倒れる訳には  
いかねーんだ…。」

「ここまで…ケイダンス130ぐらい回してるのに…まだケイダンスを上げろというの  
か…。ましては…膝の激痛に耐え…体力も限界に来てるはずなのに…気力だけで走っ  
ている！　こいつ…。ガチで狂人だな！」

「おい！　オレはまだ大丈夫だけだな！　だが…お前はとつくに限界が来てるはずだ!!  
少しは自分の身体を心配しろよ！」

「佐々木…。どうしても…追いつかないといけないんだ…。チームのために戦いたい  
…。お前もそうだろ…。」

「ああ…。そりゃな!!　まだまだこんなところでくたばってはいけねー理由があるん  
だよ!!　だからよ!!　必死についてこいや！」

「ああ…。行くぞ…。」

佐々木と中嶋はケイダンスは更に上げて距離を徐々に縮めに行く。この2人の様子  
を見てた熊野と純太の顔が険しくなる。

「先頭とはタイム差では10分もある！ このままでは…2人は…。」

「信じるしかないよ。あの2人を。」

「純太さん!! 何を根拠にそう言い切れるんですか!! 先頭に追いつくなんて…不可能です!! 先には京都伏見が集団を引つ張っているんですよ!! あの集団を抜くことなんて…出来るわけがないじゃないですか!!」

「熊野…。たしかにお前の言う通りかもしれない。けどな…。お前はこの4カ月間何を学んだ？」

「それは……。」

「山中さんはいつも言ってたよな…。不可能を可能にするって。あの2人は誰もが不可能なことを可能にするように今…実践してるんだよ。だから…そんな2人を信じるやるのがオレらの仕事じゃないのか？」

「!!!?」

「今は…信じて待つ。それが今オレらが出るベストの仕事だ。次の給水所に行くぞ。」

「はい!!」

しばらくすると…佐々木と中嶋は第1関門にぶつかる。

それは…脱落してない選手達の集団が60人ぐらい走っていて、先を抜くことが出来なかった。それに気づいた京都伏見のキャプテンである嵐山は声をかける。

「あら…。君達。沼津南の佐々木君に中嶋君かく。ようここまで来たね。君たち…。僕達を抜いて…先頭に追いつく気かい。それはさせんで!!」

「邪魔なんだよ!! てめえーら!!」

佐々木と中嶋は集団の中を強行突破する。

そして、集団の先頭でコントロールしてる京都伏見達に追いつく。

「ここを通りたければ…僕達を抜きな!!」

次回話に続く…。

## 京伏 嵐山始動！

「あらあら。君たちさく。最後尾から追いかけてきたのかく。いやーあつぱれあつぱれ  
!!」

嵐山が軽く佐々木達に冷やかにいう。陣乗して京伏のクライマーの岸も話しかける。

「君たち面白いな。脚がガクガクでプルプルになった中嶋君を引いて先頭を追いかけようとする佐々木君く。君らの追走劇には感心があるな。」

「あんたらに都合の良い話をしようか？」

「なんだよ!!」

「わいらと協調しよか？ 協調すれば早なるやろ。お互いに先頭に追いつきたいという気持ちは一緒やから。8人で交代しながら走れば追いつくで。ほな。京伏列車に乗るか？」

佐々木は一瞬考えた。

たしかに：協調すれば速く走れるようになるし佐々木の負担もだいぶ軽減される。だが：協調することによって沼津南高校にとつて不利な状況になるかもしれない。先頭に追いつくということは箱学と総北、沼津南、京伏の4校で争うことになるからだ。

中嶋は止めようとした。

「ここで！ 京伏と協調したらダメだ!! 昨日お前たちが必死に集団をコントロールした意味がなくなる!!」

「……。」

「さあ！ 決断しな！」

「協調するわ！ おめーらと一緒に走るわ！」

その場にいた京都伏見達の選手達は全員驚いた。

まさか：協調に乗るとは予想をしてなかったからである。

中嶋は佐々木に再度確認した。

「佐々木!! ここで協調するというこの意味を分かっているのか!! くれじゃ奴らの思う壺だ!!」



「わかつてはいる!! しかしなく。お前さんよ! オメーのその脚と俺の脚が持たないと思うんだよ!!」

中嶋は佐々木の脚を見た。

たしかにハイケンデンスでスタート付近から富士五湖あたりまで全力で引いていたため疲労が溜まっていることはわかった。

このままでいくとチームに合流するどころか2人ともリタイヤすることになる。

苦渋の決断だ。中嶋は何も言えなくなった。

「わかった…。京伏…。協調だ…。」

「はははは!! 自分達が今置かれてる状況がわかったんやな!! ならく ここから京都

伏見は加速や!!」

「ああ!!」

周りに走つてた選手達もしがみつく!

しかし…協調と決めた瞬間に京都伏見は加速をし集団を置き去りにしていった。

佐々木と中嶋は関西でナンバーワンのチームの力を痛感した瞬間でもあった。

「これが嵐山さんと家斉さんの引きなのか!! すごいな!! 一切の空気抵抗を感じない走

り!! さすが…関西一のチームだ! こりや…面白いことになってきたな!」

「なんだ〜コイツら!! 尋常じゃね〜!! 何一つもロスがない走りに…この安定感…  
協調して良かったのか〜。」

京都伏見と佐々木と中嶋は先頭を追いかけていくのであった。

その頃。先頭集団では2日目の山岳争いが始まるうとしてた。

箱学と総北のエースクライマー達が飛び出していく。しかし、4人で先頭になんとかついていつてる沼津南は北上を中心にコントロールしてた。そして、焦りや不安が積み上げていた。

「くそ!! 2日目の山岳リザルトを目指して箱学の美影と総北の大坂が飛び出していく!! くそ!! このままではヤバイ!! 多村! 2日目の山岳リザルトをとりに行って良いか!」

「北上君! 冷静になるんだ!! ここできみがいったらチームはバラバラになってしま  
う!!」

「オレは…オレは…! なんも出来ねーのかよ! チームのために!」

「中嶋と佐々木!! 一刻でも速く登ってこいよ!! 俺たちはここで引き離されたらマズ  
イんだ!」

「北上君。山岳リザルトはとれない。だから…今は中嶋君や佐々木君が来るのを信じて

待つんだ!!　まだ…山は続き逆転出来るチャンスもある!　心を折れたら終わりだ!!」

「くっ…。」

「俺たちが逆転出来るチャンスは…甲府盆地に向かっていく長いトンネルから。あそこから長い下り坂になる。長いダウンヒルで先頭と差を縮める!!　そこまで佐々木君と中嶋君が来れば問題ない!」

「今泉くーん!　ここから山岳区間が終わるまでは引いてね。美影くーん!　山

岳賞をとりにいくんだ!」

「こうすけくん。わかったよ。美影さん。行ってらっしゃい。」

「ああ!　ここからはシヨウタイムだ!!　行ってくるよ!　箱学のエースクライマーとしてね!　総北よ!　僕と対戦する相手はどいつだ?」

「僕が出るよ。総北高校キャプテンの大坂坂道がね。美影君。キミと勝負できることは光栄だよ。さあ!　やろうか!」

「ふーん。良いだろ。受けてたとう!」

美影と大坂は山岳リザルト争いに入る!

そして、箱学と総北はゴールに向けて加速を開始する。

「くそっ! こつちにはクライマーがオレしかいない!! 脚がいてー! チームを引つ張るのに精一杯だ! エースの2人と勘太さんを山頂まで引かないといけないんだよ!」

すると、山中は多村に質問する。

「オレが引いていいか。北上はここまで1人で引いてる。2日目のゴールは多村に任せる。アシストは勘太だ。この2日目のゴール前までは平坦な道だ。だから…オレを使ってくれないか?」

「あなたは…ゴール前のあの闘争心を活かして2日目のゴールをしてほしいと考えている。ダウンヒルで勘太さんが引いて平坦になったら僕が山中さんを引いて山中さんがエースとしてゴールする。それが…僕が今…考えているオーダーだ…。そのオーダー通りに決行しない限り総合優勝はない!! だから…北上君には今…頑張ってもらえないんです! だから…許可出来ません…。」

「あいつらが来たら…オーダーは変更するのか?」

「はい……。だから…来てくれることを信じるしかないのです。この絶望的な展開に僕

達は戦わないといけない。だから…もし…北上君が苦しいのならば僕がひく！ 平垣  
までの道のりはまだある！ 代わろうか！ 北上君！」

「ああ…。頼む…。」

佐々木君！ 中嶋君！ ここまで頑張つて追いつくんだ！ 君達はこんなところで  
リタイアされては困る！！

次回話に続く…。

## 美影良和と宮崎の出会い

一方。箱学と総北は先頭集団を走っていた。

お互いのエースクライマーを筆頭にチームを引っ張っていた。

ここの山岳賞がいかに重要か双方のチームはわかっている。それはこの山道を登り切ると長い下り坂になり甲府盆地に入る。そこでゴール争いが始まることに気づいていた。だから、この山頂が勝負どころであった。

「僕は総北キャプテンの大坂坂道。この山岳は譲れないよ。」

「私は箱学の新山神。あの東堂さんの次期スリーピングビューティー!! 美影良和。女子ファンはピカイチだろう! この山神! いざ尋常に勝負!!」

「あの山神の東堂さんの次期後継者という訳か。面白い。キミとやるのは初めてかな?」

この大坂坂道。山の勝負では負けなしだからね。」

「そうか。自称無敵の大坂君。キミと僕。どっちが最強か。決めようではないか。では行くよ!」

すると美影はロスのない静かな走りで箱学のチームメイトを引っ張りいつのまにか30mも離れた。それに大坂は驚きを隠せなかった。

「なるほど。たしかにあの東堂さんと同じフォームであり軽々と登っていく。よつぽど研究したんだな。厄介な敵だ。しかし、僕も負ける気がしないね。」

「みんな。僕の走りについてこれるかい？ これから僕は本気モードに入る。きつかったらいつてくれ。」

「大丈夫だ。坂道。おまえの別名は山の支配者。おまえの天性の勘とクライムセンスを信じる。だから。気にしないで登ってくれ。俺たち総北は5年ぶりの総合優勝に向かって走ってる。異論はないよな！みんな!!」

「はい!! 俺たちは大坂さんを信じてます!」

「ありがとな。みんな。オレはキャプテンとしてこの山岳は必ずとると約束する。それと…翔。ありがとな。」

「ああ。」

「ならば…総北! 始動だ! いくぞ!」

大坂はダンシングの体制になり一気に箱学に迫る!

ついに箱学を捉える。前で走ってた箱学の選手達が驚く。

「宮崎君! 総北が追いついてきました!」

「あれれー。圧倒的な差をつめて登ってきたけど。ここで追いついて来ちゃうか。ま。想定内だけどね。」

「あれ。僕の登りについてこれるなんて思わなかったよ！　それでこそ好敵手だね！　総北！」

「美影くん。まだ。いけるよね？」

「こんなんでもバテる山神ではないよ。宮崎君。」

「なら安心〜。」

「キミと僕が出会った時は意外な出会いだったな…。」

遡ること一年前。練習中の出来事であった。

宮崎が自主練で箱根の山を登っていた時。

「明日のヒルクライム大会で僕が優勝する！　あの…エースクライマーの山田君を蹴散らすためにね〜!!　僕が高校に入って…ゼツケンをとることが出来なかったレッドゼツケン!!　明日は必ずとってみせる！　それが…僕の目標だからね！　じゃないと！　僕が理想とするチームになれないんよ!!」

この年の箱学のエースクライマーであった山田俊明。インターハイで3日間山岳ゼツケンをとりインターハイ総合優勝の立役者としてチームのみんなからは精神的支柱の存在であったため宮崎にとって邪魔だった。この時から宮崎は箱学の理想像を描いていた。



その時、宮崎から横をすり抜けた一人の自転車乗りがいた。

その人物が美影だ。しかも：ママチャリでカゴにはカバンが入っているがらスララと登っていた。それに音を立てずに横を抜いていったため宮崎も後ろから自転車が来てることに気づかなかった。

「嘘だろ…。ママチャリでこの激坂を登っていくヤツは：珍しい…。

しかも：なんだ…。あのロスのない登り方は…。さらに：箱根学園の制服を着てるのではないか…。とにかくついていこうか！」

宮崎は美影の後をついていった。しかし、思った以上にスラスラと登っていき疲れていなかった。

「なんだ!! こいつ!! ママチャリでありながら疲れ何一つも見せずに登っていくのではないか!! これは…もしかしたら…。」

「おい!! その箱学の制服を着てる人!! 少し止まってくれないか?」

「赤の他人に話しかけられるなんて：嬉しいではないか。うん? なんだ。男子か。興奮だ。これが女子だったら良かったな。しかし：キミ。さつきから僕の後ろについてくるし：しかも：軽々しく止まってくれなんて言わないでくれないか。それに僕は急いでいるんだよ。これから親の手伝いをしないとイケないんだ。じゃーね。」

すると美影はスピードを上げて登っていった。

「おい！ まてよー！」

宮崎は美影の横に並ぶ。

「何だね？ このダサイ服を着たヤツは。うん？ よく見ると箱根学園ってアルファベットで書いてあるではないか。箱学の生徒なのかな？」

「キミ？ 箱学のなんかのスポーツの部活の人かね？」

「ああ。箱根学園自転車競技部だ。オレは宮崎浩輔。1年だ。」

「ふーん。まず。キミは歳上に敬語を使うところから学んだほうが良い。僕は美影良和。2年だ。礼儀がなっていないキミみたいな人に関わりたくないな。」

「そりゃ失礼しましたわ。しかし美影さん。あなたみたいなナルシストで痛い先輩が箱学にいるなんてね。珍しいもんすね。」

「何？なんていった？」

「僕にはわかるんですよ。あなたみたいな人は……。いかにナルシストで痛い方って。プププ。」

「てめえ！」

すると宮崎は加速していった。美影は宮崎にバカにされたことが気に食わなくて必死についていく。また宮崎の横を抜いていった。

「待てよ！ この1年やろう！ そので生まれ！」

「やつぱり……。こりや……。面白い人を見つげちゃった。」

「わかりましたよ。止まりますよ。」

宮崎と美影は近くのコンビニに自転車を止めた。すると美影は宮崎の胸ぐらを掴んだ。

「おい。ナルシストで痛いヤツっていう言葉を取り消せよ。」

「そんな小さいことで怒っているようじゃ女子の評判が下がりますよ。美影せんぱい。」

「くっ……。たしかにそうだな……。」

「案外とちよろいもんですね。ならば……。話しやすい。」

「あなたが更に女子の注目を集める方法がありますよ。聞きたいですか？」

「なんだ！ それは！ 是非……。聞かせてくれ！」

「あなたが自転車競技部に入ることですよ。」

「!? つまり……。そのダサイ服を着て自転車を漕げということか？」

「まあ。部に入ればこの服を着なきゃいけません。例えば……。ヒルクライムという箱根の坂道みたいな坂道を自転車で登っていく大会があるのですが……。もし……。あなたがこの

大会で一番をとつたら…観客もそうです…女子から人気が高まることになる。つまり…何が言いたいかわかりますよね？」

「つまり…優勝すれば女子の人気もそうだが…有名人になれるということか!!」

「もちろん。それに…あなたは…僕が乗っている自転車と違ってママチャリでこの坂道をロスなくスイスイ登っていく。あなたには…坂道を登る…クライマーのセンスがピカイチだと感じたんですよ。いかにあなたがすごいかは…僕の自転車を持つてみるとわかります。」

「ほーう。おまえの自転車を持ち上げるぞー！  
!!? なんだ!! めっちゃ軽いではないか！」

「これはロードバイクといって自転車に必要な物が詰まっている自転車。あなたが乗っているママチャリは安全性と利便性があるが…ロードバイクみたいに速くは走れないし車体が重い。わかりやすく言えば車でいうAT車とMT車みたいなもんだ。つまり…重い自転車で速く走れない自転車でこの坂を息を切らせずに登っていくことが凄いかはわかるはず。あなたはクライマーの才能がある。だから…僕はあなたを自転車競技部に誘いたいと思っただんですよ。」

「なるほどな…。僕には…そんな才能があると思わなかったよ。生れながら恵まれた顔

であり……この体型。それに女子人気は才能あると思つて生きてきたが……まさか……自転車の才能もあるなんて……。本当に僕は……ヒルクライムという大会で優勝すれば女子人気は高まるというのは間違いないだろうな！」

「間違いないでしょ。一回騙されたと思つて……明日のヒルクライムの大会に参加してみませんか？　今なら……まだ間に合うと思うので……是非。」

「ああ！　本当か否か……確かめてやる。それで良い。」

その翌日。箱根山のヒルクライム大会が開催。スタート位置に山田と宮崎がいた。

「よし。宮崎。インターハイの時みたいに山のアシストを頼むよ。」

「はい。山田さんの最期の大会でありますから……全力でアシストしますよ。」

「おう。頼むぞ。」

「あの。少し……トイレにいつてきていいですか？」

「わかった。スタート時間ももう少しだから早くしろよ。」

「はい。」

宮崎は内緒で参加してる美影のもとに駆けつける。

「僕は……あなたのアシストをしますよ。僕の言われたとおりに走ってくださいよ。」

「なんだこれは!!　さつき……ローラーっていうやつで自転車を漕いだが……全然違う!!

速いなく!! この乗り物!!」

「でしょ。あなたに僕のスペアバイクを貸しますよ。あなたは一般参加者で最後尾になりますか…必死に僕についてきてくださいよ。」

「ああ。」

そして、スタートする。宮崎と山田は2人で先頭集団にはいる。しばらくするとだんだん集団の人数が減っていきレースの終盤になると2人だけになった。

「よし。ゴールまであと3キロ。逃げ切るぞ。宮崎。残りの500mぐらいまで前で引っ張ってくれないか。」

「はい。」

「さて…そろそろですかね…。本当の楽しみは…。」

「お。本当にここまで登れてきた!!すげーな!! この乗り物!」

「きたか。」

「なんだ! 一般参加者で先頭に追いついてきたのか!!それになんだ!あの走りは!全くロスがない走り!!一般参加者と思えない走り!!宮崎!! 全開で登れ!!俺たち箱学はどんな大会であれ1番でなくてはならない!」

「残念ですが…あなたは…ここでご退場願いましょうか!!」

「何を言ってるんだ…。宮崎…。」

「言葉の通りですよ…。山田さん。」

すると宮崎は美影のアシストに入る！

「宮崎く！ まだオレは登れるぜ！優勝はオレだからな！」

「約束通りにあなたを優勝させますよ。安心してください。ベストポジションまであなたをアシストしますから。」

「宮崎!! お前!! 待て!!」

すると宮崎は美影をつれて登っていく。山田も必死にくらいついていく。

「何のつもりだ！ 宮崎！ お前は何を考えている!!」

「何を考えている？ ははっ。それは…僕が理想するチームを作るためですよ。あなた達みたいなの…生温い友情や情熱なんていらなそうですよ。僕は…どんな手を使っても…敵味方関係なく僕が必要とする勝利とそれに導く行動をするだけですよ。それ

が僕の考え。では…さよなら…。箱学の元エースクライマーさん。」

「待てよ!! 宮崎!! お前には!! 失望したぞ!」

「さて…。あれもそろそろかな…。」

山田は感情が高ぶったせいで冷静さを失った。

すると…道路に転がっていた木の枝が突然タイヤに挟まり落車をしてしまう。

そして、宮崎はゴール前の100mのところで美影をはなして美影の優勝に導いた。一般参加者初の優勝者となった。その後、美影は箱学の自転車競技部に入ることになる。

「今…思えば懐かしい記憶だな…。さて! 美影君!! キミが女子にモテるところは

よここよこ。さて! やるか!!」

「ああ! 総北のモブキャラみたいな顔をしたキャプテンには負けたくないね! 残りの2キロ! 全力で輝くよ!!」

「オレはモブキャラじゃないぞ。美影君。」

「待たせたな。浩輔。俺たち総北はジャージが6枚揃って完成形だ。そろそろ山の勝負を決めようぜ!」

「ゆうきくーん。キミに…いつも邪魔される…。この山だけは譲れないな!!」



次回話に続く…。

## 2日目のクライマー対決!

「残りの2キロ…。ガチな真剣勝負だ! 美影君!」

「総北と箱学のクライム勝負…。全力で羽ばたくよ!」

二つのチームのエースクライマーが引つ張る!!

美影の静かでロスのない走りで大坂の全力な登りで膠着状態になる。

「しかし…このモブキャラキャプテン…。ちよくちよく僕のブロックに入っては絶妙なタイミングを計ってアタックを仕掛ける。それについていく総北も中々だが…何より…チームの脚の状態や表情。勾配の感覚を考えてしつかり登っている。これは…総北を仕切るキャプテンであり山の勝負では無敵なのはわかる。」

「美影君。キミが次期山神だというのはわかる。前に動画で東堂さんの登る姿を観たことがある。まるで…そっくりだ。勇気があればだけ箱学を警戒してる理由がわかる。箱学は常勝チームでありこのインターハイでは常連校として毎年君臨してる。その実力がわかる。しかし…今年の箱学のチームは宮崎君やスプリンターの桐谷君を除いて過去の大会でタイトルを取れていないメンバーが4人いる。だから…分析も対策も出来

ないし予測不可能なのだ。さらに…1人1人実力が全国レベルだ！これは…油断大敵。」

「あれ？一瞬ペダルを緩めましたか？モブキャラキャプテン！」

「だから…モブキャラキャプテンじゃなくて総北キャプテンの大坂坂道だよ。美影君。」

「さて。そろそろ仕掛けるか！」

箱学は勾配が少し上がったところでアタックを仕掛けてる！

大坂も引かずにくらいつく！

「やりますね！」

「美影君。キミもだよ。」

更にお互いヒートアップする。いつの間に山岳リザルトまで残り1キロを切った。

「残りの1キロ！そろそろファイナレにしよう！今泉！キミに頼みたいことがある。」

「なんですか？？」

「ここからはオレが山頂をとる！なるべく速くチームを連れてこいよ！僕がとりたかった山岳賞。今日は頂くよ！」

「全く…。相変わらずワガママな先輩ですよ。こうすけ君。どうする？」

「……。キミは……。本当に目立ちたがり屋だな。美影君。」

「はは。そうこないとな! 女子人気も山岳もオレがナンバーワン!! 誰にも譲れないよ!」

すると大坂は一瞬考える。出した答えはこのままチームを引きながら山岳賞をとるといふ決断をした。

「美影君。残りの数百mでキミだけ出るのかい? せっかくチームを引っ張りながらここまで来たのに? その判断は間違っていると思うよ。」

「僕はね! 1番で山岳賞をとりたいんだよ! 僕に注目が集まる。そうすれば……女子の視線も集まる! 僕が1番輝ける場所なんだ!」

「この人……。自分の名誉のためにインハイを走っているのか。少し変わってる方ですね。この山の支配者! どんなことがあるうとも山を譲る気もないし負けなから!」

「さて。僕も本気で行くよ! みんな! 大丈夫か!」

「ああ。」

両者は互角の勝負になる。

その頃。沼津南は第2給水所地点に来る。そこに熊野と純太。マネージャーの2人

が立っていた。熊野は走りながらボトルと補給食を渡しながらレース状況を説明する。

「多村くん！ 先頭集団とのタイム差は2分12秒です！ まだ…あの2人は来てないのでですね！」

「レース状況を言ってくれてありがとう。2分も差があるならまだ逆転のチャンスがある。あーまだ来てない。あの2人が来るまで我慢です。」

「はい！ 僕は…信じてますから！ 必ず…沼津南高校が勝つと！」

「ありがとう。熊野君。」

そうすると沼津南は加速していった。熊野の拳が震えている様子を見た純太は熊野の肩をそつと叩く。

「今…多村君が必死に先頭に引つ張っていた。それに北上君もだいぶ疲労が溜まっている感じに見えた。兄さんと山中さんの脚を温存している状態。しかし…まだ2分もある。それに…多村君は逆転のチャンスがまだあると言ってた。そのチャンスがあるところは多分…甲府盆地に向かっていく長い下り坂。そこに勝負をかける。僕はそう思うんだ。」

「そうですね…。僕達も走ってきたからわかりますが…あそこの下り坂ならスプリンターの勘太さんなら一気に差を詰めることが出来る。しかし！ 今頃…先頭にいる箱

学や総北は山頂付近にいますか?もしそこで…一気に差を広がれたら…。」

「多村君はきつと…自分達が山頂に着くころに6人が揃えばまだ可能性はあるというだ。だから…来るまで信じて待つんだ! 熊野君!」

「はい!!」

すると京都伏見のサポートメンバー達が来た。

「なあ…。さつき…聞いた話によると…8人で走っているらしい…。しかも…めっちゃ速い速度で山を攻略してる。」

「8人? 誰かと一緒に協調してるのか? しかし…何故2人なんだ? 1チーム6人メンバーがいるのに2人だけ協調してるなんて…聞いたことないぞ。」

「だよな…。聞いた話によると…沼津南の2人らしいよ…。」

「マジかよ! たしかに…さつき沼津南の4人は走っていったがな…。もしかしたら…俺たちも先頭にいくつもりなのか?」

「慶喜さんな家齊さんだったら出来るよ! だって! 関西一ナンバーワンのエースとアシストだから!」

純太はこの話し声が聞こえてすぐに京伏のサポートメンバー達に話しかける!

「それは本当か!?!」

「ああ。あんたらもボトルと補給食用意すれば?」

「あいつらはまだ走ってる！しかし…京都伏見と協調しながら先頭に追いつこうとしてる！これなら…まだ希望はある！」

「純太さん！ 佐々木君と中嶋君は京伏と協調してるのですか！これはヤバくないですか！！ 協調するということは…僕達が不利になりますよ！！ それに…。」

「熊野！！ もうセオリーとか戦術とかは今ももうどうでもいいんだよ！とにかく今は6人が揃えば良いんだ！！ もし…今日の優勝は仮に逃したとして明日がある！ 今日出来なかったら明日取り返せば良い！！」

「！！。」

「純太さん… あなたは…サポートとしてチームを信じてる。それに比べて…僕は…理屈や理論に縛られていた部分があった。仲間を信じる心。きつと…僕に足りなかった部分かもしれない…。」

「来ました！」

そこには京伏の岸が先頭に引つ張っていた。

「先頭とはどれぐらいかね〜？」

「3分43秒です！」

「そつかく。りよーかい。家斉。慶喜。まだ行けるよな？」

「ああ。3分43秒ならまだ間に合うで。」

「せやな……。それに……協調しとるから間に合う。」

後ろには佐々木と中嶋が走っていた。2人の表情は険しく疲れている表情だった。純太と熊野はボトルと補給食を渡す!

「良かった! 2人とも! まだ諦めていない!」

「佐々木君! 中嶋君!」

「なーんだ! お前らかよ……。後ろの狂人にエネルギーバーを三本とボトル二本! それに! また顔に水をかける用に一本だ! こいつは! 気力で登っている! しかも! ちよくちよく先頭で引つ張つてる! オレもそうだが!!」

熊野は佐々木に言われたとおりに中嶋に渡す。

「ありがとよ……。熊野……。純太さん……。すみません……。オレのせいで……。」

「キミは昨日良く頑張った!! だから……少し……疲れが溜まっているだけだろ! 僕は君たちが山中さん達に追いつくことを信じてますから!」

「ああ……。頑張るさ……。」

「京伏!! オレが引いてやる! 下がってろ!」

佐々木は先頭で京伏の6人と中嶋を引いていった



「熊野君。あとは信じるしかない。」

「はい。」

そして、総北の大坂と箱学の美影の勝負はクライマックスを迎えていた！

「残りの200m！ 僕は！ 全力で輝く！」

「キミ一人で登ってきたのは意外だけど…良い勝負だ！」

少し後ろで走っていた箱学のメンバー達は総北の後ろについていく。

「さて…。美影君。キミのとおきをおきを解放しろ！」

「行くよ！ 僕は…全力で羽ばたく！」

すると美影の背中から羽が輝くように登っていった。一瞬。大坂はその姿に魅力されペースを落としてしまう。

「なんだ！ この羽みたいなのは！ キミがさつきから羽ばたくと言っていたのはこ  
うゆう事か!! ならばオレも…。」

「すまないが……。勇氣。少しの間……チームを引いてくれ。」

「まさか！ 大坂さんの真骨頂に!!」

「ああ。オレの勘が冴えてきたんよ。多分このままだと山岳賞はとれないとね！ だから！ 少しの間！ 頼む！」

「……。わかりました！」

大坂の親友である門倉翔はこう思ってた。

「ひつさびさに見たなー。坂道の本気の本気モード。あれを出すということは……よつほど……勘が冴えてきた証拠だな!! これは楽しみだぜ！ お前もとれよ！ 山岳を！」

「美影君。キミと勝負できて光栄だよ！ 久々に本気の本気を出せるんだからな！ ミリッター解除!! これが……山の支配者の登りだ！」

大坂は山岳リザルトまで残り50mという土壇場で美影と並ぶ！

「宮崎君のあの出会いから僕はもつともつと輝きたいと思えた。眠っていた才能を開花してくれたキミには感謝の言葉しかない。キミに恩返し出来る場面は……なんだよ。だから……必ずとる！」

「僕が1番輝く!!」

「オレがキャプテンになったからには……チームのみんなを鼓舞出来るような走りがあったいと1年間模索した。悩みに悩み抜いた……。そんな時……みんながオレを支えてくれた

から今の自分がある。そして！今！その答えを証明してくるよ！」

「オレが！ 山の支配者なんだよ!!」

残り…20m。 10m。 そして…。

「僕が1番だ!!!」

「オレは！ 総北キャプテンの大坂坂道だ！」

2人のクライマー対決に決着がつく。

「インターハイ2日目の山岳賞を制したのは…ゼッケン3番！ 美影良和選手です!!」

「

美影は両手を広げながら空を見上げた。

「やったぞ！ 僕は…羽ばたいた…。この瞬間…。たまらない！ 観たか！ オレが

山神の美影良和！ 山で羽ばたく美男子…。天性の顔に体型…そして…山に感謝!!」

「オレが…負けた…。山の支配者であるオレが…逆に支配された…。くそっ…。みんな

…。めん…。」

「ははは！ 見たか！ モブキャラキャプテンよ！ これが山神の実力。しかとご覧になっただろう。山神である以上…支配なんてされない!! ははは!!」

後ろから追走した箱学のメンバーは美影を称賛した。

「まったく。また調子こいちゃいますよ。美影先輩。」

「今泉。お前は少しオレに対する態度を改めないか?」

「箱学のエースクライマーならとって当然だろ。美影。」

「昨日のスプリントでとられた桐谷に言われたくないな。」

「やっぱりキミは…このチームに入れて良かったわ! さて! このままゴールまでいこーか!!」

「宮崎君。キミには感謝してるよ。」

「僕の計画通りになった!! ここで総北の中心的存在である大坂君が…敗ればチームの士気を下げる!! プププ。君たち…総北もここまでだな!! このまま独走して2日目のゴールはとる!」

次回話に続く…。

## 下り勝負！

沼津南高校は4人の力を合わせながら山岳を攻略してた。先行を走る車にボードが出る。そこには箱根学園の美影と総北の大坂の山岳賞の結果が映し出される。それを見た多村は驚きを隠せなかった。

「総北のエースクライマーでキャプテンの大坂さんが……箱学の無名の選手に負けるなんて……」

「多村!! そろそろ交代してくれ!! あと1kmで山頂だ!! そこまで頼む!!」

「……までご苦労様! 北上君! 君はよく頑張った!! 先頭の箱学と総北まで約1km弱まで縮めた!! ここからは僕が山頂まで引き……下り坂からは勘太さんが引く!

そして! 下りが終わってスプリントラインを追加したあたりから僕が山中さんをアシストする! これが……現状いるメンバーで出来るオーダーです! かわります!」

すると山中は多村の先頭に行く。

「!!? 山中さん? あなたが今日のエースなんですよ!」

「……はオレに引かせろ。……からオレは登りも下りもオレが引く! 今日のエースは

…多村!! お前が行くんだ!!」

「何故!!? 今いるメンバーであなが…1番…力を温存してるのですよ…。そのあな  
たがここで! 脚をつかったら僕達は優勝争いに絡めない!! 総合優勝も出来ませ  
ん!!」

「4人ではない! 6人で先頭に追いつき…そして…今日も優勝を狙いに行くんだよ  
!」

「なあ……。山頂までもあと少ししかないのに…佐々木君も中嶋君も追いついて来な  
かった…。こうなると…4人で戦わないといけない!」

「多村。オレは絶対アイツらが追いついてくると確信している。そして…オレが死ぬ気  
で先頭に追いつく走りをする。」

「それでも…僕は許可出来ない!!」

すると勘太は多村の肩を叩く。

「大地は昨日のゴール前争いで敗れた。あいつは…レース後大号泣しながらオレに抱き  
ついてきた。オレのせいで優勝をとれなかったって。皆んなに託されたジャージを1  
番で届けなかった責任。それがきつと大地には残っている。だからこそ…チームの為  
に力になりたいんだ。今日…お前にゴールを託す理由は…お前が1番このチームで強  
いからだ。そして…大地はきつとお前にこのインハイで成長してほしいと願っている

からだ。」

（山中さん……。あなたはいつも僕のオーダーを無視します……。しかし……。それが良かったことは沢山あった！僕と全く正反対な山中さん。何回もチームの力になり……。そして……。このチームを変えていった。僕には出来ないことを山中さんが出来る！）

「わかりました……。山中さん。ここからの下りは山中さん……。あなたに任せます!!」

「ああ!!」

すると山中は戦闘態勢に入りスイッチを入れる。

その頃。京都伏見と佐々木、中嶋は山頂まで残り1km地点まで来てた。

協調しながらクライマーとオールラウンダー組を入れ替えながら走ってた。家斉が佐々木に問いかける。

「なあ。そろそろ山頂やで。あとはキミに任せてええか?」

「はっはっはっ……。またオレかよ……。」

「おやおや……。君たち……。先頭に追いつくんじゃなかったの? それで……。協調に乗ったんやろ?」

佐々木も限界が来てた。いくら協調はしてるといえど先頭で引くと風除けになる為余分に体力を使う。それに……。協調する前までは全力で中嶋を引いていたため疲労も溜

まっていた。

「バーロー。行けるぜ……!」

佐々木は再び先頭に立ち全力で登っていく。それについていく京都伏見と中嶋。そして、山頂に到達すると佐々木は嵐山に問いかける。

「はっはっはっ……。山頂まで引いた……。ここからはオタクらのスプリンターを出して……下り坂を引いてくれ!!」

すると……嵐山は満面の笑みを浮かべながら佐々木に語りかける。

「いや〜。ここまでご苦労さん! キミのおかげで……先頭争いの射程圏内に入ったや!

さて! 君たちはここでおさらばだな!!」

「なんだと!! ぶざけんな!!」

「バカじゃないの? 君たち? 普通く協調乗るか? 君たちが不利になるのはわかってるのに……。これだから一年坊主は〜。経験がないからなく!! 沼津南は捕らえた!! さ

て! 宮本! 先頭いけるか?」

「嵐山さん! 行けます!」

「バイバイ〜!」

「ちよ……待てよ!!」



佐々木はついでにこうとするが脚に少し痛みが来てた。

「いたつ……。クソくそ!!」

「佐々木。この協調は正解だよ。」

「えつ。お前…何を言ってるんだよ…。」

「佐々木や京都伏見が引いてくれたおかげでオレの力が温存することが出来た!!」

「お前…まさか…。」

「ああ…。辛そうに演技してたのは…京都伏見にオレが回復しててことを察しさせない為だ。」

「お前…いつから回復したのか？ それは…第1給水所あたりからだ。オレがあの時…熊野からもらったあのドリンク。あのドリンクには疲労回復に効く成分が配合されていた。あれを飲んでいたらどんどん回復していった。後で…アイツに感謝しないとない…」

「くつ…。くははは！ お前は…やっぱり狂人だな!! こりや面白い演技を見させていただいたぜ！」

「佐々木！ オレはこのインハイに絞って平地も練習をしてたからな！ この下りでギアをMAXにして京伏もねじ伏せて…そして！ 山中さん達に追いつき！ 箱学と総北も

抜いてやるぜ!!」

「こりや面白いぜ!! さっさと蹴散らしてやろうぜ!!」

「ああ!!」

沼津南の下り勝負が始まる!!

次回話に続く…。

## 沼津南。再始動！

箱根学園と総北は先頭を走っていた。箱根学園2年のスプリンターの谷中を筆頭にチームを引っ張っていた。対する総北は3年のスプリンターの宇津木と門倉の2人体制で箱根学園と互角に走っていた。総北はキャプテンの大坂が山岳勝負で敗れたためチームの雰囲気暗かった。それに対する箱根学園は余裕な表情を浮かべ走っている。

「宮崎君！ 総北は僕達についていくのに精一杯ですね！」

「ああ。総北ちゃんはキャプテンのモブキャプテンが負けちゃったからね。プププ。大黒柱を失った総北ちゃんはもう精神的にダメージを与えちゃったな。谷中くん！ キミ。全開でいってええよ！」

「ああ！ その気だ！」

谷中は持ち前の体格の良さでスタミナ。そして、力強いペダリングで総北を離しにいく！ 総北の2人目のスプリンターの宇津木も必死に食らいついていく。

「くそ！ こいつ！ はえー!!」

「宇津木！ オレが引く！」

門倉が先頭に変わり総北を引っ張っていく。

「こうすけ！ 俺たち総北はまだ諦めてないぞ！」

「なんだ。勇気くーん。キミのキャプテンはもう君達にオーダー出してないじゃん。ずーと下向いてるし…。それに空中分解寸前じゃん！君たちは。君たちのくだらない友情ごっこしてるからこうなるんだよね。いや。滑稽滑稽。それに…君たちは僕達についていくのも精一杯だし。」

「くっ…。」

すると、2日目のスプリントリザルトラインを箱字の谷中が1番目で追加した。

「あくあ。キミと話しているうちに2日目のグリーンゼツケンも僕達がとっちゃった。レッドとグリーン…。となると…イエローは僕がとっちゃおうかな。ははっ。」

「お前にはとらせない!! 翔！ 宇津木！ 全開で行くんだ！」

「ああ！」

その頃。京都伏見は300m先に見える沼津南の4人を捕らえる。

「みーつけた!! 宮本！ お前のとっておき。見せたれ！」

「はい！ 嵐山さん！」

宮本武。慶喜と家斉が認める関西で一番速いスプリンター。別名は「京都のスピードマン」彼の得意技は風の抵抗を感じさせないようなスマートな走りと身軽さ。普通のスプリンターは体格が良い選手が多いが彼は小柄である。その走りに周りも注目を集める。

後ろから異変を気づいた多村は指示を出す。

「後ろから京都伏見が来ました！ ここからは勘太さん!! お願いします!!」

「大地!! かわれ!! ここからはオレが引く!!」

勘太が先頭に立ち差を広げにいくが…数的不利である沼津南は立ち打ち出来なかった。あつという間に京都伏見に抜かれてしまう。勘太も必死にもがくが数には勝てなかった。

「くそ!! 6人いれば……。それにもう1人スプリンターがいれば!!」

京都伏見に抜かれた沼津南は更に危機を感じる。抜いていった京都伏見のキャプテンの慶喜は笑みを浮かべた。

「ああ。沼津さんもかわいそうやな…。昨日あれだけ頑張ったのに…。まさかここで終わるなんてね。沼津南…。あんたらと一度対戦したかったけど残念やなく。」

多村は京都伏見に抜かれた瞬間に心が折れた。

(箱根学園に総北に…京都伏見まで…。僕は…この4か月間…。何をやってきたんだ

…。僕が…キャプテンじゃなかったら…こんなことにならなかった…。クソ！クソ！

「勘太さん。このまま走ってください。僕達は完全敗北しました。せめて…今日は4人で2日目をゴールしましょう…。僕達のレースは終わりました。明日も…総合優勝はありません。僕のせいで…このチームを勝たせることが出来なかったです。申し訳ございません。」

すると勘太は思い切り多村の頭を叩いた！

「ふざけんじゃね!! 何が…レースは終わりましただ!! まだ終わっちゃいねー!! 前は何もわかっていないな!! 仲間に託された想いを!! 熊野や純太はインハイで走りたくても走れなかったんだぞ!! 俺たちのために予選会で優勝して俺たちを本戦に送り出したんだぞ?! アイツらの気持ちをお前は無駄にするのか!!」

「……。」

「多村。オレはまだレースが終わったと思ってない。佐々木や中嶋もまだ諦めてないさ。アイツらの底力は並大抵じゃない。アイツらとヒルクライムしたことあるけど窮地になればなるほど燃えるタイプだぞ。アイツらは…。オレはそこに賭けてる。」

「北上君…。」

（僕はただインハイで走る理由は宮崎君を倒すことだけしか考えていなかった。兄さん

の仇をとるために……。そのために僕は無名の学校に入り自転車部に入部して自分が理想とするチームを築き上げた。しかし、山中さんや中嶋君、北上君、菅原兄弟や佐々木君、熊野君やマネージャー達と出会って僕は仲間の暖かみを感じた。僕の環境が変わっていった。そのことを教えてくれた皆んなに恩返しをしないとイケないのに……。僕は……。諦めてた。情けない。不可能を可能にする！それが沼津南高校自転車競技部だ！」

「みなさん……。すみませんでした……。まだ……。僕は諦めてない！！ 不可能を可能にするオーダーを出します！ ここから本気で先頭を追いつきます！！ そして！ 優勝する！！」

すると……。後ろから見慣れた人物が走ってきた。

「ぶは〜！ やつと追いついた！！ 多村や北上！ 山中さんや勘太さん！ すみません！！

お待たせしました！！」

「くそ〜。やつと追いついたぜ！！ あ〜あ。この狂人を連れてきて疲れたぜ〜。さて……。主人格さんよ〜。あなたの指示通りにこいつを連れてきたぜ……。そろそろ交代するから。オレは疲れたぜ……。」

すると佐々木は主人格に戻る。すると……。佐々木は緊張が途切れたせいで落車しそうになる。すると中嶋は佐々木の肩を持ち仲間と合流する。多村はこの2人の姿を見て一粒涙を流した。

「キミたちは…本当に…最後尾からここまで全力で走ってきたのですね…。信じられない…。」

「だから言ったら。不可能を可能にするって。コイツらはそれを再現したんだ。多村。6人揃ったし…オーダーを頼むぜ。」

（僕はこのチームの一員で良かった!僕がやってきたことは無駄ではなかった。佐々木君と中嶋君が来た!ここからは僕の仕事だ!!）

「中嶋君! 佐々木君! あと少しいけるかい?」

「おう! オレは箱学と総北、京都伏見をぶっ倒すためにここまで来たからな!」

「うん。僕は別人格の影響で…少し休みたいけど…少し回復すれば大丈夫…。」

「わかった! では! 沼津南! 再始動だ!」

沼津南は先頭を走る京都伏見と箱根学園と総北を追いつくために再始動する!!

次回話に続く…!



# 先頭争いの死闘 前編

2日目のゴールまであと5km地点まで箱根学園は先頭を走っていた。大黒柱の敗北により総北は陣形を崩しており先頭にしがみついているエーススプリンターの門倉とエースの真中。そして、総北の3年のエースアシストである永山雄太の3人で踏ん張っている状態だ。

永山雄太。彼は総北の副キャプテンを務めている。千葉県の大会で数々な賞をとっており、元クライマーだったがキャプテンの大坂坂道がオールラウンダーにコンバートしてほしいと頼まれ1年かけて練習をしてきた。努力の天才と部員からは呼ばれている。

「坂道が負けてしまった分、ゴール争いはこの3人でいく。宇津木がクライマー達を連れてゴールしてもらおう。翔と勇氣。お前ら。今日やるべきことはわかってるよな？」

「わかってる。雄太。しかし、今日は誰がいく？」

「やられてしまった分オレが今日ゴールを狙いにいく。翔も勇氣も脚をつかっているだろ。ここは脚が万全なオレがいく。だから、2人でアシストを頼んでほしい。」

「わかった！　いくぞ！　翔！」

「ああ！」

すると、後ろから車輪の音が聞こえてきた。

そこには京都伏見が追い上げにくる。

「いやー。計画通りやな。慶喜。」

「ああ。このラスト5km地点で先頭に並ぶ作戦は上手くいったな。宮本。あとはチームを連れてゴールまで引いとき。ワイら…。出るわ。」

「はい！」

「さて…箱学さんと総北さん。ゴールまで勝負しましょうか！」

宮崎が反応する。

「あれあれ。まさか京都伏見がここまで来るとは思っていなかったよ。嵐山君と菊川君。君たちは関西一というのは知ってるけど、僕の眼中にないかな。」

「いやー。なめられたもんやな。オレら。あんたら…昨日のゴール争いで疲労も溜まっているし…僕らはなく。このために脚を温存して来たんだよ!! 君達総北と箱学を倒すためにな! 行くで…家斉。こいつらに見せたるか! 京伏の力をな!!」

「ああ！」

家斉の表情が変わりダンシングの姿勢になる。まるで鬼のように。

2人の息があつた走りで一氣に差を開く。箱根学園も動く。

「ほう。そりや1日目で集団を引いてたら力も温存してるわ。この2日目で勝負をかけ明日に繋げる作戦か。悪くはないが……。それでも捻じ伏せてやるよ!! さて……うちらも1人力を温存してる奴がおる。ウチのとおつておきを出そうか!! 行けますか? 根岸さん。」

「……………」

その男は軽く頷いて先頭に出る。

根岸正一。箱根学園3年のエース兼アシストであり、無口で表情を変えない男。タイトルはとつておらず全くの無名の選手だ。その異様なオーラを放ちチーム内で恐れられてる存在だ。桐谷は根岸に対してこう思っていた。

(根岸……。こいつは何も喋らないし表情を変えないから何を考えているのかわからない……。だが……。一回コイツと走つた時に異様なオーラに推されいつのまにか差を開かれた。宮崎君がゆういつ態度を控えながら話かける根岸。恐るべく相手は身近にいる。)

「さて。根岸さん。アシストを頼みます。前にいる京都伏見に力を見せてやりましょう。そして! 箱根学園が強いと証明しましょう!」

根岸はまた頷いて気持ちを入れる。

「桐谷くん! あとは頼むわ。僕ら行つてくる。」

「ああ！今日は一番とれよ！」

「最初からそのつもりですよ。」

根岸と宮崎は先頭を走る京都伏見に追い上げを開始する。

それに反応して総北も動く！

「翔！勇氣！追うぞ！」

総北も真中と門倉と永山の3人で追いかける！

箱根学園の桐谷が後ろから異変を気づく。

（やけに後ろからの声援が多い。他にも先頭を争うチームがここまで来てるのか…。しかし…あと残り4kmを切ったところで先頭に追いかけることは出来ない。それに…この場に総北と京伏を含めた選手が1人いる。抜くことは出来ないだろう。）

その頃。嵐山と菊川はもの凄いスピードでゴールに向かって走っている。嵐山が後ろを振り返るとそこには箱根学園の根岸と宮崎がいた。

「あらあら。あんたら。このスピードについて来るなんて対したもんだ。ウチの家斉をなめたら痛い目見るぞ！」

「凄いですね。関西一の運び屋は。伊達じゃないすわ。しかし…この根岸さん。もつ

と本気出しますよ。」

根岸は更に加速をして京都伏見を離しに行く。

すると嵐山と菊川に変な汗をかく。根岸の異様なプレッシャーに押しつぶされそうになる。

(手が震えてる…。この凄い圧に…変な汗が…。コイツ…。ただもんで無いな！)

「家斉。本気出さんと勝てんよ。」

「ああ。アイツのオーラに負けそうになつとる!! プレッシュャーを跳ね除け!! 慶喜!!」

「ああ!!」

京都伏見も更に加速。

総北も必死にしがみつく!

「翔! 交代だ!」

「ああ! 残りの3km! 全力を出し切る!」

前を走る4人を追うのに精一杯の2人のアシスト。チームを優勝させるために全力を出す!

そして、ついに沼津南高校は箱根学園と総北、京都伏見の集団に勘太の全力の引きで追いつく！

「見えたぞ！第2集団！先頭はもう出てる!! ここからはどうする!! 多村!!」

「……。今日のアシストは山中さんと佐々木君の2人に頼みます！勘太さんは中嶋君と北上君を連れてなるべく早く早くゴールしてください！

まずこの集団を抜くのに少し僕は本気になります……。後ろについてください！山中さん！佐々木君！」

「ああ！」

桐谷が反応する。

「!!? そんなバカな!! 背後からの異変はお前達か！沼津南！」

しかし!! 残り3kmもない！先頭は今頃遙か先を走っているだろ!! ここから優勝を狙うのは無理だぜ！」

「そんなの。やってみなきやわからないじゃないですか。沼津南は不可能を可能にする!! それがこのチームのスローガンだ!!」

多村と山中、佐々木は第2集団を置いて先頭を追いかける。

その無謀な挑戦に桐谷は呆れてた。

「バカなのかな？ このチームは？ 普通に考えたら1km以上離されてるのにゴールを狙いにいくなんて無理でしょ。」

勘太は桐谷に話かける。

「いいえ。このチームは本当に不可能を可能にするチームですよ。無謀なことも乗り越える力を持っている。それがオレらのチームだからな。」

「全く。キミまでもそんなことを言うのか。呆れたぜ。」

沼津南高校の怒涛の追い上げで先頭集団を追う！

次回話に続く…。

## 先頭争いの死闘 後編

2日目のゴールは甲府駅前にある舞鶴城まで残り1km。

根岸と宮崎の箱根ペアと真中、門倉、永山の総北ペア。嵐山と菊川の京伏ペアの7人で2日目の優勝争いのクライマックスを迎える。

「さて〜!! そろそろ〜! 僕が出ようかな〜!」

「こうすけ!! オレは今日はお前を止める!!」

「勇気くーん。キミはいつもそうやって僕の邪魔をする。君達総北が3人でゴール争いに絡むのも僕を止めるストッパーが1人必要だからでしょ。その1人が勇気くーんなわけだ。」

「……。」

宮崎は不気味な笑みを浮かべながら真中に問いかける。

「残念だけど…僕…。今日はゴールを狙いにいかんわ。何故なら!!キミらを止めるからね!! さて…根岸さん! あなたの真骨頂を出しましょうか!! ここで!」



周りにいた選手達は全員驚いた。この場面で普通はアシストがエースを引き、残りの数百メートルでエースを出すのが今日の箱根学園はアシストである根岸をこのままゴールするという異例な作戦である。危機感を感じた総北の永山と京都伏見の嵐山は真っ先に先頭に行こうとするが、宮崎がブロックに入る！

「すまんなく。君達を止めて…根岸さんの単独優勝をさせるんよ!! 通らせないよ!」

「宮崎! お前のブロックを壊してやるよ!」

「やりおるなく。箱学さん! だが…関西一のエースはこんなでくたばりはせんよ!」

永山と嵐山は宮崎のブロックを避けるがすぐに宮崎は反応する。しかし、京伏の菊川と総北の真中は宮崎を囲むように宮崎を先に行かせないようにした。

「慶喜!! いけー!! こいつはオレが抑えるから!! 京都伏見の希望はお前なんや!!」

「永山さん!! 浩輔のことはオレが抑えます!! だから…必ず優勝してください! お願います!」

「家斉!! サンキューな! 1日目は我慢したからな! 我慢を全開放や!!」

「勇氣! 総北副キャプテンとして仕事をしてくる! 坂道。オレがお前の屈辱を果た

してやるよ!」

嵐山と永山は2人で根岸を追う。しかし、宮崎は表情を変えなかった。

「ふふ。キミらが抑えたとしても無意味だよ! 根岸さんはとつくにゴールに向かって走っている! あの根岸さんを止めるのは無理だね!」

「こうすけ! 菊川さん! ハマりましたね!! ウチにはもう1人ゴールに向かって走ってる選手がいるんですよ!」

「門倉君か。2対1対1で君達が数的有利だと言いたいの? 勇気くーん。そんなのわかってるわ。そんなんで負けるような根岸さんでないよ!!」

「慶喜をなめとるね! あー見えて怖いんやで。ゴール前は。」  
「!!?」

「(こうすけが認める根岸さん。いったいどんな方なんだ!!? 嵐山さんも気になる…。関西一のエースの実力。)

すると後ろから必死に追い上げてきた沼津南の3人が来た!

「エースアシスト集団に追いついたぞ!! 多村! こいつらをどう抜いていく!!」  
「強行突破のみです!!」

「あれあれ〜!! なんてキミらがここにいるんだ!! 沼津南!」

「厄介なのが来たな〜!」

「やはり来ましたか!!」

勘太と山中はツインスプリントの体制になり多村を全力で引きエースアシスト集団をあつという間に抜いていく! 菊川、真中は沼津南の止めに入ろうとするが…時はすでに遅かった。しかし、宮崎はこの隙に沼津南の3人の集団に追いつく!

「あれれ〜! 落ちこぼれ集団がなんでいるんだよ!! キミらのチームの2人はリタイアしたんじゃないの〜?」

「お前と話してる暇はない。行くぞ! 大地! 多村!」

勘太は鬼のような引きで宮崎を離しにいく。宮崎も止めにくいこうとするが少し無理をしたせいか脚に疲労が溜まっていたため遅れる。

「ふっ。誰が来ようと…無駄だ!! 根岸さんには敵わない!」

その頃。ゴール前200mまで迫った根岸は全力で走る。後方にいる永山と嵐山はダンシングになり全力で追いかけるが、根岸のプレッシャーが2人に襲い彼らを失速

させる。

（抜けそうで抜けない…。なんだ…この変な汗は…。このプレッシャーは!! 見えない壁がある!!）

（この人を恐れてるのか…オレは…。）

根岸の見えないプレッシャーを感じ失速してしまう。嵐山と永山は吐きそうになりつつ我慢して走る。縮まるところが逆に差が開いていく。

勝負は決まりつつあったが…。後ろからは勘太の必死の引きによって嵐山と永山を捉えた!

「あととは!!! 頼んだ!! 多村!!!」

「多村! オレらがこの2人を止める!」

山中と勘太は多村の腰に手を当て押し出す!!

「いけー!! 多村純太郎!!」

多村は一気にダンシングをし根岸を追いかける! 嵐山と永山は根岸のプレッシャーに負けたせいか士気を失った。勘太はこの2人のデータを知っていたため異変に気付く。

（なんでこの人達がゴール前で失速してるんだ? 普段ならここからが彼らの真骨頂なのに力を発揮してないんだ? 箱根学園の根岸という男。彼らを絶望させるような実力

を持つてるのか！ 宮崎……。お前が理想とするチームはなんだ！」

多村は必死に先頭の根岸を追うが、そこに門倉翔の姿を捉える。

氣付いた門倉は更にスピードを上げる！

「来たか！ 沼津南！」

（総北は先頭争いに3人を送り込んでいたのか！ 永山さんは囷になってたのか!!）

後方にいた永山は少し呟いた。

「かかったな。沼津南、京伏、箱学！」

「!!？」

「まさか。キミは最初から門倉君を今日のゴール争いに行かせる気だったのか!!」

「ああ。全てはこのためにある!! 詰めが甘かったな。宮崎。根岸のプレッシャーに打ち勝つことが出来るのは翔が適任だからな！ アイツには鋼の精神力と鋼のように強いスプリンターなんだよ！」

宮崎はこの言葉を聞いて誤算が生じた。

「プププ!! キミら総北は本当に!! キモいな!!」

「今更止めにくいこうとしても無駄だ！ 今日も総北が2日目を制す！そして！ 王者奪還する!!」

ゴールまで残り50 m地点でついに根岸の姿を捉えた門倉と多村はラストスパートをかける！

(残りの50 m。オレがゴールして総北を勝たせる!! 若干：根岸さんのプレッシャーがピリピリ感じるが：オレは「鋼のスプリンター」。どんな強敵にも立ち向かう!! それが！ 門倉翔だ！ 大坂さんの屈辱を果たして見せる!! そして！ オレが最初にゴールしてチーム総北は不死鳥の如く復活してみせる!!)

(佐々木君と中嶋君は最後尾からチームまで必死に追いついた。北上君はチームのため山岳区間を引いてくれた。勘太さんと山中さんは下りからの敗北したエースまで必死に追い上げた。熊野君や純太さん、マネージャー達のサポートもあってここまでこれた。皆んなの支えがなければこの場になかった。一度心を折れかけたが皆んなが僕に期待して先にゴールしてくれると信じている。だからこそ!!僕は皆さんに恩返しするような走りをしたい！ それを証明するのは今！この瞬間だ!!)

双方の想いが重なり：残りの10 m地点で3人が並ぶ！

「オレが！ チーム総北を勝たせるんだ！」

「恩返しするんだ!!」

「……。」

そして、2日目の優勝争いに終止符を打つ。

「エントリーナンバー2番! 根岸正一選手が1位です! 2位は201番の多村純太郎選手! 3位は門倉翔選手です!」

その差は僅かの差だった。数cm単位の差で箱根学園の根岸が制した。

観客達も大声で箱学コールが飛ぶ。

「やっぱり…箱根学園は強いわ!!」

「ゴール前ピリピリしてて鳥肌がたった!!」

「王者箱学!!」

根岸は片手にガッツポーズをする。門倉と多村は下を向いた。

レースの1位と2位の差は天地の差。ロードレースは過酷な世界である。努力が報われるか報われないかの違いであるからだ。

2日目の先頭争いの死闘はここに終幕する。

次回話に続く…。



## メンバー交代

2日目のゴール前には4位争いが激しさを増す。

佐々木と山中が残りの力を振り絞り絞り京都伏見の嵐山と真中を抑える。

「4位入賞は僕たちがとる！」

「佐々木！なんとかして抑えるぞ！」

しかし、京都伏見の嵐山と総北の真中は最後の力を使い佐々木と山中を抜いた。嵐山が4位で真中は5位入賞でゴールイン。抑えられなかった佐々木と山中は同時に6位入賞でゴールした。

「すまん…。みんな…。負けてもうた…。」

「なんとか…。順位を少し上げたが…。翔…。」

この時、箱根学園の補欠メンバーやマネージャー達は根岸を囲いながら2日目の優勝を喜びあつてた。その時に山中と佐々木は多村が負けたと察しがついた。2人は自転車を降りて沼津南のブースに足を運ぶ。

そこには、多村が黙って申し訳なさそうに座り込んでいた。

「佐々木君。山中さん。お疲れ様でした…。すみません…。2位でした。箱根学園に僅

かな差で負けました。2日目の優勝を逃してしまい申し訳ございません…。」  
すると佐々木は多村の隣に座り励ました。

「純ちゃんは良く頑張ったよ。僕達がない間に沼津南を引つ張ってきたんだから。」  
「そうだな。最初は絶望的な状況だったけど終盤で6人に揃ってそこから2位に入賞出来たんだから良かったよ。多村の判断は正解だったよ。オレら最後に2人抜かれたのは悔しいけど、こうして2日目を走り切れたから良かった。」

「山中さん…。そうですね。佐々木君と中嶋君が追いついて来なかったら…。ここまで来れなかったと思います。だから…佐々木君。本当に今日はお疲れ様。最後尾から6位入賞出来たのですから凄いです。」

「いや。そんな。いたっ…。」

佐々木は右膝に激痛が走った。最後尾からここまでほぼ全力でペダルを回していたため膝にダメージを負った。

「佐々木君…。今すぐケアしたほうが良いです。今日1番脚を使っていますから明日に備えて治してください。」

「うん…。そうするよ…。」

佐々木はマネージャーに頼んで脚のケアを始める。

その頃。エースアシスト集団の箱学の宮崎と京伏の菊川。総北の永山がゴールする。

宮崎は真つ先に根岸のもとに駆けつける。

「良くやりましたよ。根岸さん。やっぱりあなたを今日の補欠メンバーから選んで良かったです…。子安君に申し訳ないことをしてしまつたが…キミは明日…3日目。走つてもらうよ。」

子安友春。箱根学園の1年生のスプリンターであつた。インハイメンバー内で1人だけ1年生である。彼は、中学時代から神奈川県大会で優秀な成績を残し、インハイメンバーを決める際には先輩達を実力を見せつけ選ばれた。本来は2日の山頂に着いた辺りからチームを牽引する予定だったが、昨日の3位入賞がキツカケで急遽オーダーを変更した。

「宮崎先輩。僕…明日は走れるのですか？　しかし…そうなると誰を変えるのですか？」

「変えるのは美影君。彼はもう役目を果たした。元々山岳賞をとることしか執着がなかつたし…それに…明日は東京に入ると長い平坦な道になり、平坦でも少し下り坂になつているんですよ。だから…そこでキミの力を存分に発揮してほしいんですよ。」

「なるほどですね！」

「キミは…下りが速いからね。キミの別名は…『下りのスペシャリスト』やからね！」

その後。他の選手達が続々とゴールをし2日目のレースは終わりを告げる。勘太達が沼津南のブースに来て結果を伝えた。勘太は少し悔しそうな顔をしたが、多村を責めなかった。中嶋は佐々木が治療してる場所に行き話かける。

「本当に今日はありがとう。リタイアしそうなところで佐々木が助けに来てもらったおかげで2日目も無事ゴールすることが出来た。本当にありがとう！」

「ゆう君。本当に良かった…。これで山中さんと一緒に完走する夢をまたみる事が出来るね…。一つ残念なんだけど…僕…明日走れないや…。」

「えっ? なんて言った?」

「僕はもう…今日力を使い過ぎて右膝がやられてしまった…。さつきドクターストップがかかって…明日は自転車で走ることが出来ない…。あとは…頼んだよ…。ゆう君。」

「そんな…。」

中嶋は自分のせいで佐々木が走れなくなってしまった罪悪感を感じ、下を向いたが佐々木は中嶋の手を握った。

「僕の分も背負って走ってほしい。ゆう君。ゆう君がゴールする姿を見たい。それで充分だよ。だから…明日は全力で走って!」

「佐々木…。ごめん。無理をさせてしまった…。お前の分も背負って3日目完走するよ

!!

中嶋は佐々木に3日目を完走することを誓う。

しばらくすると、表彰式が始まった。

レッドゼツケンの美影。グリーンゼツケンの谷中。そして、イエローゼツケンの根岸。箱根学園の3人の選手がカラーゼツケンをとったことで王者箱学の象徴になる。観客達も箱学コールが飛び交う。

「これこそ王者箱学ー」

「箱学はこうじゃないとね!!」

「箱学良いぞ!!」

宮崎は後ろから笑みを浮かべながら見つめていた。

「これこそ!! 本来あるべき姿の箱根学園だ!! 明日も制し…優勝はこの僕がもぎとる!! あと…もう少しで…僕の存在価値が証明される。なあ…父さん。」

その後。多村は総括で佐々木が明日出場出来ないことをメンバー達に伝える。

「佐々木君は良く頑張りました。リタイアしそうになった中嶋君を最後尾から連れ出し先頭争いまで全力で走りました。彼の頑張りを無駄にしないよう明日は頑張りましたよ

う。そこで…佐々木君の代わりに明日走るのは…菅原純太さん。明日はよろしくお願  
いします。」

「えっ…。オレ?」

「はい。明日は東京からの平坦な道になっておりますのでスプリンターでルーラーの純  
太さんが適任だと思います。それに山岳地点からの長い下り坂があるので合宿の時に  
見せてくれた純太さんが開発したダウンヒルを是非3日目で発揮していただきたいと  
思います。大丈夫ですか?」

「うん! もちろん! 総合優勝に導く走りをするよ! みんな! 明日はよろしく  
!」

「純太さんがいれば心強いですね!!」

勘太は純太と肩を組む。

「明日は頼むぞ! 純太!」

「うん! 頑張る!!」

「では、明日の序盤のオーダーを言います。山岳リザルト地点まではアップダウンが激  
しい区間になっておりますので、クライマーの北上君と中嶋君を中心に行きます。勘太  
さんと北上君と中嶋君はなるべく僕達に早く合流出来るようお願いします。明日は箱  
根学園も総北、京都伏見も東京に入ったらスプリンターを中心にいくと思われるので、

純太さんと勘太さんは出るようにしてください。」

「ああ。任せろ。」

「兄さんとインハイ走れるのは嬉しい！」

「では。一旦解散します。」

総括を終えると多村はある人物に会いに行く。

その人物は多村の兄である光太郎であった。

「ゴール前見てたぞ。純太郎。」

「兄さん。ゴメン。箱根学園を抜けなくて……。」

「良いんだ。そんなこと……。お前がこうしてまたロードレースをやっていることが嬉しいんだ。」

「兄さん……。オレ……。絶対兄さんの仇をとるから!! 兄さんをこんな風にさせた宮崎が許せない!! 兄さんの将来を潰したあの人を許せない!!」

「……。」

兄の光太郎は1年前の箱根学園自転車競技部のキャプテンであったが、去年のインターハイ予選会で予期せぬ事故が起こり、下半身不随で車椅子生活になってしまった。

その裏に宮崎が絡んでいることを知り、純太郎は宮崎を倒すためにインハイの目標を掲げていた。

「純太郎。お前は良いチームを作った。オレは…後輩のことを気になかなかつた…。だから…こんな風になってしまったと思う。お前は宮崎の仇をとるのではなく沼津南高校のキャプテンとして走ってほしい。今日のお前の走りは小学生の時に魅せてくれた楽しそうに走る姿だった。純粹にロードレースを楽しんでいる姿。兄さんはそんなお前が良いんだよ…。だから…明日は楽しんでほしい。兄さんから言えることはそれだけだ。」

「……。わかったよ。明日！ ゴールの大手町で沼津南が1番にゴールする姿をみてて！」

「ああ。楽しみに待ってるよ。」

多村は兄の光太郎と握手をした。

その様子を木の陰から覗いていた宮崎は笑みを浮かべる。

（プププ!! 多村キャプテンの弟君の純太郎くん。君たちは兄弟揃ってキモいな。2人して同じ想いを明日させようかな。キミもく彼みたいに脚を使えなくしてやるよ!!）

「ぷっはっはははは!!」



次回話に続く…。

## 多村と勘太のミーティング

2日目の夜。

沼津南高校が泊まってるホテルの一室で多村と菅原勘太は今日のレースの全体の総括を行っていた。キャプテンの多村淳太郎を筆頭にホワイトボードを使いながら話していた。

「今日の課題点は沢山あります。僕が感じたことはまず皆さんの脚のコンディション。そして、力の配分だと思います。」

「確かにそうかもしれない。中嶋がこうなったのもコンディションが良くなかったことと、昨日のレースの力配分の管理が不十分だったからだ。それに：お前が提案したオーダーにも問題点がある。確かに中嶋を平坦でも力強く走る力とアウターの使い方が上手い部分があるかもしれない。しかし、そもそも中嶋はクライマーだ。無茶なオーダーを出したお前にも原因があると思うぞ。」

「勘太さんの言う通りかもしれません。しかし、僕は中嶋君を1日目の箱根の山頂まで任せた理由は：…来年のインハイで彼に暴れてほしいからです。」

「つまりそれはどういふことだ？」

「中嶋君はクライマーのセンスもあって登板能力は長けているかもしれない。しかし……僕達は全員がエース級の選手に育てないといけない。それが僕が理想とするこのチーム像なんです。」

「……………。なあ……。今までずっと黙ってきたけどお前のお兄さんのことは知っている。お前が沼津南でキャプテンを志願した理由もわかる。光太郎さんは僕達にとつて頼り甲斐があるキャプテンであり、箱学自転車競技部を牽引してきた偉大な先輩だ。オレはあーゆう先輩になりたいと目標にしていた。しかし、宮崎のせいで去年のインハイ寸前で光太郎さんは下半身不随になってしまい……ヤツが1番部の中で期待された選手であつたため自動的にキャプテンに任命されてしまった。そこからだ……ヤツの本心を表したのは……。数々の先輩達やオレを含む将来期待されてた同期の選手達も蹴散らした。2日間レースしてわかったが……今の箱学は当時補欠メンバーにも入らなかつた選手やオレが知らない選手が沢山いる。ヤツの思うチーム像がイマイチわからない。ヤツは本当は何をしたのか？箱学をどうしたいのか？オレには理解が不能だ。」

「……。勘太さん。僕の兄と4カ月間同じチームメイトでやってきたからわかるんですね。僕の兄は……高校卒業したら実業団に入る予定だった。しかし……宮崎さんのせいで兄の将来が台無しになった。それを知った僕は彼のこと憎くてしょうがない！僕は……いつも……兄さんを目標にロードレースを頑張っていたから……。それに……兄さんはい

つも笑顔だった。毎日のように「ロードは楽しいな!」と言ってた。その兄さんの笑顔をなくした宮崎浩輔!あれをぶっ潰すためにオレは…オレは…!このチームで優勝して…ヤツに見せつけたんだ!!」

勘太は多村の話聞いて自分と照らし合わせていた。

菅原兄弟も宮崎の陰険な計らいにより箱根学園を追放され沼津南高校に転校した。だが…勘太は多村に問いかけた。

「憎しみのためにこのチームのキャプテンをやってるのか?」

「!!?」

「憎しみだけでお前はロードレースは楽しくないのか?」

「それは…。」

「お前の気持ちは良くわかる。オレも本当のことを言うと箱根学園で自転車をやった

かった。純太と共にツインスプリントをやって全国の選手達に通じるか試したかった。しかし：それだけでもなかった。箱学の先輩達も良い人ばかりで居心地が良かった。そして、先輩達は強かった！優しさもあり強さもある。僕はそんなチームの一員に入れたことに誇りだ。1年しか箱学になかったけど楽しかった。純太も同じ気持ちだと思う。そもそも自転車競技の世界に入ったのも憧れの先輩が箱学の選手にいたからその人みたいに速いスプリンターになりたいと思ったからだ。お前が兄さんのことを尊敬しているように：オレも尊敬する人がいたから自転車を続けている。大地はこんなこと言ってたな。：「自転車に巡り会えたから楽しい」と。オレはその言葉を聞いて初心に戻った感覚があった。本来：自転車競技をやる理由は楽しさだと。大地にそれを再確認された。だからこそ：オレはこのチームの一員として全国レベルの実力を持った選手達と競っていることが楽しい。だから：オレはこのチームが好きなんだ。オレの先輩達が後輩達に良い居心地でチームをまとめていたように：オレも副キャプテンとして引つ張りたいと思ってやってる。それが：少しでも1年達に感じてもらえれば良いと思う。」

「……………」

（勘太さんは前に進んでいる。今の状況も環境も楽しんでいる。だから…1日目のスプリントラインをとった。山中さんの影響で楽しいと思ってる。兄さんも…きつとこのことをさつき伝えたかったかもしれない。イマイチ理解が出来なかったが…勘太さんの話を聞いたら納得した。自転車競技…ロードレースは楽しい競技と…。）

「勘太さん。明日は総合優勝に向けて作戦を練りましょう!!勘太さんに言われてわかりました。ロードレースは楽しい競技と。兄さんも箱学のキャプテンをした時に後輩達にそのことを伝えたかったのかなと感じています。だからこそ!僕が1番楽しまないといけない!」

「それに憎しみだけだと宮崎みたいになってしまう。何事も楽しむことが大事だ。それを実行するかしないかでだいぶ変わるとオレは確信してる。明日は…勝とうな!

多村!」

「はい!」

2人はその後。明日のレースについて1時間ぐらい話すのである。

次回話に続く…。

### 3日目のオーダー

インターハイ3日目。

2日もかけて約200kmのコースを走ってきた選手達も疲労が溜まってきている。夏の暑さもあるせいか最初は200名いた選手がリタイアし、残っている選手は100名ほどになってた。中には1チーム6人が全員リタイアした学校もいた。1チーム6人全員が残っている学校も10校に絞られた。そのぐらい夏のインターハイは過酷なレースであり総合優勝をすることは夢のような榮譽である。だから、自転車乗りは必死な想いで仲間を信じゴールを目指す。

沼津南高校も初出場でありながら6人全員が残っていることが奇跡である。途中でアクシデントはあったが、キャプテンの多村を筆頭にここまでこれた。そのことに多村は1人で歯を磨きながら感じていた。

「いよいよ運命の3日目のレースが始まる。2日とも僅かな差で1位を逃している。だが…6人全員が今日のレースを走れることは不幸中の幸いだと感じてる。だからこそ…今日こそは必ず優勝して…兄さんに喜んでもらいたいんだ!」

「歯を磨きながら独り言か…。」

「山中さん！ おはようございます！」

「良い意気込みだな。さすが沼津南高校のキャプテンだな！ オレも今日頑張らないとな……」

「そうですね……。山中さんはロードレース楽しいですか？」

「2日間走ってきて思ったけど……気迫と重圧、そして期待を背負って走っているんだなと感じてる。17年間体験したことないことを現在進行形で体験してるから楽しいよ。なかなかこういういった体験を誰もが出来るわけでもないし……貴重な体験してる。だからこそ……今を楽しまないと後々後悔すると思う。」

「そうですね……。でも、勝負の世界は甘くないのもご存知ですよね？」

「それはもちろんわかっている。勝った奴が称賛されるのは当たり前のことだ。だから……楽しさと裏腹に厳しい世界だとこの自転車競技に関して感じてる。」

「なら良かったです。僕が今から話すことは山中さんにとってショッキングなことだと思えますし……ロードレースの世界ではそれが当たり前のことなので公式戦初出場の山中さんにそれを伝えたいと思います。」

「……。わかった。」

「今日のオーダーは神奈川県と東京都の境にある地点が今日の山岳リザルトであり、今日のレースの1番標高差が高いところにあります。しかし……それからはゴールの大手



町までの道のりはほぼ平坦。そこまではクライマーの北上君と中嶋君を筆頭にチームを牽引し：山岳リザルトを過ぎたら彼らを引き離します。理由は：クライマーにとつて活躍する場所がないからです。だから：昨日足を痛めた佐々木君の代わりにルーラーでスプリンターである菅原純太さんをメンバーにいられたのです。つまり：僕が何を言いたいかというと6人が全員ゴールすることは無いということです。」

「……。じゃ……。中嶋はゴールまで行けないということか？」

「はい。」

「あいつは……オレと一緒に3日間走破したいと思って……昨日も佐々木に連れてもらって2日目をゴールした！ それに……佐々木は自分が出れなくなる分中嶋に3日目走破してほしいと言ってた！ 2人の想いを無駄にするのか!!」

「思った通りの反応ですね……。ロードレースは……エースを1番に届けるために犠牲にし送り出すのです。それが当たり前の世界なんです。それに……中嶋君はいくら脚が万全だといつても正直ダメージが残っている。彼を今日大手町まで走らせることは不可能だと思います！ 勘太さんにそのことを話したら納得しました。それが……ロードレースというものです！ そのことを山中さんにも理解してほしいと思ひ話しました！」

「……。それでもオレは……。」

するとそこに勘太が来た。

「大地。これが現実なんだ。中嶋の今後のことを思つて決断した。これはレースなんだ。自分が思ったように上手くいかないのもロードレースなんだ。大地にそれを知つてほしい。何ごとも上手くはいかないんだ。」

「勘太まで……。……。わかつたよ……。」

「山中さんなら理解してもらえると思ひました。このことは北上君や中嶋君にはまだ伝えていませんが……。彼も理解してもらえると思ひます。」

そういつて多村は口をゆすいで部屋に戻つていつた。

「大地。北上や中嶋がゴールが出来ない分俺たちはアイツらの想いを託して今日は走らないといけない。そのことだけは頭に入れておけよ。」

「わかつた……。」

2人は部屋に戻りレースの準備に取り掛かる。

AM 8時55分。

3日目のスタート地点は甲府駅前である。

甲府盆地を抜けて勾配差が激しいコースを走り相模湖を登つていくと3日目のリザルトがある。それを過ぎると東京の街中に入つていき東京の中心である大手町がゴールである。この3日目の結果により総合優勝が決まる。沼津南の選手達は補給食と

ボトルを持ってスタート地点に立った。

「いや〜いよいよ3日目っすね！ 山中さん！」

「ああ…。そうだな。」

「どうしたんすか？ 浮かない顔してますが？」

「いや。なんでもない。中嶋。今日も頼むぜ！」

「はい！ オレ…。今日3日目の山岳賞狙いに行きますから！」

「そっか…。」

（いつのも山中さんと違うなく。どうしたんだろ？ 緊張してるのかな？）

「山中さん！ 今日もオレ活躍しますから！ 見てください！」

「北上か。そうだな！ 期待してるぞ！」

「はい！」

（あれっ？ なんか表情が暗いかな？ どうしたんだろ？）

「いや〜！ 今日も良い天気ですなく。沼津さんよ。」

「嵐山さんですか。僕達に何か用があるのですか？」

「ま。僕達…今日は君たちと協調したいと思つとる。12人いれば箱学や総北に勝てるで。」

「京都伏見に2日ともお世話になりました。その点に関しては感謝してますが…今日は協調にのりません。」

「そつかそつか。ならええわ。僕達は僕達で頑張るからなく。」  
「そうしてください。」

（残念やな…沼津さんよ。君達は先頭だけしか見てなく…後方の選手達のことを気にしてへんわ…。まあ…。そのうちわかるやろーな！ 本当の恐ろしさを!!）

そして、いよいよ3日目のレースがまもなく開催する。沼津南は円陣を組んで気合いを入れた。3日目も2日目のスタートと同様に着順からスタートする。2位の多村と6位の山中と勘太がスタートする。

「では…インターハイ最終日スタートです！」

激闘の3日目が始まる…。

次回話に続く…。

## 京都伏見の計らい

インターハイ3日目のコースは国道20号線で甲府盆地を抜け山岳区間に入る。大月・相模湖を通り過ぎると東京郊外に入り都心に向かっていくコースだ。前半はアップダウンが激しいが後半ではほぼ平坦道であるためスピードマンの力を温存させないといけない。そこで沼津南はエースクライマーの北上と大一番で活躍する中嶋の2人のクライマーを起用し、山岳区間は勝負をする。

スタートを切った後すぐに多村と合流した山中と菅原勘太。

多村の序盤のオーダーとしてはまず6人が全員合流することと甲府盆地を抜けるまでは平坦道であるため佐々木に代わった純太が山岳区間に入るまでチームを引っ張ってもらう。

「山中さんと勘太さんが合流し、先頭には箱学が2人、総北は3人。京都伏見は2人にいます。あと少しで純太さんが来る頃だと思えます。」

「わかった。まず……この平坦区間は純太に任せる。」

「あの山からクライマー達の勝負がかかっているな！」

「大地。そうだ。エース級の選手と平坦が得意なルーラーやスプリンターは今はい我慢ど

ころだ。今日のレースは山岳区間で勝負が決まると思う。何故なら：平坦になると実力があるヤツだけが勝ってしまうからだ。山岳区間は実力もそうだが：攻め所の判断や力の配分を考えなければいけない。オレはクライマーじゃないからわからないが：クライマーは策士なヤツが多いイメージだ。実力だけでなく頭も使うからな。」

「なるほどな…。つまり：クライマーの活躍によつて今日の勝負は決まると過言ではないんだな。」

「ああ。話しているうちに純太達が来たぞ。」

そこに純太と中嶋、北上の3人が少し遅れて合流する。箱学も総北もチーム全員が合流するが：京都伏見の嵐山と菊川以外の選手達が来てなかった。この状況で不審に思つてた。

（京都伏見が揃っていない…。京都伏見は昨日の成績も北上君や中嶋君達の後ろにいたはずだが…。何か嫌な予感がする…。）

「ここから沼津南は始動します！まず：山岳区間に入るまでは純太さんが、山岳区間の序盤は北上君に頼みます！」

「わかつた！」

「おう！ 任せろ！」

中嶋は反論した。

「多村！なんでオレじゃねーんだよ！　ここはオレが適任だろー！」

「中嶋君！　落ちついて！　キミには後々活躍してもらう。だから…今は我慢してくださいー！」

「本当なんだろうな？」

「はい！」

「しようがねー。おい！　ドチビ！　チームの足を引つ張るなよ！」

「わかつてるわ！　あと…ドチビっていうな!!」

一方箱学は…。

「さーて。ここからは谷中君！　全力で平坦を引き…山岳区間も踏ん張りな!!」

「!!。宮崎君！　僕を山岳区間を引くのかい!?　僕はスプリンターなんだぞ!!」

「そうだよ。だからいつてるんじゃん。」

「嫌だ！　僕は最後まで走りたい！」

「キミには期待してるんだけどな…。山岳区間も全力で登れるって…。ここで踏ん張れば…キミは来年もインターハイ走れるんだよ。だから全力でいけないかな？」

「そうなのか…。そんなにオレのことを期待してもらってるのか!!　ならば…頑張る!!」



「ああ…。頼んだよ…。」

箱学の選手達は苦笑いしてた。1mmも谷中に期待してないと。彼をここで捨てると感じていたからだ。今泉はこのやりとりをこう感じてた。

（浩輔君は腹黒いよね…。僕はそんなあなたが好きだからついてきてるんですよ。谷中さん…ドンマイすぎる。哀れな人だな。さて…僕はこの人が使えなくなったらクライマーの僕が東京と神奈川の県境まで引かないといけない。それまではゆっくり休むとしますか…。）

総北からはスプリンターの宇津木が序盤引つ張り山岳区間からはもう1人のクライマーの洞島桐人が引つ張る作戦になった。

「桐人。山岳区間はお前の判断に任せる。オレよりお前の方が頭いいからな！」

「大坂さん！そんなことないですよ！ それに…ロードレースは勉強より攻略するの難しいと感じてますから。答えがありませんからね。だから…楽しいんですけど。」

「そうか。お前はIQが200もあつて体重も50kgしかなく体は細いが…持久力だけは一流。それが…洞島桐人だよな。」

「なんでこの場面で僕のプロフィールを話しているんですか…。運動とか全く興味なかった僕が自転車を始めたのも大坂さんのおかげなのでこの恩は忘れませんが。」

「ならば。魅せてくれよ。今日の走りで。桐人をこの3日目に活躍の場を設けたのはわかってるよな?」

「昨日のメールを見たのでわかります。だから任せてくださいよ。」

「ああ。期待してる。」

「さーて。家斉!少しペースダウンするぞ。」

「わかってるよ。慶喜。箱学と総北、沼津南を先にいかせて僕達京都伏見と他の選手達と共に先頭争いするということやろ。」

「ああ。それを実行するぞ!」

「イエッサ。」

多村は京都伏見の2人がペースダウンすることに気づき疑問に感じた。

(ワザとペースダウンして6人全員で走るのかな…。でも…それではリスクが伴う。いくらチームに合流したとしても先頭に追いつく可能性が低くなる。だから…協調しようとしたのか…。それとも…何か策があつて…ワザとペースダウンをしてるのか…。…。待てよ。まさかとは思うが…そのまさかが実現するかという可能性はほぼないだろ…。)

「後方集団達が固まって何十人かの協調を結んでいるのか。」

しばらく走ると山岳区間に入る。そこで沼津南は北上を中心に山を攻略していく。山に入ったら北上の判断で任せると多村に言われていた。

「ここはまず総北と箱学の様子をみましょう。いつアタックされてもついていけるように力を温存していきます。」

「わかりました。北上君。」

「はっはっ…。なんだよ!!総北も沼津も速すぎるスプリンターがいるんだな…。なんとか…ついていけた…。」

「まだ休んじやいけませんよ。谷中君。」

「わかってるって!! みんな! ついてこい!」

箱学はアタックを仕掛けるが…しかし、北上と総北の洞島は対応する。

「あなた達を止めるのは僕達ですよ。」

「こんな序盤からアタックを仕掛けるのは悪くありませんが…それでは力が持ちませんね。」

「クソクソクソ!! オメーらなんで来るだよ!! 邪魔なんだよ!」

（スイッチが入りましたね。彼の怒りスイッチが…。プププ…。さーキミのその怒りで…。黙らせてあげなさい!!）

「このひよつこが!!」

「始まりましたね。」

谷中は顔を赤めさつきと比べ物にならないぐらい速く登っていく。北上と洞島はそれに反応しチームを牽引する。

「少しついてきてください!」

「彼のスイッチを押してしまいましたか…。ならば…。そのスイッチを切らないといけませんね。」

沼津南と総北は咄嗟の判断で箱学を追っていく。

「そろそろ来るで。家斉。後ろから凄い車輪の音が聞こえるやろ。」

「ああ。あいつらにはわからないんだらうな…。集団に飲み込まれる恐怖を…。そして…。この集団は最強の武器だとな!!」

すると…。そこには約100名いる選手達の先頭をしきっていたのは岸と宮本だった。

「慶喜！家斉！連れてきたで。こつからは慶喜と家斉が指揮とつてや！」

「ご苦労さんよ！ 岸と宮本！ さて…ほな…いこか！！ 打倒箱学に向けて特急列車が出発しまーす。」

（さあ…箱学と総北、沼津さんよー。これがワイらの計らいなんよ！あんたら飲み込み…そして…僕達が優勝するんよ！）

次回話に続く…。

## 中嶋の囀

しばらく箱学と総北、沼津南の攻防戦は繰り返していた。

箱学の谷中が全力で己の力を振り絞るように沼津南の北上と総北の洞島と対峙する。谷中は慣れていない山岳区間をチームを引っ張っているため試行錯誤で登っている。

(クソっ……。この2人が強すぎるんだよ……。まだ……。オレは……。オレは……。こんなところで終わる訳にはいかないんだよ!! 彼女が大手町に待っているんだよ……。こんなところでバテる訳にはいけね! 約束したんだ!)

「谷中くーん。キミ。大月あたりまで踏ん張れないかな。」

「大月まで!! そこまで俺の脚が持たねーよ!! 今だっつて……。だいたい無理してるっていうのにな……。」

「キミをグリーンゼツケンをとらせて箱学に貢献してるんだからさー。もつともつと貢献してもらわないといけないんよ。なあ。キミみたいな雑魚キャラをインハイメンバーを選別してる理由はわかるかい?」

「雑魚キャラだと!! どーゆうことだ! 納得いかないぞ!」

「雑魚は雑魚らしく雑用してるが良い。チームのために雑用してくれよ。谷中くん。」

「ならば雑魚なら雑魚らしく散ってやるよ!! そして!! てめえーらを表彰台に上らせれば良いんだろ!! やってやるーじゃねーか! 雑草魂というのなもの!!」

(プププ。キミはキモいな。)

(ごめん。お前が待つてくれてるのに…。オレは…この生意気な後輩のせい…。ゴール出来んわ。だが…オレは雑魚は雑魚らしく魂を魅せて散ってやるよ!!)

「なんだ。この人!! 何回アタックしてるだよ!! 昨日…グリーンゼツケンをとった人が山岳を争っているのは…不思議だ!!」

「確か…沼津南の北上君だったよね。僕は…総北高校16番の洞島桐人です。今後大会とかありましたらよろしくお願いします。僕的に箱学の思う壺になつてると思います。だって…箱学にはクライマーがいるのに起用しないんですから。力を温存させるためにワザと出さないのでは?」

「それか山岳賞を狙いに行かせる作戦ですかね。」

「いや。あんた。身体が細いな…。そんなんで自転車に乗って山を攻略してるのは意外だな。」

「僕のコンプレックスですから。逆に聞きますが…あなたは小さいのによくエースクライマーとしてチームを牽引してますね。」

「小さいだと！ 聞き捨てならんな！ このピッコロやろう！」

「ピッコロってイタリアの楽器ですよ。知らないのですか？」

「知らんわ！ そんなこと!!」

すると後ろから車輪の音がもの凄く聞こえる。宮崎は後ろを振り返り一瞬で状況が理解した。

「なるほど。君たちがここにいないのもこのためですか。集団の力と脅威を利用して僕達を飲み込もうと。なあ！ 京都伏見！」

「とらえたで!! 箱学と総北と沼津南!!」

そこには100名程走っていた他校の選手達が大きい集団として迫ってきたからだ。京都伏見はこれを狙っていた。人数が多ければ多いほど風の抵抗が無くなり、そして、交代する人数が多いことで力を温存することが出来る。何より速く走れる。この作戦を企画した京都伏見は数的有利な作戦で優勝を狙いに行く。

多村の嫌な予感が当たってしまう。そのままかが目の前で起きているからだ。集団



の恐怖は理解していた。今まで先頭争いに絡んでいない他校の選手達が結託して先頭に追いつこうとしているからだ。100対6。この数的不利な場面で多村は咄嗟にオーダーを変更する。

「中嶋君と北上君!! 君達2人でこの山岳区間を引つ張ってほしい!! そして、僕も君たちの走りを真似してチームを引つ張る!!」

「多村! お前はエースだ!! エースのお前をゴール前まで引つ張らないといけない!! お前の出る幕はここではない!」

「だが…この状況でそんなことを行ってる場合ではないことはキミが理解してるだろ!! 速くいかないと飲み込まれる!」

「クソ!!」

北上と中嶋はお互いのフルパワーを使って集団を逃れるよう登っていく。箱学の宮崎は予想を反することが起きているためオーダーを出す。

「今泉君。キミ。いける。」

「いけるって。浩輔君。速くいかないと。」

「ああ。」

「ちよつと待てよ…。オレ…。お前の引きについていける自信がない…。」

「谷中くん。キミみたいな雑魚はこんなところでおちるんよ!!何が雑魚は雑魚らしく

散るだ……。そんな綺麗事はキミの彼女さんにも言っとけよ!! 雑魚は!! では……キミは集団の中にのまれて楽々とゴールすればよいんだよ。雑魚集団にな!! バイ。」

「宮崎!! てめえ!! お前みたいなクソは……箱学のキャプテンに相応しくないんだよ!! 多村キャプテンの方が良かったな!! てめえーが黒幕なのは知ってるんだよ!!」

「……………散れ。」

宮崎はそう言つて谷中の顔面に肘打ちして谷中が落車する。谷中が楽車したことにより後方に走っていた集団の選手達に混乱が生じ集団落車する。しかし、何人かの選手は落車に巻き込まれなかった。宮崎はその光景を見て爆笑した。

「キミの最後の仕事は……集団落車を誘うことやったね!! いや〜魅せてもらったよー。雑草魂をね。プププ。ハハハ!!」

勘太は宮崎の非道的なやり方に怒りを隠せなかった。総北の真中も宮崎に対して文句を言う。

「こうすけ! 彼は昨日グリーンゼッケンをとった選手なのにここで捨てるのか!」

「使えなくなつた駒はここで捨てる。それが僕のやり方だ。人の心配するより自分のチームを心配したほうが良いんじゃない? ゆうきくーん?」

「お前には失望したぞ! こうすけ!」

「信頼とかいらんよ。僕には。僕が優勝すればね！」

大坂が真中を止めてオーダーをいう。

「この状況はまずい！ オレが引く！みんないけるか！」

「はい！」

総北も大坂を筆頭にチームを引っ張り集団を引き離す！

「あーあ。箱学さん。酷いやり方やけど…集団落車をさせるために1人の選手を犠牲にするとは…変わってるねー!! だが…それでもオレらを止める事は出来んよ!!」

それでも集団は3校の選手達より速く登れている。

箱学も総北、沼津南もいくら離そうとしても差が縮まる。

そこで、多村は思わぬ作戦をいう。

「北上君!! この集団を止めるために囿になってほしい!! こんなことをいうのも申し訳ない気持ちがあるが…これは…チームが勝つために必要なことなんだ! 納得してくれないか!?!」

「オレは…まだ役割を果たしていないんだ!! 嫌だ！」

「でも!!」

「なら。そのオーダー。オレにやらせてくれ。」

「!! 中嶋君!!」

「実はな…。多村と勘太さんが昨日の夜にミーティングしてたことは聞いてたんだ…。オレは大手町までは完走する事は難しいと…。確かに…その通りだ。1日目は横浜から箱根の山岳区間を勘太さんを連れたり…昨日は佐々木の後ろについて沼津南に追いついたが…その影響もあって…回復してるように見えても本当のところは少し身体中のあちらこちらに痛みは感じている。3日目を完走すると佐々木に約束をしてしまつたが…物理的にそれは無理だと密かに感じていた。オレはチームのために昨日は皆んなと合流して役に立ちたいと思つてここまで来た。だからこそ…今!! この時!! チームのために役に立たせてくれないか!! 多村!!」

多村は5秒黙りこんだ。しかし、今すぐ決断しないと総合優勝はないと感じた多村は苦渋の決断のうえに中嶋に背中を叩いて言う。

「中嶋君…。キミにこのオーダーを託します…。」

「ああ! 任せろよ!!」

「中嶋!! 本当に良いのかよ!! 佐々木との約束を…。」

「山中さん……。正直オレは……。3日間走破したかった……。でも……。オレは佐々木と同じように沼津南高校自転車競技部が好きなんなんです！だから……。チームのためならどんな無茶なオーダーでも受けますよ！それで沼津南高校が総合優勝出来るなら……。辛くはないですよ！」

「中嶋……。」

（お前は……。オレを自転車競技の世界に連れてもらった。今まで普通に過ごしてきた人生にお前はオレを変えてくれた。そして、部活を通して色々学ばせてもらった。仲間を思いやる気持ち。仲間と共に同じ目標に向かって一生懸命になること。何よりオレが感じることはこの仲間と巡りあえたことだ。皆んなの支えがあつてオレはインターハイに出場して走れている。そのキツカケを作ってくれた中嶋悠斗。オレは……。お前に何も恩返しが出来ないのか！お前の夢を叶えることが出来ないのか！そんなオレが情けない！）

中嶋は寂しそうな表情で山中に最後の言葉をかける。中嶋の目には涙が流れていた。

「山中大地さん。あなたがゴールする姿が見たいです。そして、山中大地さん。僕が今まであつてきた中で最高の友達です！だから……。友達を全力で応援するのはオレの役

目です!!」

山中はこの言葉で涙が一滴流した。そして、山中は中嶋の背中を震えながら叩いた。「絶対! このオーダーを完遂してくれよ!! じゃないと…オレは許さないからな!」

中嶋は山中の手の感覚を感じながら笑顔で返事した。

「必ずやり遂げます! だから…安心して前に進んでください!」

中嶋はペースダウンして集団をコントロールしてた京都伏見の嵐山に話しかける。

「いや〜!! この集団をコントロールしてるなんて素晴らしいですね〜!! オレが全力で止めてやるよ!! この集団をな!! 京都伏見さんよ! オレと勝負だ!!」

「キミー人で集団を止める…。キミはバカなのか!! 100人近くいる選手を相手にキミが止めるやと…。無駄にも程があるな〜!! やってみなよ!! 中嶋君!」

「ああ!! やるさ!!」

嵐山や菊川、岸がアタックを仕掛けるが中嶋は彼らをブロックし先陣をきる!

「あんたら…オレを舐めすぎやな〜!! エセ関西弁でいきましょか!! ははは!!」

「このやろー!!」

中嶋1人で集団を阻止するためにアタックをしかける。時間稼ぎのために中嶋は囚  
になり沼津南は残りの5人で先頭争いに絡むのである。

次回話に続く…。

## 3日目の山岳賞勝負 前編

集団をコントロールする中嶋。それに対抗するかのように各校のクライマー達が凌ぎを削って中嶋のブロックを阻止しようとするが、中嶋は終始笑顔で対応する。

「いやー!! 全国のクライマー達がオレを止めるのに精一杯なんすねー!! だが…オレはチームのために全力で阻止しますよ!!」

京都伏見の嵐山は少し苛立っていた。何故なら…本来なら集団を利用して先頭に追いつこうとしているのに中嶋が集団の先頭に立ち数々のクライマーや実力がある選手達を前に行かせないように全力で阻止をしているからだ。

「おい!! お前は何度もアタックを仕掛けようが常に先頭にいてコントロールをしとる!! 邪魔なんだよ!」

嵐山はアタックを仕掛けようとするが中嶋はそれを阻止する。

「いや〜。嵐山さん!! オレはあんたらみたいな強敵が身近にいると燃えるタイプなんですよ! アドレナリンが爆発してますよ! オレ!! すげー楽しいわ!!」

（こいつ……。この状況であっても楽しんでるというのか! まさに…狂人。狂人ク



ライマーの中嶋悠斗。伊達ではないな。）

「中嶋悠斗くん。キミはおもろいなー。100人を相手に全力で阻止して集団をコントロールする気か…。キミらのチームはキミみたいな基地外な選手をインハイで走らせるとは…。変わったキャプテンやな!! キミは時期脚が使えなくなる! それまで何度もアタックを仕掛けるんやで!! わかつとるのか?」

「言われなくても…あんたらを阻止して時間稼ぎすれば俺の勝ちだ! それまでは全力で阻止し…今後ロードレースが出来ない脚にされようが…沼津南高校の勝利のために死ぬ気でペダルを回す!! そう…覚悟してるだよ!! 嵐山さん!!」

(こいつ…! 厄介な敵やな!! ならば全力で潰す!!)

嵐山は咄嗟にオーダーを出す!

「よし!! わいら京都伏見はここから行くで。今ならまだ先頭に追いつくからな…。岸!! おめさんの本気出してえーんやで! 我慢解放したれ!!」

岸はすぐに本気モードに入り京都伏見の先頭に立って登り始めるが…中嶋はそれを阻止する!

「いや〜。オレをなめたらいかんすよ! 京都伏見!」

「邪魔なんだよ…! キミは!! 岸!! もっとアタックしろ!」

「はいよ〜!」

岸はアタックを仕掛けるが…中嶋は全力で阻止し妨害する。  
すると…そこにある男が中嶋の味方についた。

「中嶋君。オレも全力で阻止するよ。」

その男は山中大地の親友である杉山であった。彼は名古屋高校のエースクライマーであり2年生で1人だけインハイメンバーに選ばれたのであった。

「杉山さん!!」

「中嶋君。キミの覚悟はしかと受け止めたよ。大地達のチームが総合優勝してほしいからキミは囷となつてこの集団をコントロールしてる。名古屋高校は昨日のレースで2人のリタイアした。総合優勝はないと悟っている。だから…僕は友のチームのサポートを全力ですると決めたんだ。だから…中嶋君。僕とキミで京都伏見を率いる集団を阻止しよう!」

「杉山さん…。わかりました!2人で阻止しましょう!」

嵐山は厄介な敵が来たと更に苛立ちを隠せなかつた。

「杉山君まで…。全く…。邪魔なんだよ! 雑魚が!!」

嵐山と岸の2人で中嶋と杉山を抜こうとするが…反応する。

「アタックを仕掛けようが…無駄ですよ!」

「京都伏見の自由にさせない！ 友の勝利を応援する！」

(クソ！クソ！)

しばらく集団を阻止する中嶋と杉山。

彼らは限界までペダルを回すと誓ったのであった。それは沼津南高校の勝利を願って…。

その頃。先頭では箱学は今泉が…総北は大坂と洞島。沼津南からは北上が全力で山岳区間の攻防戦を繰り返していた。今泉はこの攻防戦を分析していた。

(しかし…総北の大坂さんともかく…華奢な2ndクライマーは中々実力がありませんね…！ アタックを仕掛けても…それを軽々とついていく。山の支配者と意外性があるクライマーか…。総北はオレら箱学のライバルにふさわしい相手だ。だが…浩輔君を率いる箱学は谷中さん以外のメンバーは全員エース級の選手だ。こんなところで負ける訳にはいけないですね。)

「中々やりますね。総北の大坂さんと洞島さん。それに…沼津南の北上さんもね。この今泉。相手に不足ない。幸せなことですよ…。」

「キミこそ凄いな。俺たちエースクライマー2人を止めるキミの実力は本物だ。ここで提案なんだけど…。僕とキミで3日目の山岳賞を競わないか？ なあ…。宮崎浩輔君

「！」

宮崎は少し黙り込んだ。だが…宮崎は苦笑いをしながら大坂に問いを返す。

「キミ…。昨日…美影君に負けたのが悔しいの？ それとも…僕達のクライマーを使わして僕達のカードを使わせようとしてるのかな？」

箱学はクライマーの美影を代えてスプリンターの子安が入ったためクライマーは今泉の一人しかいなかったからだ。

「いや。純粹で勝負したいからさ。箱学のクライマーとね。」

「プププ。キモいなキミは。ならば…僕が出ようか？」

「おっ！それもそれで良いかも！ 箱学キャプテンと総北キャプテンのタイマンという訳か!! 面白いな!!」

桐谷はこの挑発を止めようとした。

「宮崎君！ キミがこんなところで脚を使わせる訳にいかない！ オレは許可しない!!」

「キミはわかってないな。何故…僕がこの勝負に挑むか。キミには前に話したよね？」

「……………」

（宮崎君は過去の大会でタイトルをとってないのは…山岳賞。レッドゼッケンをとって

いないことだ。キミの兄さんは……。」

桐谷は宮崎の良き理解者であったため彼の気持ちを読み取ることが出来た。だからこそ桐谷は宮崎をエールを送った。

「宮崎浩輔。暴れてこいよ。それに……念願の山岳賞。とれよ！」

「言われなくてもわかっているよ！……さて……いきましょか！……モブキャプテンさんよ!!」

「だから……モブキャプテンじゃないよ。オレのわがままで申し訳ないが……桐人。チームのことは頼む。オレの3年間の集大成はこの3日目の山岳賞だ。そして……オレの役目はここで終わる。永山。チームのことは頼んだ。お前が副キャプテンとして総合優勝を導いてくれ。オレは総北キャプテンとして絶対山岳賞をとってくる！」

永山は大坂の意志を受け取った。

「わかった！……坂道！……絶対負けるんじゃないぞ！」

総北メンバーは全員ハイタッチして大坂に想いを託した。そして……王者奪還のために必ず優勝すると約束した。

「ありがと。皆んな！……行ってくる！」

「お話は終わったようかな？……今泉くん！……頼んだよ！……キミはなるべく速く山岳リ

ザルトまで追いつけということを伝えるわ。」

「わかったよ。楽しんできてくださいよ。宮崎先輩。」

「……。ああ。」

宮崎と大坂は3日目の山岳賞に向けて死力を賭けた勝負に出る。

沼津南はここで山岳賞争いに絡む選手を出さないつもりだったが…。

「なあ……。行っていいか？」

沼津南は全員驚いた。何故なら…山中が志願したからだ。

「あなたは…ここで…出る幕ではない!! あなたは…大手町まで連れて行く!! じゃないと…僕の計画が台無しになる!!」

「大地。オレも反対だ。お前は…東京に入ってから役目を果たしてもらおう。タイトルをとりたい気持ちはわかるが…こつちには中嶋が抜けた分クライマーが1人しかいない!! だから…許可はできない!!」

「勘太と多村のオーダーで中嶋を囿にして俺たちのために時間稼ぎをしているんだろ

… あいつは… 本当は3日目の山岳賞をとりたかった…。 だが… お前らのオーダーのせいで… 完走も山岳賞をとれない。そして、昨日最後尾から全力で連れてきた佐々木の想いと夢を無駄にした…。 オレは正直それが許せない。だから… オレが代わりに中嶋の夢と佐々木の夢をどちらも叶える!! そして!! オレは必ず完走して沼津南を総合優勝させる!! あいつらの気持ちをおレは背負って走る!!」

沼津南の全力達は山中の怒鳴るように話しかけるように黙り込んでしまった。

「全く…。 あなたっていう人はいつも… 僕の予想を反する。 だが… それが悪い方向になったことはない。 むしろ… 良い方向になりそしてチームを救ってきた。 それが… 山中大地さんなんですから。」

「大地。 お前の覚悟はしかと受け止めた。 しかし… お前がタイトルをとつてもとらなくてもリタイアすることはするな!! それが… あいつらと交わした約束なんだろ。 ならば… こんなところでくたばるようなお前じゃないとオレは信じてる!」

「山中さん! オレがチームを引つ張りますから!! 俺たちのことを気にせずに中嶋がとりたかった山岳賞をとりについてください!」

「北上…。 ありがとな。」

「山中さん！ オレも兄さんと同様に負けないでください!! 兄さんが1日目のスプリントラインをとったのも山中さんが鼓舞したから成し遂げたといってました! だから…今度はオレが山中さんを押し出す側です! だから…負けないでください!!」

「ありがとう。純太!」

チーム全員山中の背中に手を添えて山中に想いを託す。

（チームのためにオレは役目を果たす! そして…オレのわがままを聞いてくれた皆さんに感謝する。）

「いけ!! 山中大地!」

「ああ!!」

山中は宮崎と大坂を追いかける。北上は山中の背中を見ながら感じた。

（中嶋と佐々木、僕達1年生はあなたに夢を託しています。今回メンバーに入れなかった熊野も同じ気持ちです。だから…僕達後輩に魅せてください!! 山中大地さんの強さと優しさを!!）

次回話続く…。



### 3日目の山岳賞勝負 中編

山梨の山岳区間で勾配差が激しい中箱学の宮崎と総北の大坂、沼津南の山中の3人の山岳賞をかけたバトルが始まる。

後方の集団も凌ぎを削ってチームがより速く山岳区間を攻略し東京に突入するかが勝負点であった。

「さて〜キミ。なんで…この山岳賞を狙っていくの〜？お二人さんよ？」

「それは…総北キャプテンとしての務めを果たすためさ。俺たち総北は箱根学園と闘っている。あの小野田さんや今泉さん、鳴子さんがいた世代のように僕達も伝説を残したい。だからこそ…あなたと対戦している。そして、オレが山岳賞をとったことによつて下の世代の模範となる成績を残すためにやるんだ。それがキャプテンとしての責務だからだ。」

「ふーん。伝説を残すか…。くだらないね。キミは〜？」

「オレは約束を果たすために山岳賞を狙うんだよ。」

「キミは…1日目の山岳賞をとり…ゴール争いにも絡んだ。それに…キミは1番目立っている。僕は…キミがどんなやつかを確かめてみたいんだよね。キミは無名の

選手だ。そんなキミがインターハイという大舞台で暴れてるから不思議でしょうがない……その力……。どこから出るのかな？」

「それはきつと楽しいからかな。お前のことは菅原勘太からよく聞いている。實力はありながら……卑劣な手を使って箱学のキャプテンを務めていると。お前は……ロードレースが楽しくないのか？ロードレースが好きだから箱学でプレーしてるんじゃないのか？」

「あの元エーススプリンター候補君にいろいろ聞いてるのか。キミ……。キモいな。何が楽しいだ？ 楽しさを求めてロードを始めたの？ そんなのはキミの自己満だ。そんなキモいキミに僕の実力でねじ伏せてやるよ。」

「お前……。弱いな。勘太のいう通りだ。」

「なんだと!! 僕が……弱い……。調子に乗るんじゃないよ! 落ちこぼれ集団が!!」

「お前の心は荒んでる。オレにはわかる。地位や名誉を求めて卑劣な手を使って上がるとうとする。どんなに實力があっても心が荒んでいればこの山岳賞も箱根学園の優勝もないね。」

「それ以上僕のことをバカにすると……キミを壊しに行くよ。」

「さっきのあんたのチームメイトを落車させたようにオレにも落車をさせる気か。それはあんたの心が荒んでいる証だな！」

「黙れ!! お前に何がわかる!! オレの気持ちが!」

「わかりたくもない。それはきつとあんたの弱みだからな。」

「クソやろうが!! 散れよ!!」

宮崎は山中に肘打ちを入れようとしたが山中はそれをかわして登っていく。

「やはり…そうなんだな。あんた。過去になんかあったんだろ?それがキツカケでこのようなやり方で自転車競技をしている。」

「…!」

それは宮崎が小学生の頃だった。

宮崎の家は父親がフランスの有名な大会の出場選手であり日本人選手では一番最強な選手であった。引退後は実業団の監督を務め日本で有名な大会で優勝に導いた名将であった。そのため…宮崎の兄と弟の浩輔は英才教育を受けていた。兄の大輔はジュニア大会で優勝を果たし数々のメダルを獲得していた。しかし、弟の浩輔は何も成績を残していないく父や兄からの評価がよくなかった。ある時父からこう言われる。

「お前はロードレースの才能がない。オレの才能が大輔にだけ受け継いでしまったの

か。このままだとお前。別な競技をしたほうが良いかもな。」

「僕が兄さんのように…優勝してないのは…僕が弱いからだよね。でも！僕はロードレースが好きなんだ！」

「ロードレースが好きか…。良く聞け。浩輔よ。父さんは今までロードレースは好きなんて感じたことはない。ロードレースは勝者が称え敗者は墮ちるんだ。だから…オレは一番になりたいから誰よりも努力し練習をして実力をつけているんだ。ロードレースは過酷なスポーツだ。サッカーや野球みたいにチームワークがあつて成り立つスポーツではない。己の力が全てなんだ。それがロードレースというものだ。楽しさだけでは勝てない。オレはそう教わつた。浩輔よ。そんな生半可な気持ちでやっているのならばやめた方が良い。それがきつとお前にとつて良いことだ。」

「……。確かに父さんはツールドフランスに出て強い選手なのはわかつている！でも…自転車は楽しい競技なんだ!! 父さんにそれをわかつてほしいんだ!」

「浩輔よ。それでは強くはなれんぞ。大輔を見習え！大輔は何十時間もペダルを漕いでジュニア大会で優秀な成績を残している。浩輔も大輔みたいに練習してもつと努力しろ！ロードを続けるのならば!」

そこに兄の大輔が来た。

「ねえ！ 兄さんはロードレース楽しくないの？」

「浩輔。オレはもつと強くなつてフランス留学して実力をつける。そのために今は自転車のために時間を費やしている。だから…楽しいも何ももつと強くなりたい。」

「兄さん…。僕は兄さんと初めてレースに出て楽しかったよ！あの時の兄さんはかつこよかつたよ！あの時の兄さんは笑つてたよね！ そうだよね!!」

「浩輔!!過去は過去だ！過去にしがみついているようじゃ…お前はいくらどんなレースに出ても結果は残せない！ オレは未来を見ているんだ！ 過去のことなど忘れろ！」

「そんな…」

「わかつたか。浩輔。大輔は未来に見据えて行動している。もし…お前がロードを続けるのならばそうするべきだ。」

「……………」

浩輔は黙つて部屋に戻つた。

(父さんも兄さんも…。オレのことを認めてくれない!! ロードレースは楽しいんだ!! チームの力を合わせてエースの勝利のために全力でペダルを回すんだ！ それが何故わからないんだ！)

その後。大輔と浩輔は地区ジュニア大会に出場する。そこで目にしたのは：兄の大輔が的確なオーダーを出し兄の大輔を勝たせる作戦であった。浩輔は平坦区間を引つ張るオーダーであった。ゴールは小山の山頂地点がゴールであったため山に入る前までは浩輔が引つ張っていた。

「兄さん！ 山岳区間までは引いた！あとは頼むよ！」

「浩輔!! お前はもう休んでろ。ここまでのお膳立ってお疲れ様。」

「兄さん!! 僕も山を登るよ！競争しようよ！」

「競争だと…。そんなくだらないことをやるつもりはない。」

「久々に競争しようよ！」

浩輔は兄に自転車の面白さや楽しさを教えたい想いで頼んだ。

「これはレースだ!!そんな生半可なことほしくない！」

大輔は浩輔を置いていき山を登っていく。しかし：弟の浩輔は必死についていく。

「はっはっはっ…。兄さん速いよ！」

「お前の役目は終わったんだよ！」

「役目は終わったとしても兄さんについていく!!」

「言うことを聞かないやつだな！」

その後：大輔と浩輔は山頂のゴールを目指し走るが：浩輔は途中でペースダウンをしてしまい順位は12位。兄の大輔は単独で優勝した。レース後。兄の大輔は浩輔に問いかける。

「これでわかつただろ。お前とオレじゃ全然レベルが違うと。それに：楽しいだけでは何も残せないということ。この大会を通じてオレはフランス留学が決まった。来年からはフランスの学校に行き実力をもっとつける。」

「兄さん……。自転車は楽しいんだよ！それをわかつてほしい！」

「お前……。何もわかつてないな。父さんの息子だから日本選手で最強でなければいけないだよ。それがオレの使命であり父さんの想いだから。期待を背負ってるんだよ！お前にはそれがわからないからそういうんだろ！少しはオレの気持ちも理解してくれよ！それと：お前は弱すぎなんだよ!! 楽しいとか面白いとか言ってるからいつでも強くなれないんだろ！今日のレースもバテたじゃねーかよ！」

浩輔は黙ってしまった。兄の怒りに何も言い返せなくなつた。

「もう。お前と話をしたくない。敗者は敗者らしくおちるんだな。」

そうやって大輔は去ってしまった。

(父さんも兄さんも…オレのことを理解してくれない…。オレのことを認めてくれない…。なんで!! オレが弱いから? オレが変がことを言っているからか? オレが父さんや兄さんみたいになれば認めてくれるのか? ならば…そうするよ!! 父さんや兄さんの強さが正しいか否か…それを確かめてやる!!)

彼の人生はそこから変わってしまう。楽しさを捨てることで父や兄に認めてもらうためにどんな手を使っても上に立ち自分の実力を証明するために。そして、それが正しいと感じるようになり中学時代で1年生でありながらキャプテンに任命し…自分より実力が強いチームメイト達も蹴散らしていった。自分の存在を認めてくれると思っていたからだ。

宮崎は過去のことを思い出しながら走っていた。

(楽しさなんて…ないんだよ! 強さこそ正義!! どんな手を使っても僕が…1番だと証明するんだよ!!)

すると、宮崎や大阪、山中は山岳リザルトまでの最後の峠道に入る。

「残りの6.5 kmの大垂水峠まで全力で行くぞ!! 山の支配者の大坂坂道!! 悔いを残



らず登る!! 3年間の集大成であり真骨頂!! 山中君! 宮崎君! 勝負だ!!」

「勝負事になると燃えるタイプなんですよ! だから…オレは後輩の約束のために全力で行く!!」

「伝説を残して後輩の模範となるモブキャプテンに…後輩の約束のために走る206番君!! キミ達がそれぞれの想いがあるように…僕は!! 最強になって実力を見せつけてやるんよ!! それが宮崎浩輔という男だからな!!」

3人はそれぞれの想いをぶつけるかのように山岳リザルトを目指して登っていく! 最初にアタックを仕掛けたのは大坂。彼は天性の勘と状況を見て試行錯誤しながら走る。しかし、宮崎も山中もしがみつく。

「モブキャプテンくん!! キミのことは勇気くんから聞いてるんだよ。山岳争いになると本気の顔になるってね!! 僕はね…そんなキミに支配されるようなひよっこじゃないからね〜!」

「わかっではいるさ。じゃないと面白くないだろ!? 山の勝負は! だから…山は好きなんだよ!! 実力がわかりやすいからね!!」

「ププププ! キモいな!! キミは!!」

(だが…もつとキモいのいるな〜! 206番!!)

山中は2人の登りについていてる。山中は闘争オーラを全開に出し対抗する!!

「……。」

(コイツ…。1日目と一緒の眼をしとる。何か内なる闘争本能を全解放してる感覚！  
周りにいる僕達に伝染してる!! 根岸さんと同じ匂いを彼からは感じる!!)

(なんだ?この人!! 勇気や翔が言っていたのはこのことか? 沼津南の山中大地は要  
注意人物だと! オレの手が震えている…。まさか…オレが逆に支配されてるのか…。  
ならば! オレが主導権をとって山岳を制する!!)

山中は更に加速して2人をあつという間に置き去りにするが…宮崎も大坂も己の力  
を使いついていく!

「残りの4km」。僕のとつておきだそかな。ここまで本気にさせるヤツは久々に見た  
な!!」

「こんなところで負けるような大坂坂道ではない!! 出し惜しまず限界までペダルを回  
す!」

山岳リザルトまでの4km。全力で3人は勝負をする!

次回話に続く…。

### 3日目の山岳賞勝負 後編

宮崎と大坂、山中は大垂水峠の残り5kmの山岳賞を賭けた勝負に出る！

「さあ!! 全力の全力で行くぞー!」

大坂は一気にダンシングして一瞬で2人を置き去りにし、逃げ切る作戦に出た!山中は無言になりただひたすら前しか見なかった。宮崎は様子を疑いながら相手を冷静に分析していた。

(モブキャプテン君も絶妙なタイミングでアタックを仕掛ける。少し傾斜が緩やかになったところでアタックする。また、傾斜が変わったところで少し脚を休めている。ギアも2段あげて一気に差を広げる。山の支配者は伊達ではないね。フィールドを一瞬で理解し攻め所を確認し仕掛ける。こりゃー面白いね。206番君は:気力で登っているだけ。技術は正直ない。ロードを初めて4か月しかたっていないから経験が浅い。だが:1日目の山岳賞に1日目、2日目ではゴール争いに絡んでいる。多村君の狙いは彼の意外性と大一番で活躍する。そして:闘争心!! 彼は:それが武器だ。厄介な敵と対戦してる。山の支配者に溢れる闘争心の塊。だが:僕は:こんなところで負ける訳がない。)

「さあ!! パーティーでも始めようか!! このゼツケン1は最強の証!! 最強の座を守りきってやるよ!! さて……本気になるか。」

宮崎は左手の人差し指と中指に巻かれた包帯を外してアウターに手を添える。それを見た大坂は驚きを隠せなかった。何故なら……彼はここまで1度もギアを変えずに走っていたからだ。

(まさかね……。キミの全力というのはアウターを変えることか! おととい……翔と勇気が言っていたことは本当だった! ペダリングだけで僕達に対抗できる選手! ギアを変えるところということは今より速くなる! これは……ヤバイ!!)

大坂は更に顔色を変えて宮崎がここから本気で来ることを察知して一気にダンシングして差を広げようとする。

(思ってた通りの反応ですねー。僕は普段から力を抑えて走っていた。ここぞというところしか使わない。それが僕が最強の証なんだよ!)

宮崎はギアを1段上げた! そして……50mも開いていた差が一気に詰め寄り大坂と並んだ。宮崎は大坂に挑発する。

「あれれ。1段上げただけでこれだけ縮まるんですか。モブさん。もつと速く登れないんですか?」

「凄いな……。1段上げただけですぐ追いついてしまうなんて……。これは!! 面白いな

!!

大坂はギアをMAXにし…己の力を全解放し宮崎に対抗する。しかし…宮崎はギアを2段上げ大坂の最大限の力で対等に走る。

「なんで…そんな軽々と登れる!!ギアを3段上げただけでオレの全力に対抗できるなんて凄いな…。さすが…箱学のキャプテンだ…。そんなキミと戦えることは光栄だ!!」

大坂はケイデンスを上げて登る作戦に出るが…宮崎はまた1段上げて軽々して登っていく。

（ケイデンスを上げて追いついている!!オレは支配してるといふより支配されている!!これはまずい…。作戦とかもうどうでもいい…。彼の方が実力があるから…。ならば…オレはもう心臓が張り裂けようが…脚がもげようが…関係なく死ぬ気で登るしかない!!」

大坂は宮崎の方が上手をとっていたことを感じて気力だけで登る。

「こうなったら…死ぬ気で山岳賞を狙う!!」

「プププ…。カッコいいことを言うねー!! なら…：…僕は…：…キミが絶望する圧倒的な力で捻じ伏せてやるよ!!」

宮崎はギアをMAXにした瞬間…電車が通り去るように一気にフル加速して大坂と

差を広げる。大坂は一瞬の出来事で理解が出来なかった。だが…大坂はケイデンスを更に上げ宮崎に食らいつこうとした。しかし…差は100mも離されていた。

「クソ速えー!!ギアを変えただけでこんなに差が出るとは思っていなかった…。みんな…すまん…。いくらペダルを回しても追いつけない。オレの3年間は何だったんだ…。」

大坂は心が折れた。するとその横に山中が通り過ぎ全力で前を追っていた。差が100m以上離されているのに山中は必死に追いつこうとして大坂は彼に話しかけた。

「もう無理だ!! 宮崎とは100mも差がある!! 残り2kmで挽回できるなんて不可能だ! キミも諦めてチームに合流した方が良い!!」

「そうですか…。ならば…不可能を可能にする。」

山中は静かに答えて大坂を置いていく。

(何故…無理だとわかっているのに…彼は食らいついていこうとするのだ? オレには理解が出来ない…。)

宮崎は後ろを振り返って勝利を確信した。

(モブキャプテンも堕ちたか……。206番君も……大坂君と力比べしてる時からいなかった。彼も早々に堕ちたのだろう。初心者の彼に僕達についていくのは無理があったんだね)。このまま逃げ切って山岳は頂く！)

宮崎はこのまま独走して念願の山岳賞を狙いにいく！

ゴール前500m地点になると箱学コールが飛ぶ。

「エースが山岳賞狙ってるの？ 凄いな！」

「王者箱学は最強!!」

「常勝箱学！」

(箱学は最強でなければならぬ。これが強さだ!! 伝説を残すだけの……約束を果たすなんて……くだらない。それは己の弱さである。それを証明する。証明することで父さんや兄さんはオレのことを認めてくれる。)

宮崎は一瞬後ろを振り向いた。

「気のせいか。」

（今泉君達がここまで登ってきてるのかな？そうであれば…もう優勝は間違えない。登り切ればそこからしばらく下り坂になり子安君が下りで勝負をつける。予想通りの展開になれば良いんだけどな…。）

「後ろから変なプレッシャーを感じる…。今までに感じたことがないプレッシャー。」

宮崎は手汗が凄かった。変な汗も垂れてくる。

「暑さのせいで汗が凄い…。」

すると車輪の音がドンドン近づいてきて宮崎は後ろを振り向く…。

「待たせたな。宮崎浩輔。」

「なんで…：キミがここまで登ってきてるんだよ！」

「話している暇はない。」



その男は宮崎と並ぶ。

「キモいな。キミ。タダモンではない。化け物だ！山中大地!!」

山中は宮崎と並びながら山頂を目指す!!

「残りの200m。オレは負けない。誓ったんだ。チームに。必ず山岳賞をとると!!」

「キミのくだらない友情ごっこはここで終わるんだよ！邪魔なんだよ!!」

「やってみろ。」

「このクソが!」

宮崎は予想を反する出来事が起きていて理解が出来なかった。そのせいか少し焦りがあった。

(こいつ…。根岸さんより…凄い圧を感じる！何より…こいつの顔つきや眼つきがさつきとは別もんだ！何だよ！コイツ！)

「怖いか？オレが？」

「!!?」

(手の震えが収まらない。僕がアイツのことを恐れているのか? そんな…訳がない!!)

「おら!!」

宮崎は更にケイデンスを上げて残りの50mのリザルトラインまで全力で走るが…  
山中は宮崎のはるか先に走っていた。

そして…。

「インターハイ3日目の山岳賞は2006番の山中大地選手です!」

「2006番! ウソだろ! コイツ! 1日目も山岳賞とってるやつだよな!! 沼津南高校! すげーな!」

「最後の最後で箱学の宮崎を抜くなんて…ありえないっしょ!」

観客達も驚いてた。

山中は山岳賞をとり両手を広げて空を見ながら叫んだ。

「中嶋！佐々木！やったぞ！！チームのために走り…チームの活力になる走りをする事が出来た！！」

宮崎は敗北した現実を受け入れることが出来なかった。つい先程までは勝利を確信していたが、彼が追いついたことによつて状況を理解することが出来なかった。

「そんな…バカな。」

「不可能を可能する。それを証明した。宮崎！お前は弱い！」

「プププ。ハハハ！！キミはキモいな！！ 弱いだと…。ふざけんじゃねー！！ この借りは…ゴールで果たしてやる！！」

「ゴールも俺たちがとる。」

「今回はキミの勝ちだが……総合優勝をしなければ意味がない。ここから切り替えて総合優勝はとる！首を洗って待ってろ！山中大地！」

3日目の山岳賞勝負は最後の最後で逆転した山中が制した。これにより宮崎は山中にケンカを売るのであった。

次回話に続く…。

## 北上と中嶋の最後の想い

山岳賞勝負に勝利した山中大地はこのままダウンヒルに入る。そして、宮崎も彼に勝負を挑むのである。

「キミ。この下り坂で沼津南と箱学のどちらが速く僕達に合流すると思う？」

「もちろん沼津南だ。何故なら……北上がここまで登りこの下りで純太が追いつく。そういうお前らはどうなんだ？」

「プププ。キミらはあの佐々木くーんを代えてあのエーススプリンター候補君の弟君を出した訳か。あの子。兄のこと大嫌いだよ。」

「そんなことを言っても信じないね。純太はそんなヤツではない。」

「そつかな。彼。実は……僕とグルを組んでるんだよね。」

「グル？どーゆうことだ？」

「彼。実は……キミらのスパイ要員なんだよね。彼とは何回も連絡をとってキミらの情報を聞いてた。あと一人スパイ要員として多村君を送り込んでたけど……彼は失敗作だったな。まっ……裏切ると予想してたけどね。それが僕の狙いなんだけどね！」

「つまり…。それはどーゆうことだ!!」

「君達。なんで…沼津南高校に過去にタイトルをとってる佐々木君や中嶋君、北上君に熊野君、菅原兄弟に多村君がいるのか知ってるかい？それは全て菅原純太くーんの計らいいなんだよ。わざわざ自転車競技部がない高校にいる理由。そして、何故彼らはこの高校で名のある選手達が揃っているのか？疑問に思っていないかったのか？出来過ぎだと思うがな。」

「そんな陽動作戦にはオレは乗らない。そんなのでたらめだ。」

「そっかな…。純太君。この作戦が成功したら来年…僕らのチームのエースストライカーとして来年走つてもらおう予定なんだよな…。プププ。彼。キミらの勝利のことなんて考えていないよ!!」

「……。そうであってもオレは純太を信じる。もし…アイツがそういうことをするのならオレは全力で阻止する。」

「プププ。愚かだな。」

(菅原純太くーんは)。キミのことも嫌いなんだよ。w w w)

その頃。集団を阻止している中嶋と杉山は山中が山岳賞を制した結果を聞いた。すると…中嶋と杉山はハイタツチした。

「山中さん!! やっぱり…あの人は…凄い!! あなたをインハイにつれて行って良かった!! 入学した時に…あの人の才能にオレは惚れた…。この人は何かを持ってるって…。その読みは正しかった!」

「大地!! お前は凄いな!! 後輩の約束を果たすなんて…! お前は男の中の男だ!!」

すると京都伏見の嵐山と菊川はこの状況に危機感を感じた。

「あかんな…。家斉。お前に無茶させるかもな…。」

「ああ。慶喜。オレがゴール手前まで全力で連れてやる。岸。すまんなあ。オレらに想いを託してくれないか?」

「家斉…。わかった。わいらの希望を託す!! だから…ゴールまで約50km。頼むで!! オレら…4人は大手町にゴールするからよ。」

嵐山と菊川は4人にハイタツチをして岸を含む京都伏見の選手達は嵐山と菊川を送り出す!

「いけー!! 慶喜!家斉!」

「ああ!!」

「チームを任せただで!!」

嵐山と菊川の2人で先頭を追うが中嶋がブロックする!

「ははっ!! あなた達を全力で止めるのが…オレの最後の仕事だからな!! 全力で止めてやるよ!!」

「このカスやろーが! どけよ!」

「いかせませんよ! ははっ!!」

中嶋と嵐山と菊川の戦いが始まる!

その頃。多村達は山岳リザルト地点に到達し、オーダーを出す。

「ここからは長い下り坂に入ります! 純太さん! 出てください!」

「わかってるよ!」

純太は先頭に立ち坂を下っていく。すると…北上はチームに最後の言葉を言う。

「沼津南!! 必ず優勝してください!! オレは……信じていますから!! 必ず……! 沼



津南が……大手町のゴールゲートをどのチームより……速く通過することを!!」

北上は全力で最後の力を使い切り箱学の今泉と対抗していたからだ。そして、箱学の今泉も箱学の選手達にエールを送る!

「僕の役割は……ここでおしまいだ。桐谷さん……。根岸さん……。子安君……。そして……宮崎さん……。頼みます……。僕達……箱学を託します……。」

今泉も己の力を使い切りチームに託す。

「北上君!! キミの想いは僕達が受け継ぐ! 本当に良く頑張った……3日間!!」

北上は多村の背中を押し送り出した!

「桐谷さん……。宮崎さんによりしくお願いします……。あなたのオーダーを全力で全うしたと。あとは……頼みました!」

「ああ! 宮崎君を勝たせる!! 安心しろ!! 子安!! 下りは頼んだぞ!! お前が得意な下りで……全力で差を広げろ!!」

「わかりました! 行きますよ!! 皆さん!」

子安が独自に開発したダウンヒルのスタイルで前の宮崎を追いかける!

北上と今泉はお互いの力を出し切り倒れ込む。

（沼津南が勝利するその時……僕は……このチームでプレーして良かったと思う……。山中さんと出会って僕は変わった……。貴方から……大事なことを教わった……。真の勝利とは……昨日の自分より今日の自分に勝つこと。あなたは……いつも……「不可能なことはない。」 あなたは……それを証明している。だから……あなたなら……大手町のゴールを誰よりも速く通過すると信じる!! あなたは……このチームの希望なんです!）

（宮崎さん…… あなたがいなければ……僕は……このインハイを走れなかったと思う……。だから……感謝します!）

北上と今泉は落車する。

すると……中嶋と嵐山、菊川の3人が通り過ぎる!

中嶋は北上が落車した姿を見て一滴涙を流した。

（北上!! すまん!! お前のことをバカにした。エースクライマーに任命されて浮かれていると。しかし……お前がその沼津南のジャージをボロボロになるまで箱学のクライマーと対抗し……チームを送り出した!! お前は……最高のライバルだ!!）

「あれれ……キミのエースクライマーがリタイアしたんやな……。いやー残念やな!! キミもそろそろリタイアしてもええーんやで!」

「黙れ。この関西弁イキリやろう。」

中嶋は涙を流しながら嵐山と菊川を冷たい目線を送った。

「キミ。クライマーなんだからなく。ここで休みなよ。なあ!!邪魔なんだよ!!!」

「お前らは下りだろうが…平坦であろうが…全力で阻止してやるよ!」

「やってみろよ!! この狂人が!!」

「やってやるよ!!」

中嶋は苦手なダウンヒルで嵐山と菊川の先頭に立ち全力で阻止する。

(下りは…時速70km〜80kmも出るからバイクコントロールが難しい!! 純太さんなら…このスピードに対応出来るが…オレは…クライマーだ!! 非常に難しいが…  
!やるしかねー!! オレは…沼津南の勝利を願っているから!!)

「死ぬつもりで…止めてやるよ!!!」

中嶋は急な下り坂で嵐山や菊川をブロックするが…菊川は中嶋に体を当て倒れそうになるが…中嶋は耐えた。

「倒れてたまるか!! オレはあんたらを阻止する!!」

菊川は中嶋の気迫に引いてた。

(なんや…コイツ!! 下りでもその狂人ぶりを発揮するんか!こりや…おつかないな…!だが…ワイらは…関西一のペアだ! こんなところで負ける訳にはいかんよ!)

中嶋に何回も菊川が体をつぶけるが…中嶋は倒れない。何故なら…山中が一番でゴールするを願っているからだ。そのため中嶋は全力でチームの勝利のために何回仕掛けるが倒れないのである。

「オレは倒れないぞ!! アンタらの自由にしないからな!! はははは!!」

(コイツ!! この状況を楽しんでいるのか!! マジな狂人だな!)

「邪魔なんだよ!!」

するといつの間にか高尾駅付近まで3人は走っていた。

すると…100m先には沼津南と箱学の集団が走っているのが中嶋の視界に入る!!

沼津南の菅原純太と箱学の子安は膠着状態であったが…チームを引つ張っていた。そして…先頭を走っている宮崎と山中と合流する!

「お疲れさんよ〜! 子安君!! このまま!! 全力で下りで差を広げるんよ!!」

「宮崎先輩! わかっていきます!」

「山中さん!! 良くやりました!! ここからは純太さんが引きますから!! 休んでください…。」

「……………。ああ。」

中嶋は先頭集団を視界に入ると最後の最後の力を出し…全力でスプリントする!

それに対抗する嵐山と菊川。中嶋は1m1cmでも速くチームに合流する気持ちで走る!!

それに気づいた多村は驚いた表情をした!

「中嶋君!! キミは…この下りも…嵐山さんや菊川さんを阻止するために走っているのか!!? 凄いな…キミは…。」

宮崎は中嶋の姿を見て苦笑いした。

「中嶋くん。キミ一人で…あの集団をコントロールして…嵐山君と菊川君と競つてい  
るといふのか…。キモいな!! キミは!!」

中嶋は全力でペダリングして沼津南と合流する!!

「多村……。オレは…すっかり仕事をしたぞ。」

「キミは凄いよ!! あの100人いた集団をコントロールして…先頭集団に追いついた  
…。僕の想像より遥かに超えた!!」

「おめえくに…褒められても…嬉しくねーよ…。皆さんに言いたいことがあるから…オ  
レは…ここまで走ってきた…。それを言うまでは…リタイアしないと決めただ  
…。」

山中は今にもリタイアしてもおかしくない程全身に力が残っていないことに  
気づいた。中嶋はチームに再び合流して想いを託したい気持ちでここまで走ってきた  
ことを理解した。

「山中さん……。また…あなたとこうして…少しながら一緒に走れていることが幸  
せなんです……。だから…僕が…あなたに伝えたいことは…僕は…あなたと  
一緒にチームで…インハイを走れて良かった…。そして…あなたを自転車競技の

世界に導いて良かったと心のそこから思う……。だから……。必ず……。優勝してくださいー！」

「ああ！ 約束だ！」

「その言葉を聞ければ…僕は…満足です…。」

中嶋はそういうと肩から力が抜けたかのように崩れ落ち落車する。

山中は中嶋を立たせようとしたが…遅かった。

「中嶋!!!」

山中は涙を流し前を向いた。

（お前の想い…しかと受け止めた!! だから…オレは…絶対…誰よりも先にゴールする!!）

山中は総合優勝をすると誓ったのであった。

次回話  
に  
続  
く  
…。



## 下り坂の追い上げ

中嶋は沼津南と合流したが…全ての力を使い切り倒れ込む。そして、京都伏見の嵐山と菊川がゴールに向けてチームを置いていき走る。箱学が4人。沼津南も4人で先頭集団に10人の選手がいた。ここで宮崎は新たなオーダーを言う。

「さて……リザルトの調布まで子安君！キミは…全力で逃げ切るんよ！多摩川を渡るまでは下り坂がある…。キミは…ここで得意な下りで差をつけるんよ！」

「わかりました！ 皆さんついていきますか？」

「おう！」

子安はギアを上げ…得意な下り坂で沼津南を離しにかかる。しかし…沼津南も純太が筆頭にチームを引っ張る！

「兄さん！あれをやろう！ああ!!」

菅原兄弟が開発したツインスプリントの体制になりチームを牽引する。

多村は後ろを振り返り3日間山岳区間を引いた北上と1日目で箱根の山頂まで箱学と総北のエースを止め、2日目は佐々木に引いてもらいながら先頭集団に追いついたことと、3日目の山岳区間を全力で集団を阻止した中嶋に敬意を払い多村は決意する。

（キミ達の想いはしつかり受けとめた！だから…良い報告が出来るよう絶対箱学に勝つ！！だから…オレは負けない。どんなことがあっても！）

多村はオーダーを言う。

「この下りが勝負です！！ だから…菅原さん！！ あなた達の力を箱学に魅せてください！！」

「最初からそのつもりだ。」

「任せなよ！」

下り坂の勝負が始まる！

その頃…。後方に走ってた集団は京都伏見の岸と宮本がコントロールして前に行かせないように時間稼ぎをしていた。その前には総北の選手達が走っていた。山岳賞争いに負けた大坂は下を向きながらチームに謝罪してた。

「みんな…。すまん…。」

「坂道…。良いんだ…。オレ達総北はまだ諦めた訳じゃない。山岳区間も終わり下り坂だ。宇津木が必死にチームを引いてる。それに…桐人。お前…まだいけるよな？」

「永山さん。もちろんいけますよ。まだ優勝は狙えます。任せてください。僕はクライマーですが…ダウンヒルも得意ですから。だって…僕…下手したら…グリーンゼツケ

ン狙いに行けますよ。それに…永山さんと真中さん、門倉さんがいれば大手町に行けます。宇津木さんは申し訳ございませんが…僕と一緒に先頭を追いきませんか？」

「桐人。わかった。お前…全て…計算済みなのか？」

「はい。そのために宇津木さんの力が必要です。」

「わかった。いこう。」

しかし…大坂が先頭に立つ！

「オレは…山岳賞をとれなかった…！だから…せめて…チームのために最後の仕事をしたい!! 苦手な平坦でも…皆んなな脚を使わせないように全力でチームを引く!! だから…ここはオレに任せてくれ!頼む!!」

永山は反対した!

「誰だ!坂道!オレは許可しない!! お前は充分…キャプテンの役目を果たしたよ…。お前はオレ達にいろんなことを教えてもらった…。それだけでも…充分だよ!!」

「オレはキャプテンだ!!総北を勝たせるために全力で走ると決めたんだ!! だから…お前らは休んでろ!! 桐人。宇津木。お前らがベストなタイミングまでオレが全力で

引つ張る！」

「坂道さん……。でも……。」

「宇津木……。お前は来年総北のエーススプリンターとして……チーム最速のスプリンターになり……。誰にも負けない選手になってほしい……。桐人。お前は総北のルーキーでありポテンシャルがある。その頭の機転と状況判断能力が優れている。お前は2年後……。この総北の中心選手になるとオレは思う。だから……。今回は全力で楽しんでほしい……。これは……キャプテンからの最後のオーダーだ……。この中で誰でも良い!!誰よりも速くゴールラインに入れ!!」

(……坂道……)

(大坂さん……)

総北のキャプテンの力強い声でチームが一丸となる。そして、大坂は己の力を使い果たすように遙か先に走っている箱学と沼津南を追う!

箱学と沼津南はお互いの力を使いながら先に多摩川までの下り坂に到達するよう走る!

「やりますね!! さすが……。将来有望視されてた菅原純太さんと勘太さん!オレ……。1年なんですけど……。あなた達の噂は宮崎先輩に聞いてたから知ってますよ!」

「そりや…どうもです！　しかし…子安君だっけ？　キミ…速いね！！　僕のダウンヒルについていくなんて凄いや！　来年あたりエーススプリンターになるんじゃないの？」

「嬉しいですね…。しかし…ツインスプリントってこんなもんすかね？　オレ…もつと速くなりますよ。」

「キミは…下りが得意そうだな。ならば…来なよ！」

「良いですか？　ならば！」

子安は下り坂でありながらダンシングしてギアをMAXにして猛スピードで下っていく！　その姿を見た純太は驚いた。

（ウソだろ…この下りでダンシング！　ただでさえ…下りはペダリングしなくてスピードが出るというのに…ダンシングしてギアを上げて走る！　このままブレーキをかけたら前に転倒する危険がある…かつ…下りはバイクコントロールが難しいというのに！）

子安は慣れているのか…全力でチームを引っ張りながら下っていく！　すると…純太もダンシングの体制になり追いつこうとするが…。

「ダメだ！　下りでダンシングはリスクがある！　下手したら大怪我するリスクがある

ぞー！」

「兄さん！ 大丈夫だ！ 僕に秘策がある！それは…兄さんがこの下りを全力で引くとだ！」

「オレが…？」

「うん！ 兄さんなら…この短距離なら箱学に追いつくことが出来る！そして…一気に離す！」

「なるほどな…。わかったよ！それで行こう！！」

「うん！」

勘太と交代して勘太の鬼のダウンヒルで箱学を追いかける！

すると、純太の読み通りに箱学に追いつく！

「さすが…菅原兄弟！凄いですね！！ 僕のスピードに追いつけるなんて…。しかし…この下り坂で対抗出来る人がいるなんて嬉しいですね！もつとやりましょうよ！」

子安は更にスピードを上げて差を広げようとするが、勘太はあつという間に子安を追い抜き先に行く。

「面白い！ あなた達の実力は伊達ではない！ それでこそやりがいがある！！」

子安と勘太はこの下り坂で膠着状態であった。すると…多村はオーダーを変える。

「菅原さん！休んでください！ここは…僕が出ます!!　そして…宮崎浩輔!!　アンタと勝負だ!!」

「ププププ。僕と勝負?このスプリントラインをかけた勝負かな?」

「ああ!!」

「キミ…。なんで…ここで…エースのキミが…出るんよ!!　僕が…勝負したいのは…山中大地!　お前だ!!」

「……。」

「山中さん…。あなたに最後のお願いを言っていますか?僕は…あなたに大手町のゴールを託します。僕は…ここでやらなければならない。あの男を倒すために…。そして…僕は…全て知っています…。あなたの企みを!!」

「あれ〜?　企み?　なんのことかな?」

「菅原純太さん。あなた…。スパイですよね？」

「純太…？」

「……。何故…：知ってるんですか？多村君。キミもスパイなのに裏切ったよね？」

山中と勘太は驚きを隠せなかった。

「えっ…。どういうことだ？純太！多村！」

「ウソだろ…。」

「ププププ…。キミ達はバカだな…。まさか…：キミ達のキャプテンと弟君が僕達のグルだと知らなかったのね。いや、滑稽滑稽…。事の発端は多村君だけどね!! ははは!!」

次回話に続く…。



## 純太と多村の狙い

それは沼津南高校自転車競技部が発足してから2週間後だった。

練習を終えた純太はキャプテンに任命した多村に初めて事実を話す。

「多村君。話があるけど良いかい？」

「なんででしょうか？」

「キミの兄さんがキャプテンだったのは知ってる。キミはここでキャプテンを務めたい理由もわかっている。宮崎浩輔が多村キャプテンのバイクに細工しワザとパンクをさせ落車をして下半身不全になったことは知っている。そこで：キミは多村キャプテンの仇をとるために自分が指揮してチームをまとめ：そして：兄と同じようにキャプテンの座に就くことによつて宮崎浩輔と同等に闘えることを証明する。だが：キミは本来は箱根学園に入学して自らの力で宮崎浩輔のキャプテンの座から引きづり下ろそうとしたが：何故か：この静岡の沼津の無名の高校に入った。そして：キミは静岡県中学生大会で山岳賞をとっている中嶋君と北上君をスカウトした。熊野君に関してはエースアシストでエースを最高なタイミングで3位入賞をさせた実績を持ち：佐々木君に関しては熱海では有名な選手であった。彼は二重人格だからね。その後、僕達もス

カウトした。僕らが宮崎浩輔のターゲットにされ追放されることを知っていたから。これで全ての合点がつく。何故…この無名の高校に実力のある選手が揃っているのか。それは全てキミがこの高校で自転車競技部を作ることによって宮崎浩輔にそのデータを送ることだ。そして、僕達を静岡県大会で優勝させるといふ条件をつけて。」

「確かに純太さんの言う通りです。宮崎さんのインターハイ優勝のためにデータを送っていたことは間違えありません。しかし…山中さんは…予測不能です。あのレースの時も…まさかあの人が最後のゴールスプリントに絡んでいくと思っていなかったからです。あの人は今まで見た中でデータをとることが出来ない。だから…彼のデータを送っても参考にならない。」

「……。兄さんは山中さんと仲良くなり…お互い信頼しあっている。だから…彼は邪魔なんだよね。彼が。何故なら…彼と兄さんがくつついたら僕の立場もなくなるのといのと…兄さんは僕が今まで勝たせてあげた恩を忘れているからだ。同じ双子の兄弟なのに…いつも兄さんが称賛される。いつもそうだ…。今まで2人で色んな大会に出場したが…いつも僕は兄さんのお膳立て。兄さんの力を思う存分発揮するところまで僕が必死に引いて兄さんを優勝させる。僕はずっと脇役。父さんや母さん…。チームメイトや友達にいつも言われる。「何故…同じ双子なのに実力の差があるんだと。」僕か

ら言わせると：兄さんを勝たせてるのはこの僕なんだよ！弟の菅原純太だと！！周りはそれを理解しない。だって：ロードの素人だからだ。素人だから：優勝すれば誰だって称賛する。それがこのスポーツの常識だからだ。正直もうウンザリなんだよね。兄さんだけ良い思いをして天狗になっっていることが。だから：僕は：兄さんより優れていることを証明するために宮崎と協力し：そして：来年は箱学に戻って僕が兄さんより優れたスプリンターとして走ると約束したんだよ！彼は：僕みたいなの：野望に燃えている選手を集めたいと計画している。僕は：それに乗っかろうと思うんだよね。だって：僕の目標は兄さんより強いスプリンターだと証明したいからね。」

「……………そうですか。純太さんもいろいろ苦労されているのですね……。しかし：山中大地さん。彼は：あなたも警戒した方が良いですよ。何をするかわかりませんから。」

「彼には充分警戒するつもりだよ。」  
「……………」

多村はその時感じた。菅原純太は宮崎浩輔と似てる部分があると。彼は自分の栄誉や称賛されるためにどんな手を使っても敵や仲間を関係なしで落とそうとするからだ。自分の勝利なら仲間は関係ないことに。多村はこの純太の発言で彼の行動を見守るこ

とにした。

多村は山中と最後のゴールスプリント対決した時に感じた気迫や強さ、人間性に触れて山中大地という男がこのチームの希望になり、そして、彼はあの宮崎を越すことが出来る選手だと見切っていたからだ。あの卑劣な手を使って己の勝利のためにしがみつく宮崎浩輔と違って：山中大地はチームを信じ：そして：仲間の想いを背負って一途に勝利を掴めると。それは天と地の差であると感じていたからだ。だから：ワザとデータを取らせないために山中大地を公式戦に出させずにインハイに絞ったのである。それが：彼しか持っていない強さを思う存分発揮出来ると確信していたからである。そして：多村にとって希望であった。

菅原純太は多村が彼に慕っていく姿を見て気分は良くなかった。そして、念のために山中大地のデータを宮崎に送るように強要したがそれに従わなかった。最初は宮崎を勝たせるためにスパイとして働いていたが：途中で山中大地と関わっていくうちに多村の心は変わってしまった。純太はそのことを宮崎に報告していた。

「キミが：山中さんに崇拜するから：：こうなったんだ。それをわかってほしいけどね！」

「山中さんはこのチームを勝たせるために不可欠な存在！そして：：貴方は兄さんの嫉妬

でロードを走っている！ 僕には…それがわかりやすかった。だから…貴方は最初インハイメンバーに選ばなかった！いつか…こうなると予想して！そして、あなたが今日佐々木君の代わりに走っているのも事実を勘太さんや山中さんに聞かせるためだ!!」

「……。そうかそうか!! キミが正しいか正しくないかは…このリザルトラインで決めようではないか!! もちろん…僕は…宮崎とタッグを組んで…宮崎を勝たせるがね!!」

「ならば…僕は…一人でキミ達と勝負する!!」

「キミ一人で……。バカかな！ キミは!! オレは……。兄さんを越えるスプリンターだからね!! 負けはしない!!」

「純太!! お前！ 正気か！」

「兄さん。アンタがいけないんだよ。アンタがいるから僕はいつまでも越すことが出来ない……。なあ…ならば…兄さん。アンタが多村と組んで僕達と勝負するのはどうかな

？ それでわかるはずだ！」

「純太……。わかった。お前の想いを受け止める。だから……。多村!!こいつらに証明しよう!! どつちが正しいかを！」

「勘太さん……。わかりました!リザルトラインまで…全力で勝負だ!宮崎浩輔!菅原純太!」

「ププププ。バカだなキミは。」

「兄さん。アンタを越すのは今この瞬間だ!」

宮崎と純太、多村と勘太の3日目のプリントラインをかけた勝負が始まる!

次回話に続く……!